

皇紀	年號	日本	西紀	外國
		<p>△坪井誠軒が「診候大極」を著して洋方診断法を説いた。</p> <p>△石坂常賢が「時刻觀象」を著しまた「方圓星圖」を書いた。</p> <p>△白石長忠が「社盟算譜」を著し整數術に關する解法を説き不定方程式を擧げた。</p> <p>△シーボルトが上京した。わが醫學者、博物學者等多くその教を乞ふた。宇田川榕庵等が日本産植物、腊葉多數を贈り、栗本瑞見は「植物寫生圖」「魚譜」數卷を示し、高橋景保もまた會見し地圖の交換をなした。</p> <p>△栗本瑞見が「巧歸鳥巢説」を著した。</p> <p>△高橋景保が「露西亞書和解」を上梓した。</p> <p>△宮崎善之が「五明算法後集」を出した。</p> <p>△大島高任(總左衛門)が生れた。</p> <p>△宇田川榕庵が幕命を受け、天文臺の翻譯方となつた。</p> <p>口頼山陽の「日本外史」が成つた。</p>		<p>△ゲメリンが消化の試験的業績を出した。</p> <p>△ストーニーが生れた。イギリスの物理學者。</p> <p>△ブレイシエが血性黃疸を研究した。</p> <p>△ジュネが蒸氣密度の測定法を發明した。</p> <p>△ニエプスが寫眞術を工夫した。</p> <p>△モサンダーがセリウムを發見した。</p> <p>△ペラアールがプロミンを發見した。</p> <p>△ヘンリー・ヘルがエチールアルコールを合成した。</p> <p>△ヴィーデアンが生れた。ドイツの物理學者。</p> <p>△カニツア・アロが生れた。イタリーの化學者。</p> <p>△カリーントンが生れた。イギリスの天文學者。</p> <p>△ロンドン大學が創立した。</p> <p>△ジェルゴヌが、雙對の原理を立てた。</p> <p>△トムゼンが生れた。デンマークの化學者。</p> <p>△ピアツジが發した。當時最もすぐれた恆星目錄をつくつた人。</p> <p>△フラウンホーファーが生れた。始めて迴折格子に依る迴折現象を研究し光</p>

皇紀	年號	日本	西紀	外國
二四八七	一〇	<p>△佐藤信淵が「經濟要録」を書いた。</p> <p>△伊藤圭介が物理學を説いた。</p> <p>△和田寧が始めて轉距軌跡術を説いた。西洋に於けるルーレットである。</p> <p>△硝子玉の義眼が用ひられた。</p> <p>△桂川國寶が發した。</p> <p>△畔田翠山が「水族誌」の一部を書いた。また「熊野物産誌」五卷をも書いた。</p> <p>△華岡鹿城が發した。</p> <p>△宇田川榕庵が「昆蟲通論」を著した。シヨメールの百科全書昆蟲篇を記し自己の意見をも加へたものである。</p> <p>△鶴峰成申が「地轉新圖」を著した。</p> <p>△佐藤文明の述べた鑛業に關する秘傳をその子信淵が筆記し、「山相秘録」として公にし更に之に圖解を附した。</p> <p>△石井光政が「磁石論」を書き磁石を記述した。</p> <p>△藤原相榮が「地轉窮理論」二冊を著した。</p> <p>△小森桃鳩が「泰西方鑑」を著した。病理學書である。</p> <p>△大槻玄澤(盤水、茂賢)が七十一歳で發した。</p> <p>△佐藤尚中が下總に生れた。</p>	一八二七	<p>の波長を算出した。</p> <p>△ホーデが發した。</p> <p>△ライヘンバツムが發した。</p> <p>△リーマンが生れた。ドイツの數學者。</p> <p>△ロバチエフスキーが非ユークリッド幾何學を立てた。</p> <p>△ウエラーがアルミニウムの單體を細粉として得た。</p> <p>△ブラウンが「ブラウン運動」を發表した。</p> <p>△ブライトがブライト病を詳記した。</p> <p>△ベエールが哺乳動物の胚細胞を、コスマは胚物斑を發見した。</p> <p>△アイリーが圓柱硝子の眼鏡を考案した。</p> <p>△ヴォルタが發した。</p> <p>△フオン・ベリアが發生の法則を發見し胎生學を創始した。</p> <p>△ラゲドニが發した。音響學の父といはれる。</p> <p>△シニタイナーが「シニタイナーの定理」を立てた。</p> <p>△フレネルが發した。光の迴折現象を説くに光波の干渉を以てし波動説を復活した。</p> <p>△ベルトウローが生れた。フランスの化學者。</p> <p>△ラブラースが發した。カント・ラブラ</p>



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二四八八	一一	<ul style="list-style-type: none"> <li>△宮本茂十郎が縮布を改良して透綾を創製した。</li> <li>△宇田川椿齋の「和蘭藥鏡」が榕庵によつて増補された。</li> <li>△高橋景保がシーボルトとの地圖交換が訴へられて獄に下つた。</li> <li>△藤田嘉言が歿した。</li> <li>△間重新が父重富の精圓規を黃銅製に改め製作し一書を附して「精圓起元」を出した。</li> <li>△岩崎常正(灌園)が「本草圖譜」五十卷(内三卷が刻本)を著した。刻苦五十年の所産であり、本草學時代の植物圖説中の代表的の文獻として、世界に誇るべきものである。尙ほこの原本は七十八卷あり、植物圖説のみではなく、動物、金石の圖説も收められてある。</li> <li>△萩原信芳が生れた。</li> <li>△榊林峽山が歿した。</li> <li>△鍋田品山の「陸奥警城界路程全圖」が刊行された。</li> <li>△大和見立が歿した。</li> </ul>		一八二八	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ナヴァリノの海戦があつた。</li> <li>△ウットロヘが内透及び外透を説いた。</li> <li>△ベニールが「動物胎生學」を著した。</li> <li>△ビオリイが打診板を考案した。</li> <li>△ベルツエリウスがトリウムを發見した。</li> <li>△ヴェラーがシアン酸アンモニウムより尿素を合成し有機物と無機物との連繫を示した。</li> <li>△ウオルラストンが歿した。パラヂウム、ロヂウムの發見、白金延伸法の發見をはじめ電流の熱作用の實驗などの業績がある。</li> <li>△グリーンがグリーンの定理を立てた。</li> <li>△コロオリが、コロオリの力を提唱した。</li> <li>△ニコルがニコルのプリズムを發明した。</li> <li>△ブルーストが歿した。定比例の法則の確立に盡した。</li> <li>△タルウエイルヒイルが胎盤の石灰變性に就て述べた。</li> <li>△ベルマスが歐爾尼亞の根治手術を説いた。</li> </ul>	
二四八九	一二	<ul style="list-style-type: none"> <li>△水野逸齋が斑入植物三百五十餘點を圖説した「草本錦葉集」七卷を著した。わが國園藝書中最上の著述と稱されてゐる。挿圖は關根雲停の筆である。</li> <li>△各務文獻が刑屍の解剖に立會つて「圖誌」を著した。</li> <li>△シーボルトの獄が起り國外に追放され、土生支碩等獄に下つた。</li> <li>△一朱銀及び二分判金が鑄造された。</li> <li>△伊藤圭介が「泰西本草名流」三卷を著し、初めてリンネの分類法を紹介した。</li> <li>△大内左馬之介が「極意箇條秘書」を書いた。</li> <li>△前田夏蔭が「木の芽の説」を著した。本邦茶の起源沿革を説いたものである。</li> <li>△高橋景保が獄中で歿した。年四十五であつた。</li> <li>△この頃日高涼臺が「格物究理論・磁石話」を書いた。蘭書を譯したものである。</li> <li>△神田孝平が生れた。</li> <li>△近藤重藏(守重)が獄中で歿した。五十九歳であつた。探檢家にして書誌學者。</li> <li>□松平榮翁が歿した。</li> </ul>		一八二九	<ul style="list-style-type: none"> <li>△J・ヘンリーが實用的電磁石を作り三五〇封度ものを引揚げた。</li> <li>△パビネが長さの標準に光波を用ふる案を提出した。</li> <li>△ステーヴンソンが機關車「ロケット」を製造した。</li> <li>△ラマルクが歿した。</li> <li>△T・ヤングが歿した。光の波動説を復活しまた光の横波なる事を提唱した。</li> <li>△アーベルが歿した。積圓函數論を始めた。またアーベル函數を發見した。</li> <li>△ヴォークランが歿した。生化學に關する業績が多い。</li> <li>△ガウスが力學の束縛の原理を公にした。またガイク場に關する定理も公にした。</li> <li>△M・B・カントールが生れた。ドイツの數學史家。</li> <li>△グリースが生れた。ドイツの化學者。</li> <li>△タリストツフェルが生れた。ドイツの數學者。</li> <li>△ケタレが生れた。ドイツの有機化學者。</li> <li>△スミツソンが歿した。</li> <li>△デーヴェーが歿した。鹽素の發見等がある。</li> <li>△コーシーが正角柱に就て振れを指摘した。</li> <li>△L・ローレンツが生れた。デンマーク</li> </ul>	



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二四九〇	天保元		<ul style="list-style-type: none"> <li>△足立長萬が初めて西洋産科術を唱へた。この年六十一歳で歿した。</li> <li>△長谷川寛が校閲し千葉胤秀が「算法新書」を著した。數學教科書として著名である。</li> <li>△小出龍が刑屍を解剖すること十數回、「導察私録」はこの所産である。</li> <li>△馬場正督が「側圓傍小圓術」を著した。</li> <li>△稻川信吾が「武用之卷」を書いた。</li> <li>△村井多治馬が行軍砲を發明した。</li> <li>△高森觀好が歿した。</li> <li>△白石長忠の校閲になる池田貞一著の「數理無盡藏」が出た。その幾何學公式はケージの定理と同一でありしかもケージに先立つこと三十年である。</li> <li>△本庄管一が「眼科錦囊」四巻を著した。漢、蘭折衷の眼科書である。</li> </ul>	一八三〇	<ul style="list-style-type: none"> <li>□アドリヤノーブルの和約が成つた。</li> <li>△ホオチエがベツスサアルを考案した</li> <li>△ライエルの「地質學原理」が出た。</li> <li>△ブラウンが細胞の核を發見した。</li> <li>△フォン・ペーアが、細胞の胚芽を説いた。</li> <li>△リービツヒが燃焼爐を發明した。この年歿した。</li> <li>△スタルチオンが電極のアマルガム法を發明した。</li> <li>△クレモナが生れた。イタリーの數學者。</li> <li>△フリーエが歿した。フリーエの級數同係數及び同積分等がある。</li> <li>△J・ヘンリーがアラデーに先立つて自己感應現象を發見した。</li> <li>△J・L・マイヤーが生れた。ドイツの物理學者、化學者。</li> <li>△ラウールが生れた。フランスの物理學者、化學者。</li> <li>□七月革命が起つた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△ヒルメンが筋肉中の被囊旋毛蟲を實證した。</li> <li>△ゼーベックが歿した。</li> <li>△アラデーが電磁感應を發見しました</li> </ul>
二四九一	二		<ul style="list-style-type: none"> <li>△藤本庄左衛門が擧段通を創製した。</li> <li>△杉田立輔が「瘍科新撰」を脱稿した。</li> <li>△足立長萬が「醫方研癸」を出した。ストルカの内科書の翻譯である。</li> </ul>	一八三一	<ul style="list-style-type: none"> <li>磁場によつて導體を動かす時は電流を生ずることを證明した。</li> <li>△リービツヒが元素分析を行ひまたアセトンの組成を明にした。</li> <li>△ホイットストンが音の共鳴の現象を發見した。</li> <li>△マクヌエルが生れた。</li> <li>△ベルチエリウスがヴァナヂウムを發見した。</li> <li>△スベイヤンがクロロフォルムを創つた。</li> <li>△ヴァグナーが生れた。ドイツの化學者。</li> <li>△グレアムがグレアムの法則を發見した。</li> <li>△デデキントが生れた。ドイツの數學者。</li> <li>△テートが生れた。イギリスの物理學者。</li> <li>△ノイマンが固體の分子熱に關するノイマンの法則を見出した。</li> <li>△ヒュースが生れた。イギリスの物理學者、發明家。</li> <li>△ブレディーヒンが生れた。ロシアの物の天文學者。</li> <li>△マクスウエルが生れた。イギリスの物理學者。</li> <li>△ラウスが生れた。イギリスの數理物理學者。</li> </ul>	

			<ul style="list-style-type: none"> <li>△岩田廣成が「新編氣背術」を發表した。</li> <li>△國友壽兵衛が反射望遠鏡の製作に着手した。</li> <li>△小野榮重が歿した。</li> <li>△安田雷洲が「輿地全圖」地球度制」を著した。</li> <li>△吉雄如淵(六三郎)が歿した。</li> <li>△青地林宗が同志會を起した。</li> </ul>			
--	--	--	---	--	--	--



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二四九二	三		<ul style="list-style-type: none"> <li>△杉田立卿の譯書「瘍科新撰」の刻が成つた。西洋外科全書の始めである。</li> <li>△高野長英が「醫原權要」を撰した。西洋の生理學書を譯述したもので、この書によつて生理學が始めてわが國に傳はつた。</li> <li>△安田雷洲が「地球度割圖解」を作つた。</li> <li>△山本實前が「大全塵劫記」を著した。</li> <li>△内田五藏が「古今算鑑」を著した。</li> <li>△中原啓介が鹿兒島に生れた。</li> <li>△飯沼慈齋が五十歳で「草木圖説」の著述に着手しまた大垣で西洋植物學を講じた。</li> <li>△鷹見泉石(土井利位)が「雪華圖説」を著した。</li> <li>△國友藤兵衛が反射望遠鏡を完成した。</li> <li>△徳川齊昭が海防を講せしめ巨砲を鑄造した。</li> <li>△松木良順が生れた。</li> <li>△柳橋悦が(方次郎)が伊勢に生れた。</li> <li>□頼山陽が歿した。</li> </ul>	一八三二	<ul style="list-style-type: none"> <li>△ランドルトが生れた。ドイツの化學者。</li> <li>□白耳義の獨立が成つた。土耳其、埃及が開戦した。</li> <li>△T・ヘンリーが自己感應を説いた。</li> <li>△ガウスが絶対單位を説いた。</li> <li>△フハラデーが瓦爾幸尼及び磁氣電流を發見した。</li> <li>△ホヂキンが假性白血性を報告した。</li> <li>△聖ヒライレが畸形學を公にした。</li> <li>△リービッヒが乳酸の組成を定めた。</li> <li>△ブリエースターが吸収スペクトルを説明した。</li> <li>△キュニエが歿した。</li> <li>△フェツダーセンが生れた。ドイツの物理學者。</li> <li>△エンケが二重星の軌道を計算した。</li> <li>△ザツクスが歿した。</li> <li>△グイムズハーストが生れた。イギリスの工學者。</li> <li>△ヴェーラーがリービッヒと共にベンゾイル基を發見した。</li> <li>△カイユテが生れた。フランスの物理學者。</li> <li>△N・L・S・カルノーが歿した。カルノーの循環過程に依り熱力學の基礎を築いた。</li> </ul>	

皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二四九三	四		<ul style="list-style-type: none"> <li>△宇田川榕庵が「植學啓源」三卷を著して西洋植物學を説いた。</li> <li>△シーボルトが「日本動物誌」の内爬蟲類、甲殼類の二卷を著した。</li> <li>△廣岡憲寛が「煩絶使用演習録抄」を書いた。</li> <li>△「長谷川流統書」が世に出た。</li> <li>△小野蕙畝、栗本瑞見等が醫學館で藥品二千二百八</li> </ul>	一八三三	<ul style="list-style-type: none"> <li>△ガロアが決闘に依り二十一歳で歿した。群論に就ての創見がある。</li> <li>△クルツクスが生れた。イギリスの化學者、物理學者。</li> <li>△ブラヴェがこの年より一〇年に亘りアルジェリア、ノルウェー、スイス等の山脈、極地等を學術探検した。</li> <li>△ゲーテが歿した。ニュートンの色彩論に反對したことで著名。</li> <li>△ケーニヒが生れた。ドイツの音響學者。</li> <li>△シヤプタルが歿した。硫酸、明礬、曹達の製造を獎勵した。</li> <li>△C・G・ノイマンが生れた。ドイツの數學者、理論物理學者。</li> <li>△モーリスが電信機を案出した。</li> <li>△フリーデルが生れた。フランスの化學者、鑛物學者。</li> <li>△リービッヒがアルコール及びエーテルがエチル基の化合物なることを示した。</li> <li>△ステイヴンソンが、汽笛を發明した。(一八三〇年)</li> <li>△ピランドが行歩繃帶を創つた。</li> <li>△リービッヒが雷氣分解をやつた。</li> <li>△ガウス・ウエーベルが電信を説いた。</li> <li>△モーターランが、滑り摩擦の法則を説いた。</li> </ul>	



皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
	<p>十餘種を鑑定し「藥品會圖錄」二回を編纂した。          △小原良道(直)が「桃洞遺筆」第一編三卷を著した。これは本草家小原桃洞の遺稿をその孫良道が編纂したもので第二編三卷は嘉永五年に完成した。          △長久保赤水の遺著「改正日本輿地路程全圖」が出た。          △鳴門善民が生まれた。          △杉田紫石が歿した。          △青地林宗が五十九歳で歿した。          △高野長英が尙齒會を組織した。          △坪井信道が「神經熱論」を発表した。          △加川蘭齋(子清)が六十二歳で歿した。          △高知の醫學校が興つた。          △小林善湜が生まれた。          △中神琴溪が九十一歳で歿した。生々堂醫談「生々堂傷寒約書」等がある。          △坂本明毅(寧海)が江戸に生まれた。</p>			<p>△アガシーが化石魚類を研究した。          △プラトールが活動寫眞の最初の試みをした。          △フアラデーが電解質の電解量に関するフアラデーの定律を發見した。          △シャンドルが歿した。          △ミュラーが「人體生理學」を出した。          △グイルトが生まれた。スイスの氣象學者。          △グレブシュが生まれた。ドイツの數學者、物理學者。          △ベイアン及びベルソーズがジアスターゼを認めた。          △デューリングが生まれた。ドイツの實證主義哲學者。          △トレヴィンツタが貧困のうちに歿した。          △ノーベルが生まれた。スウェーデンの化學者、技術者。          △J.F.ハーシエルが全天觀測のため喜望峯に赴いた。          △フツクスが生まれた。ドイツの數學者。          △ブリュースターが多邊的レンズの應用により燈臺の照明度を強めこれを實用化した。          △ホイットストーンがクラドニの圖形に就ての論文を發表した。          △ルシャンドルが歿した。</p>		

皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
二四九四						
五		<p>△齋藤宜長同宜義父子が「算法圖理鑑」を發表した。          △上田仲敏が「砲術便覽」を書いた。          △高島秋帆が「硝石丘を作る法並煉硝の法」を著した。          △板井正孝が「火術秘書」を寫した。          △和田寧が轉距軌跡術の算額を愛宕山に奉納した。          △宇田川榛齋(玄慎)が歿した。六十六歳であつた。          △山崎善故が「大日本輿地便覽」を著した。          △榎本左内が生まれた。          △栗本瑞見が七十九歳で歿した。          △福田理軒が大阪で順天堂を開き數學を教へた。          △佐賀の好生館が出来た。</p>	一八三四	<p>△レスリーが歿した。光度、湿度、氣温に關する研究がある。          △ロスコーが生まれた。イギリスの化學者。          △ワーゲが生まれた。ノルウエーの化學者。          △フォン・ベリアが細胞の胚葉を發見した。          △レンツが感應電流の方向に關するレンツの定律を發表した。          △ハリスが真空管の實驗を進歩せしめた。          △ルコングが、キアノールを發見した。          △ブロンゼンが砒素中毒の解毒劑として水酸化鐵を紹介した。          △ルエゲンが石炭酸及びヒノリンを創つた。          △グラハムが瓦斯の交流を説いた。          △ヴ・ハレンチンが顫毛運動を發見した。          △スミスが、螺旋推進器を實用に供した。          △ベルテイエがベルテイエ効果を發見した。          △ラングリーが生まれた。アメリカの物理學者、天文學者。          △ワイスマンが生まれた。</p>		



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二四九五	六			一八三五		
<p>△シールボルトが「日本植物誌」を著した。(一八五一 年完成) △水谷義三郎、伊藤圭介等が名古屋で本草會を開き 「乙未本草會物品目錄」を作った。 △伊東文村が「醫藥正始」を著した。 △國友藤兵衛が自製の反射鏡で太陽の黒點を觀測し</p>			<p>△ラゲールが生れた。フランスの數學 者。 △タインケが生れた。ドイツの物理學 者。 △クラベイロンがカルノーの理論を平 易化し發展を興へた。 △グイカードが粘性を實驗的に見出 した。 △シヨールンマーが生れた。イギリス の有機化學者。 △フランテが生れた。フランスの電氣 學者。 △ホイットストーンが電氣の速度の實 驗を行ひ電信機を發明した。次で自動 電信機を考案した。 △O・マイヤーが生れた。ドイツの物 理學者。 △メンデレエフが生れた。ロシアの化 學者。 △C・ヤングが生れた。アメリカの天 文學者。 △アラデーが格外電流を發見した。 △ワグネルが、人卵の胚種斑を發見し た。 △オーウエンが旋毛蟲を發見した。 △ヒコシユケが聽器蝸牛殼の齒を發見 した。</p>			
<p>黒點の記錄百十五圖を殘した。「日月星彙試留」はそ の觀測記錄である。 △井上正清が「調種星當解」を書いた。 △肥後天草下須島で無煙炭が發見された。 △宇田川榕庵が「開物全書黃金之卷」を著した。金 の性質、合金等を詳記したものである。 △本木道平がエレキテルを考案して淺草で公衆に觀 覽せしめた。 △華岡青洲(三代隨賢)が歿した。七十六歳であつた。 △中川五郎次が函館に於て再び牛痘苗による種痘を 行つた。 △樺本鑛齋が新エレキテルを發明した。先のエレキ テルの發明より三十五年目である。 △奥野齋(子訓)が歿した。「產論校註」「女科隨割」 等があり、産後の手術に更に産後の惡寒の治癒と人 工呼吸法を増補した雙全術(今日の足位迴轉術) を創案し婦人生殖器の解剖に意を注ぎ實川流手術を 大成した人である。 △「不知火考」が出た。 △佐藤泰然がその子に種痘を試みた。 △村田佐十郎が「六分圓儀器量地手引草」を書いた。</p>			<p>△ヂユマがエチーハアルコール及びそ の誘導體を發見した。 △リービツヒが、アルデヒドを分離 採取した。 △ホイットストーンが電弧のスペクト ルは電極によつて異なる事を發見した。 △グイスリツエヌスが生れた。ドイツ の有機化學者。 △ウオルウイルが生れた。ドイツの 科學史家。 △リービツヒが硝子に化學的に銀を附 ける法を發見した。 △コーシーがコーシーの分散式を見出 した。 △シユテファンが生れた。オーストリ アの物理學者。 △シユトロマイヤーが歿した。カドミ ウムの發見者であり、「鑛石分析集」三 十卷がある。 △スキアパレリが生れた。イタリアの 天文學者。 △ニューカムが生れた。アメリカの天 文學者。 △A・V・バイヤーが生れた。ドイツの 有機化學者。 △フイツテイヒが生れた。ドイツの有 機化學者。 △A・アガシーが生れた。スイスの生 物學者。</p>			



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二四九六	七	<ul style="list-style-type: none"> <li>△澁川(高橋)景佑が父至時及び兄景保の遺業「新考(巧)解書」四十卷、「新修五星法」十卷を大成した。</li> <li>△徳川齊昭が助川に砲臺を築かした。</li> <li>△國友藤兵衛が太陽黒點に關する學說を發表しその觀測圖記録を公にした。</li> <li>△小林忠良が「算法叢書」を著した。同書中の直菱の問題は今日の直線面である。</li> <li>△市川行英が「合類算法」を著した。</li> <li>△川原慶賀が「慶賀寫眞草」二卷を著した。シーボルトの委嘱により寫生した植物の粉本を集めて刊行したものである。</li> <li>△石黒信由が七十七歳で歿した。</li> <li>△相良知安が佐賀に生れた。</li> <li>△松田文々堂が「地球圖並に略説」を書いた。</li> <li>△北島順四郎が「武藏國輿地全圖」を刊行した。</li> <li>△樺本參齋が七十四歳で歿した。一説には巫女豊田實の邪學の連累者の嫌疑を受けて轉に就き文政十二年に磔刑に處せられたとも云ふ。</li> <li>△帆足萬里が改めて「窮理通」八卷を著した。地理、本草、醫學に就いて述べ更に銀河、恆星を説き太陽系を論じた。また和算をもつて落體の法則を吟味した。</li> <li>△足立長樹が歿した。</li> <li>△藤林普山が五十六歳で歿した。「和蘭語法解」等がある。</li> <li>△高野長英が「救荒二物考」を著した。</li> <li>△其作阮甫が「泰西名醫彙講」を書いた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△エリクソンが汽船の推進器を發明した。</li> <li>△ペーリが感應コイルを發明した。</li> <li>△スタインハイルが三稜度光計を作つた。</li> <li>△フリーヘラントが聽診法に關する著述をなした。</li> <li>△ダニエルが、ダニエル電池を考案した。</li> <li>△アマールが歿した。</li> <li>△グイラリが生れた。イタリーの物理學者。</li> <li>△グールドベリが生れた。ノルウエーの數學者。</li> <li>△シェーンバインが、オゾンを發見した。</li> <li>△チエルマツクが生れた。オーストリーの岩石礦物學者。</li> <li>△ガウスが地球磁氣の測定をなした。</li> <li>△テプラーが生れた。ドイツの實驗物理學者。</li> <li>△ヘンリーが歿した。</li> <li>△ラーメメンがラーメメンの函數を見出した。</li> <li>△ロツキヤヤが生れた。イギリスの天文學者。</li> </ul>			
二四九七	八	<ul style="list-style-type: none"> <li>△佐藤泰然が長崎に至りニーマンに就いて蘭學を修めた。</li> <li>△最上徳内が八十三歳で歿した。前後九回蝦夷、千島、樺太等を踏査した。</li> <li>△宇田川榕庵がドイツアム・ヘンリーの化學提要のドイツ譯を唱語より重譯し「舍密開宗」七卷を著した。わが國に於ける西洋化學書の始めである。</li> <li>△本間文調が「瘍科秘録」十卷を著して華岡流外科を公にした。この項種痘を行ひ「種痘活人十全辯」を著し、種痘は済民の一大良法也と論じた。</li> <li>△志野和卿が「醫理起源表」を著した。</li> <li>△齋藤宜義が「圓理起源表」を書いた。</li> <li>△森重下秋が「森重流火術全書」を出した。</li> <li>△鹿兒島藩から「質問本草」八卷が公刊された。琉球諸島産の草木に就て支那の醫家四十五人の鑑定を求め之を集録したものである。</li> <li>△國友藤兵衛が「九日月」を書いた。月面の寫生圖である。</li> <li>△青生東齋が「國郡全圖」を書いた。わが國の分國地圖である。</li> <li>△江馬蘭齋(元恭)が九十二歳で歿した。「五液診法」「泰西熱病集譯」等がある。</li> <li>△高野長英が「醫原綱要」外編を書いた。</li> <li>△吉雄常三が「晴雨考」を書いた。</li> <li>□大鹽平八郎の亂があつた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△アガスジイツが「氷結時代説」を發表した。</li> <li>△フアラデーが近接作用の立場から電磁場論の基礎を與へた。</li> <li>△カゲニアルト・ラアオオウルが醱酵原因としての酵母菌を發見した。</li> <li>△フロウレンスが、呼吸中樞を發見した。</li> <li>△ハウルが反射運動を説いた。</li> <li>△シュライデンが植物細胞の發育を證明して細胞が植物構成の原素であると説いた。</li> <li>△タツクとホイットストンが實用的磁針電信機を發明した。</li> <li>△モールスが電信機を改良しモールス符號を定めた。</li> <li>△ヴァン・デル・グアールスが生れた。オランダの物理學者。</li> <li>△ヴェーラーが尿酸の研究を進めた。</li> <li>△ダイヴアリスが生れた。</li> <li>△「リビッツ年報」が公刊された。有機化學の發達に資するところ多い。</li> <li>△ニューラングが生れた。イギリスの化學者。</li> </ul>			



皇紀年號	日	本	西紀	外	國		
二四九八	九	<p>△この時代に本間支調が独自の聴診器を工夫し胸腹の諸病を診察し、また按腹法で肝脾を診た。</p> <p>△高橋(澁川)景佑が観測事務に就き澁川家を再興した。</p> <p>△長谷川寛が五十七歳で歿した。</p> <p>△阿部樸齋が「東西半球圖」並に「圖説」を書いた。</p> <p>△上野俊之丞が生れた。</p> <p>△高野長英が「夢物語」を書いた。</p> <p>△大淵常範が栗見瑞見の遺稿「皇和魚譜」二巻を刊行した。河魚五十一種、河海通在魚十三種を載せた。</p> <p>△「三方究理頌」二百五十二頌が出た。</p> <p>△水戸の弘道館内に醫學館が出来た。</p> <p>△緒方洪庵が大阪で開業し、また適々齋塾を開き醫學の外に一般洋學を授けた。</p> <p>△田中芳男が生れた。</p> <p>△賀川南龍(子元)が五十一歳で歿した。</p>	一八三八	<p>△ベツセルが白鳥座六一番星の距離を決定した。</p> <p>△ソビニーが十二指腸蟲を發見した。</p> <p>△エーレンベルグが完備した有機體として滴蟲を述べた。</p> <p>△マウガムがアーク燈を潜水作業に利用した。</p> <p>△グインクラーが生れた。ドイツの化學者。</p> <p>△メルツェルが歿した。メトロノームの發明で名がある。</p> <p>△ジョバートが真空内に於て電流に依り炭素が灼熱することを發見した。</p> <p>△フオン・モールが原形質を研究した。</p> <p>△アウヴェルスが生れた。ドイツの天文學者。</p> <p>△アツプが生れた。アメリカの氣象學者。</p>	<p>△ベツセルが生れた。ドイツの氣象學者。</p> <p>△ベツセルが地球橢圓體の常數を精密に算出した。(ベツセルの橢圓體)(一八三七年—一八四一年)</p> <p>△マスカールが生れた。フランスの物理學者。</p> <p>△リービッヒが尿酸を研究した。</p>		
二四九九	一〇	<p>△多紀元堅が「藥治通義」を著した。</p> <p>△畔田翠山が「水族志」十巻を完成した。魚類七百種を圖説し、魚族論、魚族の體體、魚體の區域等を詳説した貴重な學術書だがその一部分だけが傳へられてゐる。</p> <p>△「見はてぬ夢」が世に出た。エレキテルに関する資料である。</p>	一八三九	<p>△ジョルダンが生れた。フランスの數學者。</p> <p>△ツエツペリンが生れた。ドイツの飛行船建造者。</p> <p>△マツハが生れた。オーストリーの物理學者。</p> <p>△デネーロンが歿した。</p> <p>△フアラデーが蓄電器の電氣容量が兩板の間に挟在する物質に依つて異なる事實を見出した。</p> <p>△バイルシュタインが生れた。ロシアの有機化學者。</p> <p>△パーキンが生れた。イギリスの有機化學者。</p> <p>△ヒルが生れた。アメリカの天文學者。</p> <p>△ヒルデブランド・ヒルデブランドソンが生れた。スエーデンの氣象學者。</p> <p>△ポアボーイランが生れた。フランスの化學者。</p> <p>△ホイットストンが實體鏡の理論を説き次で偏光時計を發明した。</p> <p>△ガウスが幾何光學理論を立てた。(一八四〇年)</p> <p>△ガヴルレットが寒戰期に於ける體溫昇騰を發見した。</p> <p>△ヘンダーソンがケンタウルス座アルファ一星の距離を決定した。</p> <p>△シニワンが動物細胞説を確立した。</p>			



皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
		<p>△内田五観が幕命により關東沿岸の巡察測量をなした。          △武藏石壽が名著「貝八種」の一部分を書いた。          △和蘭人リシニールが牛痘漿をわが國に傳へた。          △新宮涼庭が私財を投じて京都に書院を建て蘭醫方を教授した。順正書院である。          △日下誠が七十六歳で歿した。          △宇田川格庵譯「會審開宗」外篇が出た。彼はこの頃頻りに化學を唱へた。          △小關三英が歿した。時事を慨して自殺したとも云ふ。          △久米通賢がドンドロ附木からヒントを得て鐵砲發火機の工夫をなした。          △渡邊華山、高野長英が罰せられた。          △上田公鼎(棟年)が四十一歳で歿した。「上田家眼目篇」「眼科一家言」等がある。          △川北朝鄰(彌十郎)が生れた。          △岡研介が四十一歳で歿した。</p>		<p>△ルイ・アランが氷河の研究を發表した。          △ガウドイアーが、ゴムの加硫をなした。          △ヂュヌマが三鹽化磷酸を創りタイプ説を完成した。          △ブレイが正切電流計を發明した。          △トレキラヌスが歿した。          △ギツプスが生れた。アメリカの理論物理學者。          △ピアスが生れた。アメリカの物理學者。          △ハンが生れた。オーストリーの氣象學者。          △ボツゲンドルフが銀電量計を考案した。          △グロロヴがグロロヴ電池を考案し電氣弧燈を點じた。          △タントが生れた。ドイツの物理學者。          △ダゲールがダゲールタイプ(銀板寫眞)を工夫した。          △スミスが歿した。英國地質學の父。          △ハンケルが生れた。ドイツの數學者。          △プレヴオが歿した。          △A.E.ベツクレル(ベツクレルの父)がベツクレル効果を發見した。          △マイヤーが、鮮紅の靜脈血を觀察した。</p>		
二五〇〇	一一	<p>△この頃博多の人大隱能一が獨創で太陽曆を發表したが人々は之を嘲笑して顧みなかつた。          △一葉軒が「金田流火砲無窮卷口譯」を書いた。          △能勢榮之進が火書「仕込書」を著した。          △牛島盛庸が八十五歳で歿した。その遺稿「數理圖理一致術」が出たが一種の菱形算法で西洋の反形法と同様である。          △和田寧が五十四歳で歿した。彼の圓弧の長さを求むる方法は現代の方法と大差が無い。          △御橋儀右衛門が歿した。長崎の人で時計製造の祖といはれ、幕府の御用時計師であつた。          △幕府が「新編相模風土記稿」百二十巻を完成した。          △福田浩齋が歿した。          △國友藤兵衛(一貫齋)が六十三歳で歿した。          △藤井三郎が「英文範」を著した。蘭學の時代に英語の刊行は珍らしかつた。          △山口の醫學校が出来た。          △「浪花みやげ」が出た。エレキテルに關する資料である。          △劍持章行が「探蹟算法」を出した。内田五観の書いたものと云はれる。「圓理水解」は章行の著作である。          △田島柳柳の「鳴蘭地球全圖」が公刊された。          △鈴木春山が「西洋兵制」を出版した。</p>	一八四〇	<p>△ミラーがミラーの記號を用ひた。          △ルンゲが生れた。ドイツの化學者。          □鴉片戰爭があつた。          △マミチが顯微鏡の對物鏡に液浸法を用ひることを發見した。          △リービツヒが農藝化學を確立した。          △ニルソンが生れた。スウェーデンの化學者。          △ヨハン・ミラーが物理學的生理學を建てた。          △ハンレが細菌と疾病の關係に就てその學說を進めた。          △ヤコビーが電波法を發明した。          △ハイネが、脊椎性の小兒麻痺を説いた。          △スチルリントが始めて血管運動神經を説いた。          △グロロヴが白金線を用ひた真空灼熱ランプを考案した。          △シエンバインが、オゾンに就て記述した。          △ダビッドソンが蓄電池による電車を發明した。          △アツベが生れた。ドイツの光學者。          △オルバースが歿した。彗星の軌道決定の新方法を案出し、小惑星第二番パラス、第四番ジュスタ及び數個の彗星</p>		



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國		
二五〇一	一二			一八四一				
					を發見した。 △デイリクレが解析的數論の先驅をなした。 △クレイグエが生れた。スウェーデンの化學者。 △F.W.G.コールラウシュが生れた。ドイツの實驗物理學者。 △ハミルトンが四元法を發見した。 △ヘッスがヘッスの法則を見出した。 △ポアッソンが發した。數學の外に流體及び彈性力學に貢獻した。 △ホイットストーンがクリステイの發明した電氣抵抗測定器を實用化した。 (ホイットストーン繩)			
					△ヤアクソンが麻痺の目的としてエーテル吸入を試みた。 △トオインヒーが、角膜小體を發見した。 △E.W.ジームンスが、電氣鍍金の特許を得た。 △シユタイナーが等周問題を論じた。 △フオンゲルが鷓口瘡菌を發見した。 △ジユールが電流の熱作用に關するジユールの定律を説いた。 △ブンゼンが、ブンゼン電池を發明した。			

△久米通賢がドンドロ擊發々火銃を完成した。彼は之に始めて燐素酸加里を應用した。この年六十二歳で歿した。  
△上野俊之丞がダゲールタイプ(寫眞器)を島津齊興に獻じて撮影の實驗をなした。  
△高島秋帆が徳丸原で洋式訓練を行つた。  
△新に九段坂上に觀測所を設けられ澁川景佑がこの任に當つた。  
△大槻俊齋が江戸に於て種痘(牛痘漿)を行つた。この前後榊林宗建もはた之を行つた。  
△渡邊華山が歿した。  
□天保の改革があつた。

					△フオーゲルが生れた。ドイツの天文學者。 △ドウカンドが歿した。 △アマガーが生れた。フランスの物理學者。 △ヴァグナーが歿した。數學は哲學及び認識の機關、思惟は一種の計算だと説いた。 △オツボルツァーが生れた。オーストリーの天文學者。 △ポツゲンドルフが滑動加減抵抗器を發明した。 △グリーンが歿した。 △グレイベが生れた。ドイツの有機化學者。 △コルニユが生れた。フランスの物理學者。 △シユーマンが生れた。ドイツの物理學者。 △トールボットがカロタイプ法を發明した。 △モザンダーがヂヂムを分離した。 △マイヤーが熱と運動との關係を考察してエネルギーの恆存則に到達した。 △メンデンホールが生れた。アメリカの物理學者。 △リービツヒが、最小養分律を發表した。			
--	--	--	--	--	--	--	--	--



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二五〇二	一三			一八四二		
		△澁川景祐が幕府から寛政解書數理を撰述すべきことを命ぜられた。また足立信頭と共に「天保解書」九冊を編した。この解法はラランズの天文書に依つて編記したもので、明治六年太陽曆に改められるまで用ひられた。(天保壬寅曆)			△ペリゴアが初めて純粋なウラン金屬を得た。	
		△佐藤信淵が「熔化石論」を著した。天文から地球の成因を説き更に人類と日本の創成を述べたものである。			△マイヤーがエネルギーの保存を説いた。	
		△川本治兵衛が陶磁器に銅版の繪像を施すことを發明した。			△スチンストルユブが種族變換論を唱へた。	
		△緒方洪庵が大阪に解剖社を興し、葎島に解剖場を設けた。			△グロウヴが白金電球を發明した。	
		△惠川景之が「弧三角法解」を著した。			△ヘルムホルツが神經纖維の進行神經細胞を發見した。	
		△其作阮甫(摩西)が「泰西名醫彙講」を出した。			△ドゥブナラーがドゥブナラーの效果を見出した。	
		△吉雄常三が硝酸酸や酒精を作り水銀を用ひて雷汞を創製したが更に之を應用して雷管銃を發明した。			△モルトンがエーテルを麻酔劑として齒を抜いた。	
		○オランダの軍隊で初めて雷管銃を採用した翌年である。			△デルイがペリの街路照明にアーク燈を利用した。	
		△盛岡の明義堂が興つた。			△ヘンリーがライデン瓶の放電の際に於る電氣振動を證明した。	
		△翻譯書「理學入門」が出た。			△ペリゴアがウラニウムを發見した。	
		△小出修喜が「圓理算經」を書いた。			△ハリーエルが青寫眞を發明した。	
		△京都學習院が設けられた。			△アーバクロンビーが生れた。イギリスの氣象學者。	
		△高島秋帆が西洋砲術教授を許された。			△ダルプーが生れた。フランスの數學者。	
		△東條信樹が「増訂伊豆七島全圖」を書いた。			△デュワーが生れた。イギリスの化學者、物理學者。	
		□外國船打拂令を改正した。			△ラーデンブルクが生れた。ドイツの化學者。	

皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二五〇三	一四			一八四三		
		△佐藤泰然が佐倉に病院(順天堂)を建てた。			△リリーが生れた。ノルウェーの數學者。	
		△堀内素堂が「幼幼精義」二十卷を著した。西洋小兒科の譯書である。			△リッパーマンが生れた。ドイツの有機化學者。	
		△杉田成卿、宇田川榕庵、品川梅村等が「海上砲術全書」を著した。竹内玄洞、其作阮甫、山路諧孝等もこの編著に加つた。			△リヒターが生れた。ドイツの化學者。	
		△十東井齋が歿した。			△リンデが生れた。ドイツの工學者。	
		△高知の醫學校が出来た。			△レーノルツが生れた。イギリスの工學者。	
		△吉雄常三が雷管銃の改良研究を進めるうち雷汞の爆發によつて化學研究に殉じた。この年に「粉砲考」を書いた。			△レーリーが生れた。イギリスの物理學者。	
		△酒井若狭守が天球儀を献したが、天文方山路諧孝が之を修正した。			△ヴェーバーが生れた。ドイツの數學者。	
		△廣川晴軒が「世界地圖」を作つた。メルカトールの圖法を用ひたものである。			□イギリスが香港を占領した。	
		△松村忠英が「町見捷徑望遠心計志」を著して、簡			△ブンゼンが光度計を發明した。	
					△フンボルトの「宇宙」が出た。	
					△ダゲールが銀板寫眞「ダゲールタイプ」を完成した。	
					△ブレイドが以心傳心を科學的に研究した。	
					△ゲルハルトが酸素の原子量を十六と定めた。	
					△ホイットストンがホイットストーン橋を更に改良した。	
					△コッホが生れた。	
					△ギルが生れた。イギリスの天文學者。	
					△クラベイロンがクラベイロン關係式を導出した。	
					△グロートが生れた。ドイツの植物學者。	



皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
二五〇四	弘化元	<p>易な測量法を説いた。</p> <p>△小森桃塙が六十二歳で歿した。「蘭方權機」「病因精義」等がある。</p> <p>△遠藤利貞(本姓堀尾)が生れた。</p> <p>△大藤能一が再び太陽暦を作った。</p>	<p>△モールズが電信機を完成した。</p> <p>△ベエツエンコオフェルが胆汁檢證法を公にした。</p> <p>△ラカウヒが屍體水射的注射法を説いた。</p> <p>△フリーコーがアーク燈に炭素棒を使用した。</p> <p>△ローゼがニオビウムを發見した。</p> <p>△ドルトンが歿した。科學的原子論の創始者。</p> <p>△クニツピングが生れた。ドイツの氣象學者。</p> <p>△グラスマンが近代數學を創めたが世</p>	<p>△コロオリが歿した。</p> <p>△シユグアーベが太陽黑點の出現が約十年を週期とすることを發見した。</p> <p>△ジユールが、熱と仕事當量を實測した。</p> <p>△チェンバリンが生れた。アメリカの地質學者。</p> <p>△フエイがフエイ彗星を發見した。</p> <p>△ドレーパーが水素と鹽素との光化學結合の實驗をなした。</p> <p>△ラクロアが歿した。</p> <p>△タンヌリが生れた。フランスの數學者、科學史家。</p>	<p>△モールズが電信機を完成した。</p> <p>△ベエツエンコオフェルが胆汁檢證法を公にした。</p> <p>△ラカウヒが屍體水射的注射法を説いた。</p> <p>△フリーコーがアーク燈に炭素棒を使用した。</p> <p>△ローゼがニオビウムを發見した。</p> <p>△ドルトンが歿した。科學的原子論の創始者。</p> <p>△クニツピングが生れた。ドイツの氣象學者。</p> <p>△グラスマンが近代數學を創めたが世</p>	<p>△コロオリが歿した。</p> <p>△シユグアーベが太陽黑點の出現が約十年を週期とすることを發見した。</p> <p>△ジユールが、熱と仕事當量を實測した。</p> <p>△チェンバリンが生れた。アメリカの地質學者。</p> <p>△フエイがフエイ彗星を發見した。</p> <p>△ドレーパーが水素と鹽素との光化學結合の實驗をなした。</p> <p>△ラクロアが歿した。</p> <p>△タンヌリが生れた。フランスの數學者、科學史家。</p>
二五〇五	二	<p>△山路諸孝が蘭書を翻譯し「海上砲術」と名づけて出した。</p> <p>△長久保赤水の「新製輿地全圖」が出た。</p> <p>△箕作省吾が「坤輿圖說」を書いた。</p> <p>△前田温、酒井燐が「亞墨新語」を書いた。</p> <p>△安田雷洲が「銅版東海道五十三關圖」を作った。</p> <p>△桂川國家が歿した。</p> <p>△間宮林藏(倫宗)が七十歳で歿した。</p> <p>△オランダ王が幕府に忠言を呈した。</p>	<p>△シエーンバインが綿火薬を創つた。</p> <p>△フアラデーが偏光に關するフアラデーの效果を説き、またコバルトの帶磁性をも發見した。</p> <p>△ハウがミシンを發明した。</p> <p>△リントが皮下注射を創始した。</p> <p>△ヌーンが、舌尖のヌーン腺を發見した。</p> <p>△ヴェルヒオウが白血病を發見した。</p> <p>△ブエツフアーが生れた。ドイツの植物學者。</p> <p>△スターが白金電球を創つた。</p> <p>△G.H.ダーウインが生れた。イギリスの數理天文學者。進化論者として有名なダーウインの子。</p>	<p>△シエーンバインが綿火薬を創つた。</p> <p>△フアラデーが偏光に關するフアラデーの效果を説き、またコバルトの帶磁性をも發見した。</p> <p>△ハウがミシンを發明した。</p> <p>△リントが皮下注射を創始した。</p> <p>△ヌーンが、舌尖のヌーン腺を發見した。</p> <p>△ヴェルヒオウが白血病を發見した。</p> <p>△ブエツフアーが生れた。ドイツの植物學者。</p> <p>△スターが白金電球を創つた。</p> <p>△G.H.ダーウインが生れた。イギリスの數理天文學者。進化論者として有名なダーウインの子。</p>	<p>△シエーンバインが綿火薬を創つた。</p> <p>△フアラデーが偏光に關するフアラデーの效果を説き、またコバルトの帶磁性をも發見した。</p> <p>△ハウがミシンを發明した。</p> <p>△リントが皮下注射を創始した。</p> <p>△ヌーンが、舌尖のヌーン腺を發見した。</p> <p>△ヴェルヒオウが白血病を發見した。</p> <p>△ブエツフアーが生れた。ドイツの植物學者。</p> <p>△スターが白金電球を創つた。</p> <p>△G.H.ダーウインが生れた。イギリスの數理天文學者。進化論者として有名なダーウインの子。</p>	<p>△シエーンバインが綿火薬を創つた。</p> <p>△フアラデーが偏光に關するフアラデーの效果を説き、またコバルトの帶磁性をも發見した。</p> <p>△ハウがミシンを發明した。</p> <p>△リントが皮下注射を創始した。</p> <p>△ヌーンが、舌尖のヌーン腺を發見した。</p> <p>△ヴェルヒオウが白血病を發見した。</p> <p>△ブエツフアーが生れた。ドイツの植物學者。</p> <p>△スターが白金電球を創つた。</p> <p>△G.H.ダーウインが生れた。イギリスの數理天文學者。進化論者として有名なダーウインの子。</p>

皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
二五〇四	弘化元	<p>易な測量法を説いた。</p> <p>△小森桃塙が六十二歳で歿した。「蘭方權機」「病因精義」等がある。</p> <p>△遠藤利貞(本姓堀尾)が生れた。</p> <p>△大藤能一が再び太陽暦を作った。</p>	<p>△モールズが電信機を完成した。</p> <p>△ベエツエンコオフェルが胆汁檢證法を公にした。</p> <p>△ラカウヒが屍體水射的注射法を説いた。</p> <p>△フリーコーがアーク燈に炭素棒を使用した。</p> <p>△ローゼがニオビウムを發見した。</p> <p>△ドルトンが歿した。科學的原子論の創始者。</p> <p>△クニツピングが生れた。ドイツの氣象學者。</p> <p>△グラスマンが近代數學を創めたが世</p>	<p>△コロオリが歿した。</p> <p>△シユグアーベが太陽黑點の出現が約十年を週期とすることを發見した。</p> <p>△ジユールが、熱と仕事當量を實測した。</p> <p>△チェンバリンが生れた。アメリカの地質學者。</p> <p>△フエイがフエイ彗星を發見した。</p> <p>△ドレーパーが水素と鹽素との光化學結合の實驗をなした。</p> <p>△ラクロアが歿した。</p> <p>△タンヌリが生れた。フランスの數學者、科學史家。</p>	<p>△モールズが電信機を完成した。</p> <p>△ベエツエンコオフェルが胆汁檢證法を公にした。</p> <p>△ラカウヒが屍體水射的注射法を説いた。</p> <p>△フリーコーがアーク燈に炭素棒を使用した。</p> <p>△ローゼがニオビウムを發見した。</p> <p>△ドルトンが歿した。科學的原子論の創始者。</p> <p>△クニツピングが生れた。ドイツの氣象學者。</p> <p>△グラスマンが近代數學を創めたが世</p>	<p>△コロオリが歿した。</p> <p>△シユグアーベが太陽黑點の出現が約十年を週期とすることを發見した。</p> <p>△ジユールが、熱と仕事當量を實測した。</p> <p>△チェンバリンが生れた。アメリカの地質學者。</p> <p>△フエイがフエイ彗星を發見した。</p> <p>△ドレーパーが水素と鹽素との光化學結合の實驗をなした。</p> <p>△ラクロアが歿した。</p> <p>△タンヌリが生れた。フランスの數學者、科學史家。</p>
二五〇五	二	<p>△山路諸孝が蘭書を翻譯し「海上砲術」と名づけて出した。</p> <p>△長久保赤水の「新製輿地全圖」が出た。</p> <p>△箕作省吾が「坤輿圖說」を書いた。</p> <p>△前田温、酒井燐が「亞墨新語」を書いた。</p> <p>△安田雷洲が「銅版東海道五十三關圖」を作った。</p> <p>△桂川國家が歿した。</p> <p>△間宮林藏(倫宗)が七十歳で歿した。</p> <p>△オランダ王が幕府に忠言を呈した。</p>	<p>△シエーンバインが綿火薬を創つた。</p> <p>△フアラデーが偏光に關するフアラデーの效果を説き、またコバルトの帶磁性をも發見した。</p> <p>△ハウがミシンを發明した。</p> <p>△リントが皮下注射を創始した。</p> <p>△ヌーンが、舌尖のヌーン腺を發見した。</p> <p>△ヴェルヒオウが白血病を發見した。</p> <p>△ブエツフアーが生れた。ドイツの植物學者。</p> <p>△スターが白金電球を創つた。</p> <p>△G.H.ダーウインが生れた。イギリスの數理天文學者。進化論者として有名なダーウインの子。</p>	<p>△シエーンバインが綿火薬を創つた。</p> <p>△フアラデーが偏光に關するフアラデーの效果を説き、またコバルトの帶磁性をも發見した。</p> <p>△ハウがミシンを發明した。</p> <p>△リントが皮下注射を創始した。</p> <p>△ヌーンが、舌尖のヌーン腺を發見した。</p> <p>△ヴェルヒオウが白血病を發見した。</p> <p>△ブエツフアーが生れた。ドイツの植物學者。</p> <p>△スターが白金電球を創つた。</p> <p>△G.H.ダーウインが生れた。イギリスの數理天文學者。進化論者として有名なダーウインの子。</p>	<p>△シエーンバインが綿火薬を創つた。</p> <p>△フアラデーが偏光に關するフアラデーの效果を説き、またコバルトの帶磁性をも發見した。</p> <p>△ハウがミシンを發明した。</p> <p>△リントが皮下注射を創始した。</p> <p>△ヌーンが、舌尖のヌーン腺を發見した。</p> <p>△ヴェルヒオウが白血病を發見した。</p> <p>△ブエツフアーが生れた。ドイツの植物學者。</p> <p>△スターが白金電球を創つた。</p> <p>△G.H.ダーウインが生れた。イギリスの數理天文學者。進化論者として有名なダーウインの子。</p>	<p>△シエーンバインが綿火薬を創つた。</p> <p>△フアラデーが偏光に關するフアラデーの效果を説き、またコバルトの帶磁性をも發見した。</p> <p>△ハウがミシンを發明した。</p> <p>△リントが皮下注射を創始した。</p> <p>△ヌーンが、舌尖のヌーン腺を發見した。</p> <p>△ヴェルヒオウが白血病を發見した。</p> <p>△ブエツフアーが生れた。ドイツの植物學者。</p> <p>△スターが白金電球を創つた。</p> <p>△G.H.ダーウインが生れた。イギリスの數理天文學者。進化論者として有名なダーウインの子。</p>











皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
二五〇九	二	<p>△宇津木昆臺(天敬)が七十歳で歿した。古醫方をもつて世に鳴り、「古訓醫傳」二十五卷、「日本醫譜」七十卷等がある。</p> <p>△土生玄碩が八十七歳で歿した。</p>	一八四九	<p>象學者。</p> <p>△ボルツァノが歿した。函數論を創めた人。</p> <p>△ウオーレスがベーツと共に小帆船に乗り、南米アマゾンに探検旅行を試みた。</p> <p>△V・マイヤが生れた。ドイツの有機化學者。</p> <p>△W・ラッセルが土星の第八衛星を發見した。</p> <p>△ローランドが生れた。アメリカの物理學者。</p> <p>△バストールが酒石酸の光學的異性體を分離した。</p> <p>△フイゾーが地上に於ける光の速度を測定する方法を考案した。</p> <p>△アルトンが金屬壓力計を發明した。</p> <p>△リビングストンが、南亞橫斷を始めた。</p> <p>△ヴェーラーが、チタンの研究をなした。</p> <p>△エールトンが生れた。イギリスの電氣學者。</p> <p>△キルヒホッフがキルヒホッフの法則を發見した。</p> <p>△クラインが生れた。ドイツの數學者。</p> <p>△ゼーリガーが生れた。ドイツの天文</p>		

皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
二五〇〇	三	<p>を説いた。師の宇田川孫齋の遺志を繼いで完成したものである。この頃また「虎狼病治準」をも書いた。</p> <p>△水原三折が「養育全書」十二卷を著した。奥書齋の説と自己独自の説とを併せたもので、わが國產科書は之によつて完備したといはれる。</p> <p>△鍋島侯が蘭醫モーニツケより痘苗を得て之を接種せしめた。</p> <p>△劍持章行が「算法開編」五卷及び「量地圓起方成」を著した。</p> <p>△齋藤方策が歿した。</p> <p>△小石元瑞が歿した。</p> <p>△廣見忠常が「新譯和蘭國全書」を書いた。</p> <p>△杉田成龍が蘭書の私撰を禁ぜられてゐる時「濟世三方」を譯了した。フーヒエランドの治術の三基本を詳説したものである。</p> <p>△桑田立齋がオランダ人より牛痘苗を受けて接種した。</p>	一八五〇	<p>學者。</p> <p>△デベライナーが歿した。白金の接觸作用の研究は觸媒研究の先驅をなした。</p> <p>△J・ヘンリーが天氣豫報を實地に試みた。</p> <p>△フランクランドが沃化エチルに亜鉛を作用せしめエチル亜鉛を得た。</p> <p>△フレミングが生れた。イギリスの電氣學者。</p> <p>△フロベニウスが生れた。ドイツの數學者。</p>		
二五〇〇	三	<p>△佐久間象山が蘭書に依つて寫眞術を研究しその原理と技術を知つた。</p> <p>△杉谷肇助、木島藤太夫、田中虎太郎、馬場榮作等が佐賀に於て反射爐を築き同五年之を完成した。</p> <p>△布川弦五が「海岸備要」を書いた。</p> <p>△シーボルトが「日本動物志」の内、哺乳類、鳥類、魚類の三卷を著した。</p> <p>△野田青霞が「拾品考」を著した。舶來植物十種を解説したもので石崎融濟が圖を描いた。</p> <p>△高野長英が世を忍び澤三伯と自ら名乗り兵書砲術書の翻譯に従事するとき幕吏に圍まれ自刃した。四</p>				







皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二五二二	五			一八五二		
			<p>△薩摩藩で反射本爐の築設に着手した。安政三年(一八五六年)に完成した。</p> <p>△江川太郎左衛門(坦庵)が雷管を作った。</p> <p>△本木昌造が鉛製活字を作った。</p> <p>△片井京助が雷管銃の發明に没頭した。之は江川太郎左衛門の發明した雷管を應用したものである。</p> <p>△伊達彌助が天鵝絨に友禪模様を置くことを發明した。</p> <p>△栗本錫雲が函館に移住して綿羊を牧する傍ら藥園を開いた。</p> <p>△甲斐廣水が「量地圖説」を著した。</p> <p>△下坂彦輔が「地經解義」を著した。</p> <p>△鳥津齊彬が自ら綿鹽硝(綿火藥)を創つた。</p> <p>△「西洋學家譯述目錄」が出た。</p>		<p>譯出版された。</p> <p>△カプタインが生れた。オランダの天文學者。</p> <p>△ヤコービが歿した。ハミルトン・ヤコービの偏微分方程式がある。</p> <p>△シユスターが生れた。ドイツの物理學者。</p> <p>△W・タムソン(ケルヴィン卿)がタムソン効果を發見した。</p> <p>△ニコルが歿した。</p> <p>△フイツツジエラルドが生れた。イギリスの物理學者。</p> <p>△ジフアールが飛行機の原理を説き氣囊を有する飛行船を作り推進器を用ひ小型蒸氣機關で運轉を試みた。</p> <p>△フランクリンが原子價の法則を確立した。</p> <p>△バスセレアウが三元素論を説いた。</p> <p>△キユヘンアイステルが豚肉胞蟲及び蠅蟲の關聯を發表した。</p> <p>△モアツサンが生れた。フランスの化學者。</p> <p>△ゲーベル(ドイツ系米人)がニューヨークに於て始めて電燈を發明した。彼は竹を炭化したものを纖維とし之を電流によつて發熱することを發見した。</p>	

皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
一八五二						
			<p>△渡邊以親が「阿彌圓度用法略圖説」を著した。</p> <p>△江戸大森の海岸に砲臺を築いた。</p> <p>△江川太郎左衛門が千七百度の火力に耐ふる耐火煉瓦を創つた。</p> <p>△大塚瑪蜂が「煩砲射擲表抄」を著した。</p> <p>△飯沼感齋が寫眞術を研究した。</p> <p>△新發田收蔵が「新訂坤輿略全圖」を著した。</p> <p>△佐久間象山が碧色硝子を作りまた「砲術書嚴卦」を書いた。</p> <p>△この時代にオランダ船が浦賀に来てスタンホーン型手引印刷機を傳へた。</p> <p>△帆足萬里が七十五歳で歿した。</p> <p>△杉田成勲、箕作阮甫が「軍用火箭考」十七卷を著した。</p> <p>△橋本左内が乳癌の手術を行った。</p> <p>△北里柴三郎が肥後北里村に生れた。</p> <p>△橋本宗建が歿した。</p> <p>△高松豐吉が江戸に生れた。</p>		<p>即ち炭素電球の發明であるが、この名譽は二十七年後にエディソンに與へてしまつた。</p> <p>△ヴェーバーが分子電流の假説よりして反磁性解明を與へた。またガウスと共に電氣諸星の絕對單位系を導入した(一八四六年、一八五二年、一八五六年)。</p> <p>△エスビがインステイテユーションと共に氣象調査を進めアメリカの氣象事業の基礎を確立した。</p> <p>△ガドリリンが歿した。稀土類元素の鑛石ガドリリン石の發見者。</p> <p>△フアント・ホッフが生れた。オランダの物理化學者。</p> <p>△フイツツシャールが生れた。ドイツの有機化學者。</p> <p>△ウオーレスがこの年よりマレー諸島の探検をなしたが、八ヶ年を費し南洋諸島の動植物相を調査した。</p> <p>△ベツクレルが生れた。フランスの物理學者。</p> <p>△ポインティングが生れた。イギリスの物理學者。</p> <p>△マイケルソンが生れた。アメリカの物理學者。</p> <p>△H・G・マグヌスがマグヌスの効果を見出した。</p> <p>△ラムゼーが生れた。イギリスの化學者。</p>	



皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
二五二三	六	<p>△この時代に鳥津齊彬が、電池を應用して電鏡を行つた。</p> <p>△「鎗林必携」が出た。兵器に關する資料である。</p> <p>△この年より安政三年に亘りアメリカ北太平洋調査船が日本沿海で海藻類を採集したが乗組員ステインブロンは特に貝類を多く採集した。</p> <p>△ペルリが來り乗組員が伊豆下田及び函館に於て海藻、植物の調査採集をなした。</p> <p>△松原新之助が松江に生れた。</p> <p>△「遠西武器圖略」が刊行された。</p> <p>△劍持章行が「量地圓起方成」を著した。</p> <p>△木村直方が量地用規矩術を説いた。</p> <p>△伊藤圭介が「硝子霰」を著した。</p> <p>△今井修が「火藥製造書」を書いた。</p> <p>△上田帶刀が「西洋砲術便覽」を書いた。</p> <p>△高島秋帆が「砲術要録」を著した。</p> <p>△江川太郎左衛門が下田郊外に反射爐を築いたが翌安政元年に設計を變更し葦山郊外中村に築造した。</p> <p>△新發田收蔵が「蕙國地名捷覽」を書いた。</p> <p>△荒木篤之進が「英吉利紀略」を著した。</p> <p>△鶴峰成申が「米利堅新誌」を著した。</p> <p>△片井京助が元込雷管銃を完成した。江川太郎左衛門の雷管に負ふところ多い。</p>	一八五三	<p>△ラーメがラーメの常數を見出した。</p> <p>△アルネットが「純粹數學の歴史」を出した。</p> <p>△ブラグハツツが皮下注射を行つた。</p> <p>△ベルナアルドが肝臓の製糖機關であることを説いた。</p> <p>△ワグネル及びマイスネルが觸覺球を發見した。</p> <p>△ブロンゼンがアルミニウムの製錬法に成功した。亞硫酸曹達を用ひて沃度の定量を行つた。</p> <p>△ヘルムホルツが、太陽收縮説を出した。</p> <p>△ギンツルが二重電信法を發明した。</p> <p>△サン・ティエレルが歿した。</p> <p>△アラゴが歿した。</p> <p>△ヴィーデマンとフランツによりヴィーデマン・フランツの法則が發見された。</p> <p>△ランキンによつてエネルギーの語が用ひられた。</p> <p>△オストヴァルトが生れた。ドイツの化學者。</p> <p>△カメルリン・オンネスが生れた。オランダの物理學者。</p> <p>△ジエラールが水素の型、水の型、ア</p>		

皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
二五一四	安政元	<p>△田中久重が萬年自鳴鐘を考案した。四百日巻四面時計である。藤司關白より「日本第一細工師」の讚辭を受けた。</p> <p>△品川沖及び大阪川口に砲臺を築いた。</p> <p>△大槻恒輔が「外蕃通表」を著した。</p> <p>△大船製造の禁を解いた。</p> <p>△この時代に田原直助が鳥津齊彬の命を受け蘭書を譯して「造船製式」「造船圖譜」を書いた。</p> <p>△河喜多能達が生れた。</p> <p>△北尾次郎が松江に生れた。</p> <p>□米國水師提督ペルリが來朝した。プーチヤチンも來朝した。</p>	一八五四	<p>△ムモニアの型等を基型として化合物を論じた。</p> <p>△コッセルが生れた。ドイツの生理化學者。</p> <p>△フイゾーがフイゾーの干渉實驗をなした。</p> <p>△フエドロフが生れた。ロシアの結晶學、物理學者。</p> <p>△ベックマンが生れた。ドイツの化學者。</p> <p>△リッヂが生れた。イタリーの數學者。</p> <p>△絶対微分學を創始した。</p> <p>△H・ローレンツが生れた。オランダの理論物理學者。</p> <p>△E・タムソンが生れた。イギリス生れのアメリカの電氣工學者。</p> <p>△ブロンゼンが分光器を發明し天體觀測に一新紀元を劃した。</p> <p>△ゲイベルがカーボンランプを完成した。炭素電球として使用に堪ふるものであつた。</p> <p>△ダニイルゼンが癩病の原理的業績を擧げた。</p> <p>△イーストマンが生れた。アメリカの發明家。</p> <p>△ヴェルデがファラデー効果に於ける偏光面の迴轉に關するヴェルデの法則を見出した。</p>		



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
			<p>よる地理書である。</p> <p>△廣瀬竹庵が「亞墨利加總記」を書いた。</p> <p>△正木篤が「英吉利國總記和解」を編した。</p> <p>△福山の誠之館が興った。</p> <p>△伊藤圭介が「萬全叢書硝石篇」三冊を著した。</p> <p>△ペルリが來朝し幕府に電信機等を献上した。</p> <p>△加賀藩が壯輪館を設け西洋學術を講せしめた。</p> <p>△大槻俊齋(仲敏)が「鉄創瑣言」を書いた。</p> <p>△牧野祐之が歿した。</p> <p>△杉田成勳が隠棲して「砲術訓蒙」の講述に従事した。</p> <p>△大槻鯉溪が「金海奇觀」を書いた。</p> <p>△幕府が浦賀に造船所を設け鳳凰丸を建造した。</p> <p>△廣瀬元恭が「理學提要」を著した。西洋理學書の翻譯である。</p> <p>△新宮涼庭が歿した。六十八歳であつた。「神經疫論」「腦敗疫論」等がある。</p> <p>△鎌田支臺が歿した。</p> <p>△牧野傳藏が七十九歳で歿した。關流數學者。</p> <p>△この頃森山多吉郎(榮之進)が小石川に英學塾を開いた。</p> <p>△上野清が生まれた。數學教育者。</p> <p>△波江元吉が生まれた。</p> <p>△鹿兒島及び福岡に硝子製造工場が在った。</p> <p>△山川健次郎が會津に生まれた。</p> <p>△堀内忠亮(素堂)が生まれた。</p> <p>△山村昌永が「西洋雜記」を書いた。</p>			<p>△エルスターが生まれた。ドイツの實驗物理學者。</p> <p>△エーリッヒが生まれた。ドイツの醫學者、生化學者。</p> <p>△オームが歿した。</p> <p>△サバティエが生まれた。フランスの有機化學者。</p> <p>△ショールが生まれた。イギリスの氣象學者。</p> <p>△コールラウシュが電媒偏極に關する式を假定した。</p> <p>△ボアンカレが生まれた。フランスの數學者、物理學者、天文學者。</p> <p>△リドベリが生まれた。スウェーデンの物理學者。</p> <p>△リーマンが非ユークリッド幾何學の新形式を提唱した。</p> <p>△マイヤーが「植物學史」を出した。</p> <p>△ゼンケレーが柳形文字を發見した。</p> <p>□クリミア戰爭が起つた。</p>

皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二五二五	二		<p>△多紀元堅が幕命により「醫心方」の原本に依つて之を校正し模刻して世に出した。</p> <p>△關谷清景が美濃大垣に生まれた。</p> <p>△千本福隆が生まれた。</p> <p>△高峰讓吉が金澤市に生まれた。</p> <p>△辰野金吾が肥前唐津に生まれた。</p> <p>□米、英、露との和親條約が成つた。</p> <p>△江戸九段下に洋學所が出来た。頭取は古賀謹一郎である。</p> <p>△長嵐貫水が「火術提要」を書いた。</p> <p>△川勝泰運が「火攻圖略」を書いた。</p> <p>△中原猶介、宇宿重左衛門が電信機を工夫し實用に供した。</p> <p>△「蘭館エレキテル」が出た。</p> <p>△飯沼慾齋が寫眞器を作つた。また「草木圖説」草部二十卷を著した。</p> <p>△ブラキストンが函館に在住し在留二十餘年私財を投じて、ブラキストン線を發見した。</p> <p>△伊東玄朴が神田お玉ヶ池に種痘所を設けた。</p> <p>△藤川景佑が「新修彗星法」十三冊及び「三統曆管見」八冊を著した。</p> <p>△三池大ノ浦で石炭の洋式斜坑が行はれた。</p> <p>△この時代に野田半右衛門が和製六匁玉雷管銃を發明した。吉雄常三の雷管に負ふところが多い。</p> <p>△鍋島剛叟が精練方に電信機を製作せしめた。</p> <p>△幕府はオランダ國王の贈つたスチームビンダ號を練習船として航海その他の學術を授けた。</p> <p>△島津齊彬が外國向の醬油を作り輸出を試みた。</p>	一八五五		<p>△ゲルラアハが組織學に染色法をはじめた。</p> <p>△ウードが初めて莫爾比温の皮下注射を行つた。</p> <p>△ボルレンデルが脾脫疽小桿を發見した。</p> <p>△ケルビンが象限寒暖計を作つた。</p> <p>△ガウスが歿した。</p> <p>△ブラットがアイノスタシーの原理を考へた。</p> <p>△アツベルが生まれた。フランスの數學者。</p> <p>△ベツセマーによりベツセマー法が製鐵技術の上に確立された。</p> <p>△ワレレが歿した。ドイツ最初の鐵道を設計した人。</p> <p>△サン・ヴナンがサン・ヴナンの原理を立てた。</p> <p>△テイスラン・ド・ポールが生まれた。フランスの氣象學者。</p> <p>△ヒュースが、印刷式電信機を發明し</p>



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二五二六	三	<ul style="list-style-type: none"> <li>△寛政十二年より五十餘年後羽尻墨俣が八十二歳で再び傘式地球儀を作製し廣く頒布した。硬式固定式ではなく、張網自在の組立式で彼の創案である。この外渾天儀をも作つた。</li> <li>△小野廣幹が洋算を蘭人から受けた。</li> <li>△本木昌造が活字摺方を仰付けられた。</li> <li>△中濱萬次郎が寫眞を撮つた。</li> <li>△渡邊以親が「阿彌圓度用法略圖説」續篇を書いた。</li> <li>△江川太郎左衛門(坦庵)が五十五歳で歿した。</li> <li>△勅令により全國寺院の梵鐘を撤廢し大砲を鑄造せしめた。</li> <li>△菊池大麓が生れた。其作秋坪の二男である。</li> <li>△寺尾壽が福岡縣に生れた。</li> <li>△久原躬弦が岡山縣に生れた。</li> <li>△中村精男が山口縣に生れた。</li> <li>△山路諸孝がその子彰常とともにテレグラフ(電信機)傳習の御用を拜命し同年八月に上覽した。</li> <li>□オランダと和親條約を結んだ。</li> </ul>				
				一八五六		<ul style="list-style-type: none"> <li>△ブンゼン及びロスコーがブンゼン・ロスコーの法則を見出した。</li> <li>△ヘルムホルツが立體望遠鏡を發明した。</li> <li>△ベルントゼンが生れた。ドイツの化學者。</li> <li>△ユースティング生れた。イギリスの物理學者。</li> <li>△ローウエルが生れた。アメリカの天文學者。</li> <li>□セバストポールが陥落した。</li> </ul>
						<ul style="list-style-type: none"> <li>△片井京助の創つた元込雷管銃を一見して佐久間象山は狂喜し之を迅發擊銃と名付け圖説を草した。後これを伊井大老に獻したが要路の大官はこの眞價を知る事が出来なかつた。外來の元込銃は之より十年後の慶應二年に初めて輸入されたのであつた。</li> <li>△五十嵐篤好が「新器測量法」を著した。</li> <li>△藍川景佑が「丙辰萬國普通曆」を作つた。また「續海中舟道行」十冊を譯述したがこの年七十歳で歿した。</li> </ul>

						<ul style="list-style-type: none"> <li>△松本弘庵(寺島宗則)、川本幸民が、幕主の命を受け電信機を考案した。</li> <li>△川瀬江右衛門が「火術秘要」を書いた。</li> <li>△下岡運村がヒュースケンに就て寫眞術を學んだ。</li> <li>△武田斐三郎が函館に於いて諸術調所の教授となり化學、航海、測量を講じた。</li> <li>△翻譯の關文書「格致問答」が出た。</li> <li>△谷邦權藏版の地球儀が出た。</li> <li>△宇田川興齋が「地震豫防説」を書いた。</li> <li>△西村遠星の「萬國夢物語」が出た。世界地誌である。</li> <li>△村山正隆が「震雷考説」を著した。</li> <li>△杉田成卿の「砲術訓蒙」十二巻が完成した。安政五年とも云ふ。</li> <li>△洋學所を書書調所と改めた。</li> <li>△竹内(田)秀明が「皇國火攻神野圖説」を書いた。</li> <li>△田實胤信が「荻野流火攻雜記」を書いた。</li> <li>△稻川清吉が「養正流砲火矢擲張之秘事」を書いた。</li> <li>△安積貞が「水陸戰考」を書いた。</li> <li>△長山楯園が「海防私儀」を書いた。</li> <li>△江戸石川島に造船所を設け帆船四隻を建造した。伊豆戸田でも同船六隻を建造した。</li> <li>△長崎に船塢所を設けた。船舶修理、器械製造工場である。後に製鐵所と改稱した。</li> <li>△平野俊平が蘭文の「理學訓蒙」を出した。</li> <li>△柳川春三が頻りに洋算を説いた。</li> <li>△林洞海が「華性論」を著した。ワードルの翻譯である。</li> </ul>
						<ul style="list-style-type: none"> <li>△シニワアンが酵母の植物屬であることを發見した。</li> <li>△パーキンが色素モーグエインを發見した。コールドールから人造染料を採つた。</li> <li>△ベツセマーが製鋼法を工夫した。(ベツセマー轉爐)</li> <li>△ネアルデレターが原始人類の骸骨を發見した。</li> <li>△フォン・シーボルトが處女生殖の事實を發見した。</li> <li>△ロバチエウスキーが歿した。</li> <li>△ミユルレルが歿した。</li> <li>△ウエルケンが、ミクロトームを創つた。</li> <li>△ベンヤムが酵母を研究し酵素を遊離しチアーゼと命名した。</li> <li>△アウエルバツハが生れた。</li> <li>△アヴォガドロが歿した。イタリーの物理學者。</li> <li>△キヌストナーが生れた。ドイツの天文學者。</li> <li>△コルラウシュがW・ヴェーバーと共に電流の強さの靜電、電磁兩單位の比として表はされる當數を實驗的に見出した。</li> <li>△ジェナールが歿した。ローランと共に構造式に於る基型説を提唱した。</li> </ul>



皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
		<p>△花井健吉が「西算速知」を著した。翌年神田理軒も同名の書を出した。</p> <p>△沼尻景傳(一直)が八十二歳で歿した。地球儀の他に天文用品、地圖類の製作が多かつた。</p> <p>△三木一光齋が地球儀用地圖を作つた。之は地球儀に被覆する地圖である。</p> <p>△飯沼慾齋が「草木圖説」木部十卷を著した。之にて草木三十卷を完成したのである。木部は寫本として残された。「草木圖説」は草木二千種をリンネ式に分類し圖説したもので明治以後も屢々改訂増補され今日なほ分類學上貴重な文獻とされてゐる。尙ほこの他植物附葉一千三百六十八點が東京科學博物館に藏されてゐる。</p> <p>△飯沼庄左衛門が「蟲譜圖説」十二冊を著した。昆蟲、爬蟲類の寫生圖に解説を加へたものである。</p> <p>△オランダ人イ・ベイの生理學書が邦譯され「知性論」として刊行された。</p> <p>△杉田成卿、箕作阮雨等が著書譯所教授となつた。</p> <p>△ボンベ(ボンベ、フアン、メルデル、フォルト)が幕府に招かれて來朝し海軍醫官として在任し前後七年諸藩の醫生に教へた。</p> <p>△廣瀬元恭が「理學提要」三卷を著し、物理學が醫學の基礎であると説いた。</p> <p>△この時代にプロシア學術探險船が來り長崎、横濱等で海藻類を採集調査した。</p> <p>△平瀬作五郎が生れた。</p> <p>△松村任三が生れた。</p>		<p>△J・J・ダムソンが生れた。イギリスの物理學者。</p> <p>△ノットが生れた。イギリスの數理物理學者。</p> <p>△ウイリソンが生れた。アメリカの動物學者。細胞學。實驗發生理學の權威。</p> <p>△オーウェンが、大英博物館長となつた。</p> <p>△ベツケが生れた。オーストリーの礦物學者。</p> <p>△ボリアイが歿した。平行線の問題に就ての研究がある。</p> <p>△マルグレスが生れた。オーストリーの氣象學者。</p> <p>△ピカールが生れた。フランスの數學者。函數論、微分方程式に關し業績が多い。</p> <p>□巴里條約が成つた。</p>		

皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
二五二七		<p>△箕作阮雨(紫川)が翻譯局(著書譯所)の教授となつた。</p> <p>△大島高任等の築いた反射爐(高爐式)で始めてモルチール砲を鑄造した。</p> <p>△田中館愛橋が岩手縣福岡町に生れた。</p> <p>△堺和爲昌が生れた。</p> <p>△山路彰常が「遠眼鏡圖説」を書き上呈した。</p> <p>□ハリスが來任した。</p> <p>△赤松清次郎が「新銃射法論」を書いた。</p> <p>△中村奇輔、田中久重、石黒寛次が電信機を工夫し實用に供した。</p> <p>△緒方洪庵が「扶氏經驗遺訓」十二卷を著した。ヒエヘランドの治療實驗説の邦譯である。</p> <p>△中川爲始が「量地幼學指南」を書いた。</p> <p>△翻譯局も著書譯所と改めた。</p> <p>△山路謙孝等が航海曆の編纂を命ぜられた。</p> <p>△大島圭介の譯書「地球儀用法」が出た。</p> <p>△警城上手岡鎮山が発見された。</p> <p>△この頃片井京助が短銃を發明した。この時代には短刀形短銃、短刀形元込短銃等が多く製作された。</p> <p>△石阪空洞が「内服同功」を書いた。エレキテルの治療法等を記したものである。</p> <p>△會津藩が西洋學館を建てた。</p> <p>△長崎製鐵所で木造汽船を建造した。</p> <p>△オランダに註文した軍艦威臨が廻航した。</p> <p>△川本幸民が「雜譯文」を島津齊彬の爲に書いた。西洋化學書の翻譯である。また彼の「氣海觀瀾廣義」第四編も出た。</p>	一八五七	<p>△クラウジウスが電解説を訂正して電離を發見した。</p> <p>△ヘルツが生れた。ドイツの物理學者。</p> <p>△ヴェーラーがブツフと共にANシラソを得た。</p> <p>△ルコントが音波に感じて其形を變ずる燭(感じ燭)を發見した。</p> <p>△クルティウスが生れた。ドイツの有機化學者。</p> <p>△クニルバウムが生れた。ドイツの物理學者。</p> <p>△コーシーが歿した。</p> <p>△ジョリーが生れた。イギリスの地質學者、物理學者。</p> <p>△テナールが歿した。ゲイ・リユサツクと協力してカリウム、礬素、沃素、鹽素を研究した。</p> <p>△トレッドウェルが生れた。スイスの分析化學者。</p> <p>△バイス・パロットがバイス・パロット</p>		



皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
二五二八		<ul style="list-style-type: none"> <li>△本間玄調(菴軒)が大腸切斷術、特發脫疽を發表した。</li> <li>△桑田立賢、深瀬洋春が蝦夷地に出張して土人に種痘を行った。官命により種痘法を行った始めである。</li> <li>△鳥取藩で反射爐を築いた。</li> <li>△始めて氷氣鐘を海底工事に用ひた。</li> <li>△翻譯の蘭文書「理學入門」が出た。</li> <li>△村上英俊が「佛蘭西詞林」を編述した。</li> <li>△松本良順が毒命で長崎に赴き蘭醫ボンベに就いて學んだ。</li> <li>△柳川春三が「洋算用法」を譯して初等數學を説いた。</li> <li>△名和靖が岐阜に生れた。</li> <li>△軍艦教授所を設けた。</li> <li>△松本弘庵が電信機を鹿児島に持歸り藩邸内に架設した。また八木彌平と共に、藩主の命を受け石炭瓦斯を起し之を以て藩邸内で點火した。</li> <li>△松井直吉が生れた。</li> </ul>	一八五八	<ul style="list-style-type: none"> <li>△ガイストラが真空放電を説いた。</li> <li>△ダーウインが自然淘汰説を發表した(種の起源の出版)(一八五九年)</li> <li>△ウキルヒヨウが「細胞病理學」を出した。</li> <li>△ボウイス・ジェムスが帶鋸を發明した。</li> <li>△ガイレルが極海瓦斯中の放電を研</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>の法則を見出した。</li> <li>△ハンゼンが太陰運動論を完成し之を出版した。</li> <li>△ハンチが生れた。ドイツの化學者。</li> <li>△ピアソンが生れた。イギリスの應用數學者。</li> <li>△ビクタが生れた。スイスの有機化學者。</li> <li>△フリーコーが、フリーコーの鏡を考案した。</li> <li>△オスボーンが生れた。アメリカの動物學者。</li> <li>△ラーモアが生れた。イギリスの理論物理學者。</li> <li>△バストールが酸酵に関する説をなした。</li> <li>□莫臥兒帝國が亡んだ。英佛が天津に迫つた。</li> </ul>	
五		<ul style="list-style-type: none"> <li>△佐久間象山が永久磁石を作り之を地震計に應用しまたダニエル電池を發明した。更に「迅發擊銃圖説」を著し、片井京助の同銃の構造を説き使用を勸めたものである。</li> <li>△上野彦馬が長崎密研究所で寫眞術を研究した。</li> <li>△伊東玄村、戸塚静海等が新に種痘館を開いた。後の醫科大學たるべき基礎をつくつた。</li> <li>△杉田成卿の「砲術調蒙」の刻が成つた。</li> </ul>				

		<ul style="list-style-type: none"> <li>△ゼレンスケが函館に在住して病院を開いた。</li> <li>△幕府醫官の西洋醫術を兼業することが許された。</li> <li>△武田蘭吉が「萬國航海圖」を作つた。</li> <li>△葛藤康が「地理全志」十冊を書いた。</li> <li>△三浦清淵が電氣學を修め通信を行つた。</li> <li>△島津齊彬が磯村に反射爐、鋸鐵爐を設け、また陶器硝子、硫酸を製造した。この年五十歳で歿した。わが國化學工業に貢献するところ多かつた。</li> <li>△この頃川本幸民が「兵家必讀密寶潭」を開書に依つて書いた。火薬に関する化學書である。</li> <li>△深瀬洋春が樺太に、井上元長が千島に出張し土人に種痘を施した。</li> <li>△長崎版の蘭刻歐文書「理學調蒙」が出た。</li> <li>△箕作佳吉が生れた。</li> <li>△幕府が公然蘭方醫を任用しはじめた。</li> <li>△大島高任が釜石で構築した高爐(反射爐)が竣工した。</li> <li>△櫻井鏡二が金澤に生れた。</li> <li>△福田金塘が歿した。和算家。</li> <li>△岡本木幸吉が鳥羽に生れた。</li> <li>□安政の大獄が起つた。</li> </ul>				
				<ul style="list-style-type: none"> <li>完しガイレル電燈を發明した。</li> <li>△ワイールドが英米間の海底電信を敷設した。</li> <li>△クーパー・ケタレーが炭素の原子價四價なることを證明した。</li> <li>△タルツプスとブリニツカーが陰極線を發見した。</li> <li>△グーレルサが生れた。フランスの數學者。</li> <li>△ヘルムホルツが波動運動に就て論じた。後ケルヴィンやキルヒホッフ等によつて發展した。</li> <li>△カニツアローが原子量に関する最初の方法を決定した。</li> <li>△ドツプラーが發見した。</li> <li>△コールラウシュが發見した。</li> <li>△テイーゼルが生れた。父母はドイツ人、パリーの生れ。發明者。</li> <li>△リーマンに依りポテンシャルの満足すべき波動方程式が考へられた。(電氣の遠隔作用)</li> <li>△ドナテイが、ドナテイ彗星を發見した。</li> <li>△ピーコックが發見した。微分の記法を採用することに努めた。</li> <li>△フェッダーセンが迴轉鏡で電氣火花を撮り其の振動的現象なることを明かにした。</li> <li>△ブラウンが發見した。分類學者として</li> </ul>		



皇紀年號	日	本	西紀	外	國
二五一九	六	<ul style="list-style-type: none"> <li>△この時代に深瀬某が電鏡業を始めた。</li> <li>△「海上砲術書」が出版された。</li> <li>△田中由予が「信管截断表」を書いた。</li> <li>△ホヂユツンが函館に來住して植物採集に努力し後「日本植物目錄」を作った。</li> <li>△種子島平左衛門が「革家小録」を書いた。</li> <li>△中島治平が長州萩に反射爐を築いた。</li> <li>△シーボルトが再び來朝した。</li> <li>△榎本玉蘭齋が「御開港横濱之全圖」を書いた。</li> <li>△この頃大工原宗武が地震計を作った。</li> <li>△杉田成卿が四十三歳で歿した。</li> <li>△榎本左内が斬罪に處せられた。二十五年七ヶ月の若さであった。</li> <li>△廣川晴軒が五十五歳の晩學を以て上京し箕作阮甫の門に入った。</li> <li>△川本幸民が「遠西奇器述」第二輯を出した。</li> <li>△齋田功太郎が生れた。</li> <li>△松浦竹四郎が「東西蝦夷山川地理取調圖」を刊行した。</li> </ul>	一八五九	<ul style="list-style-type: none"> <li>著名でありまたブラウン運動の發見者</li> <li>△クロード・ベルナールが實驗醫學入門を出した。</li> <li>△プランクが生れた。ドイツの理論物理學者。</li> <li>△ブリュッカラーがこの年より數年に亘り眞空放電現象を研究した。</li> <li>□ロシアが黒龍江以北を征した。</li> <li>△プランテが鉛蓄電池を作った。</li> <li>△マツタスクエルが瓦斯原子運動説を説いた。</li> <li>△ニイマンがコカ葉からコカインを創製した。</li> <li>△メルデがメルデの實驗を行つた。</li> <li>△フアイマーが電燈を初めて自家で使用した。</li> <li>△ブレンゼン及びキルヒホッフが分光器を完成し、分光學の基礎を築き兩人協力して新元素ルビヂウム及びセシウムを發見した。</li> <li>△イルナーがビリヂンの構造式を發表した。</li> <li>△フンボルトが歿した。宇宙の科學的記述を終生の目的とした。</li> <li>△アレニウスが生れた。スエーデンの化學者、天文學者、電離説の開拓者。</li> <li>△オスボーンが生れた。アメリカの化學者。</li> </ul>	

<ul style="list-style-type: none"> <li>△松本良順がボンベと共に死屍の解剖をなした。</li> <li>△下瀧雅允が廣島市に生れた。</li> <li>△三守守が徳島に生れた。</li> <li>△山崎義成が「農家必讀」を著したが、その中の稻花圖などの圖解には西洋に先立つ正しい觀察が示されてある。</li> <li>△青山胤通が江戸で生れた。</li> <li>□ムラウイエフがやつて來た。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>學者。</li> <li>△ガイスラーがブリュッカラーの求めによつてガイスラー(ブリュッカラー)管を作つた。また水銀空氣ボンブも考案した。</li> <li>△カニヤール・ドゥ・ラ・トゥールが歿した。</li> <li>△キユリーが生れた。フランスの物理學者。</li> <li>△カジョリが生れた。スイス生れのアメリカの科學史家。</li> <li>△キルヒホッフが黒體輻射に關する諸關係を見出し輻射論の先驅をなした。</li> <li>△デイリクレが歿した。デイリクレの級數等がある。</li> <li>△ハルヴァアックスが生れた。ドイツの物理學者。</li> <li>△テンベルがブレアデス星團を發見した。</li> <li>△ポアンソネが歿した。幾何學的に迴轉運動を表はす方法を創始した。</li> <li>△マイエルソンが生れた。フランスの科學批判者。</li> <li>△ロイブが生れた。アメリカの生物學者。(ドイツ生れ)</li> <li>□伊太利統一戰爭が起つた。</li> </ul>
--	--



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二五二〇	萬延元			一八六〇		
		△伊達彌助が二重の綿天鵝絨を創製した。 △佐久間象山が瓦爾華尼衝動機(感應コイル)を發明しコレラ病に應用して効を奏した。これまでのエレキテルは摩擦電氣の原理に依つたがこの衝動機は誘導作用を應用したものである。 △安原千方、中曾根宗邦が「數理神篇」を著した。 △マキシモウキツチが函館在住一年日本植物の研究をなし空前の發見採取をなした。 △足立左内が「渡海新編」を書いた。 △森立之が「本草經名」を著した。 △武田斐三郎が函館郊外五稜郭を築城した。近代的築城法に依つたものである。 △太島高任が釜石鑛山で鑛爐を築いた。 △種痘館を幕府の手に收め種痘所と改稱した。大槻俊齋が所長となつた。 △松本良順等が長崎に養生所なる學校を建てた。醫學所である。 △佐藤尚中が長崎に赴きボンベに就いて學んだ。 △蕃書調所を小川に町に移し、新に化學の一種を加へた。 △堀達之助が蕃書調所教官となり英和字書の編纂に當つた。 △石阪空洞の「内服同功」第二編が出た。 △「築城典刑」が上刻された。大島圭介の譯書で自製の鉛活字で印刷したものである。 △法道寺和十郎が「觀新考算變」を書いた。書中の變形圖は西洋の反形法と同一である。		△マルムステンが腸頭毛滴蟲屬を發見した。 △マレエイが驗脈器を考案した。 △ライスがページの感應コイルによつて電話機を工夫した。 △パータが濠洲を南北に横斷した。 △ルユシニが尾氈腹を發見した。 △タルワクスがサリウムを發見した。 △ルノアールが瓦斯エンヂンを作り之を實用に供した。 △キルヒホッフが輻射に關するキルヒホッフの法則を發見した。 △キルヒホッフ及びブンゼンがルビジュウム及びシュージュウムを發見した。 △エスビが發した。 △ブリュッケルとヒツトルフが眞空管の作用に就て研究した。 △ホフマイステルが隱花植物の生殖に關する研究を發表した。 △マミチが直視分光器を發明した。 △ル・ルーが沃度の蒸氣を入れたブリズムにより赤色光を多く屈折することを知つた。 △ヴォルテラが生れた。イタリーの數學者。 △ジーマンスが製鋼法を發明した。 △分子と原子の關係が定まつた。		

皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二五二一	文久元			一八六一		
		△實作既甫が「地球説略」三冊を書いた。漢譯の萬國地理書を調點したものである。 △長崎砲ノ浦に製鐵所が起り洋式製鐵が行はれた。 △前田甲龍(源之丞)が蕨山反射爐その他の見取圖を書いた。 △官醫牧山修輔がアメリカに渡航したが同國出版の醫書はこの時から盛んに輸入された。 △廣川晴軒が「三元素略説」の稿を起した。 △青木周弼(月穂)が發した。「病理論」「袖珍内外方叢」がある。 △石川千代松が江戸に生れた。 □櫻田門外の變があつた。		△ウツドが易鹼合金(ウツドの合金)を發明した。 △コスタネツキが生れた。ポーランドの化學者。 △シユミツトが生れた。ドイツの地磁氣學者。 △バストールが新釀造法を説いた。 △ピアソンが生れた。アメリカの岩石學者。 △ブツフナーが生れた。ドイツの生物化學者。 △アガシーがハーバート比較動物學博物館を創設した。 △J・ボリアイが發した。非エークリツド幾何學の建設に關する不朽の著を残した。 △ルンマーが生れた。ドイツの物理學者。 □北京條約が成つた。 △グラハムが膠質と結晶との分離に成功した。 △オーテイスがエレベーターを發明した。 △ソルグエーがアムモニヤ・ソーダ法を發明した。 △ブンゼンが色素分析法を發見した。 △プロカが言語中樞を發見した。 △クローケスが原素タリニウムを發見		



皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
	<p>△松澤(本)信義が「算法量地捷解」を著した。          △杉山亮平が「岩戸新傳流火術秘書」を書いた。          △毛利慶親が「萩で蒸汽車の運轉を試みた」。          △大島圭介が「砲術新編」を著した。          △下岡運材が横濱で寫眞業を始めた。          △マキシモウイツチが長崎に來て翌年まで滞在し各地の植物を採集した。          △山路謙孝が没した。          △神田梅精が「彗星寫生圖」を書いた。          △井上春洋、森萩國、三守柳圃等が「瀛海志略」十冊を編纂して世に出した。          △大内桐齋の「東蝦夷夜話」三冊が出た。          △陸中小坂鎮山が発見された。          △ヘツプボルンがこの頃長崎で醫術を行ひ、後横濱でデヌベンサリー(施療院)を開いた。          △村上英俊が開成所の佛語教授となつた。          △村田佐十郎が「伊勢國細見圖」を書いた。          △蕃書調所に物産局を置き伊藤圭介を教員とした。          △福澤諭吉が「華夷通語」を著した。          △田邊朝郎が生れた。材料力學の研究者。          △長澤龜之助が久留米に生れた。          △三好學が江戸に生れた。          □ロシアが對馬を占領せんとした。</p>			<p>した。          △マルコが筋織維中の神經末端を発見した。          △マツタスウエルがアラデー電氣説を數學的に證明した。          △ウイヘルトが生れた。ドイツの地球物理學者。          △エーベルトが生れた。ドイツの物理學者。          △カイザーが生れた。ドイツの物理學者。          △ギヨームが生れた。フランスの實驗物理學者。          △タンマーが生れた。ドイツの化學者、無機化學及び物理化學の研究が多い。          △テバットが、テバット彗星を発見した。          △デューエムが生れた。フランスの物理學者、物理學史家。          △ホプキンスが生れた。イギリスの生化學者。          △ホワイトヘッドが生れた。イギリスの數學者。          △マテイアスが生れた。フランスの物理學者。          △バストウールが酒石酸の研究をなし立體化學の端緒となる。</p>		

皇紀年號	日	本	西紀	外	國
二五二二					
二		<p>△アメリカ人ブレイキとペンベリが幕命で蝦夷地の地質礦物を調査し嶺山事業に參與した。          △岡川昌信が「荻野流業法」を書いた。          △司馬凌海が「新學說」を著し七種の新業を挙げた。          △上野彦馬が「舍密局必携」三冊を著しまた長崎で寫眞業を始めた。          △村山保信が「通機算法」を著した。          △玉川三次が昭相術を唱へた。          △伊藤圭介が物産局教官となつた。          △手塚節藏、工藤岩治がベルリの「日本紀行」を譯した。          △筑作阮甫が「地質辨説」を書いた。          △蕃書調所を新築し洋書調所と改稱した。川本幸民が新たに學員となつた。          △幕府が砲艦二十隻建造案を立て、その一隻を石川島で建造に着手し四年を経て竣工した。蒸汽車鐵の始めである。          △大庭雪齋が「民間格致問答」を著した。通俗の理學書である。          △大槻俊齋が五十七歳で没した。その子玄俊が醫學所長となつた。          △緒方洪庵が大坂より召されて西洋醫學所頭取となつた。          △榎本冬次郎(武揚)等をオランダに遣し軍艦開闢を</p>	一八六二		
二五二二					



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二五三三	三	<p>建造せしめた。この一行には伊東玄伯、林研海、津田眞造等も交り醫學の研究に従事した。</p> <p>△萩原信芳が「算法方圓鑑」を著した。</p> <p>△白石長忠が歿した。</p> <p>△劍持章行が「算法約術新編」を出した。分數、連分數、不定方程式を含んだものである。</p> <p>△渡瀬庄三郎が生れた。</p> <p>△飯島魁が濱松に生れた。</p> <p>△島津齊彬が鹿兒島市外に工場を建て紡績工業を起した。</p> <p>△ボンベが前後七年間日本に滞在し、この年歸國した。</p> <p>△箕作元八が生れた。</p> <p>△田中正平が淡路に生れた。</p> <p>△水野敏之丞が福岡縣に生れた。</p> <p>□坂下門の變、生麥の變があつた。</p>	<p>△大學内に皇漢醫道御用掛の一局が設けられ、今村良庵、權田直助、井上頼閑、柳田龍之助、尾臺良作、松田本生等がその任に當つた。</p> <p>△ブラキストンが函館に定住し、鳥類の研究をなした。</p> <p>△司馬凌海が「七新藥」三卷を出した。</p> <p>△緒方洪庵の死によつて西洋醫學所頭取の後任に松本良順が就いた。この年西洋醫學所を單に醫學所と改めた。</p> <p>△東京大病院が大學に隷屬し廟議一變して醫學の教師をドイツより聘せんとするに當りウイリスは大病院を去り鹿兒島藩に聘せられた。西郷隆盛の推薦により同藩の醫學校長兼病院長となつた。ウイリスが鹿兒島に在ること十餘年、明治十四年に歸國した。</p> <p>△開成所に數學局を置き神田孝平を以て教官に任じた。洋學やうやく弘まる。</p> <p>△高島秋帆が「算術破圖説」を書いた。</p> <p>△平野喜房が「淺致算法」を著した。</p> <p>△緒方洪庵が五十四歳で歿した。</p> <p>△大島高任等が北海道遊樂部鉛山で初めて火薬爆發による採礦を行つた。</p> <p>△箕作阮甫が歿した。</p> <p>△多紀元信が「醫癸諸生局學規」を撰したが、この年三十九歳で歿した。</p> <p>△近藤眞琴が攻玉塾で蘭學、數學、航海術を教へた。明治三年に攻玉社となる。</p> <p>△戸塚文海が八木支悦の後を承けて精得館醫院長となつた。</p> <p>△幕府が長崎に語學所を建てた。後の濟美館であり更に廣運館となつた。</p> <p>△市川文吉、小澤圭次郎を露國に留學せしめた。</p> <p>△村山保信(雪齋)が「通機算法」を著した。和田寧の圓理極數に對する解である。</p> <p>△安間好基が「進退發願」を出した。</p> <p>△坪井正五郎が生れた。</p> <p>□英艦の鹿兒島砲撃があつた。長州藩の外國船砲撃があつた。</p>	<p>△ヘルムホルツが「聽覺の理論」を出した。</p> <p>△アンドリウスが無水炭酸液化に成功し、またその臨界溫度を發見した。</p> <p>△ビールメルが肝チヌトマを報告した</p> <p>△ネラトソンが始めて直接的な神經結合を行つた。</p> <p>△バスタールが幻覺生體の生活的表現として酸酵を論じた。</p> <p>△アマミチが歿した。光學器械の改良に</p>		
一八六三		<p>師をドイツより聘せんとするに當りウイリスは大病院を去り鹿兒島藩に聘せられた。西郷隆盛の推薦により同藩の醫學校長兼病院長となつた。ウイリスが鹿兒島に在ること十餘年、明治十四年に歸國した。</p> <p>△開成所に數學局を置き神田孝平を以て教官に任じた。洋學やうやく弘まる。</p> <p>△高島秋帆が「算術破圖説」を書いた。</p> <p>△平野喜房が「淺致算法」を著した。</p> <p>△緒方洪庵が五十四歳で歿した。</p> <p>△大島高任等が北海道遊樂部鉛山で初めて火薬爆發による採礦を行つた。</p> <p>△箕作阮甫が歿した。</p> <p>△多紀元信が「醫癸諸生局學規」を撰したが、この年三十九歳で歿した。</p> <p>△近藤眞琴が攻玉塾で蘭學、數學、航海術を教へた。明治三年に攻玉社となる。</p> <p>△戸塚文海が八木支悦の後を承けて精得館醫院長となつた。</p> <p>△幕府が長崎に語學所を建てた。後の濟美館であり更に廣運館となつた。</p> <p>△市川文吉、小澤圭次郎を露國に留學せしめた。</p> <p>△村山保信(雪齋)が「通機算法」を著した。和田寧の圓理極數に對する解である。</p> <p>△安間好基が「進退發願」を出した。</p> <p>△坪井正五郎が生れた。</p> <p>□英艦の鹿兒島砲撃があつた。長州藩の外國船砲撃があつた。</p>	<p>多し。</p> <p>△ブラツグが生れた。イギリスの物理學者。</p> <p>△ルニョーがルニョーの法則を實驗的に導出した。</p> <p>△レナードが生れた。ドイツの物理學者。</p> <p>△キルヒホッフが太陽スペクトルを研究し出した。</p> <p>□交趾支那が佛領となつた。</p>	<p>貢獻した。</p> <p>△ウアルデンが生れた。ドイツの化學者。ウアルデンの反轉、水以外の溶液の電氣化學の研究をなした。</p> <p>△ゲオルフが生れた。ドイツの天文學者。</p> <p>△シタイナーが歿した。幾何學の研究に直觀を重んじた人。</p> <p>△ドルーデが生れた。ドイツの理論物理學者。</p> <p>△パンプルヴェが生れた。フランスの數學者。</p> <p>△ブツヘラーが生れた。ドイツの物理學者。</p> <p>△ブラウエが歿した。結核物理學的研究所の先驅をなした。</p> <p>△ヘルムが生れた。フランスの冶金學者。</p> <p>△ホールが生れた。アメリカの化學者冶金學者。</p> <p>△ミツチエリツヒが歿した。元素の週期的類似性の研究をなし。晩年は無機化合物の研究をなした。</p> <p>△ヴェルナドスキが生れた。ロシアの化學者で、近代地球化學の創始者の一人。</p> <p>□朝鮮李熙が起つた。</p>		

皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二五二二	三	<p>師をドイツより聘せんとするに當りウイリスは大病院を去り鹿兒島藩に聘せられた。西郷隆盛の推薦により同藩の醫學校長兼病院長となつた。ウイリスが鹿兒島に在ること十餘年、明治十四年に歸國した。</p> <p>△開成所に數學局を置き神田孝平を以て教官に任じた。洋學やうやく弘まる。</p> <p>△高島秋帆が「算術破圖説」を書いた。</p> <p>△平野喜房が「淺致算法」を著した。</p> <p>△緒方洪庵が五十四歳で歿した。</p> <p>△大島高任等が北海道遊樂部鉛山で初めて火薬爆發による採礦を行つた。</p> <p>△箕作阮甫が歿した。</p> <p>△多紀元信が「醫癸諸生局學規」を撰したが、この年三十九歳で歿した。</p> <p>△近藤眞琴が攻玉塾で蘭學、數學、航海術を教へた。明治三年に攻玉社となる。</p> <p>△戸塚文海が八木支悦の後を承けて精得館醫院長となつた。</p> <p>△幕府が長崎に語學所を建てた。後の濟美館であり更に廣運館となつた。</p> <p>△市川文吉、小澤圭次郎を露國に留學せしめた。</p> <p>△村山保信(雪齋)が「通機算法」を著した。和田寧の圓理極數に對する解である。</p> <p>△安間好基が「進退發願」を出した。</p> <p>△坪井正五郎が生れた。</p> <p>□英艦の鹿兒島砲撃があつた。長州藩の外國船砲撃があつた。</p>	<p>△大學内に皇漢醫道御用掛の一局が設けられ、今村良庵、權田直助、井上頼閑、柳田龍之助、尾臺良作、松田本生等がその任に當つた。</p> <p>△ブラキストンが函館に定住し、鳥類の研究をなした。</p> <p>△司馬凌海が「七新藥」三卷を出した。</p> <p>△緒方洪庵の死によつて西洋醫學所頭取の後任に松本良順が就いた。この年西洋醫學所を單に醫學所と改めた。</p> <p>△東京大病院が大學に隷屬し廟議一變して醫學の教師をドイツより聘せんとするに當りウイリスは大病院を去り鹿兒島藩に聘せられた。西郷隆盛の推薦により同藩の醫學校長兼病院長となつた。ウイリスが鹿兒島に在ること十餘年、明治十四年に歸國した。</p> <p>△開成所に數學局を置き神田孝平を以て教官に任じた。洋學やうやく弘まる。</p> <p>△高島秋帆が「算術破圖説」を書いた。</p> <p>△平野喜房が「淺致算法」を著した。</p> <p>△緒方洪庵が五十四歳で歿した。</p> <p>△大島高任等が北海道遊樂部鉛山で初めて火薬爆發による採礦を行つた。</p> <p>△箕作阮甫が歿した。</p> <p>△多紀元信が「醫癸諸生局學規」を撰したが、この年三十九歳で歿した。</p> <p>△近藤眞琴が攻玉塾で蘭學、數學、航海術を教へた。明治三年に攻玉社となる。</p> <p>△戸塚文海が八木支悦の後を承けて精得館醫院長となつた。</p> <p>△幕府が長崎に語學所を建てた。後の濟美館であり更に廣運館となつた。</p> <p>△市川文吉、小澤圭次郎を露國に留學せしめた。</p> <p>△村山保信(雪齋)が「通機算法」を著した。和田寧の圓理極數に對する解である。</p> <p>△安間好基が「進退發願」を出した。</p> <p>△坪井正五郎が生れた。</p> <p>□英艦の鹿兒島砲撃があつた。長州藩の外國船砲撃があつた。</p>	<p>△ヘルムホルツが「聽覺の理論」を出した。</p> <p>△アンドリウスが無水炭酸液化に成功し、またその臨界溫度を發見した。</p> <p>△ビールメルが肝チヌトマを報告した</p> <p>△ネラトソンが始めて直接的な神經結合を行つた。</p> <p>△バスタールが幻覺生體の生活的表現として酸酵を論じた。</p> <p>△アマミチが歿した。光學器械の改良に</p>		
二五二三		<p>師をドイツより聘せんとするに當りウイリスは大病院を去り鹿兒島藩に聘せられた。西郷隆盛の推薦により同藩の醫學校長兼病院長となつた。ウイリスが鹿兒島に在ること十餘年、明治十四年に歸國した。</p> <p>△開成所に數學局を置き神田孝平を以て教官に任じた。洋學やうやく弘まる。</p> <p>△高島秋帆が「算術破圖説」を書いた。</p> <p>△平野喜房が「淺致算法」を著した。</p> <p>△緒方洪庵が五十四歳で歿した。</p> <p>△大島高任等が北海道遊樂部鉛山で初めて火薬爆發による採礦を行つた。</p> <p>△箕作阮甫が歿した。</p> <p>△多紀元信が「醫癸諸生局學規」を撰したが、この年三十九歳で歿した。</p> <p>△近藤眞琴が攻玉塾で蘭學、數學、航海術を教へた。明治三年に攻玉社となる。</p> <p>△戸塚文海が八木支悦の後を承けて精得館醫院長となつた。</p> <p>△幕府が長崎に語學所を建てた。後の濟美館であり更に廣運館となつた。</p> <p>△市川文吉、小澤圭次郎を露國に留學せしめた。</p> <p>△村山保信(雪齋)が「通機算法」を著した。和田寧の圓理極數に對する解である。</p> <p>△安間好基が「進退發願」を出した。</p> <p>△坪井正五郎が生れた。</p> <p>□英艦の鹿兒島砲撃があつた。長州藩の外國船砲撃があつた。</p>	<p>多し。</p> <p>△ブラツグが生れた。イギリスの物理學者。</p> <p>△ルニョーがルニョーの法則を實驗的に導出した。</p> <p>△レナードが生れた。ドイツの物理學者。</p> <p>△キルヒホッフが太陽スペクトルを研究し出した。</p> <p>□交趾支那が佛領となつた。</p>	<p>貢獻した。</p> <p>△ウアルデンが生れた。ドイツの化學者。ウアルデンの反轉、水以外の溶液の電氣化學の研究をなした。</p> <p>△ゲオルフが生れた。ドイツの天文學者。</p> <p>△シタイナーが歿した。幾何學の研究に直觀を重んじた人。</p> <p>△ドルーデが生れた。ドイツの理論物理學者。</p> <p>△パンプルヴェが生れた。フランスの數學者。</p> <p>△ブツヘラーが生れた。ドイツの物理學者。</p> <p>△ブラウエが歿した。結核物理學的研究所の先驅をなした。</p> <p>△ヘルムが生れた。フランスの冶金學者。</p> <p>△ホールが生れた。アメリカの化學者冶金學者。</p> <p>△ミツチエリツヒが歿した。元素の週期的類似性の研究をなし。晩年は無機化合物の研究をなした。</p> <p>△ヴェルナドスキが生れた。ロシアの化學者で、近代地球化學の創始者の一人。</p> <p>□朝鮮李熙が起つた。</p>		



皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
二五二四 元治元	<ul style="list-style-type: none"> <li>△本間玄調が「内科秘録」を著した。全十四巻悉く種痘の記述である。過去十四年間自ら種ゆる三千人門人をして施行せしめたもの二千人に及んだ。</li> <li>△萩原頼助が「圓理私論」を著した。</li> <li>△松本良順が西洋衛生方を説いた。</li> <li>△佐久間象山(啓、修理)が刺客に襲はれ、五十四歳で歿した。</li> <li>△賀川蘭臺(子徳)が六十九歳で歿した。父蘭齋の探領器の不備を改め、圓頭網を創案した。</li> <li>△水原三折(濟郷)が八十三歳で歿した。嘗て海上隨鸞に就いて助産を學び二十年にして探領器を作りまた「産育全書」十二巻を著した。</li> <li>△「博物新編」が出た。一般物理書である。</li> <li>△池田菊苗が生れた。</li> <li>△生田益雄が生れた。</li> <li>△古在由直が京都に生れた。</li> <li>□蛤御門の變、長州征伐、外艦の下關砲撃があつた。</li> </ul>		一八六四	<ul style="list-style-type: none"> <li>△ノーベルがニトログリセリンを創つた。</li> <li>△ダスター・ヴ・ブラウンが有桿ベツサリンを考案した。</li> <li>△マツクスウェルが光の電磁波を發表した。</li> <li>△レニョーが音の速度を精密に測定した。</li> <li>△ヴイーンが生れた。ドイツの物理學者。</li> <li>△ヘルンストが生れた。ドイツの化學者、物理學者。ヘルンストの熱定理等がある。</li> <li>△ニューランツが、オクターヴの法則(ニューランツの法則)を發見した。</li> <li>△ソルビーが金屬の顯微鏡的組織の研究を創始した。</li> <li>△クラベイロンが歿した。熱力學理論の確立に業績があつた。</li> <li>△ハワードが歿した。雲級の名稱の創始者。</li> <li>△フイツテイヒがフイツテイヒの反應を發見した。</li> <li>△プーイルが生れた。イギリスの數學者。不變數及び共變數の理論で業績をあげた。</li> <li>△ベルトウローがこの頃から熱化學の</li> </ul>		
二五二五 慶應元	<ul style="list-style-type: none"> <li>△元込雷管銃(スナイドル)が輸入された。</li> <li>△山中敬叟が「砲術新編」を著した。</li> <li>△廣川晴軒が「三元素略説」を著し電、光、温の三元素が一つであることを論じた。マックスウェルが光の電磁波を論じたと同時代である。</li> <li>△淺妻彦平が電線を行つた。</li> <li>△荒至重が「量地三略」を著し測量の三略三術を説いた。</li> <li>△京都に醫學研究會が生れ、桂文郁、新宮涼閣、新宮涼民、明石博高、明石善方、柏原學介等が醫學及び化學の研究をなした。</li> <li>△出雲の寶萬山銅山が發見された。</li> <li>△開成所が陸軍奉行の所管となり、理、化學の二科を置いた。蘭人ハタタマを招いて理化教師とした。</li> <li>△横濱本村に製鐵所を興した。また横須賀にも造船所を建設した。</li> <li>△阪沼慈齋(長順)が八十四歳で歿した。</li> <li>△ポードウインの後任としてマンスフェルドが長崎精得館の教授となつた。</li> <li>△大村一秀が「斜圓適當式」を撰んで圓に關する難問題を解き、互に相切する圓の研究を發表した。</li> </ul>		一八六五	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究に力を注ぎ、ガムソンと共に開拓に努めた。</li> <li>△ミンコフスキーが生れた。ドイツの數學者。</li> <li>△ヨリーがぜんまい秤(ヨリーの發條秤)を發明した。</li> <li>□長崎賊の亂が平定した。</li> <li>△リストアが創傷療法に石炭酸を應用した。</li> <li>△ホルツが感傳電氣機を作つた。</li> <li>△ロシエミットがロシエミット數の測定を行つた。</li> <li>△スプレングルが水銀空氣ポンプを發明した。</li> <li>△メンデルがメンデルの法則を發見した。</li> <li>△ケクルがベンゼン環を考案した。</li> <li>△エルキングトンが銅の電氣精鍊法を發明した。</li> <li>△ベツテレコフエルがミュンヘン大學で始めて衛生學を講じた。</li> <li>△アダマールが生れた。フランスの數學者。</li> <li>△ウァイスが生れた。フランス系の物理學者。熱氣學理論の研究で有名である。</li> <li>△エンケーが歿した。ドイツ天文曆を改良し、また小惑星の軌道決定に貢獻した。</li> </ul>		







皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
明治	(122)	二五二七				
	三					
				一八六七		

△柳川春三が「寫眞鏡圓形」を書いた。  
 △高島炭坑で洋式炭法を行つた。  
 △高島烈が「露西紀行」を著した。  
 △伊藤慎蔵が「改正磁石電氣療法」を著した。電氣療法に関する譯書である。  
 △オランダで建造した軍艦開闢が運航した。同艦に便乗して多數の留學生も歸朝した。  
 △京都醫學研究會員が有馬温泉その他の化學的分析を行ひその性分及び醫療上の功用を公にした。  
 △澤太郎左衛門がベルギーから火薬配合の秘密を知つて歸朝し王子に火薬製造所を建てた。

I. D. W. 量的分類法の首唱者一人である。  
 △デイーンが生れた。  
 △キユリーの妻マリイが生れた。ポイランド生れの物理學者。  
 △グールドベリし及びワグが質量作用の法則を立てた。  
 △シュタウトが發した。位置幾何學を構成した人。  
 △ストーニーがケルヴィン及びロシユミットに先立つて分子の大きさを決定した。  
 △ビルケランドが生れた。ノルウエーの物理學者、化學者、天文學者。  
 △フアブリーが生れた。フランスの物理學者。ペローと共に干涉分光器、干涉計を作り、また絶對電氣計、粘性係數の研究もある。  
 △ベルトランが生れた。フランスの生物學者。ベルトランの法を考案した。また世界大戦に際し毒ガスを研究した。トルビタリンの工業的製法を發明した。  
 △ボンスが發した。近世幾何學の創始者として功がある。  
 △ライトが生れた。アメリカの飛行界の先驅者。  
 △ベツタレルが燐光計を考案した。  
 △イバチエフが生れた。ロシアの化學者。

皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
皇紀	二五二六	二五二七				

△翻譯の英書「理學初歩」の江戸版が出た。  
 △松林飯山が兎友に燈れた。大村洋學五教館の教授であつた。  
 △開成所の學制を改正し蘭學漸く衰へ英佛獨の三學が隆盛となつた。  
 △箕作貞一郎、徳川昭武等がフランスに留學した。  
 △大村一秀が細井寧利と共に「通機算法」を著した。  
 △高久守靜が「變換清通術」を著した。  
 △田中芳男がパリの萬國博覽會に赴き日本物産の紹介に努め、昆蟲標本を出品した。  
 △外山龜太郎が生れた。  
 △岸上録吉が生れた。  
 △神保小虎が東京に生れた。  
 △平山信が東京に生れた。測地學、實地天文學、天體物理學の業績が多い。  
 △山川健次郎等が、工學修業の爲めドイツに留學した。  
 □大政を奉還した。



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國	
二五二八	慶應四 明治元		<ul style="list-style-type: none"> <li>△戰亂の爲に公私學を一時悉く廢した。</li> <li>△山路流水等の蔵する數學書數百卷が、北海で失つた。また内田五觀の蔵する數百卷も下總で灰燼に歸した。</li> <li>△横山松三郎が東京で寫眞業を始めた。</li> <li>△八月に昌平校を、九月に開成校を開いた。神田孝平、柳川春三等が本校の頭取となつた。</li> <li>△ヴァグナーが來朝した。明治四年に大學南校教師となり翌年大學東校教師となつた。</li> <li>△長崎の精得館を政府で收め長崎醫學校とし長興專齋がマンズフェルドと共に學則を改め、後ちレィウエンに代つた。</li> <li>△大阪舎密局が創設された。官令による理化學研究機關である。</li> <li>△中原脩介が越後長岡の戦ひに負傷し柏崎の野戰病院で致した。三十九歳の壯さであつた。</li> <li>△本木昌造が「穢事新書」を書いた。</li> <li>△築地ホテル館が竣工した。清水喜助の設計である。</li> <li>△村上英俊が達理堂を興した。フランス學の本源地であつた。</li> <li>△桐原眞節が醫學所の解剖學教授となつた。</li> <li>△福澤諭吉が「窮理圖解」三卷を出した。</li> <li>△京都醫學研究會の若い醫學者達が鶴小路領言を介して病院創設を朝廷に奏請し御所内施藥院三雲宗廟</li> </ul>	一八六八	<ul style="list-style-type: none"> <li>□カンボヂヤがフランスの保護國となつた。</li> <li>△マイネルトが、共同纖維系統を述べた。</li> <li>△ゴルトが急性貧血に食鹽水輸送を行つた。</li> <li>△リールマンとグレイベがアリザリンの人造に成功した。天然色素を人工的に合成した始めである。</li> <li>△バツキンスが恆星の視線速度を決定した。</li> <li>△ハクスリーが原形質は生命の物質的基礎であると説いた。</li> <li>△リヒトホーフエンが支那探検を遂げた。</li> <li>△メンデレエフが周期律を説いた。</li> <li>△ザククスが實驗的生理研究に入つた</li> <li>△ヴィラリが磁氣歪に關してヴィラリ効果を見出した。</li> <li>△ウツドが生れた。アメリカの物理學者。</li> <li>△オングストレームがオングストローム單位を創めた。</li> <li>△ターチエラが生れた。フランスの數學者。</li> <li>△シエーンバインが致した。</li> </ul>		

			<ul style="list-style-type: none"> <li>邸を下附されたので病院を開設した。國立病院であつて貧富を問はず一切平等に取扱つた。</li> <li>△近藤眞澄が譯書「新未來説」を著して液體空氣のことを説いた。</li> <li>△舊幕の醫學所を改め鎮將府の所管とし更に和泉橋に醫學所附屬病院を建て之を大病院とした。前田杏齋が主事となつた。醫學所は後の東京帝國大學醫學部である。</li> <li>△司馬凌海が東京に召出され醫學教授となつた。</li> <li>△福澤諭吉がその塾を芝に移し慶應義塾と稱した。</li> <li>△福澤の假軍陣病院を東京に移し大病院と稱し英醫シニトルをして治療せしめたが、翌年同じく英醫ウイリスをして治療及び教育に當らしめた。</li> <li>△太政官内に爲瘡局を設け大學南校出仕田中芳男をして全国各地の物産を蒐集せしめた。</li> <li>△岡松豊谷が帆足萬里の地球磁氣に關する説を「西客問答」として公にした。</li> <li>△大森房吉が福井市に生れた。</li> <li>△河合十太郎が石川縣に生れた。</li> <li>△沼津學問所及び沼津兵學校が出来た。兵學校の如きは士官養成が目的だつたが一面近代科學輸入に功があつた。</li> <li>△赤松則長が沼津兵學校で高等數學、微積分學を教へた。</li> <li>△ハラタマが大阪で氣象觀測を行つた。</li> <li>□伏見鳥羽の戦があつた。五箇條の御誓文の發布、江戸城開城等があつた。</li> </ul>				
					<ul style="list-style-type: none"> <li>△L・マイヤーが原子容曲線を作り、波狀形曲線を得た。</li> <li>△ゾンマフェルトが生れた。ドイツの理論物理學者。</li> <li>△ダウソンセンドが生れた。イギリスの原子物理學者。</li> <li>△ドリスが致した。牧師だが太陽及び惑星の觀測をなした。</li> <li>△ハーバーが生れた。ドイツの化學者。</li> <li>△フリーコーが致した。フリーコー振子、フリーコー電流等の發見がある。</li> <li>△フランクスランドが、J・ロツキヤールと共に太陽スペクトル中に未知元素に屬する暗線の系列を見出しこの元素をヘリウムと名付けた。</li> <li>△ブリュエスターが致した。反射による偏光の法則を發見し、複屈折の研究がある。</li> <li>△ブリュエツカーが致した。</li> <li>△ヘールが生れた。アメリカの天文學者。</li> <li>△ミリカンが生れた。アメリカの物理學者。</li> <li>△メービウスが致した。幾何學に於て同次座標の一種たる重心座標を用ひた</li> <li>△クロマニヨン人骨が發見された。</li> <li>△リチャヤツが生れた。アメリカの化學者。</li> <li>□ロシアがブラハラ汗を降した。</li> </ul>		



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國	
二五二九	明治二		<ul style="list-style-type: none"> <li>△政府は前年大阪に假病院を起し諸方推挙を院長としたがこの年一月ボードウインを迎へて醫員となし十一月醫學校を開き岩佐純を院長とした。</li> <li>△大阪爲替社で寫眞紙幣を作つた。</li> <li>△東京横濱間に公衆用電信を架設しブーゲー指示機を使用して通信をなした。</li> <li>△醫學所を大學東校と改めた。のち大病院と合併した。</li> <li>△幡野康利が甲斐絹をもつて傘地絹を創つた。</li> <li>△大阪病院が創設され理學者ハラタマ、醫學者ボードウインを招聘した。主醫は緒方郁造、藥局主管及び看頭は明石博高を任じた。</li> <li>△京都に練眞舎と稱する私立理化學研究所が生れた。</li> <li>△大學南校では數學を洋式に改めた。</li> <li>△奥野元碩が硝酸を作つた。</li> <li>△開成所から「和蘭學制」が出た。</li> <li>△海軍學校が「蒸氣器管書」を刊行した。</li> <li>△近藤眞琴の攻玉社が生れた。</li> <li>△大阪舎密局ではハラタマを教頭とし、松本銈、三浦嘯輔を助教授とし理化二學を教へた。のちハラタマの後任としてリツテルが就任した。</li> <li>△「磁雷針圖」が出た。</li> <li>△司馬凌海の「百朋氏藥論」二卷の刻が成つた。</li> <li>△本木昌造が洋式活版術を完成したが、この年八月五十二歳で歿した。</li> <li>△本山漸吉譯の「格物入門」が出た。</li> </ul>	一八六九	<ul style="list-style-type: none"> <li>△ウエスチングハウスが空氣制動機を發明した。</li> <li>△メンデレエフが元素週期律を發表した。</li> <li>△ハイアットがセルロイドを創つた。</li> <li>△メンヂェルとベルコが皮下榮養法を試みた。</li> <li>△ヒツトルフが陰極線を發見した。</li> <li>△ヴィルソンが生れた。スコットランド生れの物理學者。</li> <li>△E・オツボルツァーが生れた。</li> <li>△ブレイデルが生れた。ハンガリーの有機化學者。</li> <li>△グールドベリーが分子論及び化學平衡に就ての熱力學的研究をなした。(一八六七—一八七〇年)</li> <li>△アンドリュウが臨界溫度及び臨界壓力を發見した。</li> <li>△ノイマンがボテンシャルの進行に關し異つた假定を用ひウエーバーの式を導き出した。</li> <li>△ダレンが生れた。スウェーデンの發明家。</li> <li>△ハンケルが「新世紀に於ける數學的發展」を出した。</li> <li>□スエズ運河が開通した。</li> </ul>		
			<ul style="list-style-type: none"> <li>△岸田吟香が上海に渡りヘボン字典用の假名活字を作つた。</li> <li>△ハラタマ講述、三崎嘯輔譯の「舎密局開講之説」が出た。科學の歴史を述べたものである。</li> <li>△北海道後志國茅沼炭山の坑口より海濱に至る間に軌條を敷設して石炭を運搬した。</li> <li>△大阪舎密局を理學校と改めた。現在の第三高等學校及び帝國大學理學部の基礎となつた。</li> <li>△E・S・モールズが東京大學に於ける動物學の教師となつた。動物學の近世學派の始りである。</li> <li>△麻生弼吉が「奇機新話」を出した。</li> <li>△マルチン・ウイリアム(丁鹽良)が「格物入門」七卷を著した。</li> <li>△小幡篤次郎が「博物新編及同補遺」三冊を譯述しまた「天變地異」を書いた。</li> <li>△岩佐純、相良知安が醫道取調御用掛となつた。</li> <li>△ハラタマ講述の「理化新説」が出た。</li> <li>△市川齋宮が京都兵學寮御用掛をなしつつ改曆の講案を提出した。</li> <li>△長崎に活版傳習所を設け、活字鑄造及び電氣版の技術を授けた。</li> <li>△御藥園(のちの小石川植物園)が大學東校の所管となり醫學校藥園と改稱した。</li> <li>△相模觀音崎、安房野島崎の燈臺が成つた。</li> <li>△山葉寅楠が時計を考案した。</li> <li>△小貫信太郎が生れた。</li> <li>△中村清二が越前鯖江に生れた。</li> <li>△島津源藏が京都に生れた。</li> <li>□東京京都、函館戰爭、版籍奉還などがあつた。</li> </ul>				



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二五三〇	明治三			一八七〇		
			<p>△大學規則が定まり、理科及び醫科の制が設けられた。          △和泉要助が人力車を考案した。          △刑部省で刑屍解剖の建議を認可した。          △山田宥教、詫間憲久が工業的に葡萄酒を作った。          △「砲兵小學」が出た。          △岡山藩で醫學館を創立した。          △大學内に天文臺を置きまた天文曆學局を設け頭曆の事を掌らしめた。後ち星學局と改めた。          △ポードウインの主唱により明石博高が京都に癩病館を私設した。わが國に於ける癩醫院の始りである。          △石黒忠應が「化學訓蒙」を著した。          △塚本明毅が「筆算訓蒙」を著した。          △大塚半次郎が「星學初歩」を著した。          △京都に舎密局が設けられた。ヘルツ、ワグネルを教師とし學理と實驗を教へ附屬の研究所では各種の化學實驗と製造をなしその製品を市販した。          △星學局を編集局に合したが更に圖書局と改めた。          △東京濱濱間の橋梁工事を起した。          △大阪神戸間石屋川陸道の開鑿に着手した。          △大山彌助(巖)が長四斤砲を考案し後ちまた十二斤臼砲を發明した。          △廣川晴軒が西曆に倣つて太陽曆に改めんことを政府に建白した。          △尺振八の共立學舎が興つた。          △大阪舎密局を大阪理學所と改め更に大阪開成所とした。</p>		<p>△フリツチニ及びヒツチツクが腦の運動中樞を發見した。          △グラハムが、リンダ・アーマチニヤを創つた。          △クリスチアンゼンがフクシンのアルコール溶液の異常分散を見出した。          △ドナンが生れた。イギリスの化學者。          △グールドが南天の恆星目錄出版の事業を遂行した。          △クロードが在つた。空氣の成分の研究、空氣の液化、アムモニアの合成等著名である。          △ペランが生れた。フランスの物理化學者。          △ベルトンが、ベルトン水車を考案した。          △H・G・マグヌスが發した。力學、水學、熱學、雷磁氣學の重要な研究をなした。          □獨佛戰爭が起つた。(一八七一年)</p>	

皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二五三〇	明治三			一八七〇		
			<p>△この頃淺田宗伯等が溫知社を興し、西洋醫學に對抗し「溫知醫談」を刊行した。          △廣瀬元恭(燕園)が五十歳で歿した。「人身窮理」          「醫學提要」等がある。          △京都に貧民授産場が設けられた。          △加賀藩に醫學館が出来た。七年之を縣立とし金澤醫學館と稱し、九年醫學部を分離し金澤醫學所とし十二年金澤醫學校とした。          △熊本の醫學所、津藩の育生寮が生れた。福井の醫學所、富山の西洋醫學校も設けられ病院を建て西洋醫學を授けた。          △岡山藩で醫學館及び病院を開設し關醫ロエトルを迎へた。翌年醫學所と改め九年に病院となり十二年に縣立病院となり、更に十三年醫學教場を分離し岡山醫學校となつた。          △新潟では地方有志の協力で共立病院を興し、六年之を第一區協定病院となし醫學生を養成した。更に九年に縣立病院となり、十二年新潟醫學校と改め縣立病院をその附屬とした。          △清水卯三郎がフランスから石版印刷機を購した。          △西村勝三が國産靴を始めまたメリヤスをも製造した。          △四月に種痘法が普及された。          △柳川春三が「袖珍藥說」を校刻した。          △長崎府醫學校、大阪醫學校がそれ／＼大學に屬した。          △今村明恒が生れた。          △大學南校では外國教師としてポードウイン(和蘭)マッセ(佛國)シモン(丁抹)を招聘した。</p>			



皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
二五三一	明治四	<p>△ポードウインが十月に歸國した。</p> <p>△樺本市蔵がこの頃竹橋造翁を發明した。</p> <p>△安田篤が生まれた。</p> <p>△小川正孝が生まれた。無機化學者。</p> <p>△木村榮が石川縣に生まれた。</p> <p>△近重眞澄が高知縣に生まれた。</p> <p>△平山清次が仙臺に生まれた。(明治七年ともいふ)小惑星の統計的研究は著名であり、其の族の發見は特筆すべき業績である。</p> <p>△本多光太郎が愛知縣に生まれた。</p> <p>△横須賀實業舎が復興した。教授科目に微積分學がある。</p> <p>□公使派遣、新律綱領頒布があつた。</p>	一八七一	<p>△エディソンが印字電信機を工夫し翌年更に二重電信機を作り次で四重及び六重電信機を完成した。</p> <p>△フオーゲルがスベクトルの太陽自轉による變位効果を發見した。</p> <p>△ヴェーネルトが生まれた。ドイツの物理學者。</p> <p>△カウフマンが生まれた。ドイツの物理學者。</p> <p>△マドックスが最初のゼラチン乾板を發明し工業的製造を始めた。</p> <p>△ゲーデが生まれた。ドイツの實驗物理學者。</p>		

皇紀年號	日	本	西紀	外	國		
二五三一	明治四	<p>△中神保が「電氣論」を著した。</p> <p>△本木昌造の創設した私塾(長崎)の教科書として「西洋數學品題」が刊行された。</p> <p>△佐渡で鐵船新濁丸が建造された。</p> <p>△鍋島閑叟が歿した。海外の新知識を輸入し新文明に寄與するところ大きかつた。</p> <p>△大阪造幣寮、大阪泉布殿、竹橋陣營、新橋停車場築地海軍兵學寮などが竣工した。</p> <p>△伊東玄朴(玄樸、伯義)が七十二歳で歿した。</p> <p>△「化學通」が出た。</p> <p>△川本幸民が歿した。</p> <p>△京都舎密局が人造染料の使用を獎勵し、また絹の精練に化學練を勸めた。同局製造のリモナーデ、ラムネ、麥酒、冰糖、石鹼などが市場に現はれた。</p> <p>△福田理軒が順天堂を東京に移し専ら數學、測量術を教へた。</p> <p>△ホフマンが來朝し大學東校の教授となり、在留中「日本脚氣論」「日本醫家」等を著した。</p> <p>△ウイリスによつて開拓された西洋外科がシユルレルが來朝し大學東校の教授となるに及んで面目を一新した。</p> <p>△田口和義が解剖所を管理し、解剖學の研究に努めた。</p> <p>△京都で第一回京都博覽會を開催した。之は明治九年まで連年催された。</p> <p>△京都鴨川に養蠶場が設けられた。</p> <p>△兵部省に軍醫寮が置かれ松本順、林紀、石川良信、石黒忠憲等がその事務を執り軍隊衛生の制度が樹てられた。</p>	一八七一	<p>△コルニユが光速測定に關する精密な値を得た。</p> <p>△ツエルメロが生まれた。ドイツの數學者。集合論の研究で名がある。</p> <p>△ドウ・モルガンが歿した。數學の論理的基礎を闡明した。</p> <p>△J.F.ハーシエルが歿した。南天を開拓し業績をあげた。</p> <p>△ボーデンシュタインが生まれた。ドイツの化學者。</p> <p>△E.ラザフォードが生まれた。イギリスの物理學者。</p> <p>△ボレルが生まれた。フランスの數學者政治家。函數論の業績がある。</p> <p>△ダーウインが「人間の由来」を出した。</p> <p>△マックスウエルが電磁場理論を完成した。</p> <p>□ヴェルサイユ和約が成つた。</p>			



皇紀	年號	日	本	西	外	國
		<p>△京都で煉乳が作られ市場で賣られた。 △京都市外松屋村で製革場が出来、革製品の製造販賣をやつた。 △ドイツ語學教師としてホルツが來朝した。 △大學東校が文部省の所管となり單に東校と改めた同年ドイツのミユルレル、ホフマン二氏が來朝したので東校の教頭となり、解剖學を講じた。また石黒忠憲、長谷川泰が舎長となり學生を監督し、相良知安、岩佐純等が之を輔佐して學則の改正をなした。 △大學内の星學局を天文局と改めた。 △石黒忠憲が「虎烈刺論」を出した。 △島一徳が「電氣論」を記述した。 △田中芳男が全国各地物産の蒐集品を文部省博物館に移管し翌五年本郷湯島聖堂内大成殿で陳列公開した。 △英人ブライヤーが來朝し明治廿一年竣するまで横濱に定住し、鳥類、昆蟲の採集を行ひ後ち「日本蝶譜」を出した。 △醫學校藥園が文部省直轄博物館の所屬となつた。 △平岡通義、宇都宮三郎がセメントを作つた。 △ミユルレルが大學東校で眼科を講じた。次でシュルツ、スクリハ等の外科教師が何れも眼科を教授した。 △劍持章行が和算振興の爲め全國遊歴中に八十二歳で歿した。 △この時代に長谷川準也が金澤で銅器會社を興した △ヘルツが長崎に私設觀測所を設けた。</p>				

二五三二

明治五

<p>△ドイツ人クニツピンダが大學南校の數學教授となつた。のち遷信省、内務省に勤め、本邦の氣象事業を開拓した。 △坂井英太郎が信濃に生れた。數學物理學教育に功がある。 △昌平校の圖書其他を以て舊講堂に書籍館を置き五年これを公開した。 △ダイヴァース(英)が工學寮に招聘され來朝し化學を講じた。 △大幸勇吉が石川縣大聖寺町に生れた。 □廢藩置縣が行はれた。</p>	<p>△田中精助が電信機を製作した。 △仁徳天皇御陵前面が崩壊し石棺の中から白石、紺色の硝子器が発見された。同時代の美術工藝、硝子工業の進歩せるさまを物語るものである。 △寛常左衛門が西洋紡績絲を正藍で染め双子縞を創つた。 △品川横濱間の鐵道が開通した。 △湯島聖堂内に書籍館を設けた。今の圖書館である。 △天皇陛下東校に行幸あり、三崎文部小教授が直垂に裨がけで化學の實驗をなし天覽に供しその理を講説申上げた。 △南校及び東校を各第一大學區第一番中學及び同醫學校とした。 △開拓使假學校を芝増上寺内に置いた。札幌農學校の前身である。 △學制が頒布され大中小學に於ける數學はすべて洋式のみを課することとなり和算は茲に斥けられた。</p>
一八七二	<p>△セルミがブトマイネを発見した。 △グラハム・ベルが電話機を工夫した。 △アルテネットが、ドラム・マーマチュアを作つた。 △ミニイブリツチが、連續寫眞を撮つた。 △ヴイルシュテワターが生れた。ドイツの有機化學者。 △ヴインダウスが生れた。ドイツの有機化學者。ステリン類の化學に貢獻多くエルゴステリンに紫外線を作用させる時ヴイタミンCと同様の作用を有する物質を得られることを發見した。 △クラインがその研究計畫「エルランゲン」の目錄を發表した。 △G・カントールが、無理數論を發表した。</p>



皇紀	年號	日	本	西	外	國
			<ul style="list-style-type: none"> <li>△片山淳吉が「理學啓蒙」三卷を編述した。</li> <li>△田代義矩の「圖解機械事始」が出た。</li> <li>△青木東江が「珍奇物語」を出した。</li> <li>△横濱で瓦斯燈が始めて灯つた。</li> <li>△太陽曆に改められ、この年十二月三日を以て明治六年一月一日とした。</li> <li>△大阪開成所及び大阪醫學校を第四大學第一番中學及び同醫學校とし後者廢した。</li> <li>△長崎醫學校を第六大學區醫學校とした。</li> <li>△藩立醫學校を廢した。</li> <li>△中(安藤)欽哉が「布列私解剖圖譜」を著した。</li> <li>△藥物學のニエルト、物理學のコーチンダ、博物學のヒルゲンドルフ等が醫學校に入り一般科學の普及にも努めた。</li> <li>△新に東京に星學局を置いた。</li> <li>△大阪川崎新田で鐵製商船興讚丸を建造した。</li> <li>△蓬萊社、第一國立銀行等が竣工した。</li> <li>△本間文調(畫軒)が歿した。六十九歳であつた。</li> <li>△京都醫學研究會の同志が病院及び醫學校の創設を企て栗田青蓮院の宮殿を修繕して假病院を開いた。また死刑囚の屍を請ひ受けて栗田口の解剖場で解剖し醫學研究の材料とした。</li> <li>△上野清が上野塾を開き専ら數學を教育した。</li> <li>△魚住宗太郎、宇喜田小十郎共編の「窮理發蒙」三卷が出た。</li> <li>△後藤達三の「窮理問答」六卷が出た。</li> <li>△土屋政朝が「窮理餘談」二卷を出した。</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>△グレブシユが歿した。解析力學、彈性體力學に關する研究が多い。</li> <li>△トレスカが柔粘性體に就て詳細に實驗し論述した。</li> <li>△スモルコフスキーが生れた。オーストリーの理論物理學者。</li> <li>△ドウローネイが溺死した。太陰運動論の研究がある。</li> <li>△ピアスが地球の密度及び形の決定に就て實驗した。</li> <li>△モリスが歿した。</li> <li>△モールトンが生れた。アメリカの天文學者。</li> <li>△ユルバンが生れた。フランスの化學者。</li> <li>△B・ラッセルが生れた。イギリスの數學者。</li> <li>△ランキンが歿した。</li> <li>△ランジュヴァンが生れた。フランスの物理學者。</li> </ul>

			<ul style="list-style-type: none"> <li>△明月誠が「調蒙窮理便解」三卷を譯述した。</li> <li>△青木輔清が「繪本窮理物語」二卷を著した。</li> <li>△鳥山啓が「窮理早合點」二卷を出した。</li> <li>△清原道彦が「調蒙窮理證語」を出した。</li> <li>△岩佐純が佐藤尚中に代つて大學東校の校長となり八月東校が第一大學區醫學校となるに及んで相良知安が校長となつた。</li> <li>△解剖學者デーニッツが來朝し、解剖専門科を開いた。</li> <li>△文部省が田中芳男編「動物掛圖」を頒布した。(明治五年—一〇年)</li> <li>△田中芳男が「坪甘度爾列氏植物自然分科表」を出し、小野職徳と共に「有用植物圖説」の撰定に就いた。同書七冊は明治廿四年に出版された。</li> <li>△イギリスの探検船チャレンジャー號がこの年より同九年に亘り日本沿海の海洋學的調査をなし本邦海産植物及び海産浮游生物を調べた。</li> <li>△活版傳習所が工部省に屬し、東京に移した。今日の内閣印刷局の前身である。</li> <li>△函館に測候所が設けられた。</li> <li>△内田五觀が改曆に功があつた。</li> <li>△ライマンが日本に來り六年より三年間開拓使の下で北海道の地質調査をなし、後工部省に轉じ、後及び遠江の油田調査をなし、十一、十二年に日本地質調査をなし十四年に歸國した。</li> <li>△「日本礦物概表」が出た。</li> <li>△日比野(九ノ内)に博物館が設けられた。後ちの動物園である。</li> <li>△この年十一月九日曆制改定し太陽曆を採用した。</li> </ul>			
--	--	--	---	--	--	--



皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
二五三三	明治六	<ul style="list-style-type: none"> <li>△渡邊佐兵衛がキルタを作った。</li> <li>△海軍省は始めて海軍々醫を置き海軍病院を設けた</li> <li>△ジエームスの講述を近藤薫が筆記し松山棟菴が校閲し「微毒小箒」として出した。</li> <li>△大阪醫學校が第四大學區大阪醫學校と稱したが、この年十月之を廢したので大阪府下の有志が釀金して病院の設立を請ひ、翌六年二月大阪府病院を開き傍ら醫學を授けた。</li> <li>△京都府下假療院内に醫學教場が出来た。</li> <li>△洋式工業の必要を認め富岡製絲所、福綿篤(セメント)製造所、府絲紡績所などが興った。</li> <li>△池田岩治が生れた。</li> <li>△佐野靜雄が東京に生れた。</li> <li>△斯波忠三郎が金澤に生れた。</li> <li>△鈴木梅太郎が静岡縣に生れた。</li> <li>△田丸卓郎が岩手縣に生れた。</li> <li>△松原行一が名古屋に生れた。</li> <li>△曆法の改正があつた。</li> <li>△學制頒布があつた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△坪井信良が「醫學雜誌」を發行した。わが國醫學誌の始まりである。</li> <li>△文部省が各府縣に病院設立の設計を頒布した。</li> <li>△甲府で工業的に麥酒(三ツ嶺)が作られた。</li> <li>△太田倉吉が燒酎再醱法で酒精を作った。</li> <li>△鹿島萬平が北海道で沃度を作った。工業的に製造</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△マツクスウエルが光の電磁波に関する新説を發表した。</li> <li>△エディソンが四重電信法を發明した</li> <li>△エスマルクが、人工驅血法を發見した。</li> <li>△アツベが、顯微鏡の稱光器を考案し</li> </ul>		
		<ul style="list-style-type: none"> <li>した始りである。</li> <li>△阪神鐵道の鐵道が開鑿された。</li> <li>△第一大學區第一番中學を開成所とし、工業諸學、鑛山各専門學校を置いた。理工兩學部の基礎となつた。</li> <li>△京都舎密局織殿がジャカード織機六臺を購入して西陣織業の革新を促した。</li> <li>△福澤諭吉、神田孝平、箕作秋坪、加藤弘之等が明六社を起し初めて學術講演會などを開いた。</li> <li>△第一大學區醫學校に製藥學教授を置き藥學教授の基をひらいたが後ち東京大學醫學部でランガルト、エーキマン等の化學教師が製藥學を教へた。</li> <li>△杉田文瑞の「產科寶函」が出た。後ち高橋正純の「日講記問產科論」(エルトメレンス講述) 小林義直の「產科摘要」などが世に出た。</li> <li>△「筆算通書入門」卷一が公刊された。</li> <li>△林鶴一が徳島に生れた。</li> <li>△開成學校の一つ樞の新校舎が成つて東京開成學校と改稱した。舊校は従來の英佛獨學の別教場と合して一校とし獨立して東京外國語學校とした。</li> <li>△長崎醫學校では學則を改革しドイツ醫學を採用しシモンスに教授せしめた。</li> <li>△慶應義塾醫學所が出来た。また金澤醫學所、新潟醫學校も生れた。後の各醫科大學である。</li> <li>△東京に天然學校が出来た。師岡貞春の創設したものである。</li> <li>△名古屋の西本願寺別院に病院を開設し、院内に醫學講習所を設け、米醫マンダハンスを招聘して教授とした。のち明治八年愛知縣病院と改め同九年醫學</li> </ul>				
			<ul style="list-style-type: none"> <li>た。</li> <li>△オベルマイエルが再歸熱の螺旋狀菌を發見した。</li> <li>△クラークが、クラーク電池を發表した。</li> <li>△リービツヒが致した。</li> <li>△オイラー・チエルビンが生れた。スウエーデンの化學者。</li> <li>△クリリツヂが生れた。アメリカの物理學者。</li> <li>△コルニユが地球密度決定方法を考案した。</li> <li>△F.W.G.コルラウシユが交流に依る電解質の抵抗測定法(コルラウシユ橋)を考案した。</li> <li>△シュヴァルツシルトが生れた。ドイツの天文學者、數理物理學者。</li> <li>△リッツマンが電氣毛細管現象を研究し毛管電氣計を發明した。</li> <li>△ドウ・ラ・リウが致した。稀薄氣體内の放電現象の研究が著名。</li> <li>△ハンケルが致した。形式不變の原理を立てた人。</li> <li>△アガシーが致した。この年ヘニーギーズ島にアメリカ最初の臨海實習講義を開いた。</li> <li>△レヴィイ・チヴィタが生れた。イタリヤの數學者。絶體微分學に貢獻するところ多い。</li> </ul>			



皇紀年號	日	本	西記	外	國
		<p>講習所を公立醫學講習所と改め、フオン・ローレンツを招聘し、十四年に病院を愛知病院とし學校を愛知學校とした。</p> <p>△洋算採用の爲め一旦珠算を廢したがこの年再び珠算、筆算併用となつた。</p> <p>△明石朝幹、加賀實、横地偶吉郎共編「越歴新論」二卷が出た。</p> <p>△藤田正方がクワッケンボスの教科書を譯し「理學新論」として出した。</p> <p>△文部省が田中芳男校閱、小野職詮撰「植物掛圖」五幅を頒布した。(明治六年「一年」)</p> <p>△サヴァチエが鳥田充房の「花叢」(明和二年版)を佛譯してパリで出版した。</p> <p>△フランス人フオリーが來り、布教の傍ら植物採集をなし、前後四十年之に従事し大正二年臺灣に於いて不慮の死を遂げた。</p> <p>△ドイツ人ヒルゲンドルフが東京醫學校の動植物學教師となり來朝し、同九年歸國するまで動物海産物の採集をなした。</p> <p>△陸軍兵學寮で川上冬崖、近藤正純等が石版印刷を始めた。</p> <p>△東京醫學校に再び製藥教場を設けた。</p> <p>△第三大學區第一番中學を開明學校とし外國語の學校と改めた。</p> <p>△専門學校規程を定めた。</p> <p>△伏見向島に水力を利用する官設鐵工場を創設し伏見製作所と名付けた。</p>			<p>△ズーターが「數學史」を出した。</p> <p>△スキヤベレリが「古代に於けるコペルニクスの先驅者」を出した。</p> <p>△ヴァン・デル・ワールスが状態方程式を説いた。</p> <p>□ロシアがヒバ汗國を降した。</p>

皇紀年號	日	本	西記	外	國
二五三四	明治七	<p>△小幡虎次郎が「博物新編補遺」を著した。</p> <p>△明石博高が「防雷鍼略説」を著した。</p> <p>△本木昌造の門下平野富二が東京築地に活版製造所を興した。</p> <p>△東京築地で神戸丸を建造した。</p> <p>△大阪病院を再設し大阪公立病院とし院内に教授局を設け醫師の養成をなした。後ち教授局を分離し府立大阪醫學校とした。</p> <p>△「越歴新編」が再び公刊された。</p> <p>△デーニッツが來朝して解剖學科は稍整頓した。わが國に組織學及び胎生學の入門した。</p> <p>△中村正直が同人社を興した。</p> <p>△緒方洪庵が五十四歳で歿した。</p> <p>△函館病院に在つたテルドレッツチが「近世醫說」を刊行した。醫學雜誌である。</p> <p>△京都に栽培試験場が設けられた。農事試験場の先驅をなすものである。</p> <p>△小池卯八郎が鉛筆を製造した。</p> <p>△文部省が醫務局を置き長與專齋が局長となつた。</p> <p>△イギリスの電氣學者エールトンが來朝し、工學寮(工部大學校)で物理學、電氣學を講じた。</p> <p>△新城新蔵が福島縣若松市に生れた。</p> <p>△關口開が「新撰數學」を著した。</p> <p>△秦佐八郎が鳥根縣都茂村に生れた。</p> <p>□征韓論の議が破れた。徵兵令が出た。</p>			
		<p>△岩田平四郎が「空中飛翔機」の論文を発表し、飛行機の設計圖をつくつた。</p> <p>△東校を東京醫學校とし長崎醫學校を合併した。</p>	一八七四		<p>△ル・ベルが始めて原子の立體的構造に就いて説いた。</p> <p>△キュイグネットが、影寫機を考案し</p>



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國	
		<ul style="list-style-type: none"> <li>△東京に牛痘種痘所を設けた。</li> <li>△開成學校を東京開成學校と改めた。</li> <li>△内務省農事修業場を置いた。</li> <li>△内務省蠶業試驗所、東京衛生試驗所を設けた。</li> <li>△物理の山川健次郎、醫科の大澤謙三が歸朝し後ち東京開成所及び醫學校に開講した。</li> <li>△この頃、電氣應用の興行物が流行した。</li> <li>△深間内基譯の「百科全書電氣篇」が出た。</li> <li>△奥村精一が「格物入門和解」電氣の部を著した。</li> <li>△三井組が竣工した。清水喜助の設計である。</li> <li>△大阪醫學校のエルメレンスが「病原學通論」を著してウイルヒョーの細胞病理學を傳へた。</li> <li>△アトキンソンが來朝し開成學校で化學を講じた。</li> <li>△明治十四年まで清日。</li> <li>△タイワアースが來朝し工部大學校(工學寮)の化學教師として在任し、明治三十二年に歸國するまで二十六年間主として無機化學の方面に盡した。</li> <li>△高橋正(了)純がエルメレンスに代り大阪醫學校に皮膚病學を講じ、またグロスの外科書より皮膚の部分を抄譯し「日語記聞皮膚病論」を公にした。</li> <li>△ウエルニヒがホフマンの内科の後任として東京大學に來り内科を兼ね産科を講じた。</li> <li>△この年天文學教場を開いたが幾莫もなく廢した。</li> <li>△製作學教場が設けられ工作、製煉の二科に分ち、またその基本たる化學、物理學、數學等を授けた。</li> <li>△清水字三郎が「ものわりのはしこ」を著した。化學の手引書である。</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>た。</li> <li>△シユナイデルが細胞分裂を説いた。</li> <li>△オールによつて、リンボンが發明された。</li> <li>△プロフエソル・コルベルが安價なサルチル酸を作つた。</li> <li>△アツベが液體及び固體の屈折率を測る屈折計を考案した。</li> <li>△ヴァルテンホッフエンがヴァアルテンホッフエンの振子を考案した。</li> <li>△タルツクスが陰極線が積電場に於て偏倚する向から陰電氣を有する分子なることを發見した。後ちタムソンによつて電子なることが確められた。</li> <li>△ウイルソンが生れた。イギリスの物理學者。電離電流に關する研究が主である。</li> <li>△エタマンが生れた。スウエーデンの海洋物理學者。海流特に吹送流の研究をなし流速計を考案し海水の壓縮率を計算し採水器を考案した。</li> <li>△オツベンハイマーが生れた。ドイツの生化學者。</li> <li>△オングストレームが發した。スペクトルの分析研究で名がある。</li> <li>△ギルがモーリチウス島で金星の太陽面經過を観測した。</li> </ul>		

		<ul style="list-style-type: none"> <li>△京高醫學研究會の努力によつて病院及び醫學校が新築し京都療病院と稱した。府立醫學專門學校及び附屬病院の前身である。</li> <li>△京都府では明石博高の提言を容れてわが國最初の醫師試驗制度を斷行した。</li> <li>△河内の富田林、堀溝、和泉の堺、岸和田、伯太に低度の公立醫學校が出来た。</li> <li>△千葉では三井組の主唱で有志が醸金し千葉町(後の市)に共立病院を創立したが、後ち九年に公立千葉病院となし院内に醫學教場を設けた。十五年縣立千葉醫學校の附屬病院とした。</li> <li>△石黒厚がガツチンの解剖學を譯し「全體新論譯解」として刊行した。</li> <li>△權爪貫一が「洋算獨學」を著した。高本熊三郎も同名の書を出した。</li> <li>△寺田祐之譯の「理學一班」二巻が出た。</li> <li>△リツテルの講述を大阪理學所が譯し「物理日記」七巻として出した。</li> <li>△伊藤圭介の業蹟の一部がその子讀によつて編纂され「日本植物圖說初編草部(イ)の部」として出た。</li> <li>△大森惟中譯「博物新編譯解」四冊が出た。</li> <li>△石坂堅壯口授、神崎有隣編「博物新編三冊」が出た。</li> <li>△伊藤謙が「植物略解」を出した。</li> <li>△田中芳男の「動物學類編」二冊が出た。彼はまた小野駱鏡と共に飯沼愷齋の「草木圖說」の中草部二十巻を校訂し「新訂草木圖說」として出版した。</li> <li>△小野駱鏡が「植物譯箋」を著した。</li> <li>△農事修業場が駒場に創設した。同十年農學校と改め、十五年更に駒場農學校と改稱した。</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>△コルニエがフレネルの廻折現象に關する數學的計算をなした。</li> <li>△シユタルタが生れた。ドイツの物理學者。</li> <li>△ジュールが、ジュール効果を發見した。またW・タムソンと共に、ジュール・タムソンの實驗を行つた。</li> <li>△ストーニーが電氣素量の存在を主張した。</li> <li>△ドレーパーがドレーパーの法則を見出した。</li> <li>△ハーゼンエールが生れた。オーストリーの物理學者。</li> <li>△ハンゼンが發した。</li> <li>△ボツシュが生れた。ドイツの工業化學者。ハーバー法の工業的實施に努力した人。</li> <li>△マクラウドがマクラウド真空計を發明した。</li> <li>△マルコーニが生れた。イタリーの電氣工學者。</li> <li>△ヨリーが、定容氣體寒暖計を發明した。</li> <li>△ライマンが生れた。アメリカの物理學者。</li> <li>△ヴェントが「實驗心理學の基礎」を出した。</li> <li>△フアントホッフが光學的異性體の理論を立てた。</li> </ul>		
--	--	--	--	--	---	--	--



皇紀年號	日	本	西紀	外	國
二五三五 明治八	<ul style="list-style-type: none"> <li>△サグアチエが日本滞在中に採集した植物によりフランシエと共に「日本植物編目録」をパリで出版した。</li> <li>△葵川信近が「北郷記」を書き進化論を記した。</li> <li>△栗田萬次郎が臺灣植物を採集した。</li> <li>△西川藤吉が生まれた。</li> <li>△遠藤吉三郎が生まれた。</li> <li>△吉江琢兒が生まれた。</li> <li>□民選議院設立の建白があつた。佐賀の亂。臺灣征討があつた。</li> </ul>				
一八七五				<ul style="list-style-type: none"> <li>△スタンレーがアフリカを横断した。</li> </ul>	
				<ul style="list-style-type: none"> <li>△ワイズマンが核細胞を體細胞より鑑別した。</li> <li>△コオンが分裂菌の系統を立てた。</li> <li>△マルクスが石油自動車を開発した。</li> <li>△ロウシユが赤痢の病原アミイバ(原蟲)を発見した。</li> <li>△ホーランドが潜水艇を開発した。</li> <li>△ボア・ボーズランがガリウムを発見した。</li> <li>△リンデがアムモニア製氷機を開発した。</li> <li>△アブラハムが生まれた。ドイツの理論物理學者。</li> <li>△アルゲランダーが発見した。アルゲランダー恒星表を完成して名を成した。</li> </ul>	

	<ul style="list-style-type: none"> <li>△開拓使假學校を札幌に移し札幌學校とし翌九年札幌農學校と改めた。</li> <li>△瓜生政和の「知識初歩」二巻が出た。</li> <li>△小林善澄が歿した。</li> <li>△大阪衛生試験所を置いた。</li> <li>△朝倉松五郎が暹羅から歸朝し、歐式鏡玉を製造した。</li> <li>△キヨソネが印刷局に入つた。</li> <li>△京都に官立司藥場を設けベルツをして醫學の検査鑑定をなさしめた。また毒藥劇藥の制裁法をつくつた。(明治六年)</li> <li>△京都に模範藥局を新設し醫療器械、藥品一切を輸入し醫藥分業の理想を實現せんとした。後の合藥會社である。</li> <li>△東京赤坂に東京氣象臺を設け、イギリス人ジイネルに就て正戸釣之助、下野信之が測候に従事した。今日の天氣豫報の術語は下野の發案である。</li> <li>△津田仙の私立農學校が生まれた。</li> <li>△花岡眞節、宇野朗が通學生教場で皮膚科の講義をなした。</li> <li>△小幡英之助がエリオットに學び東京に齒科を開業した。</li> <li>△山本正至、田澤昌永編輯による「筆算題叢」が公刊された。之は全十五巻で明治十四年に完了した。</li> <li>△群馬縣醫學校、福井醫學校、佐賀醫學校、岐阜醫學校、福岡醫學校が開校され、河内の藤井寺、植松御厨、和泉の尾崎にも各醫學校が出来た。私立としては桐原眞節の明治學會(東京)、矢内玄悦の桂林學舍(播磨)、横井信之の好生學校(名古屋)も出来た。</li> </ul>				
				<ul style="list-style-type: none"> <li>△ヴァーブルがクアントと共に氣體の熱傳導に關する法則を見出した。</li> <li>△カーが靜電場に於けるカー効果を発見した。</li> <li>△ボアボードランがスベクトル分析に依つて方鉛礦中にガリウムを発見した。</li> <li>△カリーントンが発見した。黒點の太陽面緯度に対する特異分布及び太陽自轉の赤道加速を発見した。</li> <li>△タルツタスが元素タリウムを発見し其原子量の測定に際しラヂオメーターを發明した。</li> <li>△F.W.G.コールラウシユがイオン當量電導度に關する法則を見出した。</li> <li>△シユヴァーベが発見した。</li> <li>△バリサがヒルダ(小惑星一五三番の固有名)を発見した。</li> <li>△ワイツシャーがフェエルヒドラジンはアルデヒド及びケトンと反應してヒドラゾンを生ずることを発見した。</li> <li>△リツツが生れた。スイスの物理學者。</li> <li>△リユイスが生れた。アメリカの理論物理學者。</li> <li>△ルベールが生れた。フランスの數學者。</li> <li>△E.タムソンが電波發振器及び檢波器を發明してヘルツの實驗の先驅をなした。</li> </ul>	



皇紀年號	日	本	西紀	外	國
	<ul style="list-style-type: none"> <li>△相良知安、石黒忠憲、長谷川泰等が政府を動かして醫術開業試験法を發布せしめた。</li> <li>△遠藤利貞が古來の珠算書を改正し、順序排列を歐洲の教學書を參考とし「算術術授業書」を編んだ。</li> <li>△小野鷲龍が「植學淺解」初篇を出した。</li> <li>△本郷鴻島の博物館を東京博物館と改稱した。</li> <li>△田中芳男が「動物訓蒙」初編を出した。</li> <li>△前年來日本工藝調査の爲め日本各地を旅したドイツの地理學者ラインは動植物の調査もなし歸國後日本を世界に紹介した。</li> <li>△ナウマン(獨)が聘せられて來朝し、東京大學地質家教室に教へた。</li> <li>△醫學校藥園が教育博物館の管轄に轉じ始めて小石川植物園となつた。</li> <li>△清水誠がフランスに工學化學を學び歸朝し吉井友實の援助により國産マツチを製造した。</li> <li>△東京醫學校に通學生教場が開かれ邦語にて醫學を教へた。その生理學教授は永松東海であつた。</li> <li>△文部省醫務局が内務省に移管し衛生局を置いた。</li> <li>△シユルレルの後を承けて外科教師シユルツが來朝した。初めてリストターの防痲療法が傳へられた。</li> <li>△アンニングがこの年より明治十三年まで東京府立病院に在任し、わが國外科に密與するところ多かつた。</li> <li>△橋本綱常がドイツより歸り東京大學醫學部の教師となり(明治十一年)足立寛、桐原眞節とともに外科を講じた。</li> <li>△高木貞治が岐阜縣に生れた。</li> <li>△ペリーが來朝し工部大學土木學助教となつた。爾來五ヶ年間に在職し、わが國物理學の發達に貢獻した。</li> <li>△松井直吉がアメリカに留學し化學を專攻した。</li> <li>△鹿兒島火藥製造所を黒島に移した。</li> <li>□千島と樺太とを交換した。紅華島事件があつた。</li> </ul>				<ul style="list-style-type: none"> <li>△シヤバが「古代エジプトの衡、度量、鑄貨の研究」を出した。</li> <li>△ヘーザーが「醫學史教科書」を出した。</li> <li>△メートルの國際原器が確立した。</li> </ul>

皇紀年號	日	本	西紀	外	國
二五三六 明治 九		<ul style="list-style-type: none"> <li>△伊藤圭介が明治四年より編纂に着手した「日本産植物誌」のうち山城、武藏、近江、美濃、信濃等十一冊を文部省から出版した。</li> <li>△日本醫師試験法を定めた。</li> <li>△武内重信が「袋囊求積解」を著した。</li> <li>△長谷川泰が本郷鴻島に濟生學舎を開いた。またスライナーの「小兒科學」を譯した。</li> <li>△廣岡伊兵衛が友禪型藥を工夫した。</li> <li>△佐久間貞一が板紙をつくつた。</li> <li>△東京醫學校から初めて醫學士を出した。</li> <li>△地質學のナウマンが來朝した。</li> <li>△矢田部良吉がアメリカから歸朝し植物學の講義を始め創業の任に當つたが、同學近世學派の率先者である。</li> <li>△藤井徹が「草木栽培法」八卷を著した。</li> <li>△鈴木良輔の「百科全書續物篇」が成つた。</li> <li>△津田仙が「稻妻媒助法」を公にした。</li> <li>△田原陶菊が「藥物糖藏篇」を書いた。</li> <li>△神戸文哉が英書(ホトスレーの原書)を譯し「精神</li> </ul>	一八七六		<ul style="list-style-type: none"> <li>△ベルが音波の傳播に關する研究の結果、有線電話を發明した。</li> <li>△オットーが内燃機關を發明した。</li> <li>△コッホが脾脫疽熱の微生物を發見した。</li> <li>△スタンレーがアフリカを探検した。</li> <li>△クルツクスが、放射性物質を發見した。</li> <li>△ボオルが祖業を發見した。</li> <li>△アダムスが生れた。アメリカの天文學者。</li> <li>△エクスナーが生れた。オーストリーの氣象學者。</li> <li>△エディソンが、蓄音機の發明に着手した。</li> <li>△キルヒオッフが自然法則は自然事象の簡單整一な記載にありとする實證論をあげた。</li> <li>△ゲルドベリがワーゲと共に化學親</li> </ul>



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國		
			病約説」を刊行した。 △柏原學而がタロウスの耳科書を譯し「耳科約説」を著した。 △ギールケが來朝し初めて比較解剖學を傳へた。 △島村鼎甫、ボイドウイン、ミユルレル、ヘルツ等が大學で生理學を教へたが、この年チーゲルが來朝して同科が漸く整つた。 △戸塚靜海(春山)が七十八歳で歿した。 △京都府下蒲生野に農學校を建て大農的耕作開墾をなし牛種の改良に努めた。 △櫻井鏡二が杉浦重剛と共に化學專攻の爲めイギリスに留學した。 △小川三紀が生れた。 △ベルツがウエルニヒに代り東京大學で内科兼婦人科産科を教授した。 △野口英世が福島縣猪苗代湖畔で生れた。 △長崎病院内に長崎醫學場を開設し後十一年に長崎醫學校と改稱した。今日の長崎醫科大學の前身である。 △浦和醫學校、椽木病院附屬醫學所、三重縣立醫學校が出来た。 △田代基徳が修文館を創設した。 △木村宗三がペールの原書を譯し「理學の問答」を出した。 △片山涼吉の「物理階梯」が出た。 △文部省が片山涼吉參解「博物教授書」四册及び島次三郎編「博物教授法」三册を頒布した。			和力に關する研究を發表したがこの中に質量作用の法則が含まれてゐた。(一八六四年—一八七九年) △ブラウツシが弧光燈を考案し街路照明に供した。 △ゴルトシュエタインが陰極よりの放射線に對して始めて陰極線の名稱を與へた。 △パテールが歿した。臭素、次亜鹽素酸の發見者。 △セルビノが生れた。イタリーの實驗物理學者。 △フェルスターが「古代及び中世の天文學」を出した。 △チャレンジャー號の世界一周海洋調査が終つた。		

皇紀	年號	日	本	西紀	外	國		
二五三七	明治一〇		△博物局から小野駱盤撰「日本有用植物見本」が出た。 △近藤圭造が「博物新編講義」四册を出した。 △須川賢久が「顯微具氏博物學」一〇册を出した。 △和田維四郎が「金石學」及び「各府縣金石試驗記」を編した。 △關谷清景がイギリスに留學したがのち病を得て歸朝した。 △中川詮吉が金澤に生れた。 △ミルン(英)が工學寮(工部大學校)に招聘され來朝し金石、地質、鑛山學を講じた。 △エドワード・キンチ(英)が駒場農學校で農藝化學を講じた。 △ライマンが政府の命を受けて本邦の石油調査に着手した。 □熊本の亂、秋月の亂、萩の亂が起つた。			△ホルリンヂルが牛により放射狀菌を發見した。 △ヘエリングが色説を唱へた。 △リリエンターが、飛行機を工夫した。 △エディソンが蓄音機を發明した。 △カイエー及びビクターが酸素、窒素水素の液化を企てた。 △ソーヤーが紙又は木から炭素林をつくり電燈を考案し、アメリカの特許を得た。 △スストンが生れた。ドイツの物理學者。		



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
			<ul style="list-style-type: none"> <li>△荒木國平が絞織機を發明した。</li> <li>△廣瀬自誌が傳話機を發明した。傳話機は電話機である。</li> <li>△馬場新八、藤布武平、上原六四郎等がそれぞれ、輕氣球を發明した。實用的輕氣球の始りである。</li> <li>△内務省樹木試験場が生れた。後の東京山林學校である。</li> <li>△東京開成學校及び東京醫學校を合せて東京大學を創設し法、文、理、醫の四學部を置いた。</li> <li>△工部省工學寮を工部大學校と改めた。</li> <li>△農事修業場を駒場農學校と改めた。</li> <li>△初めて理學士を出した。</li> <li>△淺草花屋敷で新輸入の電話機を架設し興行した。</li> <li>△ベルツがわが國に於て入血絲蟲を檢出した。</li> <li>△伊藤圭介が「小石川植物園草木目録」を編した。後ち十三年、十四年に改訂版が出た。</li> <li>△エルウインが來朝し東京大學に教へた。</li> <li>△菊池大麓が歸朝し數學教授となつた。同十四年數學科の設けられたのは彼の功によるものである。</li> <li>△赤松則良、神田孝平、柳橋悦、菊池大麓等が數學の一大共同研究機關として、東京數學會社を組織した。後の東京數學物理學會である。同年「東京數學會社雜誌」を出した。</li> <li>△和田維四郎が「金石識別表」を書いた。</li> <li>△森原頼助(信芳)が「圓理算要」を著した。</li> <li>△鈴木圓が「容術新題」を著した。</li> <li>△東京博物館を教育博物館と改稱し上野公園内に移した。</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>△アブデルハルデンが生れた。ドイツの生化學者。</li> <li>△ヴァン・デル・ヴァールスが見出した。</li> <li>△ヴァン・デル・ヴァールスの状態式を見出した。</li> <li>△ヴィーランドが生れた。ドイツの有機化學者で胆汁酸類の構造を研究し、また細胞内に於ける有機物の酸化作用に關して研究した。</li> <li>△カーが磁氣的カー効果を見出した。</li> <li>△マイブリツヂが、活動寫眞を工夫した。</li> <li>△タールーが致した。經濟學に數學を應用した最初の人。</li> <li>△ジーンズが生れた。イギリスの天文學者、物理學者。</li> <li>△ソツヂイが生れた。イギリスの化學者。</li> <li>△トールボトが致した。</li> <li>△パークラが生れた。イギリスの物理學者。</li> <li>△フリーデルがクラフトと共にベンゼンの誘導體合成の方法を發表した。(フリーデル・クラフトの反應)。</li> <li>△ヘルムホルツが熱力學の理論を熱化學及び電氣化學へ始めて應用した。</li> <li>△ヴァーノン・ハーコートが、ペンタン燈を發明した。</li> </ul>

			<ul style="list-style-type: none"> <li>した。今日の科學博物館の前身である。この年まで館長たりし人は辻新次、高山義成、内村良藏、矢田部良吉であつた。</li> <li>△「寫眞新聞」が發刊された。わが國最初の寫眞雜誌である。</li> <li>△横山松五郎がカーボン・ゴム法を工夫した。</li> <li>△伊藤圭介の「小石川植物園草木目録」が成つた。</li> <li>△中村亮平が漢書「蠶桑輯要」を譯述した。</li> <li>△勸業局が「農政垂統記」四巻を刊行した。</li> <li>△松原新之助が駒場農學校で初めて植物病理を講じた。</li> <li>△尾崎富五郎が「改定諸國紙名録」を書いた。</li> <li>△服部元嗣、藤田克三が「大日本樹木志」を著した。</li> <li>△矢田部良吉が小石川植物園長となつた。</li> <li>△西南戦役の凱旋士卒が京都にコレラ病を齎し大流行を來した。この防疫の任に當つた時の衛生課長明石博高は來る十二年に再び猖獗すべきことを豫言して人々の嘲笑を買つたが、果して十二年夏コレラが續發し數百の死者を出したので、彼は當局に進言し最後の手段たるクワリーランタインの行政處分を實行した。</li> <li>△動物學の近世學派はE・S・モールズが東京大學に於ける動物學の教師に任命されたるに始まり、同十二年ホイットマンが來てこれに代つた。</li> <li>△石黒忠應が「外科学通術」を譯し外科方術の方式を説いた。また腫脹を發見した。</li> <li>△「日本洋學年表」が出た。大槻如電の編纂である。</li> <li>△廣島病院附屬學校、弘前病院附屬學校、富山醫學所等が出來た。</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>△ボツゲンドルフが致した。科學中の研究にも名がある。</li> <li>△ボルツマンがエントロピーと状態確率との間の函數的關係を見出した。</li> <li>△H・N・ラツセルが生れた。アメリカの天文學者。</li> <li>△リウエリエが致した。大惑星の運動を研究しその位置表をつくつた。</li> <li>△ヴォルフが「天文學史」を出した。</li> <li>△ブエツフアーが滲透壓を測定した。</li> <li>△バスターールが最初の豫防注射を行つた。</li> <li>□イギリス王が印度皇帝と稱した。</li> </ul>
--	--	--	--	--	--	---



皇紀	年號	日	本	西	外	國	
二五三八	明治一		<ul style="list-style-type: none"> <li>△畑時行が相成學校(群馬)を、山田養順が温古堂(三重)を創設した。</li> <li>△小宮山弘道がハートルの物理學書を譯し「格物全書」十六卷を出した。</li> <li>△丁建良の原書を譯し「格物入門和解」十卷が出た。</li> <li>△前田利器が「圖解理學大意」を出した。</li> <li>△文部省が小野職謙編、安部爲任解「博物教授法」二冊を頒布した。</li> <li>△佐々木武綱が「博物要論」を出した。</li> <li>△ジョイネルが職を解かれ、正戸豹之助が代つて觀測主任となつた。</li> <li>△アメリカの動物學者E・S・モールズが江ノ島に於て腕足類の研究に入つた。</li> <li>△地理寮が地理局となつた。</li> <li>△ギールケが來朝しデニッツに代り解剖學を講じ局所解剖學の科が新設された。</li> <li>△第一回内國勸業博覽會が開かれた。</li> <li>△木村駿吉がノットに就て四元法を深く研究した。</li> <li>□西南の役が起つた。</li> </ul>				
				一八七八		<ul style="list-style-type: none"> <li>△バイエルが人工藍を發明した。</li> <li>△ヒュースが炭素を用ふる微音機を作つた。これにより電話が急速に進歩した。またマイタロフオンを發明した。</li> <li>△スワンが白熱電燈を發明した。</li> <li>△ノーベルが無煙火薬を發明した。</li> <li>△ベルナルが殺した。</li> </ul>	

			<ul style="list-style-type: none"> <li>△東京醫學新誌、醫事新聞等が創刊された。</li> <li>△上原六四郎が輕氣球を發明した。</li> <li>△エールトン指導の下にその門下生たる工部大學生藤岡市助、中野初子が弧光燈を發明しこれを點火した。</li> <li>△益井元右衛門が眼病者の爲に自家を擧げて病院となし、また癩病者の爲に京都癩病院を設け名利を離れて天職に殉じた。</li> <li>△和田雅四郎が「本邦金石略誌」を著した。續物知識の代表的記述である。</li> <li>△内田彌一が「小學教本日用植物篇」四卷を著した。</li> <li>△山本正至が「幾何學原礎」を譯した。</li> <li>△志賀泰山が「幾何學簡明」を編述した。</li> <li>△ボードウインの主唱で癩病者に水銀局部手序を施した。</li> <li>△名古屋醫學學校を公立醫學學校と改めた。</li> <li>△大槻繁漢(清崇)が七十八歳で歿した。</li> <li>△駒込植物園を設けた。</li> <li>△勸業局が「農業要覽」を刊行した。</li> <li>△安倍喜任が「驅虫法要」を著した。</li> <li>△松原新之助が「植物綱目撮要」三卷を著した。</li> <li>△小野職謙が有毒草を圖説し「毒品便覽」を出した。</li> <li>△和田雅四郎によつて甲斐、伊豆地方の地圖が成つた。日本に於ける最初の地質學的研究である。</li> <li>△ベルツが日本に於て肺チストマによつて起る一新病、寄蟲咯血を發見した。</li> <li>△愛知縣立醫學所(明治五年醫學講習場として生れたもの)が設けられた。またこの年に熊本醫學學校、山形醫學所、青森病院附屬醫學學校等が出来た。</li> </ul>			
						<ul style="list-style-type: none"> <li>△コッホが「創傷感染原因論」を書いた。</li> <li>△ペーターリスがイスマネ(小惑星百九十番の固有名)を發見した。</li> <li>△ヴァールブルクが彈性餘效に關する理論的考案をなした。</li> <li>△エディソンが微温計器を發明した。</li> <li>△ストロールが、エオルス音を研究した。</li> <li>△E・H・ヴェバーが殺した。ヴェバー・フエヒナーの法則を發見した。</li> <li>△ギツプスが一八七四年より研究を續けた「相律を含む不均一物質系の平衡」を發表した。</li> <li>△ローランドがローランド效果を説いた。</li> <li>△J・ヘンリーが殺した。</li> <li>△ゲールケが生れた。ドイツの實驗物理學者。</li> <li>△G・C・シンブソンが生れた。イギリスの氣象學者。雷雨の電氣に關する著述がある。</li> <li>△セツキが殺した。恆星スペクトルの分類に業績がある。</li> <li>△マイヤーが殺した。エネルギー恆存則の提唱者。</li> <li>△ルクランシエがルクランシエ電池を發明した。</li> <li>△ルニョーが殺した。</li> </ul>



皇紀年號	日	本	西紀	外	國
	<ul style="list-style-type: none"> <li>△竹内雄平が清静義塾(東京)、後藤末吉が共樂社(東京)、速水南雄が啓蒙醫學會(大阪)、内田抱一が内田家塾(群馬)をそれぞれ創設した。</li> <li>△角田眞平編の「物理小學」三巻が出た。</li> <li>△高木玄眞がウイルソン原著を譯して「格物探原譯解」三巻を出した。</li> <li>△甲斐織衛が「電信機圖解」を出した。</li> <li>△佐々木武綱が「博物要論」を出した。</li> <li>△田中芳男が同志と共に「博物雜誌」を創刊したがこれは五號で終つた。</li> <li>△ブラキストンがブライヤーと共に「日本鳥類目錄」をイギリスで刊行の鳥學雜誌で發表した。二百五十九種の日本産鳥類を列挙してある。</li> <li>△ドイツ人デーデルラインが來朝し、同十三年歸國するまで醫學校に勤める傍ら本邦動植物殊に魚類を蒐集し、歸國後スタインダハネルと共に著して「日本魚類研究報告」を出した。</li> <li>△E・S・モールスが再び來朝し動物學を講じた。</li> <li>△東京大學生物學會が生れた。</li> <li>△ナウマンが地質調査部の設置を建議し翌年その議が採用になつた。今日の帝國地質調査所である。</li> <li>△ナウマンの後任としてブラウンス(獨)が東京大學地質學教室に入つた。彼の東京附近第四紀及び鮮新紀産貝類の研究は後年徳永重康の研究の基礎となつた。</li> <li>△松井惟和が「通俗金體新論」を記述した。</li> <li>△大學天文臺が本郷元富士町に設けられた。後ち内</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>△フアーブルが「昆蟲記」を書いた。(一九一〇年)</li> <li>△トーマスが製鋼法を發明した。</li> </ul>	

皇紀年號	日	本	西紀	外	國
二五三九明治一二		<ul style="list-style-type: none"> <li>新省の天象部、海軍省附屬觀象臺と合併し、明治二十年以後は大學の管理となり、東京天文臺として今日に至つてゐる。</li> <li>△大阪英語學校を大阪府立専門學校と改め醫科及び理科を置いた。</li> <li>△ドイツの化學者ヴァグナーが京都府醫學校に轉じて理化學を講じ、また省會局で化學、工藝を講じた。</li> <li>△千住製絨所が興つた。</li> <li>△メンデンホール(米)が東京大學に招聘されて來朝し物理學を講じた。</li> <li>△ユイインダが東京大學の招聘により來朝し、機械工學を講じ、また地震學上の研究をなした。大學内に觀測所を設けわが國地震現象の科學的研究の先驅をなした。</li> <li>△工部大學電氣科第一期生川口武一郎が物理學を代講した。(卒業の時死亡)</li> <li>△久原躬弦が禁根に関する論文をロンドン化學會に發表した。</li> <li>△石川千代松が日本蠶類の地理的變異に関する論文を紙育昆蟲學會雜誌パピリオに發表した。東京大學入學の前年である。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>一八七九</li> <li>△ジトメンスが電氣爐を考案し、また電車を發明した。</li> <li>△レムゼンがサツカリンを創製した。(フハールベルク)</li> <li>△クルツクスが陰極線を發見し真空管の實驗をなした。</li> </ul>	



皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
		<ul style="list-style-type: none"> <li>△大阪洋學校を専門學校とし醫理二科を置いた。</li> <li>△京都、長崎兩醫學會、東京地學協會が生れた。</li> <li>△工學會が生れた。</li> <li>△志田林三郎が丹麥注材法を行った。</li> <li>△高久守靜が「極數大成術」を著した。二變數または數箇の變數に就て別々に微分し、極大極小を求め算法で、彼の創意による新研究といはれる。</li> <li>△武藤壽の「日本金石産地」及び「金石對名表」が出た。</li> <li>△東京帝國大學に動植物學二課目を置いた。</li> <li>△和田維四郎が「晶形學」を著した。</li> <li>△永田方正が「由氏植物學」五卷を著した。</li> <li>△ミルンが武藏國根岸村で石鐵、石斧、古陶の破片等を發見した。</li> <li>△東京學士會院を創設した。</li> <li>△ナウマンの建議により帝國全部の組織的地質調査の爲の帝國地質調査所が設けられた。初代の所長は和田維四郎であり、次いで巨野部忠永、鈴木敏、井上賴之助、金原信泰等が所長となつた。</li> <li>△ブラウンス(獨)がナウマンの後を受けて東京大學理學部地質學教室に入つた。彼は主として應用地質學を講じた。</li> <li>△三浦謙三が「斷肢醫學」を著した。法醫學の譯述として完備したものである。</li> <li>△山崎元脩が「婦人病論」を著した。</li> <li>△柴田承柱が「衛生概論」を著した。</li> <li>△博物館から田中芳男撰の「日本有用動物見本」を出した。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>△エディソンが白熱電燈を發明した。またゴム塗包裝用テープを工夫した。</li> <li>△ナイゼルが、ゴノコクタスを發明した。</li> <li>△エールリツヒが白血球からエオジン染色顆粒を發見した。</li> <li>△ニルソンが、ズカンヂツルを發見した。</li> <li>△ボルツマンが輻射と溫度との關係に就て研究した。</li> <li>△コーラウシニが溶液の電導度を測定した。</li> <li>△マクスウエルが歿した。</li> <li>△アインシュタインが生れた。ドイツの理論物理學者。</li> <li>△ヒュースが人の聽覺を測る器械オーディオメーターを發明した。</li> <li>△ガイストラが歿した。</li> <li>△ギルが太陽視差決定のため火星を観測した。</li> <li>△トラウジウスがモソツテイの考案に基いてトラウジウス・モソツテイの法則を立てた。</li> <li>△シュテファンが、シュテファン・ボルツマンの輻射法則(一八八四年ボルツマンにより理論的に證明されたので)を見出した。</li> </ul>		
		<ul style="list-style-type: none"> <li>△三宅秀が東京大學醫學部病理學教授として「病理學總論」を著した。</li> <li>△上野清編輯の「數理叢談」が創刊された。數學専門の雜誌である。</li> <li>△司馬凌海が戸塚で病歿した。四十一歳であつた。</li> <li>△神戸醫學所、岩手、高知、小倉、茨城、徳島、宮城の各醫學校が出来た。</li> <li>△久能元明が醫學講習所(東京)、高階經徳が好善醫院(東京)、山本信郷が回春病院(大阪)、緒方惟準(都造)が博濟醫院附屬醫學校(大阪)、有井龍雄が明治醫學校(大阪)、佐藤春海(舜海)が順天堂(下總)、藥科松伯が米澤醫學舎(米澤)、山崎立生が鼎立義塾(高知)をそれぞれ創設した。</li> <li>△長谷川泰が東京府下の癲狂院々長となり、初めて精神患者の治療をなした。</li> <li>△中川重蘭がドイツ本から譯した「萬有七科理學」を出した。</li> <li>△宇田健齋が「物理了案」を出した。</li> <li>△宇田川準一が「物理全志、同附圖」二巻を出した。</li> <li>△スエーデンの學術探險船ウエガ號が北氷洋よりベーリング海峡を経て日本に來り千島から臺灣に至る沿海の調査を行った。その報告中乗組員植物學者ケエルマンの調査が本邦海藻學に貢獻するところ多かつた。</li> <li>△ホイットマンがこの年より約二年間東京大阪に動物學を講じた。</li> <li>△E・S・モールズが大森貝塚の研究を理學部のメモアー第一冊として出した。この年彼は歸國した。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>△スタウフがキノリン及び其誘導體の合成法を發見した。</li> <li>△ボアボードランがサマリウムを分離した。</li> <li>△R・プランテが鉛蓄電池を考案し、更に之を實用的に改造した。</li> <li>△ハーンが生れた。ドイツの化學者。</li> <li>△フィツシャーがローズアニリン色素の構造を明かにし、プリン層化合物の研究をなした。</li> <li>△E・H・ホールがホール効果を見出した。</li> <li>△ラウエが生れた。ドイツの理論物理學者。</li> <li>△ラムスアウアーが生れた。ドイツの物理學者。</li> <li>△ラモン트가歿した。地球磁氣の觀測方法に改良を加へた。</li> <li>△リチャードソンが生れた。イギリスの物理學者。</li> <li>△レイノルズが、レイノルズ數及び流体運動の相似擴張可能な法則を發見した。</li> <li>△ヴァイマルンが生れた。ロシアの化學者。</li> <li>△エベルトが腸チフス菌を發見した。</li> </ul>		



皇紀年號	日	本	西	外	國
二五四〇 明治一三	<ul style="list-style-type: none"> <li>△矢田部長吉がE・S・モールの貝塚研究のメモア1を口譯し寺内章明が筆記し「大森介城古物編」として出した。</li> <li>△大島圭介が、石油、石油採取に関する文獻「山油編」二巻を出した。</li> <li>△東京大學醫學部では別課醫學生に對し、泰西の病理學書を寫譯して講述してゐたが、之を纏めて「病理學論」及び「病體剖視要」として公刊した。</li> <li>△この頃田代基徳は病體解剖社を設け病理解剖の必要を唱へた。</li> <li>△ベルツが東京に於て一略血患者の咯痰中から肺チストマ卵子及び母嚢を發見檢出した。</li> <li>△渡邊定が「衛生體要」を出した。</li> <li>△内務省の中央衛生會が制定され、同時に各府縣に地方衛生會が制定された。</li> <li>△シヨイベが來朝し京都療病院の教師となり、同十六年歸國した。</li> <li>△高山紀齋が「保齒新論」を著した。</li> <li>△エールトン(エヤトシ)の後任としてトーマス・グレイが來朝し、工部大學で電信學を教へた。</li> <li>△久原躬敏が紫根色素の研究に着手した。</li> <li>△醫師試験規則を頒布した。</li> <li>□府縣會が始まつた。</li> </ul>				
一八八〇				<ul style="list-style-type: none"> <li>△ジーメンズが弧光燈を考案した。</li> <li>△バストールが連鎖狀及び葡萄狀球菌を發見した。</li> </ul>	

	<ul style="list-style-type: none"> <li>△わが國の傳染病豫防規則が公布された。</li> <li>△東京大學理學部に地震學教室を置いた。</li> <li>△駒場、札幌兩農學校から初めて農學士を出した。</li> <li>△府立大阪、縣立岡山兩醫學校が出来た。</li> <li>△大阪專門學校を大阪中學校と改めた。</li> <li>△日比健二郎編の「死體檢屍考」が刊行された。</li> <li>△倉田吉嗣が、關東及び北陸地方の地形測量を行つた。(十四年)</li> <li>△田賀宜政が「化學命名論」「石油略説」を著した。</li> <li>△日下部辨二郎が内務省に入り北上川、淀川はじめ大小河川の改修工事及び築港工事に盡した。</li> <li>△横濱、神戸間に二重電信機を裝置した。</li> <li>△物理のメンデルホール、山川健次郎、菊池大麓、機械のユイイング・グレイ、地質のナウマン、巨智部忠承、關谷清景等が日本地震學會を創立した。世界に於ける地震研究會の魁である。</li> <li>△佐藤信淵の原書が「天地營造化育論」として和文で再刊された。</li> <li>△駒場農學校に新に植物病理學科を設けた。</li> <li>△松本駒次郎が「植物醫藥」三巻を著した。</li> <li>△三宅秀が「病理各論」中で精神病の概要を説いた。</li> <li>△京都に氣象觀測所が出来て觀象臺と稱した。ヘルツ、明石博高などの建設になるものである。</li> <li>△東京醫學校で邦語を以て西洋醫學を教へた。</li> <li>△永松東海がこの年「生理學」を著した。</li> <li>△兩館醫學校、長崎、山口、岡山各縣立醫學校が出来た。</li> <li>△小宮山弘道が「近世二大發明傳話機、蘇言機」を譯述した。</li> </ul>				
				<ul style="list-style-type: none"> <li>△キュリーがピエツ電氣を發見した。</li> <li>△ハンゼンがリブラパチルスを發見した。</li> <li>△ベアシュが驗脈器を發明した。</li> <li>△アブネーが赤外線<small>〇・〇七五v</small>まで明瞭に撮影した。</li> <li>△ヴェーゲナーが生れた。ドイツの地球物理學者、氣象學者。</li> <li>△エーレンフェストが生れた。オランダの理論物理學者。</li> <li>△F・W・G・コイルラウシュが絃電流計を考案した。</li> <li>△シヤールが歿した。ボンズレと共に近世綜合幾何學を大成した。</li> <li>△クラークが地球橢圓形體を諸材料から計算した。</li> <li>△フロイントリツヒが生れた。ドイツの化學者。</li> <li>△ミラーが歿した。結晶面の記號として現在ミラーの記號が用ひられる。</li> <li>△ラツセルが歿した。</li> <li>△リサージュが歿した。</li> <li>△カントルが「數學史講義」を出した。</li> </ul>	



皇紀年號	日	本	西紀	外	國
	<ul style="list-style-type: none"> <li>△永田健助が「百科全書動物綱目」を出した。</li> <li>△チツセが來朝しギールケに代り解剖學を講じた。</li> <li>△松本定次郎がヴァイオリンを作った。</li> <li>△大井玄洞(調)が東京大學教授チゲールの講本を譯し「衛生汎論」として出した。</li> <li>△細川潤次郎が中央衛生會長となつた。</li> <li>△三淵謙三、谷口謙が東大醫學部教授チゲールの「國政醫論」を譯して出した。</li> <li>△練本喜三が駒場農學校で昆蟲病理を講じた。</li> <li>△三宅恒方が生れた。</li> <li>△ローレンツの講義「皮膚病理一斑」を田野俊貞が譯し石井榮三が筆記し公にした。</li> <li>△ライマンに附て北海道の地質調査をなした島田、山際の二助手が幾春別炭山を發見した。</li> <li>△大阪病院の教授局を分離し、府立大阪醫學校とした。後の大阪府立高等醫學校であり現在の大阪帝大醫學の前身である。</li> <li>△ギールケが歸國した。</li> <li>△高峰讓吉がイギリスに留學した。(十三一十六年)</li> <li>△メンデンホールが富士山頂に於て重力の加速度を實測しまた地球密度の測定も行った。また東京氣象臺も同山頂で氣象觀測をなした。</li> <li>△志田林三郎が二重通信装置を行った。</li> <li>△中央衛生會を開設した。</li> <li>△伊藤博文が立憲政體を建白した。</li> </ul>				

<ul style="list-style-type: none"> <li>△清野勇、中濱東一郎が病屍を解剖して肝ダストマ蟲を發見し肺臓の變化を證明した。</li> <li>△宮崎柳條の「廣益農工全書」五巻が刊行された。</li> <li>△砂糖、酒、醬油、纖維、紙、澱粉その他の探製法を圖説したものである。</li> <li>△林遠里の「勸農新書」二巻を出した。</li> <li>△松村任三が「植物小學」を著した。</li> <li>△私立東京慈惠會醫學校が生れた。</li> <li>△成醫會が創立した。</li> <li>△ワグナーの建議による普通工業教育機關としての東京職工學校(後の東京高等工業學校)が生れた。</li> <li>△日本藥學會が出来た。現東京工業大學</li> <li>△日本植物學會が出来た。</li> <li>△大日本氣象學會が出来た。</li> <li>△神田に皇漢醫學講究所が生れた。</li> <li>△平井晴二郎が北海道に於ける鐵道敷設工事の設計監督をなした。</li> <li>△巖谷立太郎が純ニールボルト製鍊上の研究を遂げて歸朝した。</li> <li>△瓜生寅謙の「電氣、兩氣論」が出た。</li> <li>△丹波敏三が「普通植物學」を著した。</li> <li>△淵澤清が「萬象寫生圖形」を書いた。</li> <li>△伊藤圭介、加來飛霞が「小石川植物園植物圖説」を出した。</li> <li>△桂川國興が歿した。</li> <li>△わが國最初の工業試驗場ともいふべき京都密寄局は廢止の運命に陥つたので、之と苦樂を共にした明石博高は私財を投出し拂下を受け獨力經營に當つたが、翌十五年遂に廢局の止むなきに至つた。密寄局</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△コッフホが結核菌を發見した。また丹毒において連鎖球菌を證明した。</li> <li>△ジョルジ・ベアルトが神經衰弱症を説いた。</li> <li>△バルフォアが胎生學を立てた。</li> <li>△ラヴェランがマラリヤ熱の病原體を發見した。</li> <li>△タチエルニイが初めて血管縫合を詳説した。</li> <li>△エベルト及びフキイがチフス菌を發見し、コッフホが之を病原體であると確定した。</li> <li>△パナマ運河の開鑿が始まつた。</li> <li>△ビッドウエルがセレニウムの光に對する電氣抵抗を利用し寫眞電送の實驗をなした。</li> <li>△ラウーが氷點降下の法則を出した。</li> <li>△ファン(ラ)・デル・ワールが完全な瓦斯方程式を出した。</li> <li>△ラングリーがボロメーターを發明し赤外線熱作用を精査した。</li> <li>△バルフォアが「比較發生學」を出した。</li> <li>△アツベがシヨットと共に科學的に精密な光學ガラスの製造に努力した。</li> <li>△ヴァールブルクが強磁氣性體の磁氣履歴現象に關する實驗をなし強磁氣性體理論の先驅をなした。</li> <li>△J・J・タムソンが電氣的粒子の運</li> </ul>
---	---



皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
		<p>の傳習生のうち選拔されて海外に留學した人に稻畑勝太郎、島津源太郎、横田萬壽之助等があつた。</p> <p>△島村鼎甫(榮軒)が五十二歳で歿した。「生理發蒙」等がある。</p> <p>△ベルツが新潟縣の恙虫病を調査し之を洪水熱とした。</p> <p>△ミユルレル原著を飯盛挺造が譯し「物理學」三卷を出した。</p> <p>△松本駒次郎が「動物小學」三冊を出した。</p> <p>△松村任三の「植物小學」が出た。</p> <p>△田中芳男が大日本農會の創立に盡力した。</p> <p>△大久保三郎の盡力で東京植物學會が生れた。矢田部良吉が會長となつた。</p> <p>△波江元吉が東京教育博物館の「脊椎動物標本目錄」に魚類の分類目錄を記載した。</p> <p>△田中和美が東京大學教授となり別課生の解剖學を擔任した。</p> <p>△シユルツの後を承けてスタリバが來朝したが、明治三十四年まで大學の外科教師に在職した。</p> <p>△佐々木忠次郎が駒場農學校助教授となり昆蟲學中主として害蟲を講じた。</p> <p>△明治十二年留學を了へて歸朝した松井直吉がアトキンソンの後を承けて化學を講じた。</p> <p>△櫻井鏡二がイギリスより歸朝し翌年東京大學の化學教授を分擔した。</p> <p>△寺尾壽、三守守等によつて東京物理學校が創立した。</p>		<p>動に對し惰性的質量を認めた。</p> <p>△ドウヰイルが發した。無水五酸化窒素を發見しナトリウム及びアルミニウムの工業的製造法を考案した。</p> <p>△H・フィッシャーが生れた。ドイツの有機化學者。ピロール化學の研究に力を注いだ。</p> <p>△マイケルソンが光波干渉計を發明した。</p> <p>△ラングミニアが生れた。アメリカの物理化學者。</p> <p>△リップマンが干渉に基く天然色寫眞法を考案したが一八九一年に至りこの實驗に成功した。</p> <p>△バストールが炭疽病に關する公開實驗を行つた。</p> <p>△パリの萬國電氣學會々議でC・G・S單位が決定した。</p> <p>□埃及がイギリスの保護國となつた。</p>		

	<p>△三宅秀が「病理各論」を出した。</p> <p>△新たに本郷東片町に癲狂院を開き長谷川泰に代つて中井常次郎が院長となつた。</p> <p>△教育博物館が東京教育博物館と改稱した。</p> <p>△高木兼寛が主盟となり成醫會講習所が生れた。後ち二十三年に成醫學校となり、翌二十四年東京慈惠醫學院醫學校となつた。</p> <p>△山形縣立病院醫學校を山形學校に移した。</p> <p>△町村立佐賀醫學校が出来た。</p> <p>△グアグナーが東京帝大理科で化學を講じ、傍ら東京職工學校(今の工業大學の前身)陶器玻璃工科主任となつた。</p> <p>△メンデンホールが歸國した。在任中富士山頂に於ける重力の實測、地球密度の測定を試み、また氣象臺を監督した。</p> <p>△田中館愛橋等がメンデンホールの後を承けて重力加速度の測定を行ひ、全國にわたる組織的測定も計畫された。</p> <p>△ケルナー(獨)がキンチの後任として來朝し駒場農學校で農藝化學を講じた。</p> <p>△グレイが滿期退職の後を承け工部大學電信科第三期卒業生藤岡市助、中野初子、淺野應輔等が教授補となり電信學を教授した。</p> <p>△井和爲昌が工部大學卒業と同時にダイグアースの助手となつた。</p> <p>△松本收が黄蘗皮の含有色素がベルベリンであることを確めた。</p> <p>△アトキンソンが「日本釀造論」を著した。</p> <p>□國會開設の大詔が下つた。</p>				
--	---	--	--	--	--



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二五四二	明治一五			一八八二		
		△小豆澤亮一が寫眞油繪を發明した。 △伊藤圭介、松村任三、宮部金吾、矢田部良吉等が東京植物學會を起した。 △上野に博物館が開設された。 △伊藤圭介が「老至雜誌品物之部」を出した。 △栗本龜菴、大淵棟庵、淺田宗伯等が溫知社藥品會を開いた。 △博物館に園藝課を置いた。 △松原新之助が「植物學」を著した。 △松本駒次郎が「動物小學」を著した。 △山林學校を西ヶ原に設けた。 △群馬縣產業課で高野長英の遺著「二物考」を再刊した。 △横井時敏が穀種の鹽水選種を創案した。 △片山國嘉、江口襄、榊原共著の「裁判醫學提要」が公刊された。 △佐藤尙中が歿した。 △大日本山林會、大日本水産會が創立した。田中芳男の盡力に依つた。 △植物學會の分離により東京大學生物學會は東京動物學會と稱された。今の日本動物學會の前身である。 △J.S.モールズが三度目に來朝したが東京專門學校(今の早稲田大學)で進化論を講演した。前年來朝時の進化論を寫したものである。尙彼は大學豫備門でも進化論の講義をなしたがこの講演筆記は翌十六年石川千代松の名で「動物進化論」として公刊した。 △上野公園に動物園が開かれた。明治十九年農商務		△フオザアギルが三叉神經病に就て説いた。 △ブロックが結核性小娘の肺を截除した。 △フリツシュが鼻硬化のバチルスを見つけた。 △レエフレルが鼻疽のバチルスを発見した。 △コツホが結核菌を發見しその病原性を確定した。 △リンデマンが圓の平方化不可能を説いた。 △ウイムシャーストが起電機に改良を加へ、ウイムシャースト起電機を發明した。 △ダレウインが歿した。 △メンゼルが歿した。 △バルフォアが歿した。其作佳吉が學んだことがある。 △ツエーラーが歿した。 △エディントンが生れた。イギリスの天文學者。相對性理論及び宇宙論、量子論、輻射等に關する理論的研究をなした。 △ガイガーが生れた。ドイツの物理學者。 △クルテイウスが、デアゾ酸を發見した。		

皇紀	年號	日	本	西紀	外	國	
二五四二	明治一五			一八八二			
		省より宮内省に移管され更に大正十一年東京市に下賜された。 △其作佳吉がホイットマンに代り東京大學に於て動物學を講じた。 △大澤謙二がチーゲルに代つて生理學を講じた。 △柴田承桂がザンデル原著を譯し「公衆衛生論」を出した。 △片山國嘉、古川榮等が大學別課生に衛生學を講じた。 △デーニッツが警視醫學校に聘せられて斷診醫學を講じたが、この講本「斷診醫學」の邦譯が出た。 △石黒忠應がエスマルヒの「軍除外科手術」を譯述した。 △佐藤進がピルロートの原書を譯し「外科通論」として出し、また別に「外科各論」を著した。 △天氣豫報の制度が出来た。 △千葉の私立醫學所が縣立千葉醫學校となつた。今の千葉醫大の前身である。 △和歌山病院内醫學教場が和歌山醫學校となつた。 △文部省が醫學校通則を制定發布した。 △内田五藏が歿した。和算學者で門下に竹内修敬、志野知郷、藤岡有貞、桑本正明、法道寺善、川北朝鄰、彦坂範善等がある。 △川北朝鄰がこの年頃より長澤龜之助を督し西洋の算書を譯させ普及に努めた。 △高松豊吉が英獨より歸り、翌々十七年東京大學理學部教授となつた。 △寺尾壽がフランスに留學中、金星經過觀測の爲觀測委員と共にマルチニツク島に出張した。		△フイツシャヤーが尿酸、キサンチン、カフェイン、テオブロミン等の構造を發表した。 △フランクが生れた。ドイツの物理學者。 △ボルンが生れた。ドイツの理論物理學者、相對論的力學、原子理論、量子力學の開拓者の一人。 △ラウールがチウールの第一法則を見出した。 △リウヴェルが歿した。リウヴェルの定理がある。 △シュリツタが生れた。ドイツ生れのオーストリアの科學評論家。 △ネーターが生れた。ドイツの女流數學者。 △マイケルソンが光速を精細に測定した。 □三國同盟が成つた。			



皇紀年號	日	本	西	外	國
二五四三 明治一六	<ul style="list-style-type: none"> <li>△ゴツチエがこの年より明治十七年まで東京大學理學部で地質學、金石學、古生物學を講じた。</li> <li>△杉本京太が岡山に生れた。</li> <li>△青山胤通が醫科大學を卒業し醫學部病理學教室補助を命ぜられ、ベルツ教授の下に内科助手となつた。</li> <li>□軍人に勅諭が下された。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△柏木幸助が檢濕器を發明した。</li> <li>△植田豊橋が旭燧を創め、わが國固有の繪畫を陶面に寫すことを發明した。</li> <li>△醫師開業試験規則及び免許規則を定めた。</li> <li>△大日本私立衛生會が生れた。</li> <li>△江崎禮二が咽田川で、海軍水雷機關の寫眞を撮つた。</li> <li>△田邊明郎が琵琶湖疏水工事計畫を發表した。</li> <li>△野邊地久記が「アプト式鐵道建築法」を著した。</li> <li>△宮崎柳條が「通常金石小誌」を著した。</li> <li>△平出富士太郎が「養蠶實驗録」を著した。</li> <li>△大槻修二が「金石教授法」を書いた。</li> <li>△原龍太が吾妻橋をはじめ東京市の大小十六橋梁の改築を行つた。</li> <li>△佐雙佐仲が明治三年造船學專攻の目的でイギリスに留學し同十一年扶桑艦の回航に當り一旦歸朝したが、更に渡歐し當時イギリスに註文した諸艦の設計は屢技師リードの手に成つたが浪速、高千穂、敵愾の諸艦を建造するに當り始めてリードの手を離れ、伊藤萬吉、宮原二郎と共に之が設計建造に當り百難</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△コッホがコレラ菌を發見した。</li> <li>△ウワン・ペーネデンが染色體を再び發見した。</li> <li>△タレクブスがヂフテリア菌を發見した。</li> <li>△ウロブレフスキーとオルスツエウスキーが酸素と窒素を全く液化することに成功した。</li> <li>△フェールアイゼンが丹毒球菌を發見した。</li> <li>△メチニコフが、貪喰細胞説を首唱した。</li> <li>△ブライドレニデルがブンウモベチルスを發見した。</li> <li>△エーミル・フィッシャーが、バイルビツク酸ヒドラヂンの不溶性結晶を得た。</li> <li>△アレニウスが電離説を發表した。</li> <li>△ウアルブルクが生れた。ドイツの生化學者でE.ウアルブルクの子。</li> </ul>		
			一八八三		
					<ul style="list-style-type: none"> <li>△ウエイムズハーストが錫箔及び接觸電子を用ひた感應起電機を作つた。</li> <li>△F.オストワルトが生れた。ドイツのコロイド化學者。</li> <li>△タラータが生れた。アメリカの地球化學者。</li> <li>△S.W.ジーメンズが發した。</li> <li>△G.カントールが集合論を立て、解析學の基礎を定めた。</li> <li>△フィッシャーが糖類の研究をなし、その發展の端緒を開いた。</li> <li>△ヘッスが生れた。オーストリーの物理學者。</li> <li>△マツハがその著書中特にニュートン力學の史的意義を検討し相對性理論の先驅をなした。</li> <li>△ローランドが凹面格子を用ひて太陽スペクトルの研究に知見を興へた。</li> <li>△ホウオルスが生れた。イギリスの有機化學者。</li> <li>△トラウスが「動物學教科書」を出した。</li> <li>△この年から一九〇五年までアルバトロスから北アメリカ、大西洋、太平洋の廣汎に亘り水産、生物學、海洋學の調査が行はれた。</li> </ul>

		<ul style="list-style-type: none"> <li>を排して遂にこの年竣工し外國人を驚嘆せしめた。即ち之よりわが海軍は獨立經營の基を拓いた。歸朝後は須賀造船所の經營完成に努め武蔵、葛城、鳥海、高雄、麻耶の諸艦をわが國に於て始めて建造し更に秋津洲を建造してわが國製艦術を獨立せしめた。</li> <li>△高説一が「日本製品圖説」三卷を著した。</li> <li>△丹波敬三、柴田承桂、高松數馬が「普通動物學」を著した。また「裁判化學」をも書いた。</li> <li>△「鹿兒島魚譜」が刊行された。鹿兒島縣の編纂である。</li> <li>△細川潤次郎が「養蠶須知」を著した。</li> <li>△練木喜三が「應用動物學」を著した。</li> <li>△伊勢義五郎がベルツの「内科病論」を譯した。</li> <li>△長谷川泰等が國政醫學研究會を起した。</li> <li>△杉享二の統計學校が生れた。</li> <li>△チーゲルが歸國したので、その助手大澤謙三が代つて大學で生理學を講じた。</li> <li>△田代基徳が病體解剖社を創立し病理解剖の必要を唱へた。</li> <li>△矢田部良吉の「植物通解」が出た。</li> <li>△内田彌一譯の「博物全志」三冊が出た。</li> <li>△ブラキストンが津輕海峽が日本動物分布上の一境界線なりとしその意見をこの年發行の亞細亞協會々報に發表した。この想定線は「ブラキストン線」といふ。</li> <li>△飯島魁、佐々木忠次郎が常陸國陸平の貝塚を發掘し理學部メモアに記載した。</li> <li>△原田豊吉がドイツより歸り地質調査所に入り、ナウマン歸國後はその地位を繼いだ。また傍ら大學の教授を兼ね化石學を講じた。</li> </ul>
--	--	--



皇紀年號	日	本	西紀	外	國
二五四四明治一七	<ul style="list-style-type: none"> <li>△牧野富太郎がツチトリモチを発見した。</li> <li>△石川千代松、平沼淑郎がE・S・モールの講演を筆記整理して「動物進化論」を出した。</li> <li>△梅錦之丞がドイツより歸朝し眼科専門の教授となつた。</li> <li>△清水郁太郎がドイツより歸り東京大學に於て婦人科産科の教授に任ぜられた。</li> <li>△佐々木望が生まれた。</li> <li>△わが國では歐洲に赴けてこの年より氣温傾向を採用した。</li> <li>△東京氣象臺（後の中央氣象臺）ではこの年より天氣豫報を始め天氣圖を發行した。</li> <li>△ノットが來朝し東京大學で電氣學、音響學、磁氣學、力學を講じた。</li> <li>△志田林三郎が英國留學より歸り工部大學教授となつた。</li> <li>△鳥瀧右一が生まれた。</li> <li>△青山胤通が文部省留學生としてドイツに赴いた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△有坂鎭蔵が本郷岡にて彌生式土器を発見した。</li> <li>△田原榮が白、青、紫の漆を化學的に創製し之までの色素の配合により數十種の間色を創つた。</li> <li>△陸地測量部が設けられた。</li> <li>△松本莊一郎が全國の鐵道計畫を樹てた。</li> <li>△スベンザーの「萬物進化論」を西村玄道、杉木清壽が記述した。</li> <li>△石橋純彦が工部種少技長となり爾後燈臺立標の建築改良に盡した。</li> <li>△高山甚太郎がわが國セメント製造上の業績を残した。</li> <li>△田中芳男等が畔田翠山の遺著「水族志」を出版した。</li> <li>△古川榮がコッフの「創傷感染原論」を記述した。</li> <li>△大村純道が淡路洲本の博覽會に草木二百五十餘種を出品した。</li> <li>△小藤文次郎が「金石學」を著した。</li> <li>△竹中卓郎が「舶來果樹要覽」を著した。</li> <li>△山本周朝が無煙火藥（山本火藥）を發明した。</li> <li>△瀧川昌善が「小兒病各論」を著した。</li> <li>△廣川晴軒が八十一歳で歿した。</li> <li>△わが國に専門の衛生學教授の生れたのはこの年である。緒方正規がドイツより歸り衛生學教室の主任となつた。ベルリン大學に先立つこと一年である。</li> <li>△數學會社を數學物理學會と改めた。</li> <li>△伊藤圭介の「救荒植物集説」が文部省から出版された。</li> <li>△佐々木忠次郎、白井光太郎、坪井正五郎等が東京人類學會を起した。</li> <li>△松村任三が「日本植物名彙」を出した。</li> <li>△對馬海峡の海底に沈設する海底電信工事成り朝鮮内地間の連絡が成つた。</li> <li>△上野、熊谷間の鐵道が開通した。</li> <li>△大澤謙二が東京大學醫學部で生理學の傍ら衛生學を講じた。</li> <li>△佐々木政吉がドイツより歸り東京大學醫學部の教授となり、初めて診斷學を講じ、のちに内科學を分</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△パリソンスが蒸氣タービンを發明した。</li> <li>△マーゲンタラーがリノタイプを發明した。</li> <li>△ニコライエルが、破傷風菌を發見した。</li> <li>△サラモン・フレエンケルが肺炎球菌を發見した。</li> </ul>		
一八八四	<ul style="list-style-type: none"> <li>△カルロヂ・ラトネが破傷風桿菌を發見した。</li> <li>△グリニッチ天文臺を子午線の基本と定めた。</li> <li>△シャルドンモーが人造絹絲の特許を得た。</li> <li>△クノールが、アンチピリンを創製した。コールタール合成劑の最初である。</li> <li>△イーストマンがロールフィルムを完成した。</li> <li>△ヴェルツが發した。メチルアミン、ノイリン等を合成しグリコール、アルドール等を發見し、またグリセリンの構造を決定した。</li> <li>△エディソンが、エディソン効果を發見した。</li> <li>△コルベが發した。有機化學の理論的發展に盡した。</li> <li>△シユスターが電子の比電氣量の考案を試みた。</li> <li>△スヴェドベリーが生まれた。スエーデンの物理學者。</li> <li>△デバイが生まれた。オランダの物理學者。原子、分子物理學に關する業績が多い。</li> <li>△デフアントが生まれた。ドイツの海洋物理學者、氣象學者。大洋の循環流、海水の構造等の研究がある。</li> <li>△デユマが發した。蒸氣密度測定法、</li> </ul>				

皇紀年號	日	本	西紀	外	國
二五四三一二五四四	<ul style="list-style-type: none"> <li>△古川榮がコッフの「創傷感染原論」を記述した。</li> <li>△大村純道が淡路洲本の博覽會に草木二百五十餘種を出品した。</li> <li>△小藤文次郎が「金石學」を著した。</li> <li>△竹中卓郎が「舶來果樹要覽」を著した。</li> <li>△山本周朝が無煙火藥（山本火藥）を發明した。</li> <li>△瀧川昌善が「小兒病各論」を著した。</li> <li>△廣川晴軒が八十一歳で歿した。</li> <li>△わが國に専門の衛生學教授の生れたのはこの年である。緒方正規がドイツより歸り衛生學教室の主任となつた。ベルリン大學に先立つこと一年である。</li> <li>△數學會社を數學物理學會と改めた。</li> <li>△伊藤圭介の「救荒植物集説」が文部省から出版された。</li> <li>△佐々木忠次郎、白井光太郎、坪井正五郎等が東京人類學會を起した。</li> <li>△松村任三が「日本植物名彙」を出した。</li> <li>△對馬海峡の海底に沈設する海底電信工事成り朝鮮内地間の連絡が成つた。</li> <li>△上野、熊谷間の鐵道が開通した。</li> <li>△大澤謙二が東京大學醫學部で生理學の傍ら衛生學を講じた。</li> <li>△佐々木政吉がドイツより歸り東京大學醫學部の教授となり、初めて診斷學を講じ、のちに内科學を分</li> </ul>				



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二五四五	明治一八	<ul style="list-style-type: none"> <li>△足立寛がヒューテルの「外科通解」を譯述した。</li> <li>△吉田顯三が「耳科約説」を出した。</li> <li>△梅錦之丞、須田哲造、井上達也、安藤正胤、桐淵光齋等が發起となり、眼科専門の會を設立した。</li> <li>△清水郁太郎が致したので、東京大學の産科婦人科は再びベルツの兼轄となり、同二十一年まで繼續した。</li> <li>△久原躬弦がアメリカより歸朝し東京大學理學部教授となつた。</li> <li>△下瀬雅允が印刷局に出仕し紙幣の價偽を識別し得る黒色捺用インキを發明した。</li> <li>△田中正平がドイツに留學し、ヘルムホルツ等に就いて研究し約十八年間滯留した。</li> <li>□朝鮮京城の變があつた。</li> </ul>		一八八五	<ul style="list-style-type: none"> <li>窒素定量法の創案がある。</li> <li>△トドハンターが致した。その著書は日本でも廣く行はれた。</li> <li>△バルマーが水素のスペクトルに一つの系列的關係あることを見出した。</li> <li>△ヘフナーがヘネル燈を考案した。</li> <li>△ベルギウスが生れた。ドイツの化學者、石炭液化を完成した人。</li> <li>△ポインティングが始めてポインティング・ウェクトルを導入した。</li> <li>△マイエルホーフが生れた。ドイツの生理化學者。</li> <li>△ヨリイが致した。</li> <li>△ル・シャトウリエが、ル・シャトウリエ、ブラウンの法則を見出した。</li> <li>△デバイが生れた。ドイツの化學者。</li> <li>△ニボーがニボー圓板(テレグイジョン走査用圓板)を發明した。</li> <li>△ライアーが「古代東洋の冶金術」を出した。</li> <li>△ブリガーが「レウキツボス及びデモタリトスに於ける原子の始原運動の世界發生」を出した。</li> <li>□清國がフランスと戰つた。</li> <li>△バストールが恐水病の豫防注射を發見した。</li> </ul>	

皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二五四五	明治一八	<ul style="list-style-type: none"> <li>△濱田初次郎が活版印刷機を發明した。</li> <li>△矢田部良吉がグレイの學校植物學を譯し「植物通解」として刊行した。</li> <li>△安本徳寛が「植物書」動物書各一卷を著した。</li> <li>△高橋江春が本邦人に適する義眼を作つた。</li> <li>△緒方正規が脾脫疽の天然免疫に關する新説を發表した。また内務省衛生試験場に細菌室を設け細菌の検査研究をなした。</li> <li>△高林謙三が茶葉粗採機を發明した。</li> <li>△私立熊本藥學校が起つた。</li> <li>△川島長十郎が紋羽二重織を創つた。</li> <li>△藤岡市助が白熱電燈を發明した。わが國で實用に供した始めである。</li> <li>△日本鑛業會が起つた。</li> <li>△阪島魁が日本寄生蟲學を創始し同二十八年ごろまで専ら寄生蟲學の講究に盡した。彼の「日本寄生動物篇」はわが國寄生蟲學の根柢をなすものである。またこの年、「動物學雜誌」に「鳥獸の採集及び剥製」を發表した。</li> <li>△磯崎眠龜が特許制度の必要を力説しその條例發布をみるに至つた。わが國特許制度の功勞者である。</li> <li>△野呂景義が炭炭製造を始め同二十三年之を工業化した。</li> <li>△池尻村で土偶が發見された。</li> <li>△片山直人が「日本竹譜」を著した。</li> <li>△江木清彌が「救荒要録」を書いた。</li> <li>△奈良惠二が「農學得益辨」を著した。</li> <li>△熊澤善庵、柴田承桂共著の「普通金石學」が成つた。</li> </ul>		一八八五	<ul style="list-style-type: none"> <li>△レムストウロムが電氣栽培法を試みた。</li> <li>△ウロブレフスキーが大氣の液化に成功した。</li> <li>△ブムがゴノゴウタスを培養した。</li> <li>△フレイシユルが血液比重計を公にした。</li> <li>△タツキニが太陽の最大紅焰の一つを實見した。</li> <li>△チャイルドがカゼリンから人造角質物を得ることを發明した。</li> <li>△バルマーが水素スペクトルの式を發表した。</li> <li>△ダイムラーが自動車を發明した。</li> <li>△グリネが活動寫眞機を發明した。</li> <li>△ヘルムホルツが水銀滴下電極を發明した。</li> <li>△アウアーがブラセオヂムとネオヂムを發見し、更にアウアー燈(石炭ガス燈)を發明した。</li> <li>△アンドリュースが致した。</li> <li>△ウァイルが生れた。ドイツの數學者。幾何學上から相對性理論の闡明を試み、また群論の上から量子力學を論じた人。</li> <li>△エディソンが長距離無線電信の局部的特許を得た。</li> <li>△ガイテルが生れた。ドイツの實驗物理學者。</li> </ul>	



皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
	<p>△井上久太郎が「金石一覽圖解」を書いた。 △屋井先蔵が連続電氣時計を發明した。 △この年エーキマンが歸國したので大學では高橋順太郎が代つて藥劑學を講じ、次いで猪子吉人が教授となつた。 △岩川友太郎編の「動物通解」二冊が出た。 △松村次郎口述、北村竹次郎記の「日本金石解説」が出た。 △小藤文治郎がドイツより歸朝しゴツチエの後任として地質學教室主任教授となつた。 △齋田功太郎が淡水産藻類の研究をなした。 △田中壤、高島得三の「日本植物帶調査報告」が出た。植物種屬の地理分布を調査したものである。 △小金井良精がドイツより歸り解剖學教授となつたので、チツセは病理學及び病理解剖學に轉じた。 △横濱市の淨水道が成つた。鐵管使用の始めである。竣工式は同二十年九月であつた。 △ベルツが孤獨病に就て公にした。 △純正化學と應用化學が別設せられ、後者は理學部から分れ新設の工學部に屬することとなり、松井直吉が理學部を去り工學部に教へた。工學部は幾莫もなく更に舊工部大學校と合し新に工部大學を構成するに至つた。 △河田鱗也、大月龜太郎がカレットソンの齒科書を譯し「齒科全書」として出した。 △梅錦之丞が逝去したので、スタリバが再び眼科を兼擔し、助教授甲野榮が之を輔佐した。</p>			<p>△クインケが液體の帶磁率の測定をなした。 △ウインクラーがゲルマニウムを發見した。 △シャープリーが生れた。アメリカの天文學者。 △A.V.バイヤーがバイヤーの張力説を立てた。 △フアント・ホッフに依り、反應恆容式が發見された。 △フエーリングが發した。主として工業化學の研究に力を注ぎ、またフエーリング液の發明で知らる。 △ベグエシーが生れた。ハンガリーの理論物理學者。 △ホリアが生れた。デンマークの物理學者。 △ニューイングが磁氣履歴現象を精査した。 △レリーがレリー波の存在を證明した。</p>		

二五四六明治一九

△足立寛がヒューテルの「外科各論」を譯し矯正術なる譯語を創めた。  
△塚本明毅が發した。「日本地誌提要」七十七卷その他がある。  
△群馬縣岩鼻に火藥製造所を新設した。  
△北里柴三郎がドイツ差遣を命ぜられ留學した。  
△密田良太郎が生れた。  
△本曆に各地の氣象表を加へた。  
□天津條約が成つた。  
△東京醫學會が生れた。  
△柳假が精神病を生來と後天の二種に分類した。  
△日本が赤十字條約に加盟した。  
△森林太郎が「日本兵士の食餌に就て」を發表した。  
△川島甚兵衛が風通織を創つた。  
△本所鋸銅所で電氣製銅を行つた。  
△京都大津間の疏水トンネルが興つた。  
△東京大學と工部大學を合併して、帝國大學を起した。  
△駒場農學校と東京山林學校を合併し東京農林學校とした。  
△山口辰彌が小野濱造船所長となり水雷艇の建造をはじめ軍艦、商船等の建造に盡し造船界に貢献した。  
△辰巳一が明治十四年に歸朝して以來海軍技術會議委員として數年間石炭燃焼法、煉炭製造法を研究した。  
△松尾鶴太郎がベルタンを輔佐し八重山、松島、嚴島、橋立の諸艦の設計建造をなした。  
△日本藥局方が公布された。

一八八六

△ウエルスバツハがガスマントルを發明した。  
△ダイムラーが輕油機關を發明した。  
△モルワンが、モルワン氏病を記述した。  
△フオドールが血液の殺菌能を發見した。  
△エシエリツヒが普通大腸菌を發見した。  
△ローゼンバツハが破傷風桿菌を發見した。  
△ゾキモレトが、乳滅菌法を公にした。  
△モアウサンが、弗素の分離に成功した。  
△ゴールド・シュタインが、陽極線を發見した。  
△エルトヴェツシュが液體の表面伸張力に關する法則を發見した。後ち之を



皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>△高等中學校に醫、工、理、農の各科を設けた。</li> <li>△建築學會が生れた。</li> <li>△東京帝國大學理科大學に地質學講座が設けられ、關谷清景が最初の教授となり、その業を進めた。</li> <li>△高峰謙吉が過燐酸石灰を創製した。</li> <li>△東京で毎時觀測を始めた。</li> <li>△今川庸が「日本山林副産物製造法」を書いた。</li> <li>△「帝國大學理科報告」が創刊された。</li> <li>△松村任三が矢田部良吉に代つて東京帝國大學植物學教授となつた。</li> <li>△松尾耕三の「近世名醫傳」が出た。</li> <li>△清野勉が「土都華氏物理學」二巻を出した。</li> <li>△河野於夷がチンデルを祖述し「勢力保存論」並に「科學的唯物論」を出した。</li> <li>△關澄藏譯の「理科提要」三冊が出た。</li> <li>△白井光太郎が大學を卒へて辭類分類の研究をはじめた。また東京農林學校で初めて植物病理學を講じた。</li> <li>△大谷津直麿が大學を卒へて禾本科植物の分類の研究をはじめた。</li> <li>△松村任三が「理科大學植物標品目錄」を出した。</li> <li>△氣象觀測法を制定した。</li> <li>△山本善夫が「裁判醫學」を出した。</li> <li>△「人類學雜誌」が出た。</li> <li>△陸軍々醫學校を設け石黒忠惠が校長となつた。</li> <li>△ドイツより歸朝した柳假が醫科大學で初めて精神病學を講じた。</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>ラムゼー及びミールツが修正した片山正夫が新式を提示した。</li> <li>△オツボルツァーが歿した。惑星及び彗星の研究をなし、また西紀前一二〇八年より西紀二一六一年までの日月食を計算した。</li> <li>△カイユテがマテイアスと共に平衡に共存する液と蒸氣との密度に關する實驗をなした。(カイユテ・マテイアスの法則)</li> <li>△アルレニウスが電離の理論を公にした。</li> <li>△サン・ウナンが歿した。彈性體力學に名がある。</li> <li>△ジーグバインが生れた。スエーデンの物理學者。</li> <li>△ジャマンが歿した。ジャマンの干涉計の考案がある。</li> <li>△ブレンゼン及びJ・ジョリーが、蒸氣熱量計を考案した。</li> <li>△リッチが微分幾何學を説いた。</li> <li>△ボルツマンが氣體の運動學的理論に於ける速度分布則に關し、H定理を立てた。</li> <li>△A・V・ヒルが生れた。イギリスの生理化學者。</li> <li>△フイツンシャーがヒドラゾンからイン</li> </ul>		

二五四七明治二〇

	<ul style="list-style-type: none"> <li>△高山紀實が「齒科藥物摘要」を出した。</li> <li>△長野研平が「耳科約説」を出した。</li> <li>△波江元吉が沖繩、伊豆七島の鳥類を採集した。</li> <li>△中村晴男がドイツに留學したが、歸朝後は中央氣象臺技師となつた。</li> <li>△志田林三郎が岡田川及び品川沖に於て導電法による無線電信の實驗を行った。ヘルツが電波の檢波を行つた前々年であり、電波の存在を實證した前年である。</li> <li>△帝國大學令が公布された。</li> <li>△石川千代松が前年ドイツに留學、この年フライブルグ大學ワイスマン教授指導の下に研究に入り「百工開源」を著した。</li> <li>△櫻井省三が英佛に渡り千代田、千島兩艦の建造を監督した。</li> <li>△北里柴三郎がドイツに留學中、コツホ指導の下にチフス菌の純粹培養その他の新知見を加へた。またコレラ菌に就て種々な研究を遂げ、人工培養基上に於ける病原菌の關係を實驗研究しコレラ菌の性状を明にした。</li> <li>△日本乾板製造會社が起つた。</li> <li>△四重電信機の試驗を行つたが、同二十三年東京、名古屋の通信に使用した。</li> <li>△鴉子吉人が黃連研究の成績を發表した。</li> <li>△理科大學附屬臨海實驗所を三崎に置いた。其作佳吉の建言によるものである。</li> <li>△札幌農學校に工學科を設けた。</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>△ヘルツが光電効果を發見した。</li> <li>△バイセルバウムが流行性腦脊髄膜炎の病原體を發見した。</li> <li>△マイケルソンがモーリーと共に地球エーテルとの相對運動による光波干涉現象を實測した。</li> <li>△キルヒホッフが歿した。</li> <li>△アスマンがアスマン通風湿度計を發明した。</li> <li>△フエヒナーが歿した。ヴェーバー・フエヒナーの法則で名がある。</li> <li>△ヴォルテラが函數解析學を述べた。</li> <li>△クラークが歿した。</li> <li>△タルテイウスがヒドラジンを發見し</li> </ul>		
--	--	--	--	--	--	--

一八八七



皇紀年號	日	本	西紀	外	國
		<p>△第一乃至第五高等學校の醫科を分ちて醫學部とした。          △農學會が生れた。          △社會醫學會が生れた。          △海軍醫學會が生れた。          △石川千代松の「動物通解續篇」が成つた。          △「植物學雜誌」が創刊した。東京植物學會の機關誌である。          △坪井爾爾が「摘要彙編問答」を著した。          △佐々木忠次郎が「微粒子病肉眼鑑定法」を公にした。          △宇田川興齋が歿した。          △物理學のノットがこの年以來わが國各地の地磁氣の測定を行つた。この事業は後ち田中館愛橋によつて繼承された。          △「東京農林學校要報」が創刊された。          △佐々木忠次郎が蠶兒に寄生する蛆の發生に就て研究し、蛆害豫防の方法十一を案出した。          △飯島魁が明治十六年以來岡山縣下に發見された肝臟ヂストマの性質研究をなしその所論を發表した。          △關谷清景が地震觀測の結果を比較して地震計の正確を證した。          △村岡範爲が日本魔鏡に就て豫て研究を續けてゐたが研磨に依つて起る金屬のヒヰミに就て研究を發表した。          △小藤文次郎がグロココフエーン(藍閃石)を徳島市附近及び別子銅山で發見し、その後本邦各地に散布</p>			<p>た。          △シユレーディングガーが生れた。ドイツの理論物理學者。          △フアヤンズが生れた。ポーランドの物理化學者。ウラニウムX<sub>2</sub>の發見者。          △ブツサンゴーが歿した。農藝化學、植物生理化學の基礎を確立した。          △G・ヘルツが生れた。ドイツの原子物理學者。          △モーズリーが生れた。イギリスの物理學者。          △フアントホッフが溶液論を説いた。</p>

皇紀年號	日	本	西紀	外	國
		<p>廣きことを認め光學上、化學上の研究を進めた。          △清水鐵吉、ダイヴァースが四種の亞硫酸水銀の反應を研究し亞硫酸の半ば類同性で半ば酸素酸なることを證明した。三種はその新發見によるものである。          △ダイヴァース、坪和爲昌が亞硝酸鹽類に硫化水素を作用してハイドロキシラミンを發生することを説いた。          △北尾次郎が大氣運動及び颶風の理論を發表した。          △其作佳吉、石川千代松が生物學上の一大問題たる胚葉の起原を龜體に就て研究し有脊動物發生の初期を比較的に論じた。          △渡瀬庄三郎が東洋固有の金魚の臀鰭、尾鰭の構造を説明して有脊動物四肢の起原に論及した。          △佐々木忠次郎がわが國の鯉魚の生所、産卵期、卵捕獲方法に就き調査研究し「鯉魚慣習略記」なる論文を發表した。          △小藤文次郎が歐洲に稀有な紅廉石(マンガンエビドート)が本邦の始原地層に非常に多く散布することを發見し、その礦物の化學性、物理學性及び晶像を研究發表した。          △關谷清景が相模を中心として起つた一月十五日の地震の記事論文を發表した。          △田中館愛橋が電流を斷絶することを要せずして強さを計る懷中電流計を考案した。また光學上の試験に依つてレンズの屈折率や曲率を計る新しい方法をも案出した。          △飯島魁が嘗てドイツの動物學雜誌中に記載したトリクラダ(渦蟲類)の遺補を發表して動物學者の未だ知られない四種に就き詳記した。このうち一種は</p>			



皇紀年號	日	本	西紀	外	國
		<p>新種でプラナリア・アブシツサと命名した。          △關谷清景が地震動の性質を示す雛形を考案した。          △吉田彦六郎が顯花植物の灰分中にアルミニウムの存在を發見した。          △坪和爲昌が沃度を以てハイドロキシラミンを定量するに際し溶液の強さ並に曹達鹽と炭酸の影響を公にした。          △箕作佳吉が「三崎臨海實驗場の記」を書いた。          △藤澤利喜太郎が英獨留學より歸り東京帝國大學理科大學の數學教授となり同科の研究に一段の進境を示した。          △「皇國醫事沿革小史」が出た。          △柘植千嘉衛が大學を卒へて苔類の研究に入つた。          △築谷徳五郎、市川(田中)延次郎が在學中に植物分類に従事したが、市川の菌類の研究は特に注目された。          △矢田部良吉閣、帝國大學植物園植物目錄」が出た。          △飯島魁が「人體寄生動物論」を出した。          △ヂツセが歸國したので局所解剖學の講義は今田東助が之を擔當した。          △三浦守治がドイツより歸り大學の病理學を擔任し初めて専門の病理學教授が出来た。          △吉井盤太郎が「實地應用裁判醫學論」を公にした。          △青山胤通がドイツよりフランスに轉じ、パリ大學シャルコーの門に學んだが、八月に歸り第一醫院内科の一部及び診斷學を分擔した。          △佐藤三吉がドイツより歸り外科教授に任じ、第二</p>			

二五四八 明治二二

<p>醫院の外科を擔任した。          △服部徹が「田圃害虫新説」を出した。          △地理局直轄の測候所を各府縣の所管に移した。          △伊澤信平が「齒科問答」を出した。          △橋本綱常が日本赤十字社病院長となつた。          △ウヰグナーが旭焼を作つた。          △高峰讓吉がアメリカにて過磷酸肥料を研究し歸朝後人造肥料會社を創立した。          △田中正平がドイツに於て純正調音階の極めて進歩せる理論を發表した。          △長澤龜之助がスミスの代數學を譯述した。          △菊池大麓の建議によりグルニツチの東經百三十五度の子午線が日本の標準時として採用された。</p>	<p>△三浦守治が本邦人の澱粉様變性を報告した。          △牧野富太郎が「日本植物志圖編」を著した。(第一卷第一集。明治二十四年)          △佐々木長淳が「農務問答」を著した。          △全國に五ヶの高等中學醫學部を開いた。          △眞崎照輝が麵類製造機を發明した。          △藤生佐吉郎が紋彫機を發明した。          △横山嘉兵衛が紋織機を發明した。          △森林太郎が「日本住家の人類學的衛生學的研究」を發表した。          △北河豊次郎が木材乾溜を試みた。          △地理局觀測課の事務を東京天文臺に移した。          △電氣工學會が生れた。          △猪子吉人が本邦諸菌毒に就て報告した。</p>
--	--

一八八八

<p>△ヘルツが電波の檢波を説き無線電信の基礎を拓いた。(ヘルツの實驗)          △レナードが陰極線の真空管から逸出せしめることを發見した。          △ローレンツが、光は原子の周圍を廻轉する粒子の作用に歸することを説いた。          △ゼーテが潜望鏡を發明した。          △モアサンが一八八六年に發見した弗素を遂に遊離せしめた。          △タラウジウスが發した。          △タインケが液體の電煤常數の測定に寄與した。(一八八五年)          △アサーグレーが發した。わが矢田部</p>	
---	--



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國	
			<p>△古市公威が私立工手學校の設立に盡した。 △片山國嘉がドイツより歸り大學教授となり、法醫學の名稱を起した。 △田中芳男が大藏永常の遺稿「農稼肥培論」を刊行した。 △三好學が「植物自然分科一覽表」を著した。 △白井光太郎が「植物自然分科檢索表」を書いた。 △磯村卓吉が「小笠原島要覽」を刊行した。 △藤澤利喜太郎がトランセンデンタル方程式の根數に順ひ進級する無限級數を以て不規程函數を展開するの論を發表した。之によりスワルム、ルイビル、ハイネ等の説の足らぬところを補ひその誤りを正した。 △河喜多能達、ダイヴァースが鳥もちの成分に就て論文を發表した。 △菊池安が明治七年七月三宅島の火山噴火のとき燒石の流出した長石結晶は石灰長石（ミタクロチン・タールサイト）なることを證明した。 △關谷清景が明治十八年九月より同二十年九月に互り理科大學及び第一高等中學校構内で施行した地震觀測の結果を發表し上下動を論じた。 △飯島魁が日本人に寄生することの多いボスリオセファルス・ラータス（擔節裂頭線蟲）の中間宿主が鱒であることを確めるため市販の鱒肉中の線蟲の幼蟲プレロセルロイドを技手菊池松太郎と共に嚥下し生長せしめ自己の身體をその試験に供した。 △小藤文次郎が武藏國秩父郡並に上野國甘樂郡の諸</p>		<p>良吉が學んだ。 △キュストナーにより緯度の變化の現象が認められた。その後、チャンドラーの研究により二週期あることが判つた。 △イーストマンがコダックカメラを發明した。 △ライニツフアーが異方性液體に液體結晶の名稱を與へた。 △オストヴァルトがオストヴァルトの稀釋律を設定した。 △グリースが發した。チアゾ化合物の發見者。 △ハルヴァツクスが、光電子を發見した。（光電効果） △W・コツセルが生れた。ドイツの理論物理學者。 △ゴールドシュミットが生れた。ノルウエーの礦物學者。變成岩の研究で知られる。 △ラヴアールが衝擊タービンを發明した。 △平圓盤レコードが發明された。 △パリサがトウレン（小惑星二七九番の固有名）を發見した。 △バストールがバストール研究所長となつた。</p>		
			<p>山臺（關東山）の地質を研究し、成因及び巖石の時代に就き新説を發表しこの地層より三波川地系と名づけた。 △大久保三郎が松原新之助の採集にかゝる硫黃島植物に名稱を附した。また菊池安、岡田信利、実戸一郎の採集した標品をも調査した。 △飯島魁、村田謙太郎がリギユラ蟲狀列頭線蟲の發見に關し公表し同蟲の七新例を記載した。 △田中館愛禰、ノットが日本全國磁力實測報告をなした。ノットは北部、田中館は南部を實測したが、この時田中館の考案によるデクリノメートル及び傾角計を用ひた。 △山川健次郎が大理石の熱傳導度の測定をなした。 △長岡半太郎の二大論文「ニツケルのマダネチズムに於て縱及び振レのストレッサの合効果」振レたるニツケルのマダネチズム及び殘のマダネチズム」は各國の物理學に關する雜誌に轉載された。 △久原朝弦が樟腦並に龍腦の比容積を檢出した。 △神保小虎を主任として北海道の地質的調査が行はれた。同二十四年神保は辭任したが同事業は同二十九年まで繼續した。 △頓野廣太郎が山口に私設測候所を開設した。 △中央氣象臺が天氣豫報を始めた。 △東京動物學會の機關誌「動物學雜誌」が出た。 △松村任三がドイツより歸朝し初めてドイツ流の植物解剖學、組織學が傳へられた。 △岡村金太郎がアサクサノリの發生狀態を研究し翌年一月その生殖器と發生順序とを知ることを得た。 △レツセルの「皮膚病學」を栗本庸勝、棟方隆が抄</p>		<p>△ホーフマイスターがその門下と共にホーフマイスター系列を認めた。 △ハツドフィールドがマンガン鋼を發見した。 △ラウールがラウールの第二法則を見出した。 △テマンが生れた。インドの物理學者。 △ランデが生れた。ドイツの物理學者。 △レントゲンがレントゲン電流を研究した。 △ベアードが生れた。スコットランドの發明家。 △カントルが「數學史講義」を出した。 △レオフレルがチフテリア菌を發見した。</p>		



皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
二五四九明治三二	<ul style="list-style-type: none"> <li>譯して出した。後ち下平用彩が之を全譯した。</li> <li>△弘田長がドイツより歸り大學教授となり小兒科學を擔任した。</li> <li>△濱田玄達がドイツより歸り大學產科婦人科の專任教授となつた。</li> <li>△ライマンの門下坂市太郎が、夕張大炭田を發見した。</li> <li>△スクリバが歸國したので甲野榮が代つて眼科教室の主任となつた。</li> <li>△菊池大麓の「初等幾何學教科書」初版が出た。</li> <li>△千本福隆がフランスより歸り東京高師教授となつた。</li> <li>△長岡半太郎が強磁性體に就いてみられる磁氣歪の現象に關する研究を行つた。</li> <li>□市制、町村制が發布された。</li> </ul>					
一八八九				<ul style="list-style-type: none"> <li>△シャルドンネが、人造絹絲をつくつた。</li> <li>△ピカリングが最初の分光器的通星を發見した。</li> <li>△エディソンがキネトスコープを發明した。</li> <li>△ダウトンがアイソスタシーを名付けた。</li> <li>△エルスター及びガイデルがNa及びKに就て光電効果を觀測した。</li> <li>△カーラーが生れた。スイスの化學者。</li> </ul>		

	<ul style="list-style-type: none"> <li>△高山齒科醫院が起つた。</li> <li>△水産講習所を設けた。</li> <li>△三浦守治、猪子吉人が河豚毒の研究を始めた。</li> <li>△齋藤外市が山形において飛行機を發明した。合理的飛行機の世界最初の考案者である。</li> <li>△岡村金太郎が水草の比較解剖をなした。(大學卒業)</li> <li>△王子製紙會社が始めて木材パルプをつくつた。</li> <li>△志田林三郎が液體の電氣抵抗は温度と俱に變動あることを發表した。</li> <li>△「裁判醫學雜誌」が生れた。</li> </ul>					
	<ul style="list-style-type: none"> <li>△吳秀三がエスセルレンの「醫學統計論」を著した。</li> <li>△飯島魁が「動物學教科書」を刊行した。</li> <li>△瑞西のクリストがフシリの採集した日本産半齒類四十一種を記述し、新しく五種をあげた。</li> <li>△帝國博物館、帝國京都博物館、帝國奈良博物館などを設けた。</li> <li>△北尾次郎が地球上大氣の運動及び颶風の理論を發表し、先に述べたものを一層詳細に研究證明した。</li> <li>△櫻井鏡二が芳香化合物の分子比容論を發表した。</li> <li>△横山又次郎が海外より歸朝東京帝國大學で化石學を講じたが、この年加賀、飛騨、越前の「ジュネラ」期植物を論じた。これは明治十年ラインが加賀手取川近傍で發見したもので、その後各地において發見された。</li> <li>△菊池安が小笠原島火山岩中に存在する輝石に就いて公にした。</li> <li>△關谷清景、菊池安が前年磐梯山破裂の際出張し調査報告をなした。この年關谷はまた熊本を調査した。</li> <li>△長岡半太郎がさきにニツケル線の壓と振レを興へたるときデアマグネチックとなることを發見したが更に進んで鐵、ニツケルに働く種々の磁力と壓振レを増減調和したときの行狀を研究した。そして鐵はこれらの諸力を如何に調和するも逆磁性とならぬことを認定した。磁力學上極めて重要な大發見である。</li> <li>△掛和爲昌、ダイヴアースが、オキシアミッドサルフォン酸の新鹽類新種を創製してこれを研究し、從來の化學者の説を破り定量的に亞硫酸鹽と次亞硝酸鹽とを分解することを發見し、次亞硝酸は水酸化窒</li> </ul>					
				<ul style="list-style-type: none"> <li>△タルテイウスがタルテイウスの反應を發見した。</li> <li>△B・E・J・コルベがコルベ電氣計を發明した。</li> <li>△ジュニルが發した。電流に關するジュニルの法則を立て、またジュニル・タムソンの實驗で著名。</li> <li>△デ・タードルが、電磁感應作用は裝置の廻轉によつて不變なることを發見した。</li> <li>△ヘヴィサイドが帶電粒子の電磁的質量を説いた。</li> <li>△プランテが發した。</li> <li>△ブルツクスがブルツクス彗星を發見した。</li> <li>△ラングリーが赤外線測定し月の表面温度を推定した。</li> <li>△ルミエスが發した。</li> <li>△ルンマーがルンマー・ブローチュン光度計を發明した。</li> <li>△ファウラーが生れた。イギリスの理論物理學者。量子統計力學の研究で知られてゐる。</li> </ul>		



皇紀年號	日	本	西紀	外	國
		<p>素(ハイトロキシミドゼン)なることを確證した。          △北里柴三郎が至難とされてゐたランユブラド菌及び破傷風菌(デタヌス菌)の純粹培養に成功し細菌學に一新生面を拓き「培養し得る細菌にして純粹培養の不可能なるものなし」といふ細菌學上の一大原則は彼によつて宣言せられた。          △福田理軒が歿した。和算家。          △東京農林學校より分離して水産傳習所が生れた。後ち三十年官立水産講習所となつた。          △宮部金吾がアメリカより歸り初めて植物病理學の教授と研究が組織的に行はれた。          △伊澤修二がハツタスレー原書を譯し「進化原論」として出した。          △石川千代松がワイスマンの講演を譯し「萬物進化新説」を出した。          △今田東助が病歿し、局所解剖學は歐洲出張より歸つた田口和義が之に代つた。          △東京帝國大學醫科に國家醫學講習所を置いた。          △小林義直が「齒科提要」を著した。          △飯高芳康が「耳科提要」を著した。          △賀古鶴所がドイツより歸り陸軍々醫學校教官となり耳科學を講じた。          △河本重次郎がドイツより歸り教授となり眼科は再び獨立した。地方では金澤の高安右人、京都の淺山郁次郎、千葉の荻生録造等が前後して眼科教授となつた。後ち淺山は京都帝大醫科の新設されるや府立醫學校より轉じて同大學最初の眼科教授となつた。</p>			

皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
二五五〇 明治三三		<p>△東京教育博物館が文部省の所管を離れ高等師範學校の所屬となつた。この間館長たりし人は手島精一、其作秋坪、山岡次郎、青木保、色川園士等であつた。          △齋藤宜義(和算家)が歿した。          △田中館愛橋がグラスゴー大學に留學、ケルヴィンに就て學び、後ちベルリン大學に轉じ二十四年歸朝した。          △大日本氣象學會が「氣象觀測常用表」第一版を出した。          △東京、京都間の鐵道が成つた。          △和田雄治が國際氣象會議に出席し國際暴風雨標制定を提唱し全會一致で採擇した。          △青山胤通が同志と共に大學改革運動を起し、大學組織私案を携へて、大藏大臣松方正義に意見を陳べた。          □帝國憲法が發布された。</p>				
		<p>△町田咲吉が酒母中の麦芽糖の存在を確立した。          △加瀬忠次郎が沃度加里をつつた。          △第三回内國勸業博覽會に國産電車が出品された。          △東京農林學校が帝國大學農科と改めた。          △高等學校醫學部に藥學部を附設した。          △東京職工學校を工業學校と改めた。          △始めて電話交換局が設置され志田林三郎の電話機が採用された。          △北里柴三郎が破傷風免疫證(抗毒素)を發見し、引續き嘔疽菌、水腫菌その他の病原菌の純粹培養に成功し、コレラ、腸チフス、丹毒、脾脫疽、豚丹毒に</p>				
			一八九〇			
				<p>△ブランリーが金屬粉末の塊が電波のこれに當るときは接濟することを發見した。(コヒラーの發明)          △コツホが結核の一新藥ツベルクリンを發報した。          △デスベイスが人造絹絲の製造を改良し、綿を酸化銅アンモニアに溶解しこの溶液から人造絹絲を取る方法を發明した。          △グイーターが光の定常波を寫眞的方法で示した。(グイーターの實驗)</p>		



皇紀	年號	日	本	西	外	國	
			<p>ついで抗毒免疫の實驗を行ひ、細菌學に幾多の新見を加へ、之れによつて毒素の研究から、つひに免疫學が生れ血清療法の基礎が確立された。彼は更に同じくコツホの弟子であるベエリンクと共に破傷風その他の抗毒素及び免疫の研究をデフテリアに應用し、つひにデフテリア及び破傷風の血清療法を完成し、デフテリア血清療法が北里、ベエリンクの名によつて發表されたのである。</p> <p>△池野成一郎が大學を卒へて氣孔の研究をなした。</p> <p>△藤井健二郎がイテフの乳狀體の研究をなした。(二十五年大卒)</p> <p>△大竹多喜が「内外各國古代織物の意匠及び繻子織の研究」を發表した。</p> <p>△藤海舟が大藏省の求めに應じて「吹塵録」二卷を編した。續纂に關する記録である。</p> <p>△陶山清猷の「有用藻譜」が成つた。藻類百種を記述したものである。</p> <p>△黒川良安が歿した。</p> <p>△桂田富士郎がこの年以來、肺デストマ、肝臓形デストマ等の寄生蟲及びこれに起因する疾患の病理解剖的變化の研究をなし、日本における寄生蟲病學の進歩につくした。殊に肝臓デストマ病における腹水の原因をもつて寄生蟲肝硬變或はデストマ蟲の充實により膽管の門脈枝を壓迫するとの創見をなしたことは寄生蟲病學上大きな功績である。</p> <p>△久原躬弦がアセトン及びアルデヒドヒットラムモニアの凝縮生成物に就いて研究し、この混合物から鹽基</p>				
					<p>△ヴェーバーが歿した。電磁氣理論の開拓者、電流計、電流動力計などを考案した。</p> <p>△エリスが歿した。</p> <p>△オズボーンが植物性蛋白質化學の研究論文を發表した。</p> <p>△ハーター及びドリツフイールドが感光物質の測定を定めた。</p> <p>△マイケルソンが恆星干渉計を發明した。</p> <p>△カイザー及びルンゲがアルカリ金屬に於ける系列の一般式を立てた。</p> <p>△ヘール及びデランドルが單光太陽寫眞儀を考案した。</p> <p>△テイイレがニトロ及びアミノグアニジンに關する研究を發表した。</p> <p>△シユスターが比電氣量の値を見出した。</p> <p>△フエドロフが結晶學の基礎となる結晶群に關する論文を發表した。</p> <p>△マテイアスがカイユテと共に行つた實驗に基きカイユテ・マテイアスの法則を誘導した。(一八八七年—一八九〇年)</p> <p>△ハンチ及びウエルナーが無機錯鹽に就て立體化學を發展せしめた。</p> <p>△リドベリーがリドベリー常數を見出した。</p>		

			<p>を得て <math>C_6H_5N_3</math> なる化學式を有することを明にしその遊離鹽基から各種の分解物を得た。</p> <p>△池田菊苗がシツタ氏の測定數に基き細毛引力と化學成分の關係について發表した。</p> <p>△平山信が太陽の自轉係數の算定をなし黃道と太陽の赤道との傾斜の度ならびに兩道の正交點の黃經度を決定した。</p> <p>△甲賀宜政、山縣修が一圓銀貨の純粋度に就いて發表した。</p> <p>△菊池安が上野、下野の境渡良瀬川地方、丹波龜岡地方の櫻石が接觸礦物としての重晶石の一新種なることを證明し方言に因んでセラサイトなる新稱を與へた。</p> <p>△長岡半太郎が「マグネ付けられたる鐵網及ニツケル線を振れることに依て起る磁場電流に就て」發表し、さきに研究した結果をたしかめ、更に磁氣の變化に伴ふ磁場電流の觀測をなし、ニツケルの果して逆磁性のものであることを確定した。</p> <p>△和田雄治、荒井郁之助、小林一知、中村精男等が中央氣象臺技師となつた。</p> <p>△隈川宗雄がドイツより歸り醫化學を教へた。後ち京都醫科大學では荒木寅三郎が同學を教へた。</p> <p>△川北朝鄰が「和算家略傳」を書いた。</p> <p>△村上英俊が八十歳で歿した。</p> <p>△小野敬齋が歿した。</p> <p>△牧野富太郎が下野伊豫田の水田でジナモを發見した。</p> <p>△ドイツ人マイルが本州、北海道、琉球を旅行し觀察した「日本權料植物考」をミューンヘンで刊行した。</p>				
					<p>した。</p> <p>△E・タムソンが高周波發電機を始め考案した。</p> <p>△ブラツクが生れた。イギリスの原子物理學者。W・H・ブラツクの子。</p>		



皇紀	年號	日	本	西	外	國
			<p>△宮部金吾が「千鳥列島植物誌」を著した。          △イギリス人シーボームが日本の鳥類相を研究し、その報告全部を参照し「日本帝國の鳥類」をロンドンで刊行した。          △この年確米七哩の鐵道工事が始まり同二十六年三月竣工した。アプト式を用いた。          △利根川、江戸川を連絡する運河の工事が成った。          △桂田富士郎がドイツより歸り岡山醫學專門學校の病理科教授となつた。          △吉田昌七郎、木村稔が「蠅蠟驅除法」を出した。          △村田謙太郎がドイツより歸り、醫科大學講師に任じ、附屬第一醫院に皮膚病、梅毒病外來診療所を開始した。翌年醫科大學教授となり皮膚學、梅毒學を擔任した。          △渡邊良齋が「齒科學」を著した。          △上野清の上野塾が東京數學院（後ち東京中學校）と改めた。          △横山又次郎が歸朝し、原田豊吉に代り大學に教へた。          △田中正平が五十三平均律を決定的に明かにした。またエンハルモニウムをドイツに於て發表した。純正調樂律に最も近い清音を出す鍵盤裝置として劃期的な發明である。          △高峰謙吉が元勳改良法で特許を受けた。          △志田林三郎が四重電信裝置を行つた。          △古在由直が足尾銅山の鑛毒を分析した。          □第一回帝國議會を召集した。教育勅語が下された。</p>			

<p>△中澤岩太が、佐渡支廳附屬王子硫酸製造所で、硫酸を硫酸製造に應用する化學工業を創始した。          △石藤豊太が造兵廠火藥科主任となり、わが國火藥界に貢獻するところが多かつた。          △原龍太が水道改良の必要を主唱し東京市水道工事の一部分を擔任した。          △松尾鶴太郎が英國において吉野、龍田兩艦の建造に従事した。          △北里柴三郎がツベルタリンの實驗を一先づ終りこの夏歸朝した。          △田中館愛橘が濃尾大地震の前後における等磁線の變化等に就いて貴重な發見をなした。その後日下部四郎太は岩石の特殊な彈性に關する性質の研究から長岡の研究を一段と發展せしめた。（明治三十五年—三十九年）          △醫藥分業の論文が盛んとなつた。          △原田豊吉がナウマンの説を批判し「日本地體構造論」を發表した。          △屋井先藏が純粹な乾電池の最初の發明をなした。          △牧野富太郎が「日本植物志圖鑑」十二集を著した。          △二宮忠八が鳥型飛行機を工夫發明した。          △三好學が食蟲植物カウシンサウを發表した。（二二年、足尾銅山附近にて發見）          △私立育英堂に農學科を置いた。          △電氣試驗所を設けた。          △札幌博物館が生れた。          △白井光太郎の「日本博物學年表」が成つた。          △遠山景直が「北海道重要海産志」を著した。          △箕作佳吉が龜類の胚膜に就て論文を發表し脊椎動物の羊膜及尿管の起原につき關係あることを述べた。</p>	<p>△アチエソンがカーボランダムをつくつた。（炭化硅素）          △シムメルプニツシュが無腐法を紹介した。          △ヘンキングが染色體の減數分割の現象を發見した。          △マクアースとヒフォレストが金銀を溶かして亜鉛により還元する方法を發見した。          △シベリヤ鐵道を起工した。          △キヌストナーが、緯度變化を發見した。          △タロネツカーが發した。整數論に於ける業績がある。          △コヴァレフスカヤが發した。          △ジェフリーズが生れた。イギリスの數理物理學者。          △ベンチが自動車に石油機關を應用した。内燃機自動車の始まりである。          △ネーグラーが發した。生活原形質の構成單位と考へられた分子の集團にミセルの名を與へた。          △ユーイングが分子磁石を導入した。          △H・ライヘンバッハが生れた。ドイツの科學批判者。          △リヒターが發した。          △L・ローレンツが發した。          △カルナップが生れた。オーストリーの數學者、哲學者。</p>
---	---



皇紀年號	日	本	西紀	外	國
		<p>た。</p> <p>△岸上鎌吉が本邦産蜘蛛類につき研究し有節脚類の發達の諸問題を論じた。</p> <p>△丘淺次郎が淡水産群衆類の新種についてその構造發生、出芽を研究しこれまで學術問題となつてゐた <i>Sarcobolus</i> の發生は全く出芽の一種であることを確定した。</p> <p>△五島清太郎が本邦の樹に寄生するふたこむしは新種なることを發見し、日本のふたこむし (<i>Diplozoum japonicum</i>) の學名をつけた。</p> <p>△田中延次郎が桑樹もんば病の原因である菌類の新種の性質を論じた。</p> <p>△三好學がさきごけ及び其他二三種の柱頭は外界よりの刺戟に感應することを發見した。</p> <p>△稻葉昌丸が副腎は脊椎動物體中其作用不明なる器官だがその發生を研究して其外層は腹膜より起り其内層は交換神經系より起ることを證明した。</p> <p>△横山又次郎が長門國厚狭郡の無燐炭層を挿める砂岩中の植物化石を査定し、該層の多分三疊紀に成りしを論じた。</p> <p>△關谷清景、大森房吉がミルンの地震研究に更に結論を與へた。</p> <p>△長岡半太郎が屈曲せる面の穴より起るデフラクシヨン現象を研究した。これまでは平面上の穴より生ずるものを屈曲面の場合を研究したもので彼の創始である。彼は又、白銅線の永久振レにマグネツケの結果を實驗した。</p>			<p>△チャデイツクが生れた。イギリスの原子物理學者。</p> <p>△ストロージャーが自動式電話交換方式を發明した。</p> <p>△リップマンが天然色寫眞法を完成した。</p> <p>△ジャバで直立猿人の骨が發見された</p> <p>□露佛同盟が成つた。</p>

	<p>△木村謙吉、ノットが鐵に於けるストレスの熱感歴に關して新説を發表した。</p> <p>△横山又次郎が、阿波及び土佐兩國の三角介及び讚岐小海村の菊石を研究し、いづれも白堊系に屬するもので三角介は日本固有の新種なることを證明した。</p> <p>△遠山輝吉が東京顯微鏡院を起し細菌學的検査を行ひ、またこの指導をもなした。</p> <p>△田中敬助が地方病恙蟲病の研究を進めた。</p> <p>△明治二十年ころから佐々木 岸上、箕作等が研究をなした養殖眞珠を、山本山方がこれを繼承して實績を擧げた。のち御木木幸吉が山本を雇つて技師とし養殖眞珠に成功した。御木木は更に西川藤吉の眞珠形成法の理論を應用して大成するに至つた。</p> <p>△賀川蘭草(仲見)が六十二歳で歿した。整頓社の創製がある。</p> <p>△片山國嘉が裁判醫學を法醫學と改め、法醫學教室を創設した。また檢死法を攻究した。</p> <p>△彦坂永貞が七十一歳で歿した。(明治十二年七十七歳で歿したともいふ)</p> <p>△菊池安が和田維四郎の後を繼ぎ東京帝大の植物學教授となつた。</p> <p>△矢田部良吉が「日本植物圖解」第一卷一冊を出し以後三冊まで出版した。また「植物學初歩」をも出した。</p> <p>△岡田信利が「日本動物總目錄、有脊椎部」を著した。</p> <p>△波江元吉が對馬の鳥類を採集した。</p> <p>△池田作次郎が兩棲類の研究に着手し分類よりも産卵等の習性の觀察を主とした。また頭足軟體類の研究</p>
--	---



皇紀年號	日	本	西紀	外	國
二五五二 明治二五	<p>究をもなした。</p> <p>△系統解剖學講義を小金井良精、田中和義が分擔した。(二十六年九月初めて講座制度が設けられるに及び田中は第一講座、小金井は第二講座を擔當した。)</p> <p>△筒井秀二郎が千葉醫學校の病理學を擔任した。</p> <p>△クニツピンダが滿期解任したので、本邦氣象事業は全く獨立した。</p> <p>△コッホ結核治療液研究のため國費を以て三名の醫學者をドイツに派遣した。佐々木政吉、山極勝三郎、宇野朗(さき)にドイツに留學中の三人である。</p> <p>△小野孫三郎が「害蟲要説」を著した。</p> <p>△丘淺次郎が淡水産苔類の觀察を行つた。</p> <p>△度量衡が制定された。</p> <p>△日本赤十字社病院に耳科外來診療所を設け賀古鶴所がその任に當つた。</p> <p>△菊池大麓が震災豫防調査會の創設を提唱した。</p> <p>△第二回氣象協議會を開いた。</p> <p>△逓信所電氣試験所が東京に創設された。</p> <p>△ノットが解任歸國した。</p> <p>△柳橋悦が致した。和算の問題を西洋數學で解くことを主とした「新巧算法」の著がある。</p> <p>△生田益雄がアニリン染料自給自足の必要を説いた</p> <p>△「東京物理學校雜誌」を創刊した。</p> <p>△石川千代松が「進化新論」を著した。</p>				
			一八九二		
				△ブアイフェルがインフルエンザ菌を發見した。	

	<p>た。</p> <p>△御法川直三郎が獨自の製絲機の最初の發明をなした。</p> <p>△北里柴三郎が傳染病研究所を創設した。</p> <p>△三宅宗淳が乳兒脚氣を報告した。</p> <p>△北里柴三郎が大阪で赤痢アメーバを發見した。</p> <p>△緒方正規が福岡、熊本で赤痢桿菌を發見した。</p> <p>△菊池大麓等の首唱により震災豫防調査會が設けられ、菊池安、小藤文次郎、關谷清景等の指導の下に地震及び火山の系統的調査を開始し業績をあげた。</p> <p>△石川千代松が淡水産甲殻やぶとますにつきその兩性生殖の發達を研究し、遺傳の說に關係ある生殖細胞核中色質の動作を述べた。</p> <p>△箕作佳吉、石川千代松の共著にかゝる「龜類類胚基論」につき種々の新事實を附加し「爬蟲類發生報告第三」として有脊椎動物中一部分裂卵を有する動物の發生と相似たる度をして益々近からしめた。</p> <p>△岸上鎌吉が「かぶとかにノ發生」を公にした。本邦内海産のかぶとかにを其發生の初期より記し、節脚類中における種々の問題を研究し併せてかぶとかにの分類上の位置を論及した。彼はまた蜘蛛の側眼は全く複眼の單房散して起りたるものなりと認めその成績を得た。</p> <p>△明治二十四年波江元吉、土田重四造の對馬で採集した鳥類四十八種につき飯島魁が分類中あまのじやくまと稱するきつゝきの一種はこれまでわづかに一羽の雌より知られてゐなかつたが、この蒐集中から美しい雄一羽、雌二羽を發見した。これは帝國大學</p>				
				△ベツテンコオヘルが自家の主張を證明するために學者の面前で純粹培養したコレラ菌を呑んだ。 <td></td>	
				△ホーウイワツが甲狀腺を内服に用ひた。 <td></td>	
				△グワイスマンが生殖物質説を發表した。 <td></td>	
				△リリエントールが、滑翔機を工夫した。 <td></td>	
				△モアサンが炭素が高壓の下に結晶する時はその一部がダイヤモンドとなることを證明し、また電氣爐を改良した。 <td></td>	
				△アロンスが水銀燈をつくつた。 <td></td>	
				△モアサン及びウィルソンが炭化カルシウムを電氣爐中で製することを發明した。 <td></td>	
				△アダムスが致した。 <td></td>	
				△ヴァグナーが致した。日本の工業教育及び工業の爲に盡した人。 <td></td>	
				△エアリーが致した。干渉巴圖の發見をはじめ虹の理論、色消接眼鏡に関する業績が多い。 <td></td>	
				△フレッチャーが屈折率精圓體を提唱した。 <td></td>	
				△コツプが致した。分子熱に関するノイマン・コツプの法則が知られてゐる <td></td>	
				△コンプトンが生れた。アメリカの物理學者。 <td></td>	
				△ヴォルフがシカゴ(小惑星三三四番	



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
			動物學教室のほか世界中の博物館にも絶無である。 △八田三郎が入目鱈胚葉發生に就いて述べた。 △田中館愛橋、長岡半太郎が濃尾地震に随伴せる等磁線の變化を發表した。 △瀧澤賢四郎が「光學小引」を公にした。牛蒡輪を雲母の薄片で觀ると通常輪の外周で輪軸數個あるを發見しその理由を述べた。 △さきにE・S・モールズが大森附近で貝塚を調査し動物學の坪井正五郎、醫學の小金井良精等と共に人類學の源をなしたが坪井によつて日本人類學の成立を見るに至つた。 △金杉英五郎がドイツより歸り耳鼻咽喉科を唱へ、「耳科學」及び「鼻科學」を著した。専門科の特設された初めである。 △藤井健次郎が大學を卒へイテフの乳狀體の研究をなした。 △松村任三が「和漢對譯本草辭典」を出した。 △石川千代松が「進化新論」を出した。動物學雜誌に「長虫の話」を掲載した。また「動物解剖指針」のうちカラスガヒ、ヒル、ミミズの三冊を出した。 △藤田經信が裸鯨軟體類の研究をなした。 △陸軍軍醫學校兼府が發刊された。またこの頃軍醫學會が起り「軍醫學會雜誌」が刊行された。 △この頃田中敬助がわが國の地方病たる恙蟲病の研究に努めた。 △村田謙太郎が發した。 △賀古鶴所が「耳科新書」を著した。			の固有名)を發見した。 △ジーマンスが發した。ジーマンス會社の經營者として著名。 △シヨールンマーが發した。炭化水素の研究。 △レナードがレナード効果を立てた。 △エルミート及びブザンソンが始めて探測氣球を使用した。 △ドウ・ブローイーが生れた。フランスの理論物理學者。 △ドムニが、フィルム映像と平板音機の音を同期に結合してトキーの先驅をなした。(ディスク式) △オーウエンが發した。動物の比較解剖で貢獻するところが多い。 △ホーフマンが發した。アニリンの本體を究めフクシン色素類の構造を明かにし多數の誘導體を合成した。 △ホルムスが、ホルムス彗星を發見した。 △ユイニングが、磁氣分子説を提案した。 △ルンマーがクルバウムと共に微差微熱計及び光度計を用ひて高熱物體の溫度を測定した。 △ビスコース人絹が發明された。

二五五三明治二六

△小兒科の研究の集り處和會が生れ、同二十八年に機關雜誌「小兒科」を創刊した。第三號より「兒科雜誌」と改題した。  
△坪井正五郎が理科大學教授となり、東京帝大に人類學及び古物學の研究科目を創設した。  
△三宅連及びクリバが喉腎血腫を報告した。  
△下瀧雅允が世界に比類無い強力な火薬を發明した。シカゴの世界大博覽會に「大日本風土編」を出品した。  
△田口和義、小金井良精の主唱により日本解剖學會が生れた。  
△大日本醫學會が生れた。  
△岡本松次郎が先人未踏のハガネの焼方を工夫して時計ゼンマイに應用した。  
△農事試験場を設けた。  
△私立富山藥學校が起つた。  
△東京地質學會が生れた。  
△淺野應輔、長岡半太郎、水野俊之丞等が無線電信の研究を進めてゐたが、この年水野俊之丞が檢波器を發明してわが國無線電信の基礎を確立した。  
△小坂鐵山で亜鉛の電解製錬を始めた。  
△守屋物四郎が空氣冷却装置で木醋酸をつくつた。  
△佐藤壽衛が種麹の化學的成分の分析を行つた。  
△矢木久太郎が清酒酵母に関する新説を發表した。  
△佐藤孫六が「林檎圖解」をつくつた。種類百六十種の圖解である。  
△石川理紀之助が「苹果品定」を書いた。  
△伊藤篤太郎が「綿實翁九十賀壽博物會誌」を刊行した。

一八九三

△バルテレミーがデルモグラフィを報告した。  
△テイーゼルがテイーゼル機關を發明した。(一八九七年)  
△エディソンが活動寫眞を發明した。  
△ロウツがマラリヤ病菌を發見した。  
△ゲアン・デル・ヴァールスが毛細現象の熱學理論を立てた。  
△ブロンデルがオツシログラフを發明した。のちダツデルが之を改良した。  
△カイガーが一八八八年頃より元素のスペクトル中に在る多數の輝線を研究し、バルマー式に類するものを既に立てた。  
△クンマーが生れた。フェルマの定理の研究がある。  
△シユーマンがシユーマン線を發見した。  
△テインダルが發した。テインダルの現象等名がある。  
△デユワーがデユワー瓶を發明した。  
△ヘルムホルツが光の分散の電氣學的理論を報告した。



皇紀	年號	日	本	西	外	國
			<p>△島川文太郎が歸朝し大規模に無煙火藥の製造に當つた。</p> <p>△田中館愛橋、大森房吉、中村精男、太村榮、鶴田賢次、今村明恒、新城新藏、田丸卓郎等によつて大規模の磁氣測定が日本全國に施行された。</p> <p>△藤澤利喜太郎が「楕圓函數ノ掛ケ算ニ關スル研究」を公にした。</p> <p>△岸上謙吉が「トリがひの眼の構造と發生を論じ新知見を加へた。また「くもの腹腔」を著した。</p> <p>△小藤文次郎が阿武隈地方始原化の地質について新しい説をたてた。また明治二十四年の濃尾越の大地震の原因について發表した。</p> <p>△櫻井鏡二は沸騰溶液より發生する蒸氣の溫度に就いて發表した。これまで著名な物理學者、化學者が研究したが、未だこれを明確にすることができなかった。彼は一つの實驗法を案出し沸騰溶液より發生する蒸氣の溫度はその溶液の溫度と同一なることを證明した。またブラウベル鹽の水溶液は七十二度において沸騰し、その發生する水蒸氣は百度であるといふゲルコーハの觀察の不正確を明示した。彼はまた、ベツタマンの分子測定法は特殊の裝置を要し各實驗場で行ふことが不便なのでこれが改良を志し頗る簡単に同時に分子測定の結果を一層正確ならしめた。</p> <p>△箕作佳吉が遠州相良で採集した蠅蠅の胚子につき研究し蠅蠅類のガストルラに成る方法について發表した。(蠅蠅發生研究報告第四)</p>			<p>△シャルロアがボノニア(小惑星三六番の固有名)を發見した。</p> <p>△マイケルソンが、始めて光波の長さを基とした標準メートルの値を實測した。</p> <p>△G・ヘルマンが「雪花圖譜」を出版した。</p> <p>△ユーリーが生れた。アメリカの化學者。</p> <p>△H・ローレンツが、ローレンツ短縮を假定した。</p>

			<p>△石川千代松が「生殖素ノ研究、第二夜光蟲ノ分體及胞子生殖」を發表した。</p> <p>△池田菊苗が化學力學に關する簡單なる實驗をなした。燐を以て空氣中の酸素瓦斯を吸收せしむる普通の實驗において生ずる化學變化は善く活量の法則に従ふものでその變化の速度は酸素の活量に比例するものだと證明した。</p> <p>△坪和爲昌、ダイヴアースがイミドサルフォン酸の種々の新鹽類をつくり性質を詳細に論じ、その構造の不明であつたサルファイトマノムモンの構造を明かにした。</p> <p>△松田定久が「木蘭科植物内景論」を公にし本科に屬する植物中十屬二十餘種を解剖し内部の構造上これを四區とすることが出来るが諸屬に全く區別し得べきものと否とあることを示した。</p> <p>△弘田貞守が「鶏仔羊膜及外膜間の結合及胚膜」を公にし、その結合について其發育中の變遷と一般胚膜に及ぼす影響を説きこれまでの誤りを正し併せて龜類類の同結合と比較した。</p> <p>△飯島魁、栗本東明が「一新人體蠱蟲に就て」を公にした。嘗て長崎下高島に於て一患者の排出した蠱蟲に就き研究した形態上の事項を論述したものである。この蠱蟲は人體寄生蟲として新規のものである。</p> <p>△猪子吉人は瘻を獨創の見地から和漢藥の研究をなし健胃強壯劑の黃連、吐劑としての瓜蒂の成分、生理作用及び醫療的効用等を明にした。明治二十五年官命を帯びてドイツに留學し、新研究に着手したが腸チフスに罹りこの年九月ベルリンに於て客死した。</p> <p>△中村精男が雨の原因に就て説いた。</p>			
--	--	--	--	--	--	--



皇紀年號	日	本	西紀	外	國
		<ul style="list-style-type: none"> <li>△和田雄治が始めて海流調査を行つた。</li> <li>△平瀬作五郎が明治二十一年來、東京帝國大學植物學教授に在勤中この年ころよりイテフの受精に關する研究をなした。</li> <li>△帝國大學令に改正があり講座制となると同時に之までの生理學を二講座とし、生理學と醫化學と稱し一般生理學より分離獨立した。</li> <li>△大學の生理學總論は永井潜が擔任した。</li> <li>△脇水鐵五郎が東大農科大學に入り駒場に在つて土壤地質學の研究を進め後ち森林立地學に於て獨自の境地を開拓した。</li> <li>△日本齒科醫會が生れた。</li> <li>△金杉英五郎が耳鼻咽喉科會を起し専門雜誌を刊行した。</li> <li>△大西克知が岡山で同志と共に「眼科雜誌」を創刊した。</li> <li>△栗本東明が佐賀縣下で一患屍を解剖し肝臟、腹膜腹壁等に橢圓形黃褐色無蓋の卵子を發見し、一種の新寄生蟲卵なることを證明した。</li> <li>△ロエウ(米)が東京帝大農科大學に招聘されて來朝し農藝化學を講じた。</li> <li>△高松豐吉が内地藍から藍靛を製造することを考案し煮沸法の成績良好なることを公にした。</li> <li>△この時代長井長義が阿波藍から長井藍を製造する方法を發明した。</li> <li>△丹羽保次郎が生れた。</li> <li>△大川通久が「雪花圖説」を紹介した。</li> </ul>			

二五五四明治二七

<ul style="list-style-type: none"> <li>△北里鑿三郎が香港に出張して、ペスト菌を發見した。それよりやゝ遅れて佛人エルサンも同地で同菌を發見した。ペスト菌を學界で一名北里エルサン菌と稱するのはこれがためである。彼はまた日本においてデフテリア血清の製造および使用を開始した。</li> <li>△堀井元紀、新治郎父子が腸寫版を發明した。</li> <li>△第三師團が野戰における蒸氣消毒法を行つた。これは世界最初のことであつた。</li> <li>△三浦謙之助が東北地方に流行する「首下り病」を研究し、この奇病と牛馬の膿のあひだに一定の關係あることを認めた。</li> <li>△清川惣助が無線七寶を、並川靖之が金銀入七寶をつくつた。</li> <li>△中村精男が地球上の溫度分布を論じた。</li> <li>△京都醫學會が起つた。</li> <li>△高等學校を専門學校とし大學豫科をこれに併置した。</li> <li>△「電氣化學雜誌」が生れた。</li> <li>△八田達也が「新撰養蠶書」を著した。</li> <li>△五島清太郎が日本産外部寄生吸蟲類の研究を發表し二十八種の新種と屬別を明にし歐米學界の注意を喚起した。</li> <li>△丘淺次郎が日本産陸産の新種三種を發見し一新屬を成しオロブデラなる屬を設け右の三種を編入した。</li> <li>△飯島魁、池田作太郎が、「奇形ノ章魚ニ就キテ」を公にし明治二十八年四月三崎臨海實驗場近海で獲つた一新種の章魚について述べた。</li> <li>△平瀬作五郎が一公孫樹の受胎並に胚の發育に於ける</li> </ul>	一八九四	<ul style="list-style-type: none"> <li>△チエボイがジャバで異々木の遺骨を發見した。</li> <li>△ピツクが、エリトロメリーを報告した。</li> <li>△ウインデルバンドが「歴史と自然科學」を出した。</li> <li>△ゴールドシュミットがテルミット燒夷彈をつくつた。</li> <li>△ロツヂがコヒラーを用ひて電波を検出する方法を實驗した。</li> <li>△ラムゼー及びレーレーがアルゴンを發見した。</li> <li>△フアイエルがコレラ免疫の特異性、チフス菌の特異免疫反應を説き抗毒免疫を論じた。</li> <li>△アールバートロンビーの定めた雲級が國際氣象常置委員會で採用された。</li> <li>△ヘルムホルツが發した。</li> <li>△ハクスレイが發した。</li> <li>△クントが發した。音響學、光學に業績がある。</li> <li>△チエビシエフが發した。整數論、解析學、公算論の精緻な研究がある。</li> <li>△C.G.ノイマンがα體系を想定した。</li> <li>△ヘルツが發した。電磁波を確め、またヘルツの力學を建設した。</li> <li>△ヤブプロフコフが發した。エディソンとは別に電流を各別に電球に通ずることを發明した。ヤブプロフコフ燈の發明</li> </ul>
---	------	--



皇紀年號	日	本	西紀	外	國
		<p>る研究」を發表した。公孫樹の受胎並に胚の發育についてはドイツの植物學者ストラスブルガー（一八七二年）が始めてその實檢説を公にしたが爾來（一八九二年）まで自ら前説を補正すること二回に及んだが推斷のみで要領を盡さなかつた。平瀬はつひに世界的發見をなして、歐米人の説を訂正し結論として、近時細胞學上議論紛々たる細胞核外のこと就て實檢せしところを附記した。</p> <p>△坪和爲昌、ダイヴァースがオキシミドサルフォン鹽類（一名サルファゾチン酸鹽類）の製造を完成した。</p> <p>△大森房吉が餘震に就いて研究を發表した。</p> <p>△櫻井鏡二がグリコ、ルはアミド酢酸の構造を有するとの説を正し、グリコ、ル及他の凡てのいはゆるアミド酸類は一種の安田尼亞鹽類なることを證明した。</p> <p>△横山又次郎が「上野、紀伊、阿波及び土佐産中生代植物論」を發表した。記載の化石は二十七種あり内十三種は歐米本邦等で發見されたものと同種、十種は新に發見、四種は保有不完全、種名不詳、これを含有する岩層の地質時代はこれまで信じられてきた侏羅紀上部ではなく、全く白堊紀の初期下錐砂世たることを詳にし併せて本邦の太平洋面に向へる一帯には加賀、飛騨等に發達する中部侏羅紀の植物層なきことを斷定した。</p> <p>△西和田久學が遠江國相良附近の第三紀石灰岩中に産する化石に就て新しく發表した。</p>		<p>がある。</p> <p>△ハンチがチアゾ化合物の立體異性を明かにした。</p> <p>△レナードがレナード線を發見した。</p> <p>△フェルヴォルンが「一般生理學」を出した。</p>	

	<p>△伊勢國飯野郡射和村で數百年來作つて来た輕粉は純粹なる第一鹽化汞であるが、その形状は西洋の甘汞と異りその製法も異り製造に用ふる水銀と苦鹽より熱の爲に發生するところの鹽化水素瓦斯と空氣中の酸素の三物體の反應によつて發生するものであることをダイヴァースは學理的研究の結果發見し、日本製法は純粹のものを得られ西洋のそれは多少の猛汞を含む爲め幾多の手續を要する點を指摘し日本製法を推賞した。</p> <p>△栗本東明が恐水病注射免疫法を發見した。</p> <p>△淺田宗伯が歿した。</p> <p>△原田豊吉が三十五歳で歿した。</p> <p>△二宮忠八が今日の飛行機と原理を同じうするプロペラを附けた飛行機を發明したが世に容れられなかつた。</p> <p>△アメリカのサーゼントが日本全土を旅行し「日本植林植物編」を刊行した。</p> <p>△松村任三が「日光山植物目錄」を出した。</p> <p>△菊池安が三十三歳で歿した。</p> <p>△五島清太郎が「外部寄生吸蟲類の研究」を發表した。</p> <p>△岩橋謙次郎が舶來防濕の主旨からリボン製織を發明した。</p> <p>△佐多愛彦が大坂高等醫學校（後の大阪醫科大學）の病理學教授となつた。</p> <p>△三島迪良の主唱により學童の體育及び衛生に關する注意事項が衛生行政に關する法令として發布された。</p> <p>△丘淺次郎が蛭類の體腔並に循環系の狀態に就て新</p>				
--	--	--	--	--	--



皇紀年號	日	本	西記	外	國	
二五五五 明治二八	<p>解譯を興へた。</p> <p>△弘田貞守が小笠原島に渡航し同地産動物に就て調査をなした。</p> <p>△勅令により中央氣象臺が東京に置かれ、また地方測候所が各地に設置された。</p> <p>△遠山棟吉が機關雜誌「顯微鏡」を刊行した。</p> <p>△神保小虎がドイツより歸り、東京帝大理科大學助教授となつた。</p> <p>△ミルンが滿期歸國した。</p> <p>△青山胤通が北里柴三郎と共にベストの流行地香港に出張研究中これに感染したが生命を取止める。</p> <p>△石川千代松が「新撰普通動物學」を著した。</p> <p>□日清戰役が起つた。日米改正條約が成つた。</p> <p>△緒方正規が人化拉漿中にダレガリン網の原始蟲を發見した。</p> <p>△豊田佐吉が世界無比の自動織機の最初の發明をなした。</p> <p>△北里柴三郎がコレラの血清療法を行つた。</p> <p>△廣島に於て遼東歸來の軍兵に再(回)歸熱を發見した。</p> <p>△中村精男が氣温に對する海陸の影響を論じた。</p> <p>△宮原二郎がカーチスタタービンをわが大巡洋艦に採用した。列國海軍中同タービンを軍艦に採用したのはわが國が初めてである。彼の先見に依るものだ。</p> <p>△植田安兵衛の「麥志」が成つた。</p> <p>△石川理紀之助が「草木谷山居成續」を著した。</p> <p>△弘田貞守が歿した。(明治元年生)</p> <p>△市川義方が「水理價値」を書いた。</p> <p>△林洞海が歿した。</p>					
一八九五				<p>△リンデ、ハンブソン、トリブラー等が液態空氣をつくつた。のち更にクロード、アンドリュースによつて工業的製造機が考案された。</p> <p>△ラムゼイが、或礦石中にヘリウムの存在することを分光器によつて決定した。</p> <p>△レントゲンがX光線を發見した。レントゲン線ともいふ。</p> <p>△ベクレルが元素の放射能を認めた。</p> <p>△マルコーニがヘルツの電磁波を利用した通信装置を發明し翌年イギリスで特許を得た。</p> <p>△ランチェスターが空氣冷却式自動車を發明した。</p>		

<p>△丘漢次郎が「淡水産群棲類の所謂排泄器に就きて」を公にした。群棲類は淡水ともに皆體腔中に在る游離細胞で排泄作用を營み決して特別排泄器を有せずと斷定し類軟體動物の種屬發育を明にするの大發見をなした。</p> <p>△弘田貞守が「ナマヅ科魚類の一種の泌尿生殖突起に附着せる樹形の附屬品に就きて」を公にし、これまでの誤りを正し其生理的作用は之を明にし得るも其構造によつて判斷し一種の腺あることを確めた。</p> <p>△北尾次郎が「地球上大氣ノ運動及颶風ノ理論」第三編を發表した。</p> <p>△一八二七年にローゼが鹽化水素の次亜磷酸溶液によつて還元することを發見したが、後世の化學者は次亜磷酸水銀は容易に得られずと斷定した。羽田清人はこの研究の結果、次亜磷酸水銀と硝酸水銀との複鹽を發見し、併せて次亜磷酸ビスマスをも發見した。</p> <p>△近藤眞澄はこれまでの硫酸亞錳加里を鹽化安母尼亞と共に熱して鹽化亞錳加里に變ずる法の不完全を知り、フレセニヤス方法に従つて分析の鹽化母尼亞により硫酸鹽の分解することを公にした。また酸化要素製造におけるエワルト・ジョンストン方法を説いた。</p> <p>△井和爲昌、大幸勇吉が非化水素酸の酸性測定をなした。</p> <p>△榎本又真が「諸病爾箇保兒の諸有機體における毒性反應」について公にした。</p> <p>△野澤三郎が「積圓函數ノ九掛ケ算式」を公にした。</p>	<p>△テュワーオルゼフスキーが水素空氣の液化に成功した。</p> <p>△ワルブが自家中毒の臨床的研究をなした。</p> <p>△メスルザイスがブリズム双眼鏡を發明した。</p> <p>△ハンブソンが液體空氣の製法を改良した。</p> <p>△バストールが歿した。生化學、微生物學、醫學の研究が多い。</p> <p>△フランスがアイコナールを説いた。</p> <p>△エディソンがX線の實驗中透視鏡を發明した。</p> <p>△ケリーが歿した。不變式論の研究で名があつた。</p> <p>△コスタネツキがこの年より各種のフラボン色素を相次いで合成し、その化學構造を明かにした。</p> <p>△リドベリーが各元素系列に通ずる近似的關係式を立てた。</p> <p>△ノイマンが歿した。</p> <p>△ロジニミットが歿した。</p> <p>△フイツツジエラルドが運動物體の長さの短縮を提唱しマイケルソン・モーリーの實驗を説明した。</p> <p>△ヘールが「天文學雜誌」を發刊した。</p> <p>△ホツベ・ザイラーが歿した。血液色素並に蛋白質、原形質の組織酸酵機能に關する研究がある。</p>
---	---



皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
		<p>△坂井英太郎が「楕圓函數ノ十掛ケ算式」を公にした。</p> <p>△關谷清景、大森房吉が「一八九四年六月八日東京強震々動ノ圖」をつくつた。</p> <p>△野中至夫妻がこの年十月より十二月まで富士山頂で觀測をなした。</p> <p>△三好學がドイツよりかへり東京帝國大學で植物生理學を檢當し初めて斯學が開けた。この年「歐洲植物學概論の進歩」を出し、また伊香保温泉中の鐵バクテリア、日光湯元温泉の硫黄バクテリアの發生に關する觀察をなした。特に湯元温泉に於ける硫黄バクテリアの聚落を研究し硫黄芝と命名した。</p> <p>△山極勝三郎が東京醫科大學の病理學教授となり同學の講座漸く整頓した。</p> <p>△林洞海が八十三歳で歿した。</p> <p>△神保小虎が海外より歸り菊池安に代り礦物學講座を擔當した。</p> <p>△箕作佳吉が「通俗動物新論」を出した。</p> <p>△三浦謹之助が東京市養育院に收容中の五歳の男兒に就て那々蟻を發見した。</p> <p>△北里柴三郎主宰の「微菌學雜誌」が刊行された。</p> <p>△大阪高等醫學校で細菌學の講義を開始した。長谷川清治がその講師となつた。</p> <p>△松村松年が札幌農學校で昆蟲學を講じた。</p> <p>△石川千代松が本邦産葉脚類の研究を公にした。</p> <p>△中央氣象臺が文部省の管轄となつた。</p> <p>△吳秀三が「精神病學集要」を出した。(三〇〇年)</p>		<p>△J・L・マイヤーが歿した。メンデルエフに先立つて元素の週期性に着眼した。</p> <p>△H・ローレンツが、ローレンツの電子論を立てた。</p> <p>△セント・ジェルジが生れた。ハンガリーの醫學者。</p> <p>△ダンマーが「化學製造學教科書」を出した。</p> <p>□英露がベミール境界を定めた。</p>		

皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
二五五六		<p>△並川三男造が歸朝し東京で開業し、初めて皮膚微毒科の専門醫が出来た。</p> <p>△狩野亨吉が「東洋學藝雜誌」上に「志筑忠雄の星氣説」を掲げた。</p> <p>△上原六四郎が「俗樂旋律考」を著し俗樂音階の組成を明にした。</p> <p>△震災豫防調査會の事業として緯度變化に關する現象の觀察を木村榮が行つた。</p> <p>△古在由直が農藝化學研究のため、ドイツに留學した。</p> <p>△明治二十四年ドイツに留學した三好學は、この年歸朝し帝國大學教授となつた。</p> <p>□下關條約が成つた。遼東を還附した。</p>				
二二九		<p>△東京に血清醫院が出来た。</p> <p>△高田嘉助が製鹽釜を發明した。</p> <p>△橋引弓人がヴァイタスコープを輸入し東京錦輝館で行つた。活動寫眞興行の始めである。</p> <p>△大阪に工業學校を置いた。</p> <p>△私立熊本醫學校が起つた。</p> <p>△農業傳習所が設けられた。</p> <p>△名和昆蟲學實驗所が起つた。名和靖の創設したものである。</p> <p>△平瀬作五郎が公孫樹の花粉管中に精蟲を發見し生殖作用の一事において、顯花植物と隱花植物との間に生殖上の關聯あることがはじめて明示され、植物形體學上最も注目すべき業績を残した。</p> <p>△中村精男が氣温の日變化を論じた。</p> <p>△淺野應輔が無線電信を發明しその發達に功があつた。</p>				
			一八九六			
				<p>△ウイダルがチフスの血清診斷を公にした。</p> <p>△ゼーマンが分光器、ソデイウム焰、強力な電磁石を用ひて電子の回轉を検出した。ゼーマン効果を發見した。</p> <p>△リニエールがシネマドグラフを發明し、活動寫眞を改良し現在の如きものとした。</p> <p>△ウイエルソンがウイエルソン現象を發見した。</p> <p>△エルトヴエツシュニがエルトヴエツシュニの振押を考案し之により翌年實測により重力的質量と慣性的質量との比例することを確めた。</p> <p>△ウイーンがカナル線は陽電氣線なる</p>		







皇紀年號	日	本	西紀	外	國
		<p>アシニアが日本産虎耳草科三十三種、ケレットが日本産ワトギリ草屬十一種をそれん記述した。</p> <p>△荒木和一がアメリカより歸朝し、初めてX光線を興行に用ひた。</p> <p>△通信省電氣試験所長淺野應輔、同電信課松代松之助等が京橋區月島と金杉沖一哩の距離に於て國産無線電信の工學的試験をなして成功した。マルコーニの發明と時を同じうして然もマルコーニの公式は未だ實驗の域を出ぬ時代であつた。</p> <p>△全國に赤痢流行の際傳染病研究所の一所員志賀源は赤痢患者の糞便中から特殊の桿菌を發見した。當時學界の承認するところとならなかつたが、後ちクルーゼやフキシネルも同一の桿菌を證明して志賀の發見が確認された。赤痢菌を一名シガ菌と稱する所以である。</p> <p>△吳秀三が、柳假に代り、精神病學の講座を擔任した。</p> <p>△森林太郎、小池正直が「衛生新論」を著した。わが國最初の完備した衛生學書である。</p> <p>△森島庫太が京都醫科大學で藥物學を講じた。</p> <p>△「洋學大家列傳」が出た。</p> <p>△松村松年の「日本昆蟲學」が出た。</p> <p>△石川千代松がネギの花粉の發生に於ける染色體の減數分裂に關する研究を發表した。</p> <p>△アメリカ人スタインガーは明治二十年代に多くの論著を發表し日本の鳥類を明にした。</p> <p>△岸上鎌吉が水母類の研究に着手した。</p>			<p>學解析の基礎を確立した人。</p> <p>△ウイルソンがウイルソン霧函を考案し氣體電離の撮影實驗をなした。後ち、この裝置がブラケット及び清水武雄によつて改良された。</p> <p>△ギヨームが不變銅を發見した。</p> <p>△サバテイエがシクロヘキサンを容易に得る事に成功した。</p> <p>△シルヴェスターが殺した。不變式論の開拓者。</p> <p>△ローレンツが、束縛電子に就いて説いた。</p> <p>△デ・クロアゾーが生れた。球面投影法等がある。</p> <p>△サーの計算によつて電磁的質量が速度の函數であることが知られた。アブラハムも同様の説を立てた。</p> <p>△バルマーがバルマー式を導出した。</p> <p>△K・D・ブラウンがブラウン管を考案した。</p> <p>△ベックレルがベックレル線を發見した。</p> <p>△V・マイヤーが殺した。蒸氣密度測定法の改良(ウイクトル・マイヤーの法)混合瓦斯の緩徐燃焼をはじめ幾多の業績がある。</p> <p>□希土戰爭が起つた。朝鮮が國號を韓</p>

皇紀年號	日	本	西紀	外	國
二五五八	三一	<p>△丘淺次郎が綿蟲類を最初に記述した。</p> <p>△傳染病預防法が施行された。</p> <p>△千葉醫學學校が細菌學の講義を開始し押田健郎が之を擔當した。</p> <p>△仙臺醫學學校が細菌學を開講した。</p> <p>△宇野朗が多年勤續の大學教授を辭したのでその後任として近藤次繁が外科教授となつた。</p> <p>△名和靖が「昆蟲世界」を創刊した。</p> <p>△柳假が殺した。</p> <p>△神田孝平が殺した。英學者神田乃武はその養嗣子である。</p> <p>△明治二十七年伊・獨に留學した大森房吉がこの年に歸朝し帝國大學理科大學教授となつた。</p> <p>△八幡製鐵所が操業を開始した。</p> <p>□金貨本位制に改めた。</p>			
		<p>△農科大學に實科を置いた。</p> <p>△測地學委員會を設けた。</p> <p>△有坂成章が連射野砲を完成した。</p> <p>△安中常次郎が無線電信を考案したが後ち三十七年に海軍省で之を採用した。</p> <p>△生田目經徳が「花さくら」一巻を著した。</p> <p>△ボアシアが日本産茸科六十一種を記述した。</p> <p>△萬國測地學協會總會の決議で緯度變化を共同觀測するために設けられた觀測所の一つとして、わが國では陸中水澤(東經百四十一度八分)に緯度觀測所が定められた。所長は木村榮である。</p> <p>△中濱萬次郎が殺した。</p> <p>△佐々木忠次郎が「日本農作物害蟲篇」及び「日本</p>	一八九八		<p>△フレウトが治療上にレントゲン線を應用した。</p> <p>△ウイットが水星と地球の間に小遊星エロスを發見した。</p> <p>△ラムゼー及びトラヴァースがこの年以後、ネオン・クリプトン及びクセノン元素を發見した。</p> <p>△エーミル・フイツシャーがビニリンを遊離した。</p> <p>△デニワールが液體水素の大量製法を發明した。</p> <p>△ロイカートが殺した。飯島魁が學ん</p>







皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
	<p>△井口在屋が木材剪断試験をなした。</p> <p>△河喜多能達がダイグアースと共に「鳥モチの成分研究」及び「雷酸鹽類の構造」を公にした。</p> <p>△中山秀三郎が自成本路に於ける流沙量に關する實驗を報告した。</p> <p>△ボアシアアが日本産十字科四十七種を記述し、八新種を檢定した。エー・ヘツケルが日本産禾木科二百五十二種を記述し、ウイリリアムが日本産ミミナダサ屬二新種を擧げた。</p> <p>△花部生熊學のクヌートが來朝した。</p> <p>△三好學の「植物學講義」が出た。昭和六年通計八版となる。</p> <p>△矢田部良吉が鎌倉に游泳中溺死した。</p> <p>△中川源三郎が「農業氣象學」を出した。</p> <p>△東京大阪間長距離電話が開通した。</p> <p>△京都帝國大學に生理學講座が出来、天谷千松が之を擔任した。</p> <p>△京都醫學校で宮入慶之助が生理學を擔任した。</p> <p>△岡田武松が中央氣象臺に入つた。</p> <p>△京都醫科大學の開設に際し荒木寅三郎が醫化學教室主任となつた。またこの年藥物學教室をも設け森島庫太が主任教授となつた。</p> <p>△坪井次郎が京都大學醫科衛生學を擔當し、後ちその役後は松下禎が任命された。</p> <p>△大日本私立衛生會傳染病研究所を官立とし北里榮三郎が新たに所長となる。</p> <p>△京都帝國大學醫科大學、臺灣總督府醫學校で細菌學が講述された。</p>	<p>△佐々木忠次郎が「日本農作物害蟲論」を出した。</p> <p>△ダイバースの歸國の後を受けて坪和爲昌が教授の任に當り無機化學の發達に盡した。</p> <p>△緯度變移の觀測は陸中水澤觀測所に於て開始された。</p> <p>△岡村龍彦が歸朝し皮膚瘡毒科病院を開いた。</p> <p>△ベルギーのブリユツセルに靈毒花柳病黨國會議が開かれわが國からも三名の參列者を派遣した。</p> <p>△富安晉が「齒學研究」を出した。</p> <p>△このころ血脇守之助が「齒科學報」を刊行した。</p> <p>△岡田和一郎がドイツより歸朝し大學に生れた耳鼻咽喉科學の講座を擔當した。</p> <p>△第一回關西產科婦人科會を大阪に開き、また「産科婦人科學雜誌」を刊行した。</p> <p>△京都醫科大學では開設當初より外科學講座を設け猪子止才之助、伊藤準三を教授とした。後ち福岡醫科大學に於ては大森治豊が教授となり、その他岡山醫專には高橋金一郎、大阪高等醫學校には井上平造名古屋にも熊谷幸之助、千葉には三輪徳寛、仙臺には山形伸徳、金澤には木村孝藏がその任に在つた。</p> <p>△第一回日本外科學會を開いた。田代義徳、近藤次業、佐藤恒久、林藤等がこの設立に力を盡し第一次會長は佐藤三吉であつた。</p> <p>△京都帝國大學が開設されると共に笠原光興が内科學の教授となつた。後ち中西龜太郎がドイツより歸朝しまた賀屋隆吉を加へて内科三講座の制が成立した。</p> <p>△下瀬雅允が下瀬火藥製造所長に補された。</p>	<p>△レベデフが光波の壓力の存在を觀測した。(レベデフの實驗)</p> <p>△ベツタが「機械製作史論」を出した。</p> <p>△ツイツテルが「地質學及び古生物學史」を出した。</p> <p>△ゲルラント及びトラウミュラーが、「物理實驗技術の歴史」を出した。</p> <p>△ピアソンの「科學概論」が出た。</p> <p>□フランスが清國の港灣を租借した。義和團の亂が起つた。</p>	<p>なほ不感應電話線、カーボランタムの發明もある。</p> <p>△ライトがステイア計を考案した。</p> <p>△ダウンSENDが氣體イオンの荷電量が水の電解に際して得られる水素イオンの荷電量に等しいことを實測した。</p> <p>J・J・タムソンと共に電子現象論の先驅をなしたものだ。</p> <p>△テイイレが共軌二重結合並に部分原子價の研究を發表した。</p> <p>△ペラーが電氣變位を二つの部分から成るとした。</p> <p>△ニルソンが殺した。スカンヂウムの發見者。</p> <p>△ハルトマンがハルトマンの測微光度計を考案した。</p> <p>△フランクランドが殺した。</p> <p>△フリッデルが殺した。</p> <p>△マルコーニがイギリス海峡を距て、無線通信に成功した。</p> <p>△ラーモアがラーモアの歳差運動を導出し電子理論の開拓に資した。</p> <p>△リリーが殺した。</p> <p>△ル・ベルが5價の窒素を含む光學活性體の合成を證明した。</p> <p>△ルンマーがプリンダスハイムと共にブラントクの輻射法則を確めた。</p>		

皇紀年號	日	本	西紀	外	國
	<p>皇紀二五五九—二五五九</p>	<p>△京都帝國大學が開設されると共に笠原光興が内科學の教授となつた。後ち中西龜太郎がドイツより歸朝しまた賀屋隆吉を加へて内科三講座の制が成立した。</p> <p>△下瀬雅允が下瀬火藥製造所長に補された。</p>			



皇紀	年號	日	本	西	外	國
二五六〇	三三三		<p>△大森房吉が大森式地動計（水平振子を應用した水 平動地震計）を考案した（明治三二年—四〇年）。の ちに中村左衛門太郎はこれに特殊な制振装置を施し 改善した。 △野口英世がその著「病理學的細菌學的檢究術式綱 要」を出版した。 □改正條約を實施した。商法を施行した。</p>			
			<p>△淺川龍彦が陽チフス診斷液を創製した。 △高峰謙吉が上中腎三と協力し純粹ホルモンの析出 に成功しアドリナリンを創製した。生理學上の大發 見である。 △三村鐘三郎が空氣冷却法で木酢酸を採り含有醋酸 を分析し醋酸曹達の製法を説いた。 △麻生慶次郎が細菌胞子の成分を研究した。 △東京工業試験所を設けた。 △水曜會が生れた。 △松尾鶴太郎が英國で三笠、初瀬兩艦の建造を監督 した。 △逓信省では谷津、浦賀間二十九哩の無線電信の通 信に成功した。マルコーニ式が海上十數哩の通信に やうやく成功した時代で、淺野應輔等の研究の成果 である。 △藤澤利喜太郎がペリに開かれた萬國數學會議に於 て關孝和一派の和算の事績に關して説述し注目を惹 いた。 △中央氣象臺で氣象練習會を開始した。</p>			
				一九〇〇		<p>△マンゴウスキーがチフス菌及び大腸 菌の鑑別的培養を案出した。 △ベンチツタスが結核の血清診斷に就 いて報告した。 △テイーゼルが重油機關を發明した。 △バヴロフが、條件反射現象を發見し た。 △ツエツペリン飛行船が現はれた。 △コッホが人牛結核異同論を發表した △アームストロングが發した。アーム ストロング砲を發明して著名。 △エディソンがエディソン蓄電池を發 明した。 △ドルンが、エマナチオンに就いて説 いた。 △クリストッフエルが發した。曲面論 等がある。 △テラー及びホワイトによつて高速 度鋼が發明された。</p>

皇紀	年號	日	本	西	外	國
			<p>△山田猪三郎が輕氣球を發明し日本式氣球と名づけ た。 △築地海軍大學校構内調査所、羽田穴守稻荷附近八 哩八分間に於て木村駿吉の考案になる日本海軍式無 線電信の通信を行ひ之に成功した。マルコーニの公 式によれば送受兩機の直立線の高さは同埋數に對し 八十五呎を要するが之は七十五呎で通信可能なるを 得た。 △東京帝大理科大學植物學教室編「大日本植物誌」第 一卷第一集—第四集（四十一年）が出た。 △白澤保義の「日本森林樹木圖譜」第一帙が出た。 △岡村金太郎が「日本藻類圖説」第一卷第一冊より 第六冊（三十五年）まで繼續出版した。また「海藻 學汎論」を著して海藻學一斑を専門的に論述した。 △矢田部長吉の「日本植物誌」第一冊が出た。 △アメリカ人ジョルダン及びスナイダーが本邦沿海 並に河川湖沼に採集し之を翌年の「日本動物學彙報」 に邦産魚類六百八十五種を記載した。 △テイーンが來朝し三崎に於いて鮫類の發生を研究 した。 △村上庄太が金澤醫學專門學校法醫學教室主任兼病 理學を擔當した。 △長崎醫學校が細菌學の講述を始めた。 △長岡半太郎がペリに於ける萬國物理學會に於いて 磁歪に關する報告書を提出し近世物理學界に一大記 録を止めた。 △皮膚病學會（後の日本皮膚病學會）が生れた。 △中川源三郎が、「天氣豫報論」を出した。 △海軍望遠鏡の觀測をはじめた。</p>			
						<p>△オーウエンス及び E・ラザフォード がトロンを發見した。 △パウリが生れた。オーストリーの理 論物理學者。 △ヒュースが發した。 △プランクが輻射エネルギーの不連続 性を假定した。量子論の發端である。 △モートルンがチェンバリンと共にチ エンバリン・モートルンの遺週説を提 唱した。 △ラーモアが電子理論に關する著作を 發表した。 △ワーゲが發した。グールドベリと共 に質量作用の法則を發見した。 △ジヨリオが生れた。フランスの原子 物理學者。 △ババンが裝荷通信ケーブルを發明し た。 △メルケルが、「古代に於ける工學技 術」を出した。 △ラザフォードがラヂウム・エマネー ションを發見した。 △メンデルの遺傳法則が再發見され た。 □ロシアが滿洲を占領した。</p>



皇紀年號	日	本	西記	外	國	
二五六一						
三四	<p>△東京齒科醫學院が設立された。</p> <p>△濱田文達の後任の後を承けて木下正中が大學の産科婦人科を擔任し三十八年に至つて教授に任ぜられた。その間中島襄吉、盤福雄一、相馬又二郎等が前後して教課の一部を擔任した。</p> <p>△水澤謙度觀測所で緯度觀測が開始された。</p> <p>△久原躬敏、近重眞澄が「デイフエニール・デイケイ・ト・ヒ・ラチン」から藍青を生成することを研究した。</p> <p>△野口英世が前年末に渡米、この年一月フレキシナーの助手となり蛇毒の研究に従事したが十一月アカデミー・オブ・サイエンスにおいて蛇毒に就いて公にした。</p> <p>□北清事變が起つた。</p>					
一九〇一				<p>△ド・フリリスが突然變異説を説いた。</p> <p>△フランタが量子説を発表した。</p> <p>△リチャードソンが熱電子放射に關する理論的説明を加へ式を與へた。</p> <p>△モールズが素燐の半透性膜をつくつた。</p> <p>△ターバー・ヘウイットが水銀燈を改良した。</p> <p>△エルミットが發した。フランス近代數學界の巨頭。</p> <p>△カウフマンが電子が光速度に近い速度で運動する際にその質量が急速に増大することを實驗的に示した。</p>		

皇紀年號	日	本	西記	外	國	
二五六一						
三四	<p>△高等學校醫學部を分ち千葉、仙臺、金澤、岡山、長崎各醫學專門學校とした。</p> <p>△東京、大阪兩工學校を高等工業學校とした。</p> <p>△育英農學科を東京高等農學校とした。</p> <p>△京都醫科大學に始めて病理學講座を置き藤浪龍が教授となつた。</p> <p>△安田篤が「ストラスブルガーの植物學教科書」に倣つて編述し「植物學汎論」を出した。</p> <p>△牧野富太郎の「日本羊齒植物圖譜」第一卷第一集—第七集(三十五年)及び「日本禾木莎草植物圖説」第一卷第一集—第十集(三十五年)が出た。</p> <p>△遠藤吉三郎が珊瑚藻類の研究をなし後ちサンゴモ亜科の分類をなした。この業績はエンゲラー・ブラントル編「植物自然分科大全」に採録された。</p> <p>△箕作佳吉が海岸に産する貝類の一種タマキビの趨光性に關する實驗をなしその示す陰性趨光性がその局所を定める要因であることを發表した。</p> <p>△渡瀬庄三郎がアメリカより歸朝し東京帝大教授となり細胞組織學を講じた。</p> <p>△ロシアのシニミツトが來朝し東京、三崎で魚類の採集をなした。</p> <p>△飯島魁が「日本産六射玻璃海綿類の研究」第一報を出したが翌三十五、六、七年に亘り第二、第三、第四報を出した。</p> <p>△石川千代松が「石川大動物學」の著述に着手し、この年第一卷を出し明治三十七年第二卷を出した。</p> <p>△岡田武松が「近世氣象學」を出した。</p> <p>△三角梅が熊本醫專の前身たる縣立熊本病院の病理部長となつた。</p>					
一九〇一				<p>△グリニヤールがグリニヤールの試案を發見した。</p> <p>△テイトが發した。氣體論の基礎に就いて論文を公にした。</p> <p>△ケーニヒが發した。音の速度、音の波形、ドップラー効果、踊り端等の研究で名がある。</p> <p>△アブラハムが電子の質量が全く電磁的であることを實驗的根據の上に主張した。</p> <p>△シュエリントクがベルソンと共に自由氣球に搭乘し高層氣象觀測を行ひ一萬八百メートルの高さに昇つた。</p> <p>△フアント・ホッフが化學力學の法則及び溶液の滲透壓發見に依りノーベル化學賞を受けた。</p> <p>△レンゲンがX光線の研究でノーベル物理學賞を受けた。</p> <p>△ハイゼンベルクが生れた。ドイツの理論物理學者。</p> <p>△フイツツジエラルドが發した。</p> <p>△フェルミが生れた。イタリアの原子物理學者。</p> <p>△オスボーンがガウス號で海洋探検に赴き一九〇三年までに南極洋、南大西洋及び印度洋の調査をなし海洋生物學に貢獻した。</p> <p>△マルコーニが長距離無線通信に成功した。</p>		



皇紀年號	日	本	西紀	外	國
二五六二					
三五	<ul style="list-style-type: none"> <li>△吳秀三が歸朝し精神病學專任教授となり同時に兼鴨病院長となつた。</li> <li>△「皮膚病及泌尿器科雜誌」が出た。</li> <li>△矢部長克が卒業後講師として東京帝大に留り専ら北海道白雲記のアムモナイトを専攻する傍ら各時代の化石に就いて研究し多くの發見をなし之を「大學記要」「地質學雜誌」に發表した。</li> <li>△福澤諭吉が歿した。</li> <li>△大島高任(總左衛門)が七十六歳で歿した。</li> <li>△斯波忠三郎が英、佛、獨の留學を終へて歸朝し東京帝大の教授となつた。</li> <li>△田九卓郎がドイツに留學した。(三四年—三八年)</li> <li>△長岡半太郎が東京及びボツタムに於る重力常數の比較をなした。</li> <li>△中川詮吉がドイツに留學した。</li> </ul>				
三五四	<ul style="list-style-type: none"> <li>△有坂鋁藏が新式絶縁鎖機を發明した。</li> <li>△木村榮が(7項)を發見し萬國共通の測定方式の間違を正した。緯度變化に關するこれまでの系統的誤差を減少し満足な答が得られるやうになつた。</li> <li>△岸敬二郎が發電機及び電動機の磁田鐵心を發明した。</li> <li>△森正道が脾症が脂肪缺乏症であることを發表してヴァイタミン缺乏症の先驅をなした。</li> <li>△寺島昇が縫織機を發明した。</li> <li>△松代松之助が無線電信を發明した。</li> </ul>				
一九〇二				<ul style="list-style-type: none"> <li>△メルデが歿した。</li> <li>△ラウールが歿した。</li> <li>△ローランドが歿した。</li> <li>△レフシングが「金屬の歴史」を出した。</li> <li>△コッホが人牛結核の異種説を發表した。</li> <li>△ケルヴィンが原子模型をつくつた。</li> <li>△ペーリングがチフテリア治療血清の創始でノーベル醫學生理學賞を受けた。</li> </ul>	
				<ul style="list-style-type: none"> <li>△E・ラザフォードが、ラヂウムの放射能を證明した。</li> <li>△マルコーニが、鑛石檢波器を發明した。</li> <li>△ヴィスリツエヌスが歿した。立體化學の研究で知られ、幾何異性の發見者。</li> <li>△ヴィルトが歿した。國際氣象委員會として功績多く、またその考案になる地球磁氣測定器械は現今も用ひられてゐる。</li> </ul>	

皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
二五六二						
三五	<ul style="list-style-type: none"> <li>△三浦謙之助が銅鐵類には受精卵と未受精卵の二種あることを發見した。</li> <li>△三好學が「實驗植物學」を著した。植物學における實驗の指針である。また「植物生態學」をも公にした。</li> <li>△高田研安が、日本における萎黃病の存在を報告した。</li> <li>△日本會密會社が電氣曹達法を創始した。</li> <li>△京都高等工藝學校、盛岡高等農林學校を置いた。</li> <li>△國藝試驗所を設けた。</li> <li>△日本消化學會、日本皮膚病學會、日本婦人科學會などが生れた。</li> <li>△東京天文臺では天體の寫眞研究と緯度變移の觀測をなしたが、その結果、平山信が新小遊星を發見しこれを「東京」及び「日本」と名づけた。</li> <li>△高層氣象觀測のため筑波山に觀測所が出来た。</li> <li>△吳秀三、三浦謙之助等が日本神經病學會を起した。後の日本精神病學會である。</li> <li>△山内繁雄がこの年以來、引續き褐藻類のヒバマタ類、紅藻類イ、トクサ類に關する研究をなし業績を擧げた。</li> <li>△牧野富太郎が伊勢三重郡桶村でホンゴウウサウを發見した。</li> <li>△宮部金吾が北海道で昆布科植物の研究をなした。</li> <li>△岡村金太郎が「日本藻類名彙」を出した。</li> <li>△川上龍彌が「北海道森林植物圖説」を出しまた森廣との共著「はな」を出した。</li> <li>△梅村甚太郎が「富士山植物目録」を出した。</li> <li>△日光に小石川植物園の植物分園が設けられた。</li> </ul>					
三五四						
一九〇二				<ul style="list-style-type: none"> <li>△ヴォルフがヴェネシア(小惑星第四九九番の固有名)を發見した。</li> <li>△アブラハムにより純粹の光又は電磁波が惰性を有することを説き、エネルギの惰性に關した。</li> <li>△ギッブスが統計力學に先驅的役割を果す大著を完成した。(ギッブスの統計力學)</li> <li>△ダルトベリが歿した。</li> <li>△ヘイサイドとケネリーが砂と同時ケネリー・ヘイサイド層を提出した。</li> <li>△E・ラザフォード及びソツテイが、元素變説を提唱した。</li> <li>△コルニユが歿した。主として光學の研究に業績を残した。</li> <li>△ゼーマンがA・ローレンツと共に、ゼーマン効果の研究でノーベル物理學賞を受けた。</li> <li>△デイラツクが生れた。イギリスの理論物理學者。デイラツクの電子論の提唱者。</li> <li>△デイスランド・ポールが大氣は對流圈と成層圈とに分れてゐることをアスマンと同時に獨立に發見した。</li> <li>△カウマンが電磁的質量以外に速度に無關係な一定の古典力學的質量の存在せぬことを證明した。</li> <li>△E・フイツシャトが、糖類及びプリン</li> </ul>		



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國	
			<p>△渡瀬庄三郎の「螢の話」が出た。發光現象に関する問題を述べたものである。</p> <p>△「日本水産動物學」が出た。</p> <p>△この年六月より竹内苗(竹内某の死因に關する)を總り緒方正規、北里柴三郎の間に激越な論争が行はれた。八月に至り論争が漸く跡を斷つたが更に同月下旬緒方の門下石原喜久太郎、北里門下の柴山五郎作の間に論争が再燃し、その結果コレラ菌に種々の變種の有することが判明した。</p> <p>△第一回日本聯合醫學會が開かれ、北里柴三郎が「結核病の豫防及び撲滅」の特別講演をした。</p> <p>△丘淺次郎が蛭類の血管系に關する研究をなした。</p> <p>△「氣象集誌」に「東京の雨」が載つた。</p> <p>△ザウテルがこの年以後臺灣昆蟲の蒐集をなした。</p> <p>△京都帝大醫科附屬耳鼻咽喉科を設け淺井健吉が之が主任となつた。後三十八年和辻春次が教授となり講座を擔當した。</p> <p>△第一回日本婦人科學會を開いた。</p> <p>△緒方正規が「中央婦人科雜誌」を出した。</p> <p>△佐多愛彦が大坂府立高等醫學學校々長となるや率先して醫育統一論を唱へ醫育機關を悉く大學の制に統一すべきを高調し後四十二年七月新學制の卒業生に大阪高等醫學學校學生なる稱號を認可せしめた。</p> <p>△高峯讓吉がニューヨークに於て高峰研究所を創設した。</p> <p>△長岡半太郎がわが國に於る重力測定の指導をなした。</p>		<p>族化合物の研究でノーベル化學賞を受けた。</p> <p>△フエイが發した。太陽黒點の成因を論じた。</p> <p>△フックスが發した。H<sub>2</sub>大模型微分方程式の理論に新生命を拓いた。</p> <p>△ヨルダンが生れた。ドイツの物理學者。</p> <p>△リンデが空氣中より液體酸素の抽出に成功した。</p> <p>△トロツフケが「初等數學史」を出した。</p> <p>△ヘーンが「栽培植物及び家畜のアジアよりの渡來」を出した。</p> <p>△ロスがマラリヤ蚊の發見及びマラリヤ發育環の發見でノーベル醫學生理學賞を受けた。</p>		

皇紀	年號	日	本	西紀	外	國	
二五六三	三六		<p>また迴折理論に關する論文を發表した。</p> <p>△中村精男が「大日本風土論」を編した。</p> <p>△エールリツヒが初めて化學的療法の研究に着手したが志賀彌はその助手として共にトリペンロートを發見した。化學的療法第一の成功である。</p> <p>△明治八年以來大學に教授たりしベルツが退いた。</p> <p>□日英同盟が成つた。</p> <p>△鈴木藤三郎が糖液蒸發罐を發明した。</p> <p>△京都帝國大學第二醫科大學を編置した。大澤岳太郎が一時兼職で解剖學を講じたが後小山龍徳に代つた。</p> <p>△葛西徳一郎が直動蒸氣ポンプを發明した。</p> <p>△中央度量衡檢定所を置いた。</p> <p>△京都、大阪、愛知、熊本、東京慈惠會各醫學學校が醫學專門學校となつた。</p> <p>△日本内科學會、日本衛生學會等が生れた。</p> <p>△俄國一が本多光太郎、高木弘と協力で「高温度に於ける特殊鋼の變態に就いて」を發表した。また淺原源七と共著で「鐵炭素合金中の黒鉛發生の状態」を發表した。</p> <p>△細木松之介が明治二十九年來、輸出陶磁器素地の改良につとめ、同時に松薪の代用として石炭を用ふることを研究し貢獻した。</p> <p>△松村鶴造が「連接桿の速度に就いて」を發表し、また「靜力學的不定の機械部分の設計」を書いた。</p> <p>△青柳榮司が「ネットウオータ内電流及電壓降下を圖式に由て現はす法」その他を發表しまた電球の真空裝置及びその應用を研究完成した。</p>		<p>一九〇三</p> <p>△J・j・タムソンが電子説を發表した</p> <p>△ライト兄弟が飛行機を發明した。</p> <p>△ソデイイが原子崩壊によつてヘリウム元素の生ずること(原子の變質)を發見した。</p> <p>△ボーニールが人造紅玉を發明した。</p> <p>△ブルースが睡眠病の媒介物を發見した。</p> <p>△パナマ運河を起工した。</p> <p>△ウイムズハーストが發した。</p> <p>△アレニウスが電氣解離の理論でノーベル化學賞を受けた。</p> <p>△ウエーネルトがX線の硬度を測る方法を見出した。</p> <p>△ハガ及びウイントが楔形のスリットを用ひてX線の迴折現象を見出した。</p> <p>△ギツプスが發した。</p> <p>△キユリーがマリイ夫人及びベックレルと共に放射能の研究でノーベル物理學賞を受けた。</p> <p>△グレーシャーが發した。</p>		



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國	
			<ul style="list-style-type: none"> <li>△淺野應輔が水銀檢波器を發明した。</li> <li>△峰守太郎がハブ毒血清療法を行つた。</li> <li>△北里研究所の所員遠藤滋が、これまで不可能とされてゐたチフス菌の培養基を創製した。「遠藤培養基」である。</li> <li>△三好學が博物叢書第四編「植物社會」を出した。</li> <li>△牧野富太郎が美濃惠那山附近でサタネキサウを發見した。</li> <li>△遠藤吉三郎が「日本有用梅毒動物」を公にした。</li> <li>△波江元吉が「日本産蛇類圖版」を「動物學雜誌」に發表した。尙ほ邦産カウモリ類の調査は二十二年ころより着手し後年内務省の依頼を受け風族の調査をなし業績を挙げた。</li> <li>△田子勝彌がサンショウウオ類の調査に着手した。</li> <li>△松村八次郎が石炭電の發明をなし製陶上に一進歩を促した。</li> <li>△會田龍雄が「新撰動物學」二巻を出した。</li> <li>△石川千代松が「動物の社會」「動物の共棲」を出した。</li> <li>△阿部彦七が電氣時計を發明した。後ちこれが二十餘種にのぼつた。</li> <li>△福岡醫科大學が増設され藥物學教室が開始された。</li> <li>△長岡平太郎が原子模型を考案した。</li> <li>△京都大學醫科では法醫學を置き、岡本榮松が之を擔任した。</li> <li>△東京慈惠會醫院醫學專門學校、京都府立醫學校に細菌學が開設された。</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>△クレモナが發した。直線面、二次曲面、三次空間曲線、一般曲面論に創見があつた。</li> <li>△アイヘンダルトが携帶電流を實驗に依つて證した。</li> <li>△ゲールケがルマーと協力して水銀スペクトルの精細な分析をなした。</li> <li>△ツイグモンディ及びジードントツプが限外顯微鏡を考案した。</li> <li>△レベデフが光壓の存在を實驗的に證した。</li> <li>△エルスター、ガイテル、クルツクス等が別々にシンチレーションを發見した。</li> <li>△ストークスが發した。ストークスの法則の發見がある。</li> <li>△J・J・タムソンが原子模型を考案した。</li> <li>△ピエルクネスが發した。</li> <li>△ベックレルがノーベル物理學賞を受けた。</li> <li>△リッツがリッツの公式を見出した。</li> <li>△イバチエフが高壓ポンペを製作し化學反應に於る加壓研究の先驅をなした。</li> <li>△ブルゼンが無線電話を工夫した。</li> <li>△ブレウツルが「アレクサンダー」征戰の植物學的研究を出した。</li> </ul>	

皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
			<ul style="list-style-type: none"> <li>△京都帝大醫科の皮膚病學講座が開設され松浦有志太郎がその任に當つた。</li> <li>△京都大學醫科で平井誠太郎が最初の小兒科教授となつた。その他大阪には劉小一郎、千葉には瀧川昌善が専任教授となつた。</li> <li>△長岡半太郎がJ・J・タムソンに先んじて線狀及び帶狀スペクトル並に放射能を説明する原子模型の理論を公にした。</li> <li>△中村清二がドイツに留學した。(明治三六年—三九年)</li> <li>△大森房吉が地震の脈動と旋風又は颱風の出現との間に密接な關係のあることを指摘した。</li> <li>△瀨信省では長崎臺灣間六三〇海里の無電通信に成功した。淺野應輔、佐伯美津留の功績である。</li> <li>△吉田彦六郎が漆の高溫硬化法を發明した。</li> <li>△古在由直が大學教授の傍ら農事試驗場技師を兼任その場長となつた。</li> <li>□ロシアが滿洲撤兵を宣言した。</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>△ニューマンによつてレムストロウムの電氣栽培が始めて實驗された。</li> <li>△フレミングが、三極真空管を發明した。</li> <li>△コルンが、コルン式電送寫眞を發明した。</li> <li>△ヴィラリが發した。物質の磁氣的性質を特に研究した人。</li> <li>△ウイリアムソンが發した。アルコールと硫酸からエーテルを生成する時先</li> </ul>
二五六四	明治二七		<ul style="list-style-type: none"> <li>△木村護吉が無線電信を完成した。</li> <li>△この時代に梅野信吉が痘苗製造上の發見をなし、ジェンナー以來の種痘法を一新した。彼は東京痘苗製造所の一所員で北里柴三郎指導の下にこれを發見したのである。</li> <li>△西室逸作が八千代黒紋防染糊を發明した。</li> <li>△石渡繁胤が蠶兒雌雄鑑別法を發見して養蠶上に一新紀元を劃した。(三七年—四三年)</li> <li>△橋本綱常、長谷部仲彦が苦心研究八年つひに無鉛白粉をつくつた。</li> </ul>			
一九〇四						



皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>△釀造試驗所を設けた。</li> <li>△京都醫學會が生れた。</li> <li>△富士川游が「日本醫學史」を著した。</li> <li>△藤波正が蓄電池の研究を遂げた。</li> <li>△松尾鶴太郎が横須賀海軍造船所長となり、戰艦薩摩、對馬を建造した。</li> <li>△上野俊之丞が六十七歳で歿した。</li> <li>△和田維四郎が多年日本産鑛物の蒐集につとめ「日本の鑛物」を著した。</li> <li>△わが國における地味の調査による地圖が公刊された。</li> <li>△桂田富士郎、藤浪鑑が日本住吸血蟲を發見した。これまで肝脾肥大症又は片山病として記された地方病の未知の病原を明にし、その豫防と治療の方針方法を示し、寄生病學に一進歩を加へた。當時この寄生蟲の中間宿主が判明しなかつたが後年宮入慶之助が河水中に生活する特殊蝸牛(宮入貝)なることを發見した。</li> <li>△丘淺次郎が「進化論講話」を出した。</li> <li>△五島清太郎が「實驗動物學」二巻を出した。</li> <li>△田口和美が歿した。</li> <li>△宮入慶之助が藤朝し福岡醫大で衛生學を擔當した。</li> <li>△中央氣象臺が「歐支報告」を創刊した。</li> <li>△小貫信太郎が「實用昆蟲學」を出した。</li> <li>△菊池大蔵がアメリカのセント・ルイスに於いて開かれる萬國博覽會學術大會で朗讀することになつてゐた「日本に於ける最近の地震學研究」と題する論文を公にした。</li> </ul>					
				<ul style="list-style-type: none"> <li>△フエチル硫酸が生成し、之にアルコールが作用することを明にした。</li> <li>△ウイルソンが感度の設けられた金箔電器をつくつた。</li> <li>△グインタラーが破した。ガス分析法の先驅者。ニツケル及びコバルトの工業的製法を案出し、ゲルマニウムを發見した人。インヂウムに就いて先驅的研究をした。</li> <li>△ハーゼンエールによりエネルギーが簡性を有することを初めて説かれた。</li> <li>△F・オストヴァルトがゼラチンの膨化に關する研究をなした。</li> <li>△カメルリン・オンネスが液體空氣を作つた。</li> <li>△フアント・ホッフが光化學變化は吸收された光の量に比例して起ることを定量的に證した。</li> <li>△J・J・タムソンが原子模型に就て提案した。</li> <li>△グエーネルトがグエーネルト陰極を考案した。</li> <li>△グオルフがツエルリナ(小惑星三五一番の固有名)を發見した。</li> <li>△ラムゼーが稀有瓦斯の發見並に之に關する貢獻でノーベル化學賞を受けた。</li> <li>△レーリーがアルゴンの發見並に之に關する貢獻でノーベル物理學賞を受けた。</li> <li>△ブレディー・ヘンが歿した。生涯を彗星尾の形態の研究に傾けた。</li> <li>△フレミングが「二極真空管」を發明した。</li> <li>△タンヌリが歿した。</li> <li>△シペリヤ鐵道が開通した。</li> <li>△バゴロフが消化腺生理學の研究でノーベル醫學生理學賞を受けた。</li> </ul>		

二五六五明治三十八

<ul style="list-style-type: none"> <li>△長岡半太郎が原子模型に就て新なる提案をイギリスの學術雜誌に發表した。</li> <li>△鈴木梅太郎がドイツより歸り東京帝大農學部教授となつた。</li> <li>△大森房吉が破壊性地震の發生と緯度の値の著しい變化の間に關係のあることを述べた。</li> <li>△西村熊二が國産ナフタリンからアリザニン・ブラワタSを製造することを研究した。</li> <li>△北里柴三郎が米國セントルイスの萬國學藝會議に參列した。</li> <li>○日露戰爭が起つた。</li> <li>△南嶺次郎が歩兵(騎)銃をつくつた。</li> <li>△久保田權四郎が、鐵管金型鑄造裝置の發明をなした。</li> <li>△柴山五郎作が陽チフス以外にパラチフスの存在を確證した。</li> <li>△齋藤賢道が細菌芽胞の多色性について研究し、また諸味中から酵母五種、バクテリア四種を發見した。</li> <li>△名古屋高等工業學校を設けた。</li> <li>△火兵學會が生れた。</li> <li>△杉山清次郎が「整流子を有する單相式電動機特に單相式反轉電動機」に就いて研究發表した。</li> <li>△柴田睦作が工學的問題の新しい解法を發表した。</li> <li>△橋田成年が大學卒業(三十一年)以來船體震動に關する研究をなしその成果を發表した。</li> <li>△藤井健二郎が歐洲より歸り理科大學教授となり植物形態學が初めて組織的に講ぜられるやうになつた。</li> </ul>
---

一九〇五

<ul style="list-style-type: none"> <li>△シヤウ・ディンが蠶毒の病原體を發見した。</li> <li>△アインシュタインが特殊相對性理論を説き、またブラウン運動の理論を發表し、更に光量子假説を立てた。</li> <li>△アツベが歿した。</li> <li>△パータラがX線の偏りに關する最初の實驗をなした。</li> <li>△ランジュエヴァンが軌道電子の反磁性を見出した。また大氣中に存するランジュエヴァン・イオンを見出した。</li> <li>△クレイヴエが歿した。ツリウムの發見、クロム・白金等のアムモニア錯鹽の研究、スカンヂウム、サマリウム化合物の研究で著名。</li> <li>△ゲーデが、迴轉空氣ポンプを發明し</li> </ul>
--



皇紀	年號	本	西	外	國
二五六六	明治三九	<p>△前垣乙丙が「農務物理氣象學」を出した。</p> <p>△宮原二郎がカーチスタービンを用いた。列國海軍中本式タービンを海軍に採用した。始まりであり、彼の先見の明である。</p> <p>△東自助が仙臺醫學專門學校の病理學を擔任した。</p> <p>△福岡醫科大學に於て細菌學が講義され始めた。</p> <p>△フレック・ド・フラインが東亞旅行の途、わが國を訪ね各地を旅行し觀察採集した結果、日本沿海の動物相を歐米の學界に紹介した。</p> <p>△京都帝大に文學部の創設されるや小川琢治が地理學教授として任じ、後ち大正十年地質學教室の創設されるやその主任教授となつた。</p> <p>△長岡半太郎は地震の観測から得られる彈性波の速度はチャンドラー週期から得られる價と一致することを認めた。</p> <p>△伊木榮三郎が福木中の主要色素フタゲチンを研究し、この色素から福木ブラウン、福木ブラウングを發見した。</p> <p>△青山胤通が戰時衛生機關の不備なるを慨し陸軍當局に獻策したが大學諸教授ととも陸軍臨時衛生部補助員となつて活躍した。</p> <p>△三好學が「日本植物景觀」を書きはじめた。全十卷、大正三年に完成した。</p> <p>□ボーツマス條約が成つた。韓國を保護國とした。</p> <p>△島田孫市が硝子器周縁修整機を發明した。これより硝子器が機械的に製造されるに至つた。</p>	<p>一九〇六</p>	<p>た。(一九〇七年)</p> <p>△ゲールケがライヘンハイムと共に陽極線を發見した。</p> <p>△シュタルクがカルナ線におけるドツブラー効果を見出した。</p> <p>△シュトルーフエが發した。恆星の位置の研究より歳差常數を決定した。その子(ヘルマン)も天文學者。(一八五四年—一九二〇年)</p> <p>△ジーンズがレーリー・ジーンズの輻射法則を見出した。</p> <p>△バイヤーが有機色素及びヒドロ芳香系化合物の研究でノーベル化學賞を受けた。</p> <p>△レナードが陰極線の研究でノーベル物理學賞を受けた。</p> <p>△ビルケランドとアイデが大氣中の窒素を採つて窒化カルシウムを製造するビルケランド・アイデ法を發明した。</p> <p>△アンダーソンが生れた。アメリカの原子物理學者。</p> <p>△ヨハンゼンが生物純系説を公にした。</p> <p>△コツホが細菌學の創始及諸細菌の發見でノーベル醫學生理學賞を受けた。</p> <p>△クワイスターが葉綠素の成分を發見した。</p>	<p>△宮崎林三郎が盲目をまかへりみず刻苦二十餘年を費して測器を發明した。</p> <p>△屋井先藏が繼電機を發明した。</p> <p>△松本善三郎が、松本式電信電話双信裝置を完成した。</p> <p>△寺野精一が天洋丸、地洋丸に液體燃料裝置を實施した。</p> <p>△新渡忠三郎が寺野精一と共に天洋、地洋丸の機關全部の設計をした。また第十八號水雷艇、驅逐艦春雨、連島の振動試験をなした。</p> <p>△第五高等學校を分ちて熊本高等學校とした。仙臺高等工業學校を置いた。</p> <p>△朝鮮總督府農事試驗所を置いた。</p> <p>△日本醸造協會が生れた。</p> <p>△東京學士會院を廢して帝國學士院を設け、萬國學士院聯盟に加入した。</p> <p>△深川文十が文十式螺旋推進器を發明した。</p> <p>△丘淺次郎が「進化と人生」を著した。</p> <p>△佐伯美津留が鐵粉檢波器を發明した。</p> <p>△外山龜太郎が、蠶兒の遺傳研究に關する權威ある學術的論文を發表した。</p> <p>△木村榮が水澤の緯度觀測所にあつて緯度の變化地軸の變化を研究の結果、緯度の變化は單に地軸の變化によるものではなく、同緯度の上では略同様の周期性の變化(木村デクリ「Z項」)もあることを發見(明治三五年)し萬國測地學委員に列席し之を發表し列國の委員會を承認せしめた。</p> <p>△三好學が「名木の伐採並に其保存の必要」を「東洋學藝雜誌」に發表した。</p>

皇紀	年號	本	西	外	國
二五六五—二五六六	明治三九	<p>△宮崎林三郎が盲目をまかへりみず刻苦二十餘年を費して測器を發明した。</p> <p>△屋井先藏が繼電機を發明した。</p> <p>△松本善三郎が、松本式電信電話双信裝置を完成した。</p> <p>△寺野精一が天洋丸、地洋丸に液體燃料裝置を實施した。</p> <p>△新渡忠三郎が寺野精一と共に天洋、地洋丸の機關全部の設計をした。また第十八號水雷艇、驅逐艦春雨、連島の振動試験をなした。</p> <p>△第五高等學校を分ちて熊本高等學校とした。仙臺高等工業學校を置いた。</p> <p>△朝鮮總督府農事試驗所を置いた。</p> <p>△日本醸造協會が生れた。</p> <p>△東京學士會院を廢して帝國學士院を設け、萬國學士院聯盟に加入した。</p> <p>△深川文十が文十式螺旋推進器を發明した。</p> <p>△丘淺次郎が「進化と人生」を著した。</p> <p>△佐伯美津留が鐵粉檢波器を發明した。</p> <p>△外山龜太郎が、蠶兒の遺傳研究に關する權威ある學術的論文を發表した。</p> <p>△木村榮が水澤の緯度觀測所にあつて緯度の變化地軸の變化を研究の結果、緯度の變化は單に地軸の變化によるものではなく、同緯度の上では略同様の周期性の變化(木村デクリ「Z項」)もあることを發見(明治三五年)し萬國測地學委員に列席し之を發表し列國の委員會を承認せしめた。</p> <p>△三好學が「名木の伐採並に其保存の必要」を「東洋學藝雜誌」に發表した。</p>	<p>一九〇六</p>	<p>た。(一九〇七年)</p> <p>△ゲールケがライヘンハイムと共に陽極線を發見した。</p> <p>△シュタルクがカルナ線におけるドツブラー効果を見出した。</p> <p>△シュトルーフエが發した。恆星の位置の研究より歳差常數を決定した。その子(ヘルマン)も天文學者。(一八五四年—一九二〇年)</p> <p>△ジーンズがレーリー・ジーンズの輻射法則を見出した。</p> <p>△バイヤーが有機色素及びヒドロ芳香系化合物の研究でノーベル化學賞を受けた。</p> <p>△レナードが陰極線の研究でノーベル物理學賞を受けた。</p> <p>△ビルケランドとアイデが大氣中の窒素を採つて窒化カルシウムを製造するビルケランド・アイデ法を發明した。</p> <p>△アンダーソンが生れた。アメリカの原子物理學者。</p> <p>△ヨハンゼンが生物純系説を公にした。</p> <p>△コツホが細菌學の創始及諸細菌の發見でノーベル醫學生理學賞を受けた。</p> <p>△クワイスターが葉綠素の成分を發見した。</p>	<p>△ワツセルマン反應が發見された。</p> <p>△ラングリーが破した。</p> <p>△ヴォルフがアキレス(小惑星五八八番)を發見した。</p> <p>△E.S.モールズが「火星とその秘密」を書いた。日本に來朝し教授した人。</p> <p>△ヘルンストが化學恆數を立てた。</p> <p>△シュタルクがドツブラー効果の存在に就いて詳説した。</p> <p>△カメルリン・オンネスが液體水素を作つた。</p> <p>△キユリーがペリで自動車に懸かれ慘死した。</p> <p>△デュワーが金屬法燻を考案した。</p> <p>△カウフマンが剛體電子に關する實驗を公にした。</p> <p>△ブラウワーがヴェクトルの平行移動の概念を導入した。</p> <p>△J.J.タムソンが氣體内電子運動の研究でノーベル物理學賞を受けた。</p> <p>△ラウスがルーマーの考案した録音裝置を映畫と結びつけてトキーを發明した。</p> <p>△ドルーデ(一九〇六年)及びフォード(一九〇八年)によつてドルーデ・フォードの分散式が電子論上より與へられた。尙ほこの年ドルーデが自殺した。</p> <p>△モアツサンが弗素化合物、クロム化</p>



皇紀	年號	日	本	西	外	國
			<p>△遠藤吉三郎が「實驗隱花植物學」を出した。          △池野成一郎が「植物系統學」を著した。          △早田文藏、松村任三共著の「臺灣植物誌」が出た。          △中井猛之進が朝鮮植物研究に着手した。          △宮部金吾、三宅勉が樺太に赴き植物の採集をなしその結果「樺太植物誌」を著した。(大正二年刊行)          △飯塚啓が「動物發生學」を出した。          △スナイダーがアメリカの學術探検船で再び來朝し多數の魚類を採集し之を前後數回に亘り發表した。          △二村領次郎がドイツより歸り解剖學第三講座を擔任した。          △林直助が愛知醫學專門學校の病理學を擔當した。          △富山縣氷見郡地方に尙舊病患者が多數に出たので田代義徳、林春雄、緒方正清等が出張し本病の研究をなしたがその原因を究めることが出来なかつた。          △小林一知が歿した。          △荒木蒼太郎がローベルト・ゾンメルの所説を持ち「精神病學評議」を公にした。          △福岡醫科大學の皮膚病癩毒學講座が開かれ、旭憲吉がその任に當つた。また同大學に耳鼻咽喉科の講座も設けられ久保猪之吉がその主任教授となつた。          △東京帝大醫科に始めて整形外科の講座が置かれ田代義徳がその任に當つた。同じく京師帝大醫科にも同科講座を開き松岡道治がこれを擔當した。          △相良知安が歿した。          △佐藤順一が推算氣壓に就て論じた。          △口下部四郎太が岩石の彈性に關する熱効果の實驗</p>			<p>化合物、炭化物、電氣爐の研究でノーベル化學賞を受けた。          △バイルシュタインが歿した。トルエンのニトロ化、硝素化等に關する研究論文がある。          △ハーデンがヤングと共に助酵素の存在を示した。          △コップがペトロクルス(小惑星六一七番の固有名)を發見した。          △フイツタイヒがデーヴィー賞を受けた。          △ホブキンスが不明の副養素を知り今日のヴィタミンの研究の緒に就いた。          △ボルツマンが自殺した。          △ゲールケとライヘンハイムが初めて陽極線を觀測した。          △ライマンが、スペクトル線のライマン系列を發見した。          △ツグエツトが植物色素の研究に初めて色素物質分離法(クロマトグラフ法)を用ひた。          △ゴルギとラモンが鍍金染色法による神經系の研究でノーベル醫學生理學賞を受けた。          □英佛協約が成つた。</p>

皇紀	年號	日	本	西	外	國
			<p>結果を發表した。          △長岡半太郎が減少する漸進波に論及し遠地地震における尾を引く現象を説明した。又圓形の面積上にかゝる表面荷重の問題をも論じた。          △わが國では國際電信條約に加入した。          △第二回日本聯合醫學會が開かれ北里柴三郎がその會頭となつた。          △醫師法、齒科醫師法を公布した。          △石川千代松が「動物講話」を著した。この年濠洲へ差遣された。          □關東都督府を置いた。鐵道を國有にした。</p>			<p>△ハーバーが空中窒素からアムモニヤ合成をなした。(一九一〇年)          △アレニウスが電度化學を説いた。          △ムーアがムーア管を發明した。          △デ・フォレストが、三極真空管を發明した。          △ケルキンが歿した。          △メンデレエフが歿した。          △パーキンが歿した。アニリン色素工業の創始者。          △アインシュタインがアインシュタインの比熱式を公にした。          △アウアーがルテシウムを發見した。またイテルビウムとして取扱はれてゐたものからアルデバラニウム及びカシオベイウムの二元素が分離された。のちユルバンによつても二元素が分たれた。</p>

二五六七明治四〇

一九〇七



皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
	<p>村政治郎である。</p> <p>△菊池大麓の主唱で關孝和の二百年祭が催された。</p> <p>△松本良順が歿した。</p> <p>△牧野富太郎が土佐でヤッコウサウを發見した。</p> <p>△川村清一がこのころから軟質靈菌の研究に着手した。</p> <p>△スタインガーが「日本並にその版圖内の爬虫類」を報告した。</p> <p>△飯塚啓が「海産動物學」を出した。</p> <p>△熊本醫學專門學校が細菌學を開講した。</p> <p>△菊池大麓がロンドン大學に招かれ日本の教育の特質に就て講演を試みた。</p> <p>△京都府立醫學學校、大阪府立高等醫學學校、愛知縣立醫學專門學校、仙臺醫學專門學校が、皮膚病細菌科の專門教授を置いた。</p> <p>△金澤の下平用彰、千葉の筒井八百珠、岡山の高橋金一郎が、いづれも同學校外科教授となり、皮膚病細菌科を兼擔した。</p> <p>△北尾次郎が歿した。物理學(特に力學)に名がある。</p> <p>△鳥潟右一、横山英太郎、北村政治郎等が無線電話の研究に着手した。</p> <p>△泰佐八郎が歐洲に出張、第十四回デルモグラヒイ會議に出席したが、後ちベルリンのローベルト・コッホ研究所に入り細菌學を研究した。</p> <p>△三好學、牧野富太郎共著の「日本高山植物圖譜」を出した。第二卷は翌四十二年に成る。</p>			<p>△タムソン(ケルヴィン卿)が歿した。</p> <p>△F・オストヴァルトがコロイド分類に關する論説を發表した。</p> <p>△E・オツボルツァが歿した。小惑星エロスの變光を發見した。</p> <p>△カーが歿した。磁氣光學的現象としてのカー効果を發見した。</p> <p>△ドイツでハイデルベルグ人の骨が發見された。</p> <p>△ベステルマイヤーが陽體電子を斥けローレヰツ電子に味方した。その後、ブツヘラー、ウオルフ、フブカ、C・ノイマン等も同様の説を立てた。</p> <p>△ジャンサンが歿した。天體物理學の先驅者の一人。</p> <p>△シヨロがこの年以來國際氣象委員會會長となる。</p> <p>△スグエド・ペリーが、膠質微粒子に就てブラウン運動の實驗的根據を確立した。</p> <p>△スモルコフスキーが蛋白光の現象を理論的に解明した。</p> <p>△フランスのリュミエール會社が始めて天然色乾板を製造した。</p> <p>△ブフナーが醗酵の化學的研究でノーベル化學賞を受けた。</p> <p>△マイケルソンが干渉計に依る諸研究</p>		

皇紀年號	日	本	西紀	外	國		
	<p>△關秀太郎が「東北凶作論」を出した。</p> <p>△關東都府府では管内の標準時として日本西部標準時を採用した。</p> <p>□日佛協約、日露協約が成つた。</p>			<p>でノーベル物理學賞を受けた。</p> <p>△パウアーがパウアー管を考案した。</p> <p>△フオーゲルが歿した。恒星及び惑星の分光的研究で業績を擧げた。</p> <p>△フロインドリツヒがフロインドリツヒの吸着式の研究をなした。</p> <p>△コッブがヘクトル(小惑星六二四番の固有名)を發見した。</p> <p>△ベツオルトが歿した。大氣熱力學の系統を立てその基礎を築いた。</p> <p>△ベルトウローが歿した。晩年は化學史の研究に没頭した。</p> <p>△ホブキンスが筋收縮と乳酸の生成及び酸素の役目を説いた。</p> <p>△マルコーニが圓板放電器を發明した</p> <p>△ラヴェランがマテリアヤ寄生體の發見でノーベル醫學生理學を受けた。</p> <p>△パウルゼンが高周波持續裝置を發明し無線電話の研究に一進歩を招來せしめた。またフレミングの二極真空管、ドウ・フォレの三極真空管發明にその功があつた。</p> <p>△モアツサンが歿した。人工的に金剛石を作ることに成功し一般的に著名。</p> <p>△ユルバンがイテルビウムとルテシウムとの分離に成功した。</p> <p>△ラウスが歿した。「ラウスの定理」がある。</p> <p>△ブルタハルトが「動物學集」を出した</p>			



皇紀年號	日	本	西紀	外	國
二五六八明治四一	<ul style="list-style-type: none"> <li>△松田武一郎が南滿撫順炭礦長となり開發に資するところあり、また「有用金石論」を著した。</li> <li>△鹿兒島高等農林學校を置いた。</li> <li>△滿鐵中央試驗所を置いた。</li> <li>△癌研究會、日本天文學會、札幌農林會などが生れた。</li> <li>△永井潜が「醫學と哲學」を著した。</li> <li>△平澤繁太郎がイヒチオール的人工構成に成功した。</li> <li>△本間義次郎が歿した。</li> <li>△日高榮三郎が網防腐劑を發明した。</li> <li>△池田菊苗が調味料「味の素」を發明した。</li> <li>△中島幾三郎がアルミ版印刷機を發明した。</li> <li>△中堀發三郎が轉鏡經緯儀を發明した。</li> <li>△三好學が印度、馬來地方を旅行し「印度馬來熱帶植物奇觀」を發表し、またシタンシ科のコハティン进行研究した。外に「普通植物生態學」をもこの年に出した。</li> <li>△服部廣太郎が「小笠原島の植物地理學的研究」を出した。</li> <li>△早田文藏が「臺灣高山植物誌」を出した。</li> <li>△小川三郎が歿した。野外生態學者であつた。</li> <li>△林郁彦が長崎醫專の病理學を擔當した。</li> <li>△ローベルト・コッホが來朝した。その歡迎會の席上彼はトリパノゾム病たる睡眠病に關する講演を出した。</li> </ul>		一九〇八	<ul style="list-style-type: none"> <li>△ヘルンレが「古代インド醫學史」を出した。</li> <li>△オONSEGがヘリウムの液化に成功した。</li> <li>△E・ラルザフオードがアルファ粒子の荷電量を測定した。</li> <li>△ペランが寫眞電送を工夫した。</li> <li>△ラムゼーがラヂウム・エアーネーションが一新元素なることを發見し、ニトロンと命名した。</li> <li>△メチニコフが、喰菌現象の發見でノーベル醫學生理學賞を受けた。</li> <li>△ブルツタスが歿した。眞作佳吉、五島清太郎、渡瀬作次郎が學ぶ。</li> <li>△エールトンが歿した。日本の電氣工業界に寄與するところ多かつた。</li> <li>△エールリツヒが化學療法法の創始でノーベル醫學生理學賞を受けた。</li> <li>△ガイガーが電子の荷電量を直接測定した。</li> <li>△キュストナーが子午線觀測より恆星光行差を研究し「恆星表」を出した。</li> <li>△ランドルトが質量保存の法則に就て精細に検討した。翌年エーリトヴエツシユも同様のことを行つた。</li> <li>△ヘールが太陽面に垂直な磁場を検出した。</li> </ul>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>△細菌學者フレンケルが來朝した。</li> <li>△久原躬敏が門下生との共同研究になるベツタマン轉位に就ての報告はこの年より始まつた。</li> <li>△新城新藏がドイツより歸り京都帝大理工科大學教授となつた。</li> <li>△近重眞澄がドイツ及びフランスの留學を了へて歸朝し京都帝大教授となつた。</li> <li>△長岡半太郎が餘震頻度の減少を放射能物質の變脱との類比において論じた。</li> <li>△鏡子及び天津丸、伊豫丸、丹後丸等に無線電信局を設け、公衆用無線電信を取扱つた。</li> <li>△水野敏之丞が海軍省の依頼を受け無線電話の研究を進めてゐたが、この年距離の通話に成功した。</li> <li>△上高五一郎がグリコール酸とアントラニール酸から人造藍を合成する法を發見した。</li> <li>△臨時脚氣病調査會が設立され青山胤通が顧問及び委員となつた。</li> <li>△石川千代松が「進化論」及び「進化論的動物學綱要」を著した。この年歐米へ差遣された。</li> <li>△天文月報を創刊した。</li> <li>△岡田武松が「氣象學講話」を出した。</li> <li>□戊申詔書をお下しになつた。</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>△ウオルフがネストル（小惑星六五九番の固有名）を發見した。</li> <li>△リツプマンが光の干渉を用ひた有色寫眞の方法でノーベル物理學賞を受けた。</li> <li>△E・ラザフオードが、放射能に關する貢獻でノーベル化學賞を受けた。</li> <li>△ブツヘラーが電場、磁場を互に垂直にした場合の方法を試みた。</li> <li>△ベツケレルが歿した。</li> <li>△マスカールが歿した。地球の固有運動が光學現象に及ぼす影響を説いた。</li> <li>△ミンコフスキーが相對性理論に於ける空間及び時間概念を論じ、これらが四次元の時空世界を形づくることを示し其の幾何學的意味を明にした。</li> <li>△マイスナーの再生裝置及びマヨラナの特殊檢査器の發明が無線電話を完成に導いた。</li> <li>△ハーンがメゾトリウムを發見した。</li> <li>△モーアハウスがモーアハウス彗星を發見した。</li> <li>△C・ヤングが歿した。太陽の物理學的研究に盡した。</li> <li>△ダンネマンが「大科學者の著作抄」を出した。</li> <li>□ブルガリヤが獨立した。</li> </ul>	



皇紀	年號	日	本	西	外	國
二五六九	明治四二			一九〇九		
		△吉川龜次郎が鳥津製作所においてGS蓄電池を創案し大正三年までこの改良に當つた。 △旅順工科學堂を設けた。 △千葉縣立園藝專門學校が起つた。 △泰佐八郎がエールリツヒと共に微毒スビロヘータの化學的療法を行つた。 △三共會社研究所が生れた。 △陸軍外科學會が生れた。 △堀浦重蔵がゼミブリツチ二重通信装置を完成した △荒井郁之助が歿した。中央氣象臺初代の臺長。 △山田猪三郎が氣球に推進機を裝置して山田式空中安全飛行機と名づけた。 △今橋芳松が摩擦低熱精米機を發明した。 △廣井仙市が最新な編網機を發明した。 △高峰讓吉が強力消化劑タカヂアスターゼを創製した。 △棚橋寅五郎が鹽素酸鹽電解法を發明した。 △田澤昌孝が沿軸並流水車を發明した。 △佐伯美津留がカーボランダム檢波器を發明した。 △鳥瀧右一、横山英太郎、北村政治郎が鋭維檢波器を發明し、銑子局から三千百哩離れたハワイ沖航行中のコレア丸に通信し成功した。僅々數キロワットの電力でこの長距離の通信をなしたことは世界の驚異であつた。 △明治初年京都會審局と運命を共にし、これに殉じた明石博高が、その後債鬼に追はれ貧しい一開業醫として轉々關口を渡いでゐたが、遂に七十二歳で市		△シヤットルトンが南極極を發見した △ピアリーが北極を發見した。 △イービー・ウィルソンが男女性の決定と染色體との關係を説いた。 △E・ラザフォードがα線は陽電荷を帯びるヘリウムなることを證明した。 △ブレリオがはじめて飛行機でイギリス海峡を横斷した。 △ニューカムが歿した。 △エヴァーシエツドがエヴァーシエツド效果を見出した。 △ダグリスハイム・エレクトロン會社がエレクトロン・メタルを創製した。 △オストヴアルトが接觸作用、化學平衡及び反應速度に關する貢獻でノーベル化學賞を受けた。 △シユアルンクが歿した。理論氣象學を數理的に取扱つた名著があり、また多くの日記氣象器械を考案した。 △ペランが沈降の現象を研究した。 △ツエツベリンが飛行機を建造した。 △ドウ・フオンが電解質檢波器を考案した。 △グイが電氣二重層の生成を證明した。チャップマンも同様の説明をなした。(一九一三年) △トムゼンが歿した。熱化學の研究で		

		井の願屋で世を去つた。 △宮原二郎が過熱蒸氣汽鍋を發明した。 △遠藤吉三郎が「莫語花」を著したがこの中にはホンダワラ科殊にキングワラ屬の研究報告が認められてゐる。 △軍用氣球研究會官制が公布された。 △中井孫之進が「朝鮮植物篇」を公にした。 △西川藤吉が歿した。眞珠形成法を發明した人。 △箕作佳吉が歿した。 △今裕が慈惠醫專の病理學を擔當した。 △福岡醫大では佐多愛彦に次いで一時桂田富士郎が病理學を兼任したが、後ち歐洲留學より歸つた田原淳が主任となり、次いで歐洲留學より歸つた中山平次郎が主任となつた。 △陸軍々醫學會を解散し、新に陸軍々醫團が設けられた。 △福岡醫大では整形外科研究の爲め住田正雄をドイツに留學せしめた。 △榎本綱常が歿した。 △東北帝大に地質學が創設され海外留學より歸つた佐川榮次郎がその教授となつた。後ち辭して三井礦山會社に入つた。 △矢部長克が海外留學より歸り東北帝大の古生物學及び地質學の教授となつた。 △萩原信芳が歿した。その著「圓理算要」が著名である。 △北里柴三郎がベルリンの第二回萬國醫學會讀及びブダペストの第十六回萬國醫學會に出席した。 △種痘法が公布された。			知られた。 △ブラウン及びマルコーニが無線電信の研究でノーベル物理學賞を受けた。 △ペーランドが人造樹脂(ペークライト)を發明し實用化した。 △O・マイヤーが歿した。氣體の運動學的理論、液體の内部摩擦等を論じた。 △リツツが變分の問題解決に關するリツツの方法を案出した。この年歿した。 △ジーモンが「古代數學史」を出した。 △ヒルシュベルクが「インド人の内障眼手術」を書いた。 △オルトンが優生學を説いた。 △コッヒヤが外科殊に甲狀腺外科の研究で醫學生理學賞を受けた。		
--	--	--	--	--	--	--	--



皇紀年號	西紀	本國	外
二五七〇 明治四三		<p>△野口英世がカーネギー學院より「毒蛇及び蛇毒」を出版した。</p> <p>△滿田隆が諸味中から酵母五種を分離した。</p> <p>△榎野明次郎が諸味中から細菌九種を分離した。</p> <p>△藤田耕が藤田式刷字電信機を完成した。</p> <p>△泰佐八郎がエールリツヒと共にサルバルサン(六〇六號)を創製し梅毒の化學的療法を完成し近世細菌學史上に不朽の業績を残した(一九〇八年)。この年十二月歸朝した。</p> <p>△松本善三郎が松本式閉電式電燈を發明した。</p> <p>△大野正がベアリングを發明した。</p> <p>△小柴保人が明治十三年來、宮城、岩手、新潟諸縣下の河海工事につくした。</p> <p>△九州帝國大學を福岡に置いた。</p> <p>△新潟醫學專門學校、米澤高等工業學校、土田靈絲專門學校、秋田鑛山專門學校を置いた。</p> <p>△富山縣藥學學校が藥學專門學校となり、熊本藥學學校が、九州藥學專門學校となつた。</p> <p>△獸疫檢査所を設けた。</p> <p>△鈴木梅太郎が米糠中の榮養成分を研究の結果アベリ酸を發見した(一九〇九年)が、のちにグイタミンBとよばれ、イギリスのフランクに先立つこと一年、實にグイタミン學說の基礎を確立したのであつた。</p> <p>△明治初期の末にベルツ、中濱東一郎、清野勇等によつて研究の緒についたチヌトマ病は、その後、桂田富士郎、山極勝三郎、井上善次郎などによつて幾</p>	
	一九一〇		<p>△ハーバーが窒素固定法を發明した。</p> <p>△カプタインが恒星の大分流説を唱へた。</p> <p>△ハリスがイソブレンから護膜を合成した。</p> <p>△キユリー夫人が、金屬ラヂウムの遊離に成功した。</p> <p>△パリ翰林院が、チフス豫防ワクチンを發見した。</p> <p>△タツジョンが水銀蒸氣燈を發明した。</p> <p>△フロイドの精神分析學が成つた。</p> <p>△アー・ネツテルが大氣中に流れる一種特別な輻射線を發見した。のちの宇宙線である。</p> <p>△ハードウツクがグイスコール精製製造に表面にオレイン酸の薄層を浮遊せる稀硫酸を固定に使用した。</p> <p>△リンドツクが比抵抗と溫度係數と比重の三つの相乘積が一定値なることを見出した。</p> <p>△クラウテがネオン管の光につき研究した。</p> <p>△バツキンゲルが完全氣體の定義を</p>

		<p>多の新知見を加へられ、その病理學上の研究はほとんど完結したが、まだ幼蟲の發育狀態や中間宿主に就て不明であつたがこの年肝臟ヂヌトマ蟲の中間宿主はモロコ、タナコ等であることが發見された。</p> <p>之は他の寄生蟲の發生の指針ともなつた。</p> <p>△三好學が岩代吾妻山で發見した八重石楠の紅變花冠の變態に關する研究をなした。また「日本の植物界」を出した。</p> <p>△白澤保美が「日本森林樹木圖譜」第二巻を出した。</p> <p>△小泉丹が「最近寄生原蟲學」を出した。</p> <p>△谷津直秀が實驗發生學を研究し講述をなした。(明治末葉)</p> <p>△白瀬龜等一行二十七名がこの年十一月二十八日南極探險に赴いた。</p> <p>△奥村多忠がマンソン氏蘇蟲の發生を明にした。</p> <p>△二木謙三、高木逸磨、谷口眞二、大角眞八及び石原喜久太郎、大田原豊一等が鼠咬病の病原であるスピロヘータの一種を發見した。</p> <p>△三宅恒方、内田清之助が「ふをるそひ氏昆蟲學」を共譯出版した。</p> <p>△八田三郎がプラキストン線を訂正し津輕海峡の境界線として重要であるが宗谷海峡が一層重要であると説いた。</p> <p>△生田益雄が發した。色素化學を研究し寫眞業界に貢獻あつた。</p> <p>△この年十二月日野、徳川兩大尉が代々木原でわが國最初の飛行を試みた。</p> <p>△野口英世が「梅毒の血清診斷」を出した。この年血清學會々頭となる。</p>
		<p>與へた。</p> <p>△電氣學の萬國會議でラヂウム、エマネーションの單位を制定し一瓦のラヂウムと平衡の状態にあるエマネーションの量を一キユリーと名づけた。</p> <p>△シユレーヂンゲルが濕氣ある空氣中に於て絶縁體の傳導度を測定した。</p> <p>△パウエルが磁氣嵐地球磁氣の原因は大氣中のイオンの流れに關すると説いた。</p> <p>△ザタスが紫外線の作用を検じ電外線の作用により塵なき空氣中に荷電體の存在を認めた。</p> <p>△シユエーブが噴霧鍍金を發明した。</p> <p>△コツホが發した。</p> <p>△ノイシエレルが定在波振動の筋に於て抵抗變位を以て其斷熱的溫度の變化を測定した。</p> <p>△ホーデンシユタイン及びシユタルタが沃度分子の熱解離を測定した。</p> <p>△ラムゼーがグレイと協力して二トンの比重、分子量、原子量を測定し元素週期表上に確乎たる位置を與へた。</p> <p>△W・タムソンが陽極線分析を行ひネオンの同素體を發見した。</p> <p>△ホイットマンが發した。日本に來り教授した人「動物學と東京大學」の著がある。</p> <p>△ヴイルシユテツターが葉綠素の結晶</p>



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國	
		△岡田武松が「梅雨論」を公にした。 △和田雄治が「氣象彙集誌」に朝鮮古代觀測に就て發表した。 □韓國を合併した。日露新協約が成つた。					
					を得ることに成功し、その構造を研究した。 △グインケルマンが發した。溶液の比熱、流體の熱傳導、X線等の研究がある。 △ヴァン・デル・ヴァールスが状態方程式の研究でノーベル物理學賞を得た。 △ヴァルラツハがテルベン及びカンファリーの研究でノーベル化學賞を得た。 △ゴツケルが氣球による上空の電離状態研究の結果ある高さ以上は電離度の増加することから宇宙線を認められた。後一九一二年ヘッスも同様の發見をした。 △レーリー卿が初めて活性窒素を見出した。 △カニツアローが發した。カニツアローの反應で名があつた。 △クイリツチが脆いタンゲステンに延性を與へることに成功した。 △コスタネツキが發した。フラボン色素の化學に關する業績が多い。 △コツセルが、蛋白質核酸の化學研究でノーベル醫學生理學賞を受けた。 △F.W.G.コールラウシュが發した。 △スペリー、アンシュツツ、ブラウン等がジヤイロコンパスを發明した。		

皇紀	年號	日	本	西紀	外	國	
二五七二	明治四四	△田原良純が河豚の毒素からテトロドキシンを創製した。世界的鎮靜劑でありこれまで多くの人によつて研究されたものである。 △藤山常一が炭化物から窒素化合物を製造することに成功した。 △原秀太郎が電力の消費を少くするオツシログラフを發明した。 △奥田謙が酒母中から二種の乳酸菌を發見した。 △黒野勘六が清酒醗中から三種の新酪酸菌を發見した。 △南滿醫學堂が起つた。 △蠶業試験所を置いた。		一九一一			
					△スキアパレリが發した。惑星表面の直接觀測の第一人者 △A.A.アガシーが發した。海膽類及び海星類の研究がある。 △ファイツテイヒが發した。 △ハツキンスが發した。天體物理學の嚆矢をなした人。 △ヘーフォードが地球精圓體の計算をなした。後ち(一九二四年)萬國測地學協會で採用した。 △スクラウプが發した。炭水化物、蛋白質、セルフィン等に關する業績がある。 △ブレイデルが有機化合物の微量元素分析を行ふ爲に微量天秤を工夫した。 △ランドルトが發した。屈折率その他の重要恆數の測定に従事した。 △フンクがウイタミンを説いた。 △ラムゼー及びグレイがラヂウム、エマナチオンの原子量を測定し二百二十三とした。 △サーベリが礬土と石灰を電氣爐で高壓度に熱し窒化アルミニウムを得た。 △アインシュタインが光の速度は重力のポテンシャルに關係あることを述べた。又ミレーも相對律を説いた。 △高周波振動放電に關しカンベルは電波の波長をクントの方法により測定し音波の波長はこれを生ずる電氣振動の		



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國	
			<p>△九州帝國大學工科大学を開設し、福岡醫科大學を九州帝國大學に屬した。</p> <p>△日本病理學會、朝鮮醫學會が生れた。</p> <p>△東京鑛山監督署(局)が「日本鑛業誌」を編纂した。</p> <p>△帝國學士院では國內優秀の研究に賞を與へて之を獎勵することにした。學士院賞である。</p> <p>△木村榮が地變動の研究特にZ項の發見によつて帝國學士院恩賜賞をうけた。</p> <p>△史蹟名勝天然記念物保存法が制定された。</p> <p>△遠藤吉三郎が「海産植物學」を公にした。</p> <p>△安田篤が「植物學各論(花部)」を出した。</p> <p>△井上通夫がドイツより歸り解剖學講師となつた。</p> <p>△池田岩治が胞子蟲類の研究をなした。</p> <p>△このころ中原徳太郎が整形外科學をもつて門戸を開いた。</p> <p>△白瀬瀧等の南極探検隊はこの年一月十六日南極ホエール灣に到着し、七十八度三十分の地點に達し六月二十日歸つた。彼等の命名した開南灣、大開灣、大和平原はのちに世界的に承認された。</p> <p>△下瀬雅允が歿した。</p> <p>△東京帝大の創立に際し林鶴一が數學の主任教授となつた。</p> <p>△本多光太郎が獨、佛、英の留學より歸り東北帝國大學理科大學教授となつた。</p> <p>△松井直吉が歿した。</p> <p>△島瀨右一が鑛石檢波器を考案した。</p> <p>△北原榮三郎が滿洲、ベトナム豫防に活躍した。</p>			<p>二倍に等しき結果を證明した。</p> <p>△ステトルアトが太陽のコロナを證明し太陽より放射する陰電氣粒子の流れであるとし此の粒子は太陽の磁場の影響をうけ一定の法則によつて動くものとした。(一九〇八年にビルケランも同様の説をなした)</p> <p>△ヴェカントが北極光はA線又はB線よりなると説いた。</p> <p>△シユスターが太陽より来る電氣的粒子が大氣上層を電離し地球に感應を起すことを説いた。(一九一〇年にバイエルも同様の説をなした)</p> <p>△バイエルが地球の永久磁石が地球外部の陰電子の流れにより變化すると説き、ビドリソクマイエルが、これと反對に地球内部における鐵層の磁性が温度の變化により地磁中の年週變化を説明した。</p> <p>△リースがセレニウスの原子内にある電子は各固有の振動なくこれに相當する振動の光波により共鳴し振動し自由電子を生じこの自由電子が抵抗を減ずるものとした。</p> <p>△J・J・タムソンがカナル線につき三種の線を含有することを結論しヘーウムの存在を指示した。</p>	

皇紀	年號	日	本	西紀	外	國	
			<p>△野口英世が、微毒スピロヘータ純粹培養に成功した。</p> <p>△メンデンホールが再び來朝した。</p> <p>△農林省山林局が八年計畫で森林湖候所を設け始めた。</p> <p>△水路部がアルゲの「極東颶風論」を譯して刊行した。</p> <p>□日英同盟を改訂した。改正條約が出来た。</p>			<p>△タリーリツチが完全なタンダステン電球をつくつた。</p> <p>△アムンゼンが南極を探検した。</p> <p>△パリサがアルベルト(小惑星七一九番の固有名)を發見した。</p> <p>△ヴアイスが強、常、反磁性體の各特質の解明をなした。また強磁性體の實驗事實より磁子の存在を唱へた。</p> <p>△ヴイーンが輻射の研究でノーベル物理學賞を受けた。</p> <p>△キユリー夫人(マリー)がラヂウム及びポロニウムの發見でノーベル化學賞を受けた。</p> <p>△デバイが、デバイの比熱式を公にした。</p> <p>△コルビノが、コルビノ効果を發見した。</p> <p>△P・ヴアイスが磁子を見出した。</p> <p>△ストーニーが歿した。</p> <p>△フアント・ホッフが歿した。</p> <p>△メリカンが氣體中のブラウン運動を實驗した。</p> <p>△ライデンブルクが歿した。アルカロイド化學の研究に業績がある。</p> <p>△E・ラザフォードの原子模型が成つた。</p> <p>△クルストランドが眼科光學理論の研究でノーベル醫學生理學賞を受けた。</p> <p>□支那に革命黨が起つた。</p>	











皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
			<p>△吉田余三男が風向觀測に現はれた心理作用を論じた。</p> <p>△中央氣象臺附屬柿岡地磁氣觀測所で觀測を開始した。</p> <p>△エンゲラーがわが國に來朝した。</p> <p>△寺田寅彦が肉眼によつて結晶軸の位置を基準し得ることを發見した。</p> <p>△野口英世が麻痺狂及び脊髓癱において微毒スピロヘータを發見した。</p> <p>△石川千代松が「動物學講義」上巻を出した。中巻は大正五年に出し、下巻は昭和九年に出した。</p> <p>△日本機械工業會が生れた。</p> <p>△東京高等工藝學校、九州齒科醫學專門學校を置いた。</p> <p>△藤原咲平が「音波の異常傳播」を出した。</p>			<p>△ワレリスが歿した。</p> <p>△ウエルナーが金屬錯化合物、原子價理論でノーベル化學賞を得た。</p> <p>△ドゥ・ブローイーが迴轉結晶法を用ひてX線を或物質で吸收した際に吸收端を有する吸收帶スペクトルの現れることを見出した。</p> <p>△モーズリが固有X線スペクトルに関するモーズリの法則を見出した。</p> <p>△エーベルトが歿した。空中電氣現象に關する業績を多く残した。</p> <p>△カイユテが歿した。</p> <p>△ラングミュアが瓦斯入電球を發明した。</p> <p>△タリーツヂがクローリツヂ管球を考案した。</p> <p>△ゲーデが分子式空氣ポンプを發明した。</p> <p>△E・ラザフォード及びボーアに依つてラザフォード・ボーアの原子模型が説かれた。</p> <p>△ネニミンがシマイサ(小惑星七四八番の固有名)を發見した。</p> <p>△シュニマンが歿した。</p> <p>△ヘールが一般に太陽面に磁場の存することをゼーマン効果から發見した。</p> <p>△チャンドラーが歿した。變光星表の</p>

皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二五七四	大正三		<p>△外山龜太郎、森繁太郎が協力して蠶の一代雜種を發見し養蠶の改良に貢獻した。</p> <p>△稻田龍吉、井戸泰が、ワイル氏病の原因をなす熱性黃疸症を發見した。これより一年おくれでウーレンフリートが同じものを發見した。</p> <p>△井口在屋がのぐち式ポンプを發明した。</p> <p>△中島幾三郎父子がオフセット印刷機を發明した。</p> <p>△松尾作太郎が松尾式四重電信裝置を考案した。</p>			<p>作成、地球の緯度變化に關する業績がある。</p> <p>△テイーゼルが航海中航行不明となつた。</p> <p>△ウイルステッターが葉綠素の化學的研究をなした。</p> <p>△ドイツにおいて石炭液化を試みた。</p> <p>△カメルリン・オンネスが、低温度に於ける各種の研究でノーベル物理學賞を受けた。</p> <p>△ブレーデルが元素分析法の新系統を完成した。</p> <p>△ソツデイ及びファヤンズが放射性元素の變位法則(ファヤンズ・ソツデイの法則)を發見した。</p> <p>△ミルンが歿した。多年日本に在任し本邦地震學に貢獻した。</p> <p>△ヴェーバーが歿した。代數學の權威。</p> <p>△リシエが過敏性の研究でノーベル醫學生理學賞を受けた。</p> <p>△モーズリがモーズリ圖表を發表し、X線スペクトル研究に貢獻した。</p> <p>△デュフォレーが無線電話をつくつた。</p> <p>△エディソンが合成石炭酸をつくつた。</p> <p>△ウオルフ及びミュラーが、新しい電氣爐をつくつた。</p> <p>△バラニーが三半規管及び平衡感覺の研究でノーベル醫學生理學賞を受けた。</p>



皇紀	年號	本	西	外	
		<p>△齊藤常次が、蓄電池送電流防止送電装置を考案した。</p> <p>△吉川龜次郎が日本化學工業會社に入り鹽素酸加里製造の電氣法を創始した。また同社で電氣化學工業に使用する白金の代用品を研究した。</p> <p>△京都帝國大學理工科大學を分離した。</p> <p>△國立傳染病研究所を内務省所管を改め、のち東京帝國大學附屬とし、醫科大學長青山胤通が所長を兼任した。</p> <p>△吉川龜次郎が關東都府府において食鹽の電解により苛性曹達製造の水銀法を研究し今日の大阪曹達株式會社を創立した。</p> <p>△大原農事研究所が生れた。</p> <p>△東京、京都兩醫科專門學校を置き、醫業講習所を廢した。</p> <p>△國立傳染病研究所を辭した北里柴三郎が北里研究所を起した。</p> <p>△森佐八郎が北里研究所の創立に參畫し後ち理事となり副所長となり、昭和十三年六十六歳で歿するまで終生その任に在つた。</p> <p>△土木學會、林學會等が生れた。</p> <p>△ポイント活字が使用された。</p> <p>△化學工業調査會が生れた。</p> <p>△土岐重助が、鳥羽右一等の發明したT・Y・K式無線電話機を携へてイギリスに赴き之が實驗をなしマルコーニ等を驚嘆せしめた。</p> <p>△田原淳が哺乳動物の心臟に於ける刺戟傳導筋系統</p>	<p>△ルイトウキツヒブフターが光線、熱線、紫外線の酵母發芽に及ぼす影響を研究した。</p> <p>△フランスでアセチレンから醋酸を製出した。</p> <p>△エミール・フィッシャーが、ニウタレオタイトを合成した。</p> <p>△リスタアが歿した。</p> <p>△ワイスマンが歿した。(石川千代松が學んだ)</p> <p>△マスマンが隱退後、大氣上層の等温層の存在を發見した。</p> <p>△C・G・ダーウィン及びP・P・エヴァルトがエヴァルト・ダーウィンのX線干涉理論を立てた。</p> <p>△ブランケル(一九二三年)及びローゼンタールがボルツマンのエルゴード假説の不可能を指摘した。之を更にエーレンフェスト夫妻が修正した。この假説を準エルゴード假説といふ。</p> <p>△ブラッグが岩鹽型格子を見出した。</p> <p>△ギルが歿した。</p> <p>△コブレングが輻射光度に就て熱電堆により四等星以上を測定した。</p> <p>△W・コッセルが、X線スペクトルの放出構成に關して、量子論的考案をなした。(一九一六年)</p>		

皇紀	年號	本	西	外		
		<p>の研究で帝國學士院恩賜賞をうけた。</p> <p>△日下部四郎太が岩石の力學研究で帝國學士院賞をうけた。</p> <p>△小倉伸吉が「潮の理」を出した。</p> <p>△三好學が明治三十八年より十年の歳月を費して完成した「日本植物景觀」全十五卷を出した。</p> <p>△小藤文次郎が櫻島破裂の際に實地に之を踏査しその論文を公にした。</p> <p>△東京教育博物館が、文部省普通學務局所管となつた。後ち十年東京博物館官制發布され東京博物館と改稱された。この間主事または館長たりし人は千本副館長、谷本富、中川謙二郎、朝夷六郎、本莊太郎、棚橋源太郎、秋保安治等々である。</p> <p>△井和爲昌が歿した。無機化學に關する業績が多い。</p> <p>△歐洲大戦が起りわが國も青島攻略において始めて軍用機を使用し、爆彈を投下した。</p> <p>△日本動物協會が生れた。</p> <p>△日本齒科學會、日本法醫學會等が生れた。</p> <p>△京都帝大附屬大津臨湖實驗所を置いた。</p> <p>△東亞氣象臺長會議による暴風雨觀式を制定した。</p> <p>△中央氣象臺が「氣象略報」を創刊した。</p> <p>□ドイツ領南洋諸島を占據した。</p>	<p>△シヤープブリーが銀河系の構造に就て新説を立てた。</p> <p>△エーレンフェストが斷熱假説を提出した。</p> <p>△ラウエが結晶體に於るX線の干涉でノーベル物理學賞を受けた。</p> <p>△リチャーズが原子量の精密測定でノーベル化學賞を受けた。</p> <p>△パーネットがパーネット効果を發見した。</p> <p>△ピアスが歿した。</p> <p>△ヒットルフが歿した。スペクトル研究に名を残し、また電氣化學の基礎を築いた。</p> <p>△ヒルが歿した。太陰運動論、三體問題、木星と土星の攝動等多くの研究がある。</p> <p>△ヘルマーが歿した。C・M・ホールとは別にアルミニウムの電解冶金法を發見した。</p> <p>△ポインティングが歿した。</p> <p>△ホールが歿した。ヘルマーと共にアルミニウムを今日の如く普及せしめた功が大きい。</p> <p>△マルコーニが無線電話の四十五哩通話に成功した。</p> <p>△H・N・ラッセルがラッセルの恆星進化論を立てた。</p> <p>△ラムスアウアーがラムスアウアー効果</p>			



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二五七五	大正四		<p>△鯨井恒太郎が周波數變換器を發明して簡單に高周波電流を發生せしめることに成功した。</p> <p>△杉本京太が邦文タイプライターを發明した。</p> <p>△田中龍太が整流子型電氣機を發明した。</p> <p>△田熊常吉が二十餘年刻苦して世界一能率のあるタマ式汽機を發明した。</p> <p>△田中新吉がS・T式製鹽法を發明して製鹽業を一新した。</p> <p>△森山浩行がセメント防水劑を發明した。</p> <p>△寺田寅彦が「地球物理學」及び「海鳴に就て」を出した。</p> <p>△東北帝國大學醫科大學を開設した。</p> <p>△桐生高等工業學校を置いた。</p> <p>△竹尾結核研究所が生れた。</p> <p>△日本鐵鋼協會、水産學會が生れた。</p> <p>△伏見義雄が交直流四重通信裝置を考案した。のちに通信方式として採用した。</p>	一九一五	<p>果を見出した。</p> <p>△リーバーマンが發した。天然色素、類糖體、アルカロイド等に薬績が多くグレイベと協力してアリザリンを合成した。</p> <p>△デイールスが「古代の技術」を出した。</p> <p>△マイヤーが「化學史」を出した。</p> <p>□世界大戰が起つた。(一九一九年)</p> <p>△デニビリアーが潜航艇偵知機を發明した。</p> <p>△ダットンが埋没彈感知機を發明した</p> <p>△ダグワイツトが電氣の變化を應用して性能判斷機をつくつた。</p> <p>△エリアス・リースが飛行機翼來聴取器をつくつた。</p> <p>△ラッセルが無線電波により操縱する空雷を實驗した。</p> <p>△ゾンマーフェルトが原子のスペクトルに關する理論を發表した。</p> <p>△アインシュタインとドウ・ハースによつて、アインシュタイン・ドウ・ハース効果が發見された。</p> <p>△アウヴェスが發した。ドイツの天文學者。</p> <p>△アマガーが發した。</p>	

			<p>△木村駿吉が工業的オゾン發生器を發明した。</p> <p>△大阪衛生試験所でニガリから臭素を製出した。</p> <p>△野口英世がスピロヘータ・ペリータの研究によつて帝國學士院恩賜賞をうけた。この年一旦歸朝し十一月歸米した。</p> <p>△外山龜太郎が蠶の遺傳研究によつて帝國學士院賞をうけた。</p> <p>△第十回全國氣象協議會で寺田寅彦が海鳴現象の報告をした。</p> <p>△中川幸庵が肺臟デストマの發生状態と人體内移行經路を明にした。また肥大吸蟲は肝臓と同様の經路をなすことを發見し、その中間宿主は平巻貝であることを發見した。その他臺灣における地方病につき研究發表したものが多い。</p> <p>△中央氣象臺の氣象講習會に於て岡田武松が雨、雪、降水等に關し講演した。</p> <p>△武藤昌知が横山定のメダコニムスの第一中間宿主が河貝子なる事を、また肝臟(篤形)デストマの幼蟲の第一中間宿主がマメタニシであることを確定した(この研究は大正三、四年から大正十年頃まで繼續された)。彼の業績は肝臟デストマ(篤形一口蟲)の感染の經路を明にした事であつた。</p> <p>△山内安太が三寒四温に就て發表した。</p> <p>△山極勝三郎が痛腫は刺戟により發生することを證明した。</p> <p>△川上瀧彌が發した。(明治四年生)</p> <p>△松村任三が「改訂植物名彙(漢名)」を出し翌大正五年和名を出した。</p> <p>△有坂成章が六十歳で發した。</p>		<p>△ヴェイルシュエツターがクロロフィルの研究でノーベル化學賞を得た。</p> <p>△ブラウダがX線をスペクトルに分解する器械(X線分光器)を考案した。</p> <p>△エールリツヒが發した。</p> <p>△ターチユエが發した。數學者として理論主義を唱へた。</p> <p>△ゲーデが、擴散空氣ポンプを發明した。</p> <p>△ゾンマーフェルトが原子模型に知見を加へた。</p> <p>△ウエストグレンが沈降の現象を實測した。</p> <p>△デバイ及びシエラー並にハルによつてデバイ・シエラー法が考案された。</p> <p>△デユエーン及びハントが、デユエーン・ハントの法則を見出した。</p> <p>△G・I・テラーがテラー輝星を發見した。</p> <p>△ブラウダ父子が結晶のX線分析でノーベル物理學賞を受けた。</p> <p>△ハーゼンエールが發した。</p> <p>△モーズリがダーネル海戦で戰死した。X線分光學の開拓者。</p> <p>△リーケが發した。電磁場論、電子論、原子構造論上に業績がある。</p> <p>△ロスコーが發した。稀金層及び光化學に關する研究が多い。</p>	
--	--	--	--	--	---	--



皇紀年號	日	本	西紀	外	國
二五七六	大正五	<p>△遠藤利貞が歿した。和算の衰滅を憂ひ日本數學史の研究に従事し後ち東京理科大学並に帝國學士院で菊池大麓の下で和算の調査に任じた。</p> <p>△片山正夫がエートヴェツシュの法則に新知見を加へた。</p> <p>△高松豊吉が工業試験所長となつた。</p> <p>△泰逸三、久村清太郎の研究の成果として米澤人造絹絲製造所が設けられた。</p> <p>△三好學が「天然記念物」を公刊した。</p> <p>△水産學會、日本植物病理學會等が生れた。</p> <p>△柴田雄次がこの年より約十ヶ年にわたり多数の有色無色の錯鹽に就て分光學的研究を行ひ業績をあげた。</p> <p>△安藤廣太郎が東北凶冷論を發表した。</p> <p>△中村精男が新案強雨計に就て發表した。</p> <p>□日支交渉が成つた。</p>	一九一六	<p>△ウエゲナーが「大陸移動説」を出した。</p>	
二五七五	大正五	<p>△岩田繼清が脱臼機を發明した。</p> <p>△西川藤吉が眞珠形成法を發見して眞珠養殖に貢献した。</p> <p>△小藤文次郎が「總體的火山論」を地質學雜誌に發表した。</p> <p>△中川瀧三郎が「日本氣候學」を出した。</p> <p>△新城新藏が「宇宙進化論」を著した。</p> <p>△永井藩が「人生論」を著した。</p> <p>△氣象觀測法、氣象電報規則を改正した。</p> <p>△石澤豊太が日本火藥製造會社を起した。</p>		<p>△アインシュタインが一般相對性理論を完成した(一九一四年―一九一六年)</p> <p>△コンプトンが自記X線分光器を考案した。</p> <p>△エーレンフェストが斷熱不變量の假説を發表した。</p> <p>△ラングミュアが凝結式ポンプを考案した。</p> <p>△シユヴァルツシルトがシユヴァルツシルトの式を立てた。この年大戦に従</p>	

<p>△京城醫學專門學校、同高等工業學校を置いた。</p> <p>△斎藤試驗所を設けた。</p> <p>△鹽見政次が佐多愛彦と語り大阪に鹽見理化學研究所を興した。初代所長は佐多愛彦。</p> <p>△照明學會、東北醫學會などが生れた。</p> <p>△山本忠興が交互磁極誘導子型交流發電機を發明した。</p> <p>△中堀幾三郎が測量器並行線裝置の發明をなした。</p> <p>△スチュワードが鼠をもつて蠅の中間宿主であると主張したに對し、大阪醫大の吉田教授は自ら蠅の卵を吞んで實驗しこれを反駁し、慶應醫大の懷野教授も同様に勇敢にこれを實驗した。</p> <p>△岡田武松が「雨」を出した。</p> <p>△東京帝國大學に傳染病研究所を附設した。</p> <p>△稻田龍吉、井戸泰が黄疽出血性スピロヘータ病に關する研究で帝國學士院恩賜賞をうけた。</p> <p>△鳥潟右一、鯉井恒太郎、横山英太郎、北村政治郎が無線電話に使用する電氣振動間隙に關する研究で帝國學士院賞をうけた。</p> <p>△本多光太郎が鐵に關する研究で帝國學士院賞をうけた。</p> <p>△臨時産業調査局が成つた。</p> <p>△田中芳男が歿した。</p> <p>△松原新之助が歿した。晩年農商務省水産講習所長を勤めた。</p> <p>△金屬材料研究所が仙臺市に設けられた。初め臨時理化學研究所と稱しその後鐵鋼研究所となり、更に現在の名稱に改められた。初代所長は本多光太郎、現所長は石原寅次郎である。</p>	<p>軍して戦死した。</p> <p>△ゾンマフェルトがゾンマフェルトのスペクトル微細構造論を立てた。</p> <p>△デキントが歿した。代數的數論の開拓者の一人。</p> <p>△デュエムが歿した。科學批判家として名を高めた。</p> <p>△バツクリーが、電壓壓力計を考案した。</p> <p>△ハーンが生れた。カイザー・ウィルヘルム・ゲゼルシャフトの化學研究所長となつた。</p> <p>△ベネディックスがベネディックス効果を見出した。</p> <p>△マツハが歿した。科學史家としても多くの業績がある。</p> <p>△ラムゼーが歿した。放射性元素變説は著名である。</p> <p>△リュイスが分子構成に關して八隅説を立てた。</p> <p>△ローウェルが歿した。火星の觀測に於いて著名である。</p> <p>△ステープル・ファイバーが、工業化された。</p> <p>□袁世凱が死し、黎元洪が大總統となつた。</p>
---	--



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國	
二五七七	大正六		<ul style="list-style-type: none"> <li>△北里柴三郎が大日本醫師會長となつた。</li> <li>△東京帝大内に航空學調査委員會を設けた。この年田中館愛徳擔任の風洞が運轉を開始し飛行機の設計をなした。</li> <li>△岡本保佐が歿した。</li> <li>△大塚信豊が歿した。</li> <li>△篠崎又兵衛が安全インキをつくつた。</li> <li>△阿部彦吉が電氣時計を發明した。</li> <li>△黒田泰造が黒田式發射機を發明した。</li> <li>△内村八郎が特殊繼電機を發明した。</li> <li>△横堀治三郎が秋田鑛山學校創立にあたり最初の校長となつた。</li> <li>△東京、大阪兩私立藥學專門學校が起つた。</li> <li>△大阪藥學專門學校、同齒科醫學專門學校を置いた。</li> <li>△財團法人理化學研究所が成つた。菊池大麓が暫く所長となり、大河内正敏が之を繼ぎ、池田菊苗、長岡半太郎、本多光太郎、鈴木梅太郎、眞島利行、寺田寅彦をはじめ東京、東北各帝大の諸大家を指導員としたる一大研究機關である。</li> <li>△東京電氣、三菱鑛業、同製紙、同造船、旭ガラスの各研究所が成つた。</li> <li>△日本遺傳學會、東京昆蟲學會、日本植物病理學會等が生れた。</li> <li>△青山胤通が五十九歳で歿した。</li> <li>△寺田寅彦がラウエ映畫の實驗方法及其説明に關する研究で帝國學士院恩賜賞をうけた。</li> </ul>	一九一七	<ul style="list-style-type: none"> <li>△シヤブリーがケファアイド變光星の變化に基いて、球狀星團の距離を決定した。</li> <li>△ラングミニアが一分子層に就いて研究を發表した。</li> <li>△P・ゼーマンが振押を用ひて、惰性的質量と重力的質量とが比例することを確めた。</li> <li>△W・コッセルが、ボーアの原子模型に基いて始めて原子價理論を建てた。(一九二一年)</li> <li>△スモルコフスキーが歿した。ブラウン運動の理論を完備した。</li> <li>△ダルブーが歿した。</li> <li>△ツエツベリンが歿した。</li> <li>△バークラが元素のX線放出に關する研究でノーベル物理學賞を受けた。</li> <li>△A・V・バイヤーが歿した。有機合成化學史上の巨人。</li> <li>△ハーキンスがハーキンスの法則を立</li> </ul>		
二五七八	大正七		<ul style="list-style-type: none"> <li>△眞島利行が漆の主成分に關する研究で帝國學士院賞をうけた。</li> <li>△西川正治がスピネルの原子配置並に歪を受けたる物體のレントゲン線検査に關する研究で帝國學士院賞をうけた。</li> <li>△野口英世がレプトスピラに關する最初の論文を發表した。</li> <li>△菊池大麓が歿した。研究の主なるものは和算の批判的研究である。</li> <li>△本多光太郎が高木弘と協力し、當時最も強力なK・S鋼(永久磁石鋼)を發明した。</li> <li>△石川千代松が「人間の進化」を出した。</li> <li>△電氣通信學會、日本建築協會、化學工業協會、衛生工業協會等が生れた。</li> <li>△深川越中島に航空研究所を設けた。</li> <li>△兵庫縣、岡山縣の各工業試験場を置いた。</li> <li>△農商務省畜産試験場を置いた。</li> <li>△ノルウェーのビルゲランドがわが國に來朝中に歿した。</li> <li>△「朝鮮古代觀測記錄調查報告」を出した。</li> <li>□日米共同宣言があつた。</li> </ul>	一九一八	<ul style="list-style-type: none"> <li>△ドオルフが離心率の大きな新小惑星を發見した。</li> <li>△シー・スキントンが、テレビジョンの原理を説いた。</li> </ul>		



皇紀	年號	日	本	西	外
			<p>守英五郎等の協力で世界に魁して高周波式多重無線電電話装置を完成した。(大正九年特許)</p> <p>△藤原吹平が雲の呼名に關し試案を發表した。</p> <p>△北海道帝國大學を札幌に置き東北帝國大學農科大學を北海道帝國大學に屬した。</p> <p>△東京帝國大學に航空研究所を附設した。最初の所長は横田成年である。</p> <p>△東京醫學專門學校、東洋女子齒科醫學專門學校を置いた。</p> <p>△啓明會、理科教育研究會等が生れた。</p> <p>△大阪工業試驗所、徳川生物研究所、古河、住友各會社研究所などが起つた。</p> <p>△朝鮮總督府地質調査部が設けられた。</p> <p>△小川琢治が八ヶ岳やアルプス山系の山容は凡て氷河の浸蝕作用を受けて出来たものであることを斷定した。</p> <p>△帝國學士院が英、佛兩國學士院の招聘に應じてロンドン及びパリの國際學術會議に参加し、わが學界の代表者を送つた。</p> <p>△關根幸雄が強風の降りる現象に就て發表した。</p> <p>△農商務省窒素研究所が設けられた。</p> <p>△柴田桂太が植物界に於けるブラウオン體の研究で帝國學士院恩賜賞をうけた。</p> <p>△桂田富士郎、藤浪鑑が日本住血吸蟲病の研究で帝國學士院賞をうけた。</p> <p>△野口英世が黃熱病菌を發見した。</p> <p>△外山龜太郎が發した。</p>	<p>△ドイツでエレクトロン燃夷彈が發明された。</p> <p>△アスマンが發した。ドイツの氣象學者。</p> <p>△ウオルフがアリンダ(小惑星八八七番の固有名)を發見した。</p> <p>△ウイلم・ユネツターが高等植物の炭素同化に關する研究をなした。大戦後は酵素の精製の研究に着手し環式炭化水素、接觸反應等に關して業績をあげた。</p> <p>△E・A・オーウエンがオーウエンの法則を發表した。</p> <p>△G・カントールが發した。集合論を創始して名がある。</p> <p>△エディントンが脈動説を唱へた。</p> <p>△スハウテンが、移變の理論を確立した。レイ・チャイタも同様の説を成した。(一九一七年)</p> <p>△ルビノーヴィツチがゾンマフェルトの理論に對し選擇理論を立てた。</p> <p>△テイラーが發した。</p> <p>△トレッドウエルが發した。ピラヂンの發見で知られる。</p> <p>△プランクが量子論の研究でノーベル物理學賞を受けた。</p> <p>△ハーバーがアムモニアの合成でノー</p>	

皇紀	年號	日	本	西	外
二五七九	大正八		<p>△石田雅生が發した。</p> <p>△渡江元吉が發した。脊推動物學全般に亘り功績があつた。</p> <p>△遠藤利貞の遺稿「大日本數學史」がその發後「増修日本數學史」として帝國學士院版として刊行された。</p> <p>△千本福隆が發した。數學教育上の功績が多い。</p> <p>△東京數學物理學會が、日本數學物理學會と改稱した。(一九一九年)</p> <p>△志田順が地震初動方向の方位的分布に關する研究を發表した。(志田の法則)</p> <p>△平山常太郎が「日本に於ける歸化植物」を公にした。</p> <p>△工政會が生れた。</p> <p>△山形縣工業試驗場を置いた。</p> <p>△古河理化學研究所を置いた。</p> <p>△和田雄治が發した。</p> <p>□シベリヤに出兵した。</p> <p>△竹内壽太郎が三相誘導電動機を發明した。</p> <p>△東北帝國大學附屬鐵鋼研究所及び同大學工學部を置いた。</p> <p>△府立大阪醫學專門學校が醫科大學となつた。</p> <p>△臺灣總督府高等農林學校を置いた。</p> <p>△陸軍科學研究所、海洋氣象臺、茶業試驗所、陶磁器工業試驗所などが出来た。</p> <p>△鳥瀧右一が有線無線兩電接續装置の發明をなし再び世界の無電界を驚かした。協力者は北村政治郎丸毛登、堀井貞次郎である。</p> <p>△萬國天文學協會、萬國化學協會、萬國地球物理學</p>	<p>一九一九</p> <p>△アインシュタインが太陽による光のフレを説いた。</p> <p>△マジヨラナが光の速度はその光源の速度に無關係であると證した。</p> <p>△ラングミニアがリユイスの原子模型に基いて、物質の化學的性質を説明した。(リユイス・ラングミニアの理論)</p> <p>△フオノファイルム式トーカーが成つた。ト・フォオレーの發明である。</p> <p>△アストンが元素の「イソトープ」の研究を發表した。またJ・J・タムソン</p>	<p>ベル化學賞を受けた。</p> <p>△フエッダーセンが發した。</p> <p>△K・F・ブラウンが發した。ルシヤトウリエ・ブラウンの法則を立てた。</p> <p>△ポリアが對稱原理(古典論と量子論の對稱)を説いた。</p> <p>□獨逸兩國に革命があつた。</p>

皇紀二五七八―二五七九

三七九



皇紀年號	日	本	西紀	外	國
		<p>協會と連絡を保つため帝國學士院はわが國內における學術研究會議の設立を政府に建議し、翌九年その官制が公布せられ同會議の成立をみた。</p> <p>△石原純が相對性原理萬有引力論及量子論の研究で帝國學士院恩賜賞をうけた。</p> <p>△山極勝三郎、市川厚一が癌の研究で帝國學士院賞をうけた。</p> <p>△石川登喜治が滿鐵青銅其他の合金及鑄鐵の鑄造に關する研究で帝國學士院賞をうけた。</p> <p>△御木本幸吉が西川藤吉の眞珠形成法の學理を應用して養殖眞珠を完成し、眞珠素質被着法で特許を得た。</p> <p>△第一回萬國學術研究會議總會がブラッセルに開かれ、田中館愛橋がわが代表として出席した。</p> <p>△美作元八が歿した。</p> <p>△川北胡鄰が歿した。「數理起源」百餘卷を編した。</p> <p>△久原躬弦が歿した。小松茂との共同研究になるフェニルフタルイミドの異性體及びその關聯化合物は著名である。</p> <p>△藤原咲平、關口鯉吉が推算三千米等壓線圖を天氣豫報に利用した。</p> <p>△藤澤利喜太郎が歿した。</p> <p>△辰野金吾が六十六歳で歿した。わが國建築教育の功勞者。</p> <p>△山極勝三郎が人工癌の發生に成功した。</p> <p>△糧食研究會が生れた。</p> <p>△東京府立商工獎勵館、商工省陶磁器試驗所、奈良</p>			<p>の裝置を改良して質量分光器を考案した。</p> <p>△アインシュタインの一般相對性理論から豫言せられた光線屈曲の事實が、イギリスの日食觀測隊によつて實證された。</p> <p>△ライオンムートがアガメムノン（小惑星九一一番）を發見した。</p> <p>△アツブが歿した。</p> <p>△ウエルナーが歿した。その獨創になる主原子價、側原子價の概念及び之から導かれた配位説により複雑な錯鹽の立體構造が明かになり、また無機化合物に於て殆ど顧みられなかつた異性現象（特に光學異性）の存在の理論と實證を成した。</p> <p>△ステンストレームはM吸收端に於てリンドの見出した線吸收スペクトルと同様の結果を見出した。</p> <p>△エートグエツシュが歿した。</p> <p>△ゲーデが、擴散空氣ポンプを考案した。</p> <p>△レリーが歿した。</p> <p>△タルツタスが歿した。放射性物質のスペクトル分析に業績があつた。</p> <p>△E・ラザフォードが窒素原子にα線を衝突させ水素線の放出を見た。次で</p>

		<p>縣工業試驗場を置いた。</p> <p>△伊吹山觀測所を開設した。</p> <p>△氣象臺測候所條例施行細目が改正された。</p> <p>△上海の中央氣象臺附屬觀測所が事務を開始した。</p>			<p>硼素、弗素、ナトリウム、アルミニウム、磷等の元素で同様の現象を見た。</p> <p>△コンプトンがこれまでの象限電氣計を改良した。</p> <p>△ジューバインが結晶の格子常數の測定を行つた。（一九一九年—一九二六年）</p> <p>△シユタルクがシユタルク效果の研究でノーベル物理學賞を受けた。</p> <p>△萬國化學協會が組織された。</p> <p>△ピアソンが歿した。火成岩のC・I・P・W・量的分類法の創始者の一人。</p> <p>△ピツカリングが歿した。變光星、恆星スペクトルに關する研究の基礎を作つた。</p> <p>△フイッシャーが歿した。晩年は主として、タンニン及び炭水化物を研究した。</p> <p>△フエドロフが歿した。</p> <p>△ボルデーが補體結合反應百日咳菌の發見でノーベル醫學生理學賞を受けた。</p> <p>△フオーグトが歿した。結晶の物理的性質を研究し結晶物理學の基礎を築いた。</p> <p>△E・ブラウンが月の位置表を完成した。</p> <p>△リドベリーが歿した。分光學の開拓者。（リドベルトに同じ）</p> <p>□パリ講和會議が開かれた。</p>
--	--	--	--	--	--



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國	
二五八〇	大正九		<ul style="list-style-type: none"> <li>△長谷川善一が熱線機を發明した。</li> <li>△窪田香二郎が鍍中の金銀銅回收法を發明した。</li> <li>△戸上信文が配電装置に關する發明をなした。</li> <li>△牧鏡夫が「フタル酸誘導體」に關する研究を發表した。</li> <li>△邦文モノタイプが完成した。杉本京太の發明である。</li> <li>△三村鐘三郎がマグネシウムアブラスタを發明した。</li> <li>△元良信太郎が、元良式船舶動搖制止装置を完成した。</li> <li>△九州帝國大學に農學部を置いた。</li> <li>△早稲田、慶應兩大學を昇格し早稲田理工科、慶應醫學部が成つた。</li> <li>△縣立愛知醫學專門學校が醫科大學となつた。</li> <li>△廣瀨、廣島、金澤三高等工業學校、富山藥學專門學校、神戸高等商船學校、鳥取高等農學校を置いた。</li> <li>△商工省燃料研究所、内務省養蚕研究所を設けた。</li> <li>△帝國學士院の建議により學術研究會議が成つた。</li> <li>△鳥瀨右一等の發明した高周波有線無線の多重電信電話装置を繞り、ドイツ特許界に大波瀾を生じテレホンベブリック會社對テレホンケン會社の特許無効訴訟が起つたが、鳥瀨等の發明がテレホンケン會社の發明よりも約二ヶ年早いことが判明して、テレホンケン會社の敗訴となり、日本の無線界は斷然世界をリードした。同年鳥瀨が北村、丸毛及び館日隆治の協力發明による送電線に於ける高周波通信方式の</li> </ul>	一九二〇	<ul style="list-style-type: none"> <li>△ブエツプアアが發した。(松村松年、矢田部良吉、三軒學等が學んだ)</li> <li>△エルスターが發した。空中電氣の諸現象を研究し、また陰極線の磁場による影響に就て實驗した。</li> <li>△M・H・カントールが發した。數學史の研究に終始した。</li> <li>△ギヨームがニツケル鋼の發見と應用に關する研究でノーベル物理學賞を受けた。</li> <li>△ジョンセン及びライベツクがジョンセン・ライベツク効果を發見した。</li> <li>△フロイドリツヒが吸着の行はれる層を除いた液體内の電位差と固體、液體間の全體の電位差との區別を明かにした。</li> <li>△ネルンストが化學に對する熱力學の理論及び實驗的應用、ネルンスト熱定理の發見でノーベル化學賞を受けた。</li> <li>△デニングが白鳥座新星を發見した。</li> <li>△バーデがヒダルゴ(小惑星九四四番の固有名)を發見した。</li> <li>△フランクがG・ヘルツと共に、フランタ・ヘルツの實驗を見出した。</li> <li>△ポルン及びハーバーが、ポルン・ハーバーの循環過程を提示した。</li> <li>△マルダレスが發した。大氣の振動論</li> </ul>		

			<ul style="list-style-type: none"> <li>特許も得た。</li> <li>△辻本滿丸が脂肪の研究で帝國學士院恩賜賞を受けた。</li> <li>△藤原咲平が音の異常傳播の研究で帝國學士院賞を受けた。</li> <li>△早田文藏が臺灣植物の研究で、桂公記念賞を受けた。</li> <li>△軍艦陸奥が進水した。</li> <li>△萬國緯度變化調査委員會は日本に委嘱し世界の緯度調査を廻めることとなつた。その委員長は木村榮である。</li> <li>△東大理學部に地理學科創設されるや山崎直方が同科主任となつた。</li> <li>△高木兼寛が發した。</li> <li>△江口元太郎が外部電場を取去つても尙ほ電媒分極を保持する物質(エレクトレット)を始めて實現した。後之が西川正治、坂山大三によつて實用に供され、更にマイスナーによつて試みられた。</li> <li>△高木貞治が「相對アーベル數體の理論に就て」を發表し、世界の學界に先んじて數體論を完成した。</li> <li>△田中館愛橘が懷中電氣磁氣計を改良した。</li> <li>△北里紫三郎が中央衛生會長となつた。</li> <li>△日本技術協會を設けた。</li> <li>△茨城縣小野川村に高層氣象臺を設けた。</li> <li>△神戸市に海洋氣象臺を設けた。</li> <li>△軍艦山城から飛行機を飛ばした。</li> <li>△京都市工業研究場を置いた。</li> <li>□ニコライエフスク事件があつた。</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>が著名である。</li> <li>△ミリカンが短波長のミリカン線を見つけた。</li> <li>△リーガーがリーガリの眞空計を考案した。</li> <li>△ロツキヤアが發した。</li> <li>△ベリイが發した。晩年は數學教育の改造運動を主唱した。</li> <li>△リツプマンが「鍊金術の起原と傳播」を出した。</li> <li>△バルクハウゼンとタルツが電子振動を發見した。</li> <li>△アストンが次々と同位元素の發見をなした。</li> <li>△タロツホが毛細血管の生理研究でノーベル醫學生理學賞を受けた。</li> </ul>
--	--	--	---	--	--	--



皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二五八一	大正一〇			一九二二		
		<ul style="list-style-type: none"> <li>△山本忠興、川原田政太郎がO・V・K誘導同期電動機を發明して電力事業を一新した。</li> <li>△平田佐雄が自動編網機を發明した。</li> <li>△小川琢治が日本群島地質構造論を發表した。</li> <li>△新田長次郎が木綿調帯をつくつた。</li> <li>△池貝喜四郎が池貝式旋盤を完成した。</li> <li>△桑木義雄、池田芳郎が「相對性原理講話」を書き石原純も「相對性原理」を著してアインシュタインの理論を紹介した。</li> <li>△宮崎吉太郎が宮崎式ベーチカを考案した。</li> <li>△西尾銈次郎が「古代に於ける鑛山技術の研究」を著した。</li> <li>△大藤高彦が「構造強弱學」を著した。</li> <li>△吉川龜次郎が湯淺蓄電池會社で蓄電池の原料たる光明丹の製造と共に亞硝酸曹達の製造を開始し輸入を防止した。</li> <li>△九州帝國大學に農學部、北海道帝國大學に醫學部を置いた。</li> <li>△日本地理學會が生れた。</li> <li>△東京高等工藝學校、神戸高等工藝學校、三重高等農林學校を置いた。</li> <li>△仙臺高等工業學校が再び獨立した。</li> <li>△府立京都、私立慈惠兩醫學專門學校が醫科大學となつた。</li> <li>△朝鮮總督府水産試驗所、臺灣總督府研究所を置いた。</li> <li>△大日本獸醫學會が生れた。</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>△ソツプデイが元素の原子は水素原子核の集合であると説いた。</li> <li>△アインシュタインが「相對性原理」を公表した。</li> <li>△ラインムートがアスプリンダ（小惑星九五八番）を發見した。</li> <li>△アインシュタインが理論物理學の諸研究でノーベル物理學賞をうけた。</li> <li>△ラルソンがX線の純粹のスリット廻折を認めた。</li> <li>△ウツドが活性水素を作つた。</li> <li>△カーラーが多糖類の構成に關する新説を發表した。</li> <li>△シュレーディンガーがアルカリのスペクトルを説明するため、其の原子價電子にこの構造の軌道を貫通軌道とした。</li> <li>△ホプキンスがグルタチオンを抽出した。</li> <li>△リニボ・クラマーが減感測として、フエノサフラン色素を用ひた。</li> <li>△ジーダバインが真空分光器を考案した。</li> <li>△シャープリーが綜合的寫眞觀測事業の中心となつて活動した。</li> <li>△シュニテルンの考案によりW・ゲルラツハと共に、原子の磁氣能率を決定した。</li> </ul>	

皇紀	年號	日	本	西紀	外	國
二五八一	大正一一			一九二二		
		<ul style="list-style-type: none"> <li>△齊藤報恩會が生れた。</li> <li>△宮田利喜太郎が綜統製造機を發明した。</li> <li>△布蕪現之助が腦の解剖的研究で帝國學士院恩賜賞をうけた。</li> <li>△松本彦七郎がクモヒトデ分類の研究で帝國學士院賞をうけた。</li> <li>△俄國一が日本刀の研究で帝國學士院賞をうけた。</li> <li>△田原良純が河豚毒素の研究で桂公記念賞をうけた</li> <li>△樺田邦彦が蛙皮電動性に關する研究をなし電動性の起因を詳にし進んで生物の電氣發生の學說の解明に資した。</li> <li>△淺藤吉三郎が歿した。</li> <li>△飯島魁が歿した。</li> <li>△三宅恒方が歿した。純正昆蟲學で業績を積んだ。</li> <li>△グアイマルンが來住し東京、東北、京都の各大學で講義した。</li> <li>△海洋學會、日本營養學會等が生れた。</li> <li>△科學知識普及會が生れた。</li> <li>△大森房吉が餘震頻度に關する大森双曲線公式を完成した。（明治一七年—大正一〇年）</li> <li>△兵庫縣西脇染色試験場を置いた。</li> <li>△日本労働科學研究所を置いた。</li> <li>△中央氣象臺が測風氣球の觀測を開始した。</li> <li>△布良、長津呂、皆月、足摺に中央氣象臺附屬臨時出張所を置いた。</li> <li>△鐵道博物館を國有鐵道開通五十年記念事業として一般に公開した。</li> <li>△岡田武松、中村左衛門太郎が國際氣象會議出席のためロンドンへ赴いた。</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>た。（シュニテルン・ゲルラツハの實驗）</li> <li>△E・シュニツトが歿した。マイルブルク化學研究所長。</li> <li>△ランデが弱い磁場に於ける異常ゼーマン効果を表す式を見出した。（ランデのg公式）</li> <li>△ラングミュアが、相対原子價を立てた。</li> <li>△デューリングが歿した。力學の諸原理の歴史的發達を批判的に研究した。</li> <li>△ソツプデイが放射性物質の化學性及び同位元素の研究でノーベル化學賞を受けた。</li> <li>△カルツァが時空世界の四次元の外に第五次元を導入した一つの超世界を假定した。</li> <li>△ハンが歿した。降雨の理論、フェーシンの理論等がある。</li> <li>△ノルウェー學派が温帯颶風の構造の理論を立てた。</li> <li>△ワシントン會議が開かれた。</li> </ul>	



皇紀年號	日	本	西紀	外	國	
二五八二大正一一		<ul style="list-style-type: none"> <li>△蠅崎千晴の發見した牛疫預防液がこの年から實施された。</li> <li>△島津源藏が易反應性鉛粉製造に成功して各國の科學者を驚かした。</li> <li>△梅根常三郎が赤褐鐵選礦法を發明した。</li> <li>△渡邊三郎が自硬性磁石を發明した。</li> <li>△小西正三が硝子兩斜面像摺磨機を發明して、レンズ、時計ガラスなどの製造を一新した。</li> <li>△朝倉慶吉が「乙字型氣壓」を發表した。</li> <li>△東北帝國大學附屬鐵鋼研究所を擴張して金屬材料研究所とした。</li> <li>△京都帝國大學臨海實驗所を瀬戸に置いた。</li> <li>△燃料協會、日本生理會、北海道醫學會等が生れた。</li> <li>△新潟、岡山、私立熊本醫學專門學校が醫科大學となつた。</li> <li>△旅順工科學堂及び南滿醫學堂が昇格して旅順工科學、滿州醫科大學となつた。</li> <li>△神戸、濱松、徳島、三高等工業學校、宇都宮高等農林學校、氣象技術官養成所、南滿洲工業專門學校セブランス聯合醫學專門學校を置いた。</li> <li>△佐藤正典が大豆油のアルカリ土類石鹼乾溜に依る燃料油の製造をなした。</li> <li>△朝鮮總督府燃料研究所、同林業試驗所を置いた。</li> <li>△拔山大三がモンズーン・レーンを論じ、また高氣壓性の雨を論じた。</li> <li>△高嶺俊夫、吉田卯三郎がスタルク效果の研究で帝國學士院恩賜賞をうけた。</li> </ul>	一九二二	<ul style="list-style-type: none"> <li>△石炭ガスを燃やす冷蔵庫が發明された。</li> <li>△マイヤホッフ及びヒルが筋收縮化學及びエネルギー論の研究でノーベル醫學生理學賞を受けた。</li> <li>△アブラハムが發した。電磁的世界觀を高唱した人。</li> <li>△アストンが質量スペクトルと同位元素の研究でノーベル化學賞を得た。</li> <li>△フリードマンが動的宇宙論を説いた。</li> <li>△ターレンカンブが連続X線スペクトルを研究した。</li> <li>△カリオ及びフランクが活性水素を作つた。</li> <li>△カプティンがカプティン宇宙を論じた。この年發した。</li> <li>△クニツピングが發した。日本の氣象事業の先驅をなした人。</li> <li>△支那でこの年(民國元年)グレゴリオ曆を用ひた。</li> <li>△ジョルダンが發した。群論に於ける開拓者であり、また實變數函數論の先驅をなした。</li> <li>△ノットが發した。日本に於ける物理學の發達の爲に盡した。</li> <li>△ボーアが原子構造の研究でノーベル物理學賞を受けた。</li> </ul>		

		<ul style="list-style-type: none"> <li>△清野謙次が生體染色法に就ての研究で帝國學士院賞をうけた。</li> <li>△末廣恭二が傳動軸の振れ計の研究で帝國學士院賞をうけた。</li> <li>△岡田武松が北海道米作と氣象の關係を論じた。</li> <li>△第二回萬國學術研究會議總會に、わが代表、櫻井鏡二、中村精男、安藤廣太郎、山崎直方が出席した。</li> <li>△第一回萬國天文學協會總會(ローマ)に平山信、木村榮が出席した。</li> <li>△第一回萬國測地地球物理學協會(ローマ)に今村明恒、中村精男が出席した。</li> <li>△第三回萬國純正應用化學協會總會(リヨン)に近藤眞澄、井上仁吉が出席した。</li> <li>△萬國純正應用物理學協會創立會(ブラッセル)に中村精男が出席した。</li> <li>△萬國地理學協會創立會(ブラッセル)に山崎直方が出席した。</li> <li>△第二回萬國生物學協會總會(ブラッセル)に山崎直方が出席した。</li> <li>△第一回萬國無線電信學協會總會(ブラッセル)に中村精男が出席した。</li> <li>△池田岩治が發した。本邦沿海産の帶蟲類を分類的に研究しその幼生アクチノトロカの發生變態殊にその中の胚葉と排泄器に就て精査した。</li> <li>△村越小五郎が物理療法に就て精査した。</li> <li>△堀口由巳が測風氣球の上昇速度に關する調査を發表した。</li> <li>△東京、大阪間定期飛行開始し後藤勇吉が二時間半で翔破した。</li> </ul>				
				<ul style="list-style-type: none"> <li>△ヘヴェシー及びゴスターがハフニウムを發見した。</li> <li>△ハリヴァツクスが發した。</li> <li>△ヒツクスがスペクトル系列に關するリドベリーの公式に修正を加へた(ヒツクスの公式)。</li> <li>△フランクがヘリウムの共鳴ポテンシャルに就て實驗した。</li> <li>△ベルが發した。</li> <li>△ミリカンが宇宙線は極めて短波長の輻射線なることを主張した。</li> <li>△ランデが多重線に關するランデの間隔規則を見出した。</li> <li>△ルーベンスが發した。赤外線スペクトルの研究者。</li> <li>△キヤデイが水晶時計を發明した。</li> </ul>		



皇紀	年號	日	本	西	外	國
二五八三	大正二二		<p>△ベルリンのポツダムに在つた萬國緯度觀測中央局がわが水澤の緯度觀測所内に移された。木村榮は中央局長を兼務した。(昭和十二年退任)</p> <p>△高峰謙吉が歿した。</p> <p>△東京化學會が日本化學會と改稱した。</p> <p>△高木貞治が更に「任意の代數體に於ける相互法則に就て」を發表した。</p> <p>△愛知敬一が異質物體間の面に生ずる横波は特殊な場合には分散を生ずることを認めた。</p> <p>△大森房吉、今村明恒等により明治三十八年以來地震觀測の結果、日本に於ける主なる震央圈を完成した。</p> <p>△北海道工業試驗所及び青森縣、茨城縣の各工業試驗場を置いた。</p> <p>△内務省土木試驗所を置いた。</p> <p>△帝國發明協會研究所を置いた。</p> <p>△藤原咲平が渦動の研究から、ある條件の下に岡田武松の「岡田の法則」を認めた。また氣流性降雨を唱へた。</p> <p>△高山四郎がモンスーン・レーン(季節風式降水)を論じた。</p> <p>□シベリヤを撤兵した。</p>			
				一九二三		<p>△コンプトンがコンプトン効果を發見して量子理論の新しい展開に導いた。</p> <p>△ケリスによつてムービーメーション式トイキーが成つた。</p>

			<p>△不破橋三、和田粹一郎、白裕一郎、森二郎等が電球用バルブ硝子を創製した。</p> <p>△京都帝國大學に農學部を置いた。</p> <p>△岐阜高等農林學校、長岡、福井兩高等工業學校、金澤醫大附屬藥學專門學校、東京寫眞專門學校を置いた。</p> <p>△千葉、長崎、金澤の各醫學專門學校が醫科大學となつた。</p> <p>△海軍技術研究所が設けられた。</p> <p>△日本地理學會、日本結核病學會、白本豫防醫學會等が生れた。</p> <p>△佐久間巖が木燐色素漂白法を發明した。</p> <p>△中央氣象臺事務の中に航空氣象の觀測調査及び豫報を加へた。</p> <p>△朝比奈泰彦が漢藥成分の化學的研究で帝國學士院恩賜賞をうけた。</p> <p>△木下季吉が放射線に関する研究で帝國學士院賞をうけた。</p> <p>△第四回萬國純正應用化學協會總會(ケムブリッジ)に朝比奈泰彦が出席した。</p> <p>△臨時萬國純正應用物理學協會總會(パリ)に長岡半太郎が出席した。</p> <p>△齋田功太郎が歿した。</p> <p>△寺尾壽が歿した。編曆、測地學其他の公務に盡した。</p> <p>△大森房吉が歿した。大森式地動計其他を考案し、地震觀測に一新紀元を劃し我が國の地震學發展に貢獻した。</p> <p>△斯波忠三郎が航空研究所長となつた。</p>			
						<p>△コスタール及びヘヴェシーがハフニウムを發見した。</p> <p>△ヴァン・デル・ヴェールズが歿した。</p> <p>△熱學研究に一生を捧げた人である。</p> <p>△ヴァルターが60のシリットと模形のシリットを使用しX線の廻折を見出した。</p> <p>△フアヤンズが吸着指示の現象を見出した。</p> <p>△シチイウツが共有原子價なる概念を進めた。(一九二七年)</p> <p>△シュタインメッツが歿した。鐵の磁氣履歴現象に関する研究で名があり、またシュタインメッツの實驗式を見出した。</p> <p>△デバイ及びヒュツケルが、デバイ・ヒュツケルの説を立てた。</p> <p>△デユワーが歿した。</p> <p>△ギーマントがイオンの分布に関する理論を發表した。シュテルンも同様の説を公にした。(一九二二年—一九二三年)</p> <p>△ミリカンが電子荷電及び電子現象の研究でノーベル物理學賞を受けた。</p> <p>△ブレイデルが微量分析法の確立でノーベル化學賞を受けた。</p> <p>△ベツクマンが歿した。有機化合物の分子量の測定法に関する業績が多い。</p> <p>△ヘールがこの年來ウィルソン山天文</p>